

# 京都府遺跡調査概報

## 第116冊

1. 案察使遺跡第5・6次
2. 内里八丁遺跡第20次
3. 片山遺跡第2・3次

2005

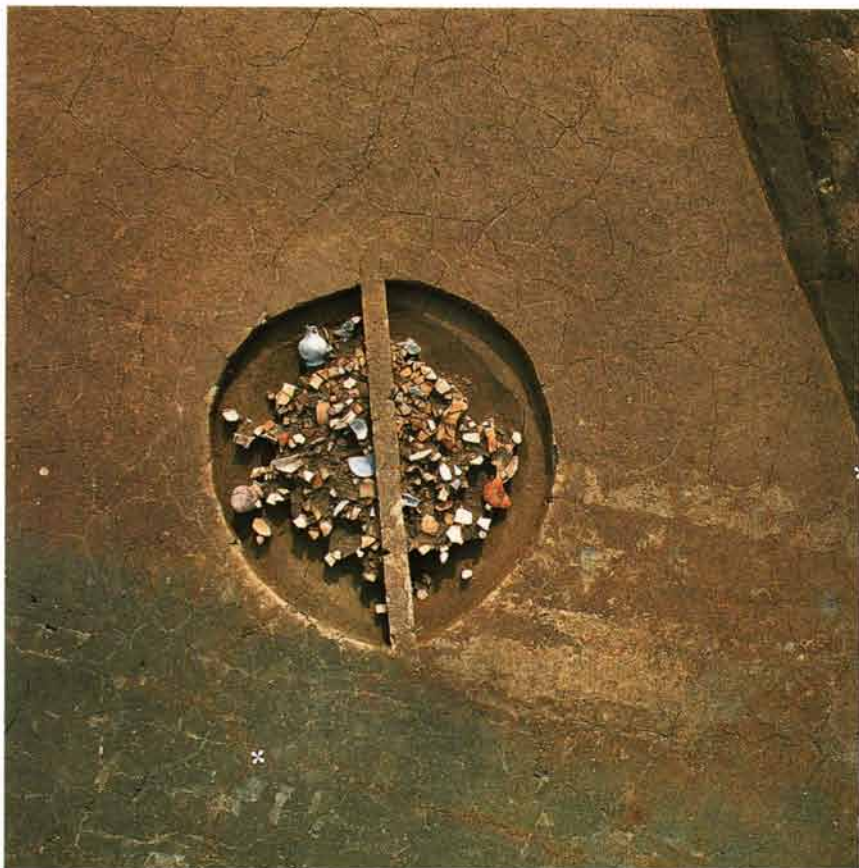
財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)案察使遺跡第6次第3トレンチ(上が南)



(2)案察使遺跡第6次第3トレンチ深掘区南壁  
(北から)



(1) 第3トレンチ土坑SK1



(2) 絞胎陶枕片



(3) 第1トレンチ溝SD150出土の土器

## 序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成15・16年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、独立行政法人都市再生機構(旧都市基盤整備公団)の依頼を受けて行った、案察使遺跡第5・6次、内里八丁遺跡第20次、片山遺跡第2・3次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、御活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、亀岡市教育委員会、八幡市教育委員会、木津町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理 事 長 上 田 正 昭

## 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 案察使遺跡第5・6次
2. 内里八丁遺跡第20次
3. 片山遺跡第2・3次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	案察使遺跡第5・6次	亀岡市保津町出井ほか	平16. 1. 16～平16. 2. 24 平16. 7. 20～平16. 12. 3	京都府土木建築部	中川和哉
2.	内里八丁遺跡第20次	八幡市内里	平15. 4. 24～平16. 2. 26	京都府土木建築部	引原茂治 高野陽子 石崎善久
3.	片山遺跡第2・3次	相楽郡木津町大字木津小字池田・片山	平15. 7. 22～平16. 2. 24 平16. 7. 8～平16. 11. 29	独立行政法人都市再生機構(旧都市基盤整備公団)	伊野近富 筒井崇史

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

## 本文目次

1. 案察使遺跡第5・6次発掘調査概要-----	1
2. 内里八丁遺跡第20次発掘調査概要-----	19
3. 片山遺跡第2・3次発掘調査概要-----	119

## 付表目次

2. 内里八丁遺跡第20次 付表-----	19
--------------------------	----

## 挿図目次

1. 案察使遺跡第5・6次	
第1図 案察使遺跡位置図および周辺遺跡分布図-----	2
第2図 トレンチ配置図および周辺地形図(ほ場整備前)-----	4
第3図 案察使遺跡第5・6次調査トレンチ配置図-----	5
第4図 試掘第1トレンチ東壁・南壁断面図-----	6
第5図 第6次調査第1・2トレンチ遺構平面図-----	8
第6図 第6次調査第1トレンチ遺構平・断面図-----	9
第7図 第6次調査第1・2トレンチ遺構断面図-----	10
第8図 試掘第2トレンチ北壁断面図-----	11
第9図 第6次調査第2トレンチ土坑SK17内弥生土器出土状況-----	12
第10図 第6次調査第3トレンチ深掘南断面-----	12
第11図 第6次調査第3トレンチ平面図-----	13
第12図 出土遺物実測図(1)-----	15
第13図 出土遺物実測図(2)-----	16

## 2. 内里八丁遺跡第20次

第14図	調査地位置図	20
第15図	トレンチ配置図	21
第16図	各トレンチ層序図(部分)	22
第17図	第1トレンチ平面図	23
第18図	土坑S K158・157実測図	24
第19図	溝S D150平・断面図	25
第20図	溝S D150A・B地点遺物出土状況図	26
第21図	溝S D150C・D地点遺物出土状況図	27
第22図	溝S D150E地点遺物出土状況図	28
第23図	溝S D150出土土器図(1)	29
第24図	溝S D150出土土器図(2)	29
第25図	第1トレンチ平面図(上層遺構)	30
第26図	掘立柱建物跡S B60実測図	31
第27図	井戸S E117(上層)実測図	32
第28図	井戸S E117実測図	33
第29図	土坑S K61・22実測図	34
第30図	中世墓S K10実測図	35
第31図	溝S D1・4・8実測図	36
第32図	第2トレンチ平面図(下層遺構)	37
第33図	竪穴式住居跡S H12・188実測図	38
第34図	竪穴式住居跡S H182実測図	39
第35図	第2トレンチ平面図(上層遺構)	40
第36図	掘立柱建物跡S B271、柵列S A9・10実測図	41
第37図	井戸S E17・55実測図	42
第38図	第3トレンチ平面図	43
第39図	土坑S K1実測図	44
第40図	出土遺物実測図(1)	45
第41図	出土遺物実測図(2)	47
第42図	出土遺物実測図(3)	48
第43図	出土遺物実測図(4)	49
第44図	出土遺物実測図(5)	50
第45図	出土遺物実測図(6)	51
第46図	出土遺物実測図(7)	53
第47図	出土遺物実測図(8)	54

第48図	出土遺物実測図(9)-----	55
第49図	出土遺物実測図(10)-----	56
第50図	出土遺物実測図(11)-----	57
第51図	出土遺物実測図(12)-----	59
第52図	出土遺物実測図(13)-----	60
第53図	出土遺物実測図(14)-----	61
第54図	出土遺物実測図(15)-----	62
第55図	出土遺物実測図(16)-----	63
第56図	出土遺物実測図(17)-----	65
第57図	出土遺物実測図(18)-----	66
第58図	出土遺物実測図(19)-----	67
第59図	出土遺物実測図(20)-----	68
第60図	出土遺物実測図(21)-----	69
第61図	出土遺物実測図(22)-----	70
第62図	出土遺物実測図(23)-----	71
第63図	出土遺物実測図(24)-----	73
第64図	出土遺物実測図(25)-----	74
第65図	出土遺物実測図(26)-----	75
第66図	井戸枿実測図(1)-----	77
第67図	井戸枿実測図(2)-----	78
第68図	井戸枿実測図(3)-----	79
第69図	井戸枿実測図(4)-----	80
第70図	井戸枿実測図(5)-----	81
第71図	井戸枿実測図(6)-----	82
第72図	井戸枿実測図(7)-----	83
第73図	第17次調査B地区第3遺構面遺構平面図-----	85
第74図	各溝土層断面図-----	86
第75図	溝S D247遺物出土状況図-----	87
第76図	溝S D247出土遺物実測図(1)-----	88
第77図	溝S D247出土遺物実測図(2)-----	89
第78図	溝S D247出土遺物実測図(3)-----	90
第79図	溝S D247出土遺物実測図(4)-----	79
第80図	溝S D247出土遺物実測図(5)-----	92
第81図	溝S D247出土遺物実測図(6)-----	93
第82図	溝S D247出土遺物実測図(7)-----	94



第83図	溝 S D 247出土遺物実測図(8)-----	95
第84図	溝 S D 247出土遺物実測図(9)-----	96
第85図	溝 S D 247出土遺物実測図(10)-----	97
第86図	溝 S D 247出土遺物実測図(11)-----	98
第87図	溝 S D 247出土銭貨拓影-----	99
第88図	溝 S D 205出土遺物実測図(1)-----	100
第89図	溝 S D 205出土遺物実測図(2)-----	101
第90図	溝 S D 205出土遺物実測図(3)-----	102
第91図	溝 S D 205出土遺物実測図(4)-----	103
第92図	溝 S D 205出土遺物実測図(5)-----	104
第93図	溝 S D 205出土遺物実測図(6)-----	105
第94図	溝 S D 205出土遺物実測図(7)-----	106
第95図	溝 S D 205出土遺物実測図(8)-----	107
第96図	溝 S D 205・354出土遺物実測図(9)-----	108
第97図	焼土坑 S X 171および出土遺物実測図-----	109
第98図	竪穴式住居跡 S H 340・350出土遺物実測図-----	110
第99図	内里八丁遺跡遺構変遷図-----	112

### 3. 片山遺跡第2・3次

第100図	片山遺跡周辺主要遺跡分布図-----	122
第101図	トレンチ配置図-----	122
第102図	調査地土層柱状図-----	124
第103図	第1・2・10トレンチ検出遺構配置図-----	126
第104図	第3・4トレンチ検出遺構配置図-----	127
第105図	土坑 S K 02実測図-----	128
第106図	土坑 S K 191実測図-----	129
第107図	竪穴式住居跡 S B 140実測図-----	129
第108図	竪穴式住居跡 S B 142実測図-----	130
第109図	竪穴式住居跡 S B 230実測図-----	130
第110図	溝 S D 59・143実測図-----	131
第111図	土壙墓 S X 165実測図-----	132
第112図	掘立柱建物跡 4 実測図-----	133
第113図	掘立柱建物跡 5 実測図-----	134
第114図	溝 S D 132・161・157・187実測図-----	135
第115図	井戸 S E 07実測図-----	136
第116図	掘立柱建物跡 2 実測図-----	136

第117図	掘立柱建物跡 3 実測図-----	137
第118図	焼土坑 S K 177・188・199 実測図-----	137
第119図	柱穴 S P 113・土坑 S K 227 実測図-----	138
第120図	掘立柱建物跡 1 実測図-----	138
第121図	不明遺構 S X 135 実測図-----	139
第122図	不明遺構 S X 168・土坑 S K 174 実測図-----	139
第123図	出土遺物実測図(1)-----	140
第124図	出土遺物実測図(2)-----	141
第125図	出土遺物実測図(3)-----	142
第126図	出土遺物実測図(4)-----	144
第127図	出土遺物実測図(5)-----	145
第128図	出土遺物実測図(6)-----	146
第129図	出土遺物実測図(7)-----	148
第130図	出土遺物実測図(8)-----	149
第131図	出土遺物実測図(9)-----	150
第132図	出土遺物実測図(10)-----	151
第133図	出土遺物実測図(11)-----	152
第134図	出土遺物実測図(12)-----	154
第135図	出土遺物実測図(13)-----	155
第136図	出土遺物実測図(14)-----	156
第137図	出土遺物実測図(15)-----	158
第138図	出土遺物実測図(16)-----	159
第139図	出土遺物実測図(17)-----	160
第140図	出土遺物実測図(18)-----	161
第141図	出土遺物実測図(19)-----	162
第142図	出土遺物実測図(20)-----	163
第143図	出土遺物実測図(21)-----	164
第144図	出土遺物実測図(22)-----	165
第145図	出土遺物実測図(23)-----	166
第146図	出土遺物実測図(24)-----	167
第147図	出土遺物実測図(25)-----	168
第148図	出土遺物実測図(26)-----	169
第149図	出土錢貨拓影-----	169
第150図	片山遺跡周辺弥生時代後期遺構分布図-----	171
第151図	片山遺跡周辺奈良時代遺構分布図-----	172

# 図版目次

## 1. 案察使遺跡第5・6次

- 図版第1 案察使遺跡調査トレンチ全景(西から)
- 図版第2 (1)第1トレンチ全景(東から) (2)第2トレンチ全景(南から)
- 図版第3 (1)第3トレンチ全景(上が南) (2)試掘第2トレンチ(西から)
- 図版第4 (1)試掘第3トレンチ(東から) (2)試掘第4トレンチ(東から)
- 図版第5 (1)第1トレンチ北部遺構(南から) (2)第1トレンチ南部遺構(北から)  
(3)第1トレンチ土坑S K01遺物出土状況(東から)
- 図版第6 (1)第1トレンチS K02(東から) (2)第1トレンチS K04(東から)  
(3)第1トレンチS K09遺物出土状況(南から)
- 図版第7 (1)第2トレンチ(西から) (2)第2トレンチ(東から)
- 図版第8 (1)第2トレンチ南部落ち込み(西から)  
(2)第2トレンチ土坑S K17遺物出土状況(北から)  
(3)第2トレンチ土坑S K17遺物出土状況(北から)
- 図版第9 (1)第2トレンチ溝S D13(北から) (2)第2トレンチ溝S D13断面(北から)  
(3)第2トレンチ土坑S K16(北から)
- 図版第10 (1)第2トレンチ土坑S K15・16(南から)  
(2)第2トレンチ土坑S K15(南から) (3)第3トレンチ東部(西から)
- 図版第11 (1)第3トレンチ深堀区南壁(北から) (2)第3トレンチ木質出土状況(上が北)  
(3)第3トレンチ深堀区(西から)
- 図版第12 (1)第3トレンチF26グリッド遺物出土状況(北から)  
(2)第3トレンチF24グリッド遺物出土状況(東から)  
(3)第3トレンチトレンチ中央部(南から)
- 図版第13 出土遺物
- 図版第14 (1)縄文時代押型文土器(表) (2)縄文時代押型文土器(裏)

## 2. 内里八丁遺跡第20次

- 図版第15 (1)第1トレンチ調査前全景(南から) (2)第1トレンチ溝S D150(南東から)
- 図版第16 (1)第1トレンチ溝S D150遺物出土状況(北から)  
(2)第1トレンチ溝S D150手焙形土器出土状況(北から)
- 図版第17 (1)第1トレンチ土坑S K158(南西から)  
(2)第1トレンチ土坑S K158遺物出土状況(南東から)
- 図版第18 (1)第1トレンチ西半部上層遺構(北西から)

- (2) 第1トレンチ溝SD155(北から)
- 図版第19 (1) 第1トレンチ掘立柱建物跡SB60(南から)  
(2) 第1トレンチ掘立柱建物跡SB60柱穴(東から)
- 図版第20 (1) 第1トレンチ井戸SE117(南から)  
(2) 第1トレンチ井戸SE117井戸枠(西から)
- 図版第21 (1) 第1トレンチ井戸SE117底部(北から)  
(2) 第1トレンチ井戸SE117井戸枠墨書
- 図版第22 (1) 第1トレンチ溝SD1(西から)  
(2) 第1トレンチ溝SD1遺物出土状況(南から)
- 図版第23 (1) 第1トレンチ中世墓SX10遺物出土状況(西から)  
(2) 第1トレンチ中世墓SX10墓壙(北から)
- 図版第24 (1) 第2トレンチ調査前全景(北西から)  
(2) 第2・3トレンチ全景(空撮、左上が北)
- 図版第25 (1) 第2トレンチ下層遺構全景(空撮、左上が北)  
(2) 第2トレンチ上層遺構全景(空撮、左上が北)
- 図版第26 (1) 第2トレンチ竪穴式住居跡SH12(南から)  
(2) 第2トレンチ竪穴式住居跡SH182(南から)
- 図版第27 (1) 第2トレンチ井戸SE17遺物出土状況(北東から)  
(2) 第2トレンチ井戸SE17断面(西から)
- 図版第28 (1) 第3トレンチ調査前全景(北西から)  
(2) 第3トレンチ全景(空撮、右下が北)
- 図版第29 (1) 第3トレンチ土坑SK9(南東から)  
(2) 第3トレンチ焼土層SX10(北西から)
- 図版第30 (1) 第3トレンチ土坑SK1(南西から)  
(2) 第3トレンチ土坑SK1遺物出土状況(南西から)
- 図版第31 出土遺物(1)
- 図版第32 出土遺物(2)
- 図版第33 出土遺物(3)
- 図版第34 出土遺物(4)
- 図版第35 出土遺物(5)
- 図版第36 出土遺物(6)
- 図版第37 出土遺物(7)
- 図版第38 出土遺物(8)
- 図版第39 出土遺物(9)
- 図版第40 出土遺物(10)

- 図版第41 出土遺物(11)  
 図版第42 出土遺物(12)  
 図版第43 出土遺物(13)  
 図版第44 出土遺物(14)  
 図版第45 出土遺物(15)  
 図版第46 出土遺物(16)  
 図版第47 出土遺物(17)  
 図版第48 出土遺物(18)  
 図版第49 (1)出土遺物(19) (2)出土遺物(20)  
 図版第50 出土遺物(21)  
 図版第51 出土遺物(22)(第16・17次調査)  
 図版第52 出土遺物(23)(第16・17次調査)  
 図版第53 出土遺物(24)(第16・17次調査)  
 図版第54 (1)出土遺物(25)(第16・17次調査) (2)第16・17次調査地全景(南から)

### 3. 片山遺跡第2・3次

- 図版第55 (1)調査前全景(東から) (2)第2次調査試掘トレンチ重機掘削中  
 (3)第2次調査試掘トレンチ作業風景  
 図版第56 (1)第1トレンチ南壁土層断面(1地点) (2)第3トレンチ(試掘)土層断面(6地点)  
 (3)第3トレンチ(試掘)土層断面 (4)第3トレンチ南壁土層断面(8地点)  
 (5)第6トレンチ南壁土層断面(9地点) (6)第7トレンチ南壁土層断面(10地点)  
 (7)第8トレンチ南壁土層断面(11地点) (8)第9トレンチ南壁土層断面(12地点)  
 図版第57 (1)第2次調査調査地全景(東から) (2)第2次調査第2トレンチ全景(西から)  
 (3)第2次調査第1・2トレンチ全景(北から)  
 図版第58 (1)第2次調査第1トレンチ上層遺構全景(西から)  
 (2)第2次調査第1トレンチ下層遺構全景(東から)  
 (3)第2次調査第1トレンチ土坑SK02完掘状況(北西から)  
 図版第59 (1)第2次調査第2トレンチ西半上層遺構全景(東から)  
 (2)第2次調査第2トレンチ南東部上層遺構全景(西から)  
 (3)第2次調査第2トレンチ東半上層遺構全景(東から)  
 図版第60 (1)第3次調査第2トレンチ下層遺構全景(北東から)  
 (2)第3次調査第2トレンチ下層遺構全景(上が北)  
 (3)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4・5、溝SD132・161全景(上が北)  
 図版第61 (1)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4、溝SD132・161全景(西から)  
 (2)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4全景(南から)  
 (3)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4完掘後全景(南から)

- 図版第62 (1)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4柱穴SP153完掘状況(西から)  
(2)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4柱穴SP154土層断面(西から)  
(3)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4柱穴SP182土層断面(西から)  
(4)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4柱穴SP159完掘状況(西から)  
(5)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4柱穴SP194遺物出土状況(北から)  
(6)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4柱穴SP193土層断面(西から)  
(7)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4柱穴SP192完掘状況(西から)  
(8)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4柱穴SP160完掘状況(西から)
- 図版第63 (1)第2次調査第10トレンチ溝SD131ほか検出状況(西から)  
(2)第3次調査第2トレンチ溝SD132・161全景(南から)  
(3)第3次調査第2トレンチ溝SD132遺物出土状況(南から)
- 図版第64 (1)第3次調査第2トレンチ溝SD132遺物出土状況(西から)  
(2)第3次調査第2トレンチ溝SD161遺物出土状況(東から)  
(3)第3次調査第2トレンチ溝SD161遺物出土状況(北から)
- 図版第65 (1)第3次調査第2トレンチ溝SD157遺物出土状況(西から)  
(2)第3次調査第2トレンチ溝SD157遺物出土状況(南から)  
(3)第3次調査第2トレンチ溝SD187遺物出土状況(北西から)
- 図版第66 (1)第3次調査第2トレンチ軒丸瓦(6291B型式)出土状況(北から)  
(2)第3次調査第2トレンチ焼土坑SK188全景(東から)  
(3)第3次調査第2トレンチ焼土坑SK199遺物出土状況(東から)
- 図版第67 (1)第2次調査第2トレンチ井戸SE07検出状況(西から)  
(2)第2次調査第2トレンチ井戸SE07掘削状況(南から)  
(3)第3次調査第2トレンチ井戸SE07完掘状況(東から)
- 図版第68 (1)第2次調査第2トレンチ掘立柱建物跡2・3検出状況(東から)  
(2)第2次調査第2トレンチ掘立柱建物跡2・3検出状況(南から)  
(3)第2次調査第2トレンチ掘立柱建物跡2(柱穴SP113)遺物出土状況(西から)
- 図版第69 (1)第3次調査第2トレンチ不明遺構SX167全景(西から)  
(2)第2次調査第2トレンチ不明遺構SX135全景(東から)  
(3)第3次調査第2トレンチ土壙墓SX165全景(西から)
- 図版第70 (1)第2次調査第3トレンチ上層遺構全景(西から)  
(2)第2次調査第3トレンチ上層遺構全景(南東から)  
(3)第3次調査第3トレンチ下層遺構全景(北から)
- 図版第71 (1)第3次調査第3トレンチ流路SD73全景(西から)  
(2)第3次調査第3トレンチ流路SD73全景(南から)  
(3)第3次調査第3トレンチ流路SD73土層断面(北東から)

- 図版第72 (1)第3次調査第3トレンチ土坑S K227遺物出土状況(南から)  
(2)第3次調査第3トレンチ竪穴式住居跡S B230全景(南から)  
(3)第3次調査第3トレンチ作業風景(西から)
- 図版第73 (1)第2次調査第3トレンチ下層遺構全景(南西から)  
(2)第2次調査第3トレンチ竪穴式住居跡S B140全景(南西から)  
(3)第2次調査第3トレンチ(試掘)竪穴式住居跡S B140遺物出土状況(西から)
- 図版第74 出土遺物(1)
- 図版第75 出土遺物(2)
- 図版第76 出土遺物(3)
- 図版第77 (1)出土遺物(4) 縄文土器・弥生土器 (2)出土遺物(5) 須恵器・土師器
- 図版第78 (1)出土遺物(6) 須恵器・土師器 (2)出土遺物(7) 須恵器・土師器
- 図版第79 (1)出土遺物(8) 須恵器・土師器 (2)出土遺物(9) 瓦器
- 図版第80 (1)出土遺物(10) 土師器・須恵器・瓦質土器  
(2)出土遺物(11) 白磁・青磁ほか
- 図版第81 (1)出土遺物(12) 瓦 (2)出土遺物(13) 瓦
- 図版第82 (1)出土遺物(14) 石器 (2)出土遺物(15) 石器

# 1. 案察使遺跡第5・6次発掘調査概要

## 1. はじめに

平成15・16年度の案察使遺跡第5・6次発掘調査は、京都府土木建築部の依頼により平成15・16年度の主要地方道路亀岡園部線緊急地方道路整備事業に先立つ調査として実施した。15年度調査は、遺構の広がりや堆積状態を確認するための試掘調査として実施され、16年度は試掘調査を受けた本調査として企画された。遺跡の所在地は亀岡市保津町出井ほかである。

案察使遺跡は、縄文時代から近世までの複合遺跡である。隣接地を調査した第4次調査では、弥生時代末の粘土採掘坑と考えられる不整形の土坑が多数発見されている。

現地の発掘調査は、第5次調査は平成16年1月16日～2月24日、第6次調査は平成16年7月16日～12月3日まで実施した。調査面積は5次調査が約350m<sup>2</sup>、第6次調査が約1,000m<sup>2</sup>である。

現地調査は、第5次調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係係長伊野近富、同主任調査員中川和哉が、第6次調査は、調査第2課調査第1係長小池寛、同主任調査員中川和哉が担当した。

調査期間中は、亀岡市教育委員会・京都府教育委員会・京都府立丹後郷土資料館・地元各自治会・保津地区の方々に多くの御配慮をいただいた。また、縄文土器については、矢野健一・富井眞氏に多くのご教授をいただいた。記してお礼申し上げたい。

なお、調査に係わる経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

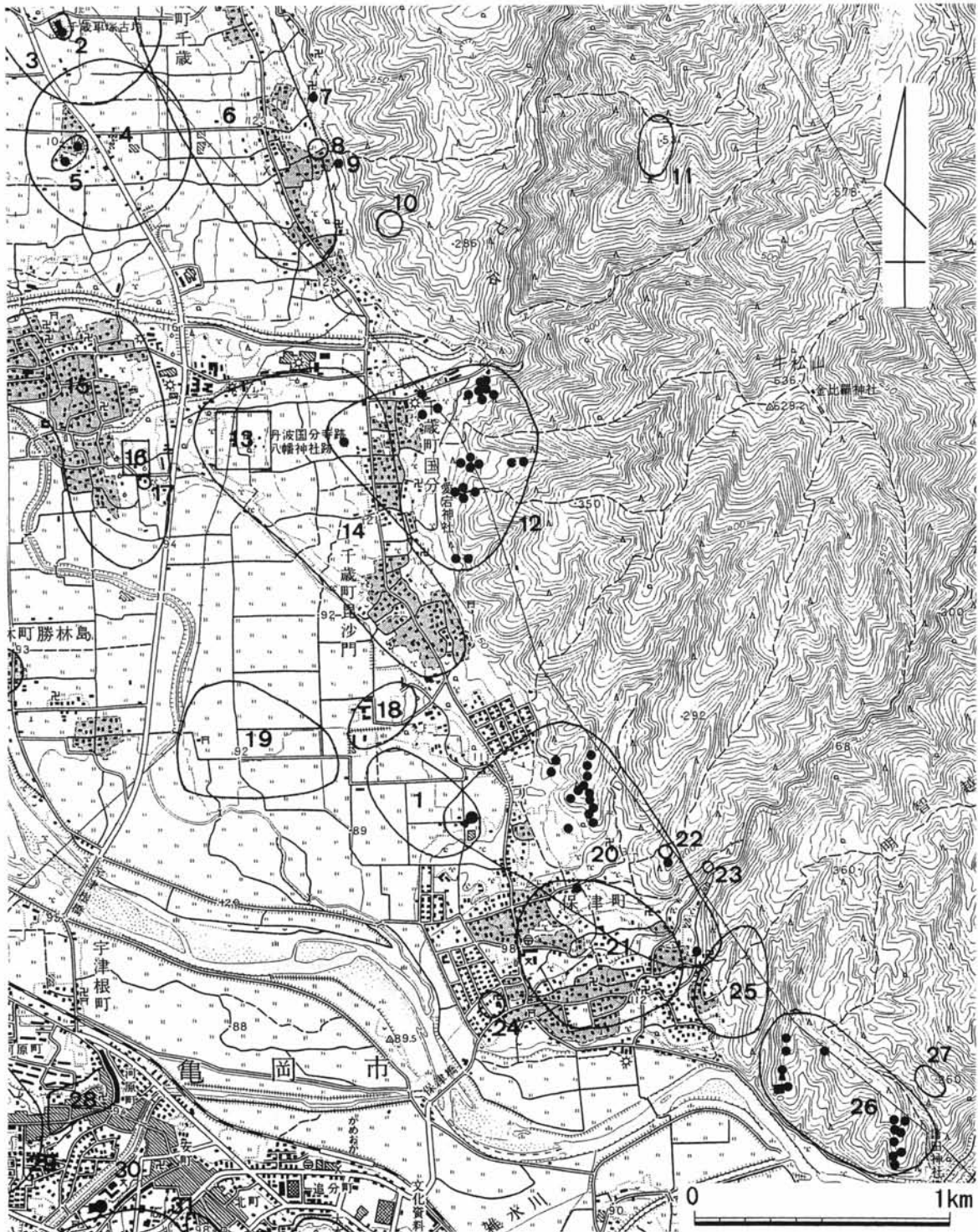
## 2. 位置と環境

縄文時代から近世に至る複合遺跡である。遺跡は亀岡盆地を貫く桂川の左岸の段丘から沖積面にかけて広がる。遺跡のある保津地区は、盆地における河川の出口で小河川も合流することから、上流のダム建設以前は水嵩が増えると河川氾濫が頻繁に起こる地域であった。桂川左岸は、現在のJR山陰線や京都縦貫道、国道9号線の走る右岸に比べ、田園が広がっており開発の機会が少なかったため、遺跡の様相が明らかでなかった部分が、近年の発掘調査によって多くのことがわかってきた。

亀岡盆地内で人類活動を示す最も古い遺跡は、八木町の池上遺跡で、後期旧石器時代の石器が出土している。亀岡市域では稗田野町の鹿谷遺跡で発見された黒曜石製の槍先形尖頭器などの縄文時代草創期の遺物が最も古い遺物である。同時期のものとして千代川遺跡のサヌカイト製有舌尖頭器がある。土器では今回報告する縄文土器が縄文時代早期前葉のもので最も古く、次いで千代川遺跡の縄文時代早期中葉の黄島式土器の検出例がある。桂川右岸の千代川遺跡では上記の草創期・早期だけではなく前期～晩期の遺物も出土しており縄文時代全般にわたり生活痕跡を見出



すことができる。桂川左岸では亀岡市馬路町の三日市遺跡で縄文時代中期末の土器片が採集されている。発掘調査では、大淵遺跡(戸原2003)において縄文時代晩期の突帯文土器を2个体用いた



第1図 案察使遺跡位置図および周辺遺跡分布図(国土地理院1/25,000亀岡)

- |            |           |            |             |            |          |
|------------|-----------|------------|-------------|------------|----------|
| 1. 案察使遺跡   | 2. 千歳車塚古墳 | 3. 車塚遺跡    | 4. 三日市遺跡    | 5. 三日市古墳群  | 6. 出雲遺跡  |
| 7. 金光寺古墳   | 8. 中館跡    | 9. 中村古墳    | 10. 江島里砦跡   | 11. 鬼ヶ嶽城跡  | 12. 国分遺跡 |
| 13. 丹波国分寺跡 | 14. 蔵垣内遺跡 | 15. 河原尻遺跡  | 16. 御上人廃寺   | 17. 河原尻経塚  |          |
| 18. 桜久保遺跡  | 19. 大淵遺跡  | 20. 案察使古墳群 | 21. 保津遺跡    | 22. 保津谷川砦跡 |          |
| 23. 引無窠跡   | 24. 保津館跡  | 25. 保津城跡   | 26. 保津山東古墳群 | 27. 請田砦跡   |          |
| 28. 余部城跡   | 29. 余部遺跡  | 30. 加塚古墳   | 31. 加塚遺跡    |            |          |

甕棺墓が検出されている。

弥生時代に入ると右岸の太田遺跡に環濠集落が営まれるようになる。左岸では大淵遺跡・池尻遺跡・河原尻遺跡・蔵垣内遺跡において前期の遺物が出土している。中期には右岸では余部遺跡や千代川遺跡、天川遺跡などで竪穴式住居跡や方形周溝墓が検出されている。右岸では八木町の池上遺跡、亀岡市の時塚遺跡、里遺跡で竪穴式住居跡や方形周溝墓が検出されている。左岸では弥生時代後期のものとして案察使遺跡、蔵垣内遺跡、里遺跡で遺構・遺物が検出されている。

古墳時代に入ると亀岡盆地にも古墳が営まれるが、前期のものとしては向山古墳、三ツ塚古墳群がある。向山古墳は亀岡盆地から京都市のある山城盆地へ抜ける山陰道を見下ろす丘陵上にある。甕龍鏡、車輪石、石釧、銅鏃、鉄剣などが出土している。三ツ塚古墳群は4世紀後葉から5世紀初頭の3基からなる古墳群で、画文帯環状乳神獸鏡や棗玉などが出土している。鏡は「吾作明竟幽凍三岡大吉長寿」の銘をもつ。

案察使遺跡の東側には、古墳時代後期のものを主体とする案察使古墳群が分布している。そのひとつである保津山古墳(案察使2号墳)は埴輪をもつ中期末の円墳で、主体部は箱式石棺で乳文鏡や管玉、鉄器が出土している。古墳群の中で唯一の前方後円墳である保津車塚古墳(案察使1号墳)は当調査研究センターで発掘調査され、二重の周溝をもつ前方後円墳であることがわかった。周溝内からは盾形・笠形木製品が出土しており、墳丘に立てられていたものと考えられる。築造年代は、主体部が調査されていないことから明らかでないが、周溝内遺物から5世紀末のものとして想定できる。坊主塚、榊塚に代表されるように古墳時代中期の大型墳に、方墳が採用される地域においては、貴重な存在である。同じ左岸の千歳車塚古墳(国史跡)は全長82mの規模をもち、盾形周濠を備えた前方後円墳である。墳丘は三段築成で、葺石と埴輪を伴う。埴輪から6世紀前半の古墳と考えられる。この時期の古墳としては丹波最大であることはもちろん全国的に見ても大規模なものと位置づけられる。この古墳の東には丹波一宮である出雲神社が鎮座している。

畿内を中心に古墳に代わる権力のシンボルとして寺院が建設されるようになるが、亀岡市域においても桑寺廃寺・観音芝廃寺・與能廃寺・池尻廃寺が造られた。東岸地区には観音芝廃寺・池尻廃寺がある。

奈良時代の律令期に入ると全国に国府が置かれたが、亀岡市域が含まれる丹波国にも設置された。丹波国は和銅6(713)年に丹後国と分国されたが、旧来の丹波の中心は丹波郡のある丹後国側とされている。したがって、分国以前の国府の所在は定かではない。国分寺・国分尼寺・一宮が亀岡に存在することから奈良時代から亀岡市内に国府があったものと想定される。10世紀の「和名類聚抄」には亀岡のある桑田郡に所在することが記されている。国府の位置については、諸説があり決着を見ていない。

天平13(741)年の詔によって造られた国分寺・国分尼寺も前述したように桂川左岸にあり、近年の三日市遺跡の調査では、創建時の瓦窯の灰原が調査されている。

平安時代には亀岡市篠地域では、平安京に供給するための須恵器・緑釉陶器が焼かれており、窯の多くは右岸に存在するが左岸にも窯は存在している。

### 3. 調査概要

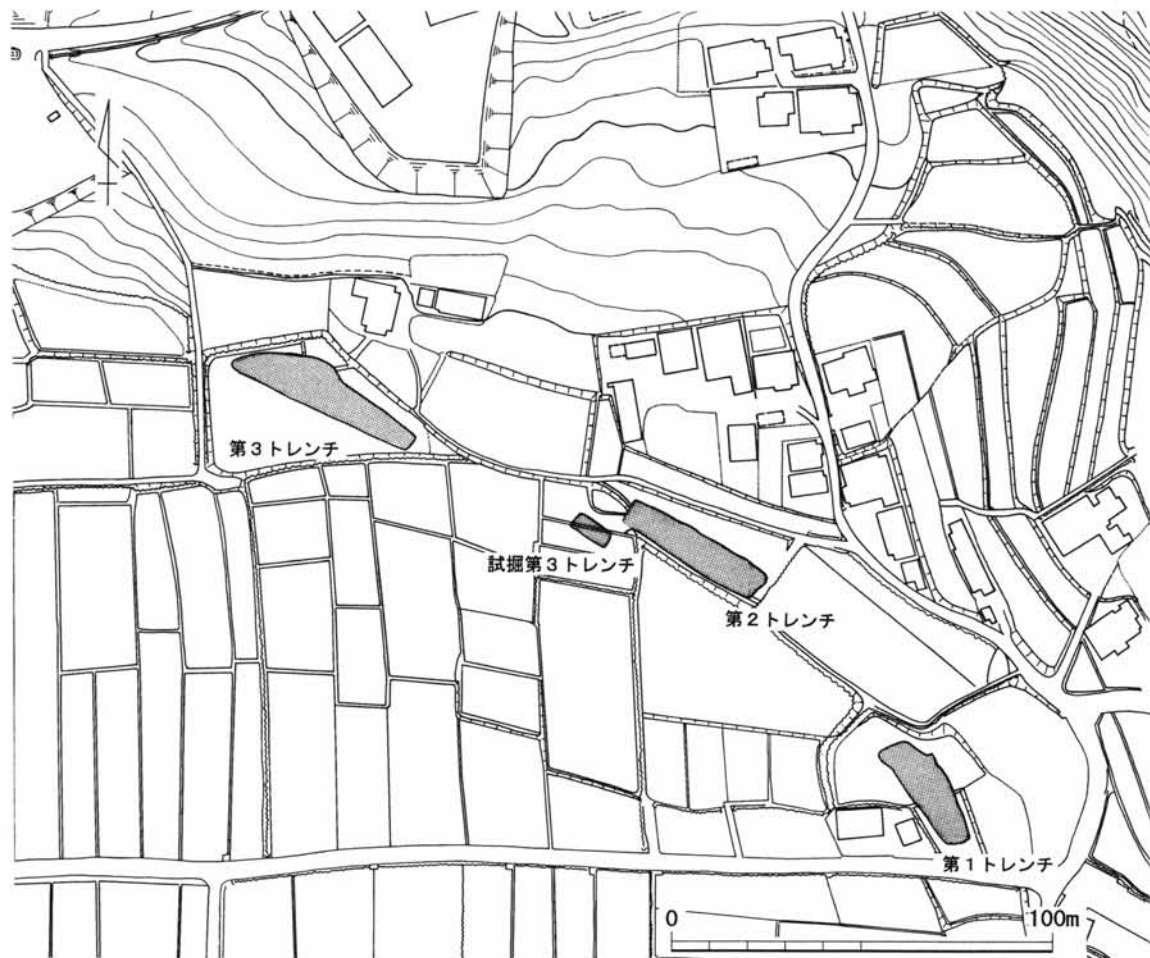
#### (1) 第5次調査(試掘調査)

調査対象地は丘陵の縁に沿って湾曲しており、段丘崖と考えられる比高差が認められる。試掘調査として、段丘崖の下の部分に3か所、上に1か所の調査トレンチを設けた。南端から試掘第1～4トレンチと名付けた。

試掘第1トレンチは、平成14年度の第4次調査区に隣接する。その調査成果と同じく黒色の粘質土が堆積し、弥生時代末の土坑が検出できた。内部からは庄内期の甕や木製品が出土している。

試掘第2トレンチは、段丘上に設けたトレンチで、調査区隅で遺構が検出できた。遺構の多くの部分が調査区外となるため遺構の性格は特定できないが、内部から弥生時代中期の壺が完全な形で出土した。詳細は第2トレンチの記述にて説明したい。

試掘第3トレンチは、段丘の下に設けたトレンチである。土層の堆積状況は耕作土と考えられる粘砂質土の下に5cm程度の厚さで礫層が広がる。この層は試掘第4トレンチ12層と同じものである可能性がある。トレンチ掘削中に排水と考えられる埋設管を発見したため、部分的に現地表面から2m深掘りを行った。その結果、第10層と11層の間で広域火山灰であるアカホヤ火山灰と考えられる火山灰層を検出した。試掘第3トレンチの堆積環境は同じ沖積面に設置した試掘第4トレンチと似る。段丘崖と現存の用水路に挟まれた狭隘な地域であることと、深掘りで遺物が検



第2図 トレンチ配置図および周辺地形図(ほ場整備前)

出できなかったことから本調査の必要性が低いものと考えた。

試掘第4トレンチは、段丘の下に設けたトレンチである。上面での遺構検出はできなかったが、下層で広域火山灰であるアカホヤ火山灰層を検出した。アカホヤ火山灰層の下には黒色の粘質土があり、有機物とともに縄文時代早期の土器が出土した。

遺物・遺構については、本調査時のトレンチと重複するため、あわせて記述したい。

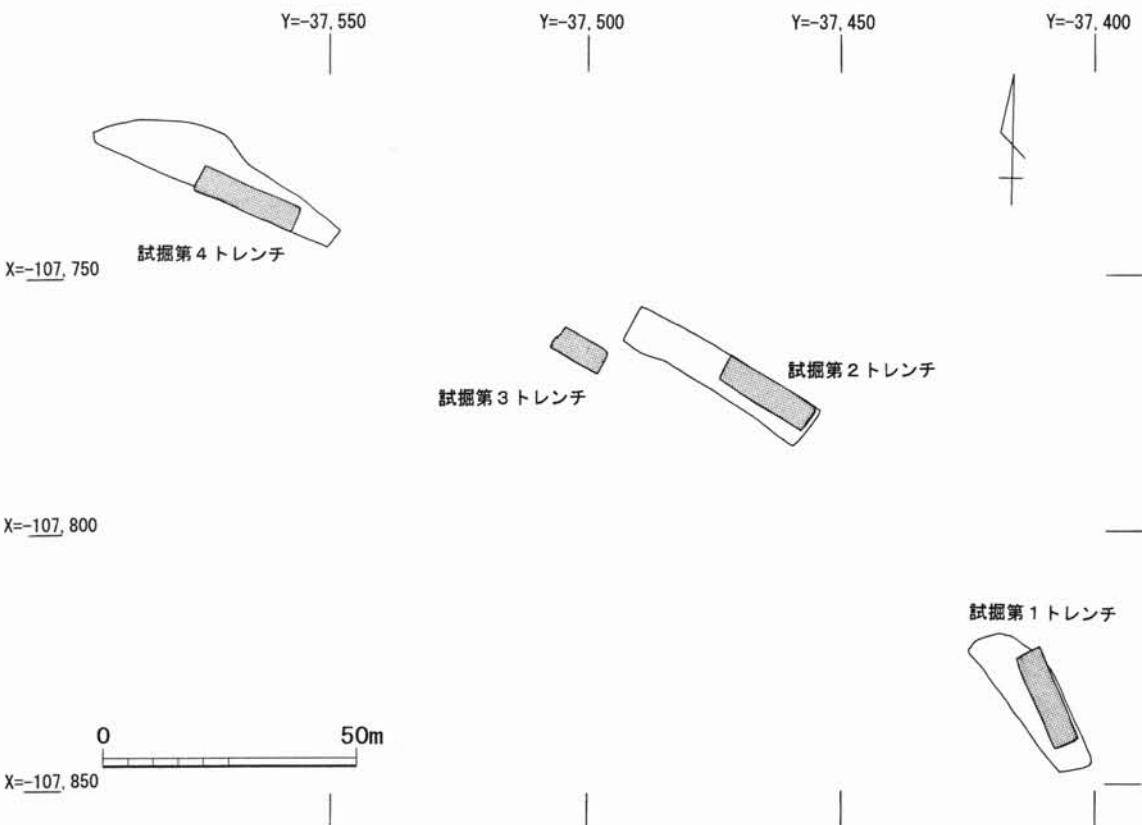
(2)第6次調査

試掘結果を受け、試掘第1トレンチと重複するように、第1トレンチ、試掘第2トレンチと重複するように第2トレンチ、試掘第4トレンチと重複するように第3トレンチと設置した。試掘第3トレンチについては、調査可能面積が狭く、湧水が激しく、試掘によって遺物が出なかったため調査対象地から除外した。

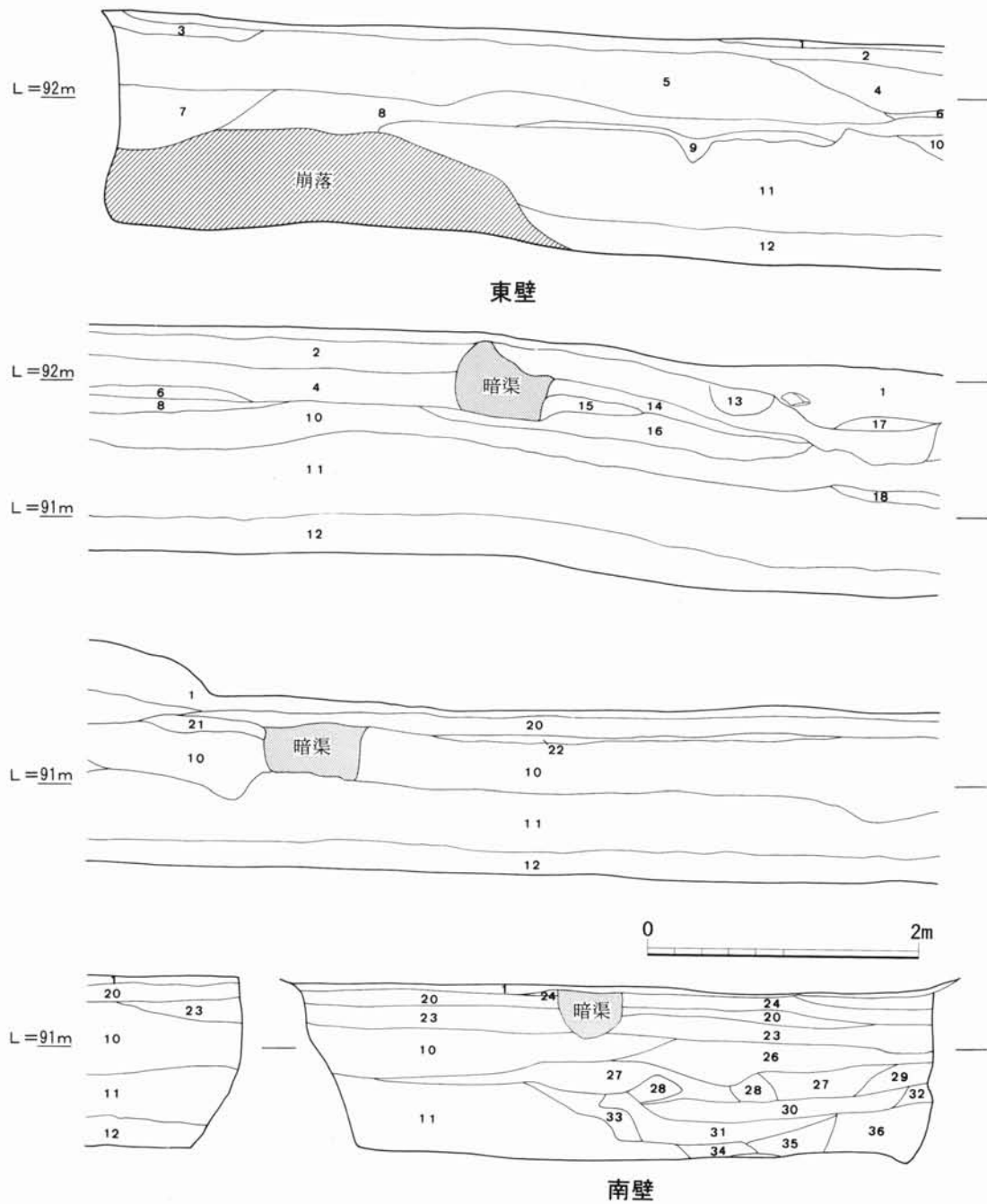
①第1トレンチ

第4次調査区と農道を1本隔てて近接するトレンチである。試掘結果を受け拡張してトレンチを設置したが、重機掘削中からおびただしい湧水が認められた。そのため、2インチのポンプを昼夜稼動する必要があった。また、平成16年秋の台風による集中豪雨によってトレンチ肩が大きく崩れ、二次的な崩落も予見されたことから、数千個の土嚢によって調査区の壁面を保護したため有効な土層断面図を記載する事が困難であった。そのため、第4図に試掘第1トレンチの土層断面図を掲載し代わりとした。

基本的な層序は、円磨されていない岩片を含む砂礫層が耕作土、床土の下にあり、砂礫層の下



第3図 案察使遺跡第5・6次調査トレンチ配置図



- |                  |               |                |
|------------------|---------------|----------------|
| 1. 暗褐色砂質土        | 13. 灰色砂礫      | 25. 淡黄灰色粘砂質土   |
| 2. 淡灰色砂質土        | 14. 淡灰色礫混砂質土  | 26. 黒灰色礫混粘砂質土  |
| 3. 暗黄灰色砂礫        | 15. 暗黄褐色砂礫    | 27. 黒褐色礫混粘砂質土  |
| 4. 灰褐色砂礫         | 16. 灰色砂礫      | 28. 黒褐色粘質土     |
| 5. 緑灰褐色砂礫        | 17. 黒色礫混粘質土   | 29. 黄灰褐色礫混粘砂質土 |
| 6. 灰色礫混粘砂質土      | 18. 黒色礫混粘質土   | 30. 黒褐色礫混粘砂質土  |
| 7. 淡灰色粘砂質土       | 19. 灰色砂礫      | 31. 青灰色礫混粘砂質土  |
| 8. 暗褐色粘質土 (ピート層) | 20. 緑褐色砂質土    | 32. 淡黄灰褐色粘砂質土  |
| 9. 暗灰色砂礫         | 21. 暗褐色粘質土    | 33. 黒色粘質土      |
| 10. 暗緑灰色砂礫       | 22. 暗褐色粘質土    | 34. 黒色礫混じり粘質土  |
| 11. 黒灰色シルト       | 23. 灰褐色礫混粘砂質土 | 35. 灰褐色礫混粘質土   |
| 12. 暗灰色シルト       | 24. 青灰色礫混粘質土  | 36. 黒色粘質土      |

第4図 試掘第1トレンチ東壁・南壁断面図

には11層に代表される黒色のシルト層が広がる。11・12層の層理面付近には火山灰層と考えられる層が部分的に認められた。12層以下は黒色と暗灰色のシルト層が交互に堆積していた。その下には砂礫層があり湧水が激しく、この層の直上のシルト層には、表皮のついた樹木の幹が検出できた。12層以下の層位は重機による地層確認であるが、湧水が激しく肉眼観察によってのみ確認している。

第1トレンチで検出した遺構は、すべて土坑で総数12か所存在する。土坑はすべて前述の砂礫層の部分から、シルト層まで掘削されている。埋土にはブロック状に上層の地層が入ることから掘削された後に埋め戻されたものと考えられる。

**土坑SK01** 土坑が掘られた底部近くでは、袋状になるようにシルト層を挟んでいるようすが見てとれる。直径約1.3m、検出面からの深さ0.35mの土坑である。遺構内からは弥生時代中期の土器片が1個出土している。この調査区の土坑の内、弥生時代中期の遺物が出土したのは土坑SK01だけである。

**土坑SK02** 直径3.3mの調査区内で最も大きな土坑である。ブロック状に層が入る部分があり、シルト層より上位の土層起源と考えられる堆積層が認められる。出土遺物が確認できなかったため時期は不明である。検出面からの深さ0.5mである。

**土坑SK03** 平面形が円形で直径約2.7m、検出面からの深さ0.4mの土坑である。ブロック状に層が入る部分があり、シルト層より上位の土層起源と考えられる堆積層が認められる。出土遺物が確認できなかったため時期は不明である。

**土坑SK04** 平面形が円形で直径約2.8m、検出面からの深さ0.6mの土坑である。ブロック状に層が入る部分があり、シルト層より上位の土層起源と考えられる堆積層が認められる。出土遺物が確認できなかったため時期は不明である。

**土坑SK05** 平面形が円形と考えられる直径約2m、検出面からの深さ0.4mの土坑である。ブロック状に層が入る部分があり、シルト層より上位の土層起源と考えられる堆積層が認められる。出土遺物から庄内期の土坑と考えられる。

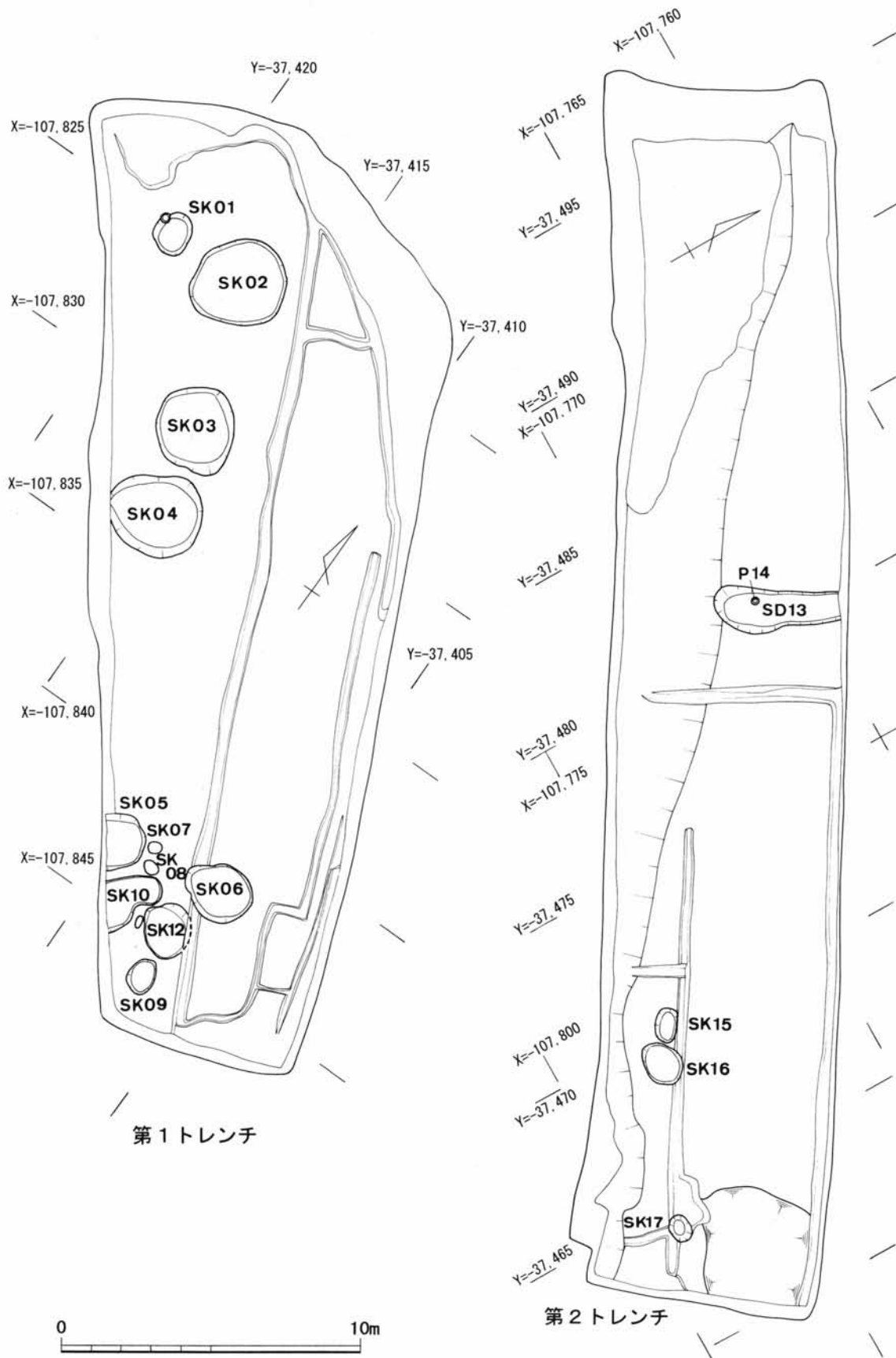
**土坑SK06** 試掘第1トレンチで北半を検出していた土坑で直径約2m、検出面からの深さ0.3mを測る。土坑内からは棒状の木製品と庄内期の甕が出土した。

**土坑SK07・08** 小型の土坑で埋土は砂礫層である。検出面からの深さが約0.1mと浅く他の土坑と性格が異なる可能性が指摘できる。

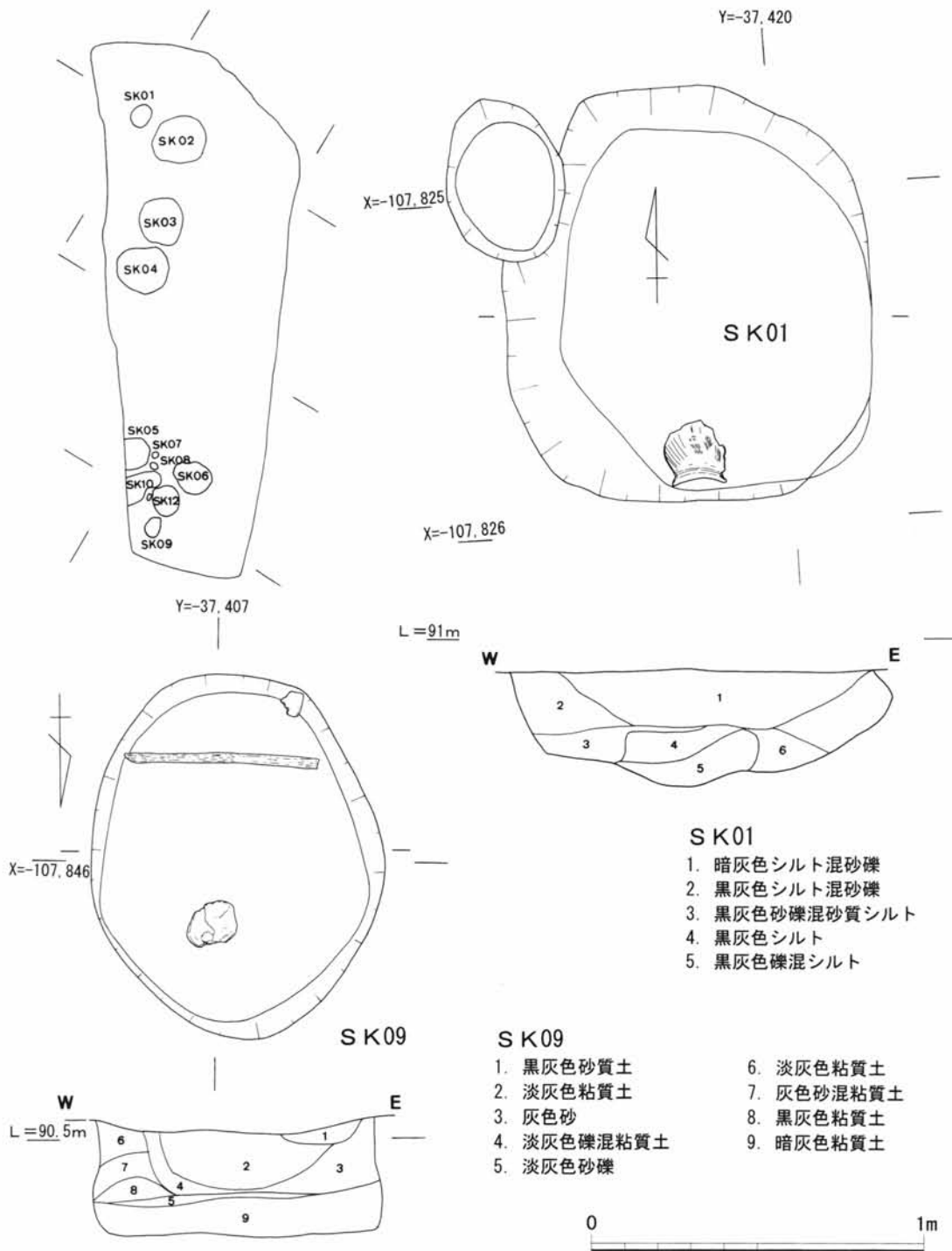
**土坑SK09** 短径1m、長径1.2m検出面からの深さ0.3mの平面形は楕円形の土坑である。土坑内からは棒状木製品と庄内期の土器が出土している。

**土坑SK10** 平面形が不正形な土坑で検出面からの深さ0.3mを測る。土坑の底部には凹凸があり、他の土坑と異なる特徴をもつ。土坑内から庄内期の土器が出土している。

**土坑SK12** 平面形が円形と考えられる直径約1.6m、検出面からの深さ0.4mの土坑である。ブロック状に層が入る部分があり、シルト層より上位の土層起源と考えられる堆積層が認められる。出土遺物から庄内期の土坑と考えられる。



第5図 第6次調査第1・2トレンチ遺構平面図

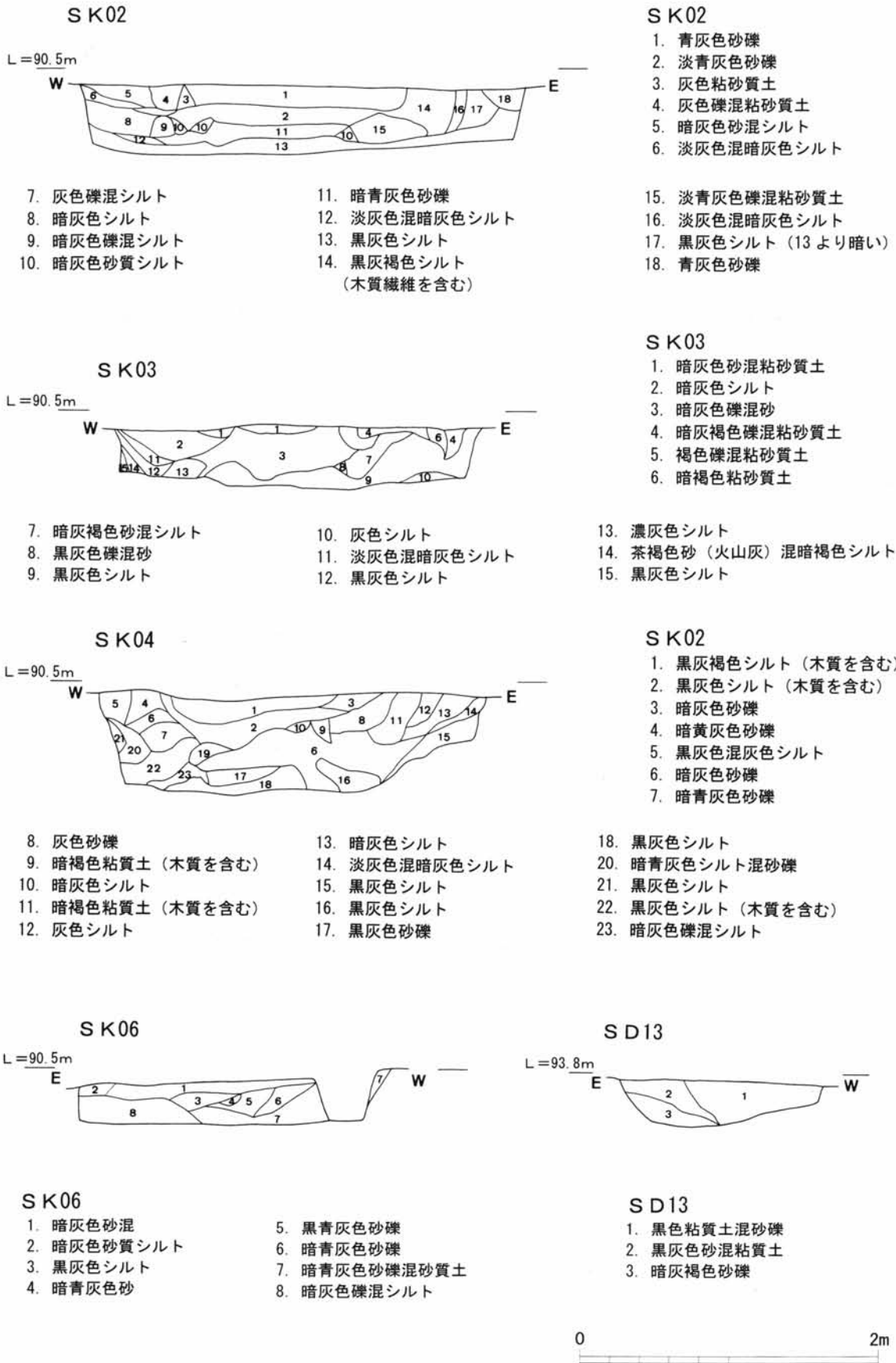


第6図 第6次調査第1トレンチ遺構平・断面図

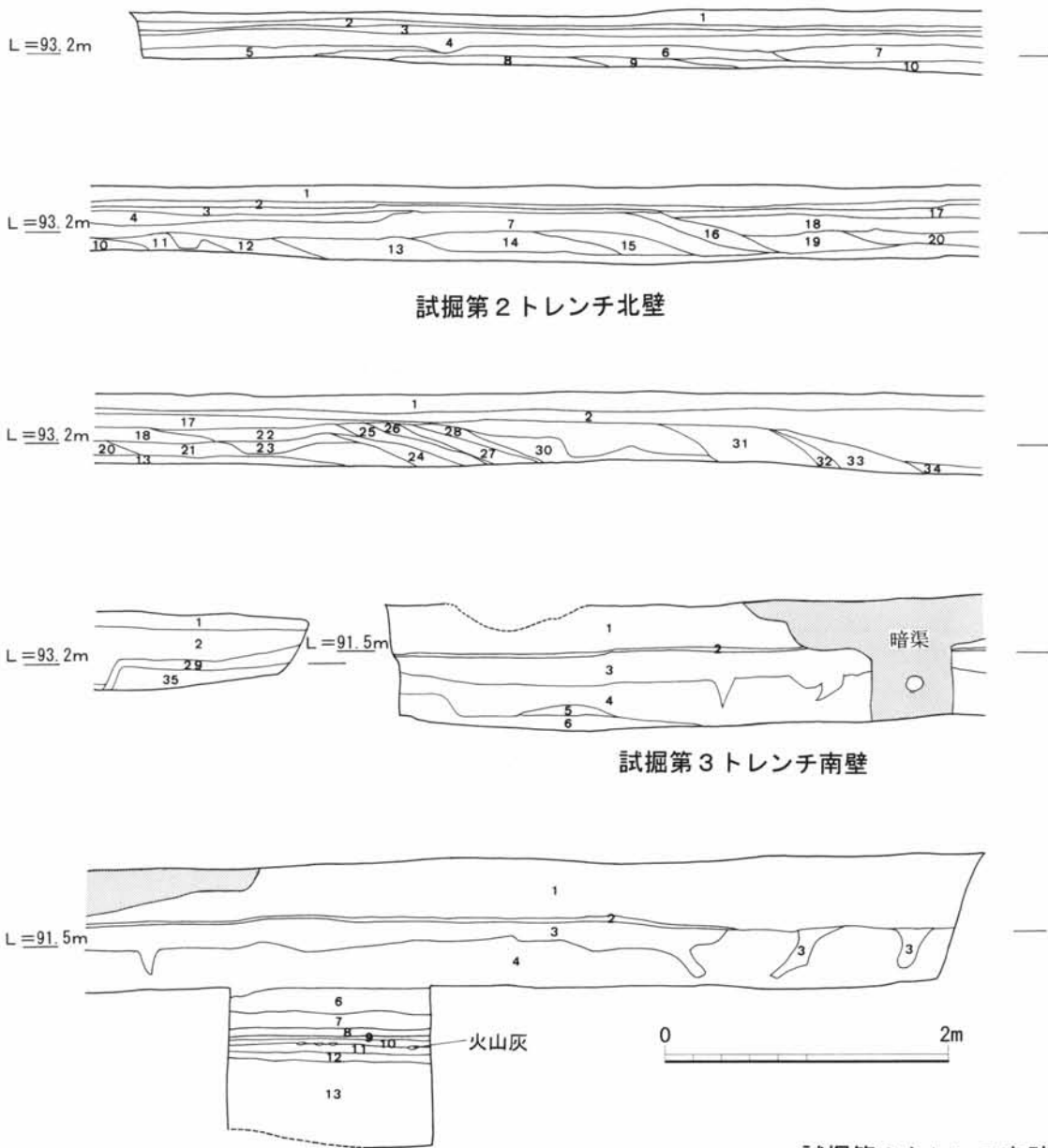
②第2トレンチ

段丘と考えられる第1トレンチの載っている面よりも高い部分に設けられたトレンチである。トレンチの西部と南辺部は段丘崖になっており、西部では崖面から湧水が激しく川状を呈している。調査区南辺には包含層が残されており平安時代から弥生時代までの遺物が含まれていた。調査区の大部分は段丘形成期の地層まで削平が及んでおり、溝のほかほとんど遺構が検出できず、多くは南部に集中する。





第7図 第6次調査第1・2トレンチ遺構断面図



試掘第2トレンチ北壁

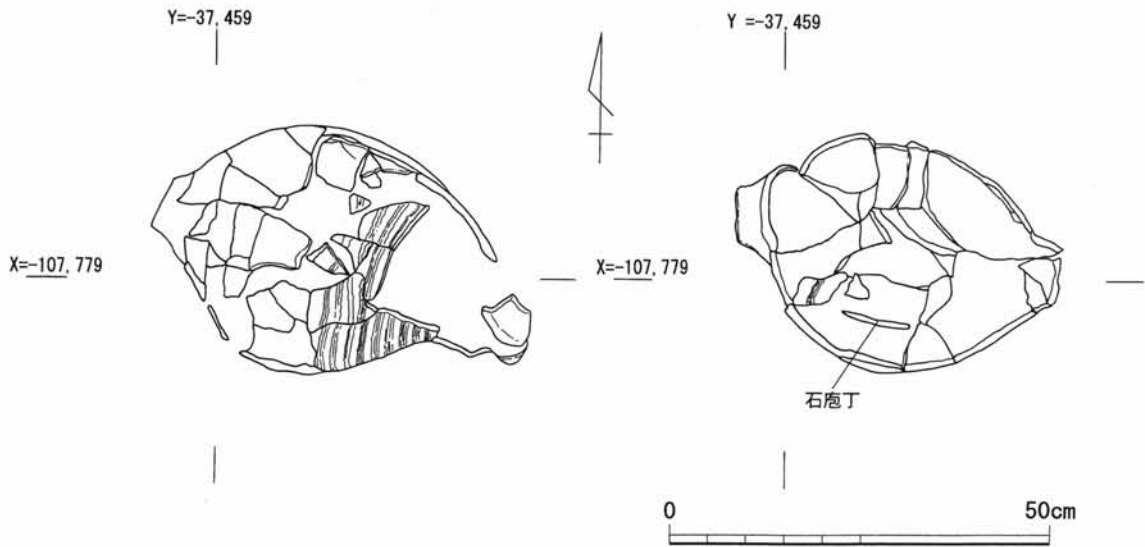
1. 整地土
2. 暗青灰色粘砂質土 (攪乱)
3. 黄灰褐色粘砂質土 (攪乱)
4. 青灰色粘砂質土
5. 暗黄灰褐色粘砂質土
6. 淡灰色礫混粘砂質土
7. 黒褐色礫混粘砂質土
8. 暗灰褐色粘砂質土
9. 暗灰褐色礫混粘砂質土
10. 黒褐色礫混砂質土
11. 黄褐色砂質土
12. 暗褐色砂質土
13. 暗黄褐色砂質土
14. 淡灰色礫
15. 灰色砂砂質土
16. 灰色砂礫
17. 黄灰褐色礫混粘砂質土

18. 黒褐色礫混粘質土
19. 淡青灰色礫混砂質土
20. 黄褐色礫混砂質土
21. 淡灰褐色砂質土
22. 明黄褐色礫混粘砂質土
23. 明黄褐色粘砂質土
24. 淡灰褐色砂質土
25. 灰褐色礫混砂質土
26. 淡黄灰褐色粘砂質土
27. 黒灰褐色礫混粘砂質土
28. 黄灰褐色礫混粘砂質土
29. 灰褐色礫混粘砂質土
30. 淡灰褐色礫混粘砂質土
31. 淡灰褐色礫混砂質土
32. 黄褐色砂質土
33. 灰褐色砂質土
34. 黄褐色礫混粘砂質土
35. 灰褐色砂質土

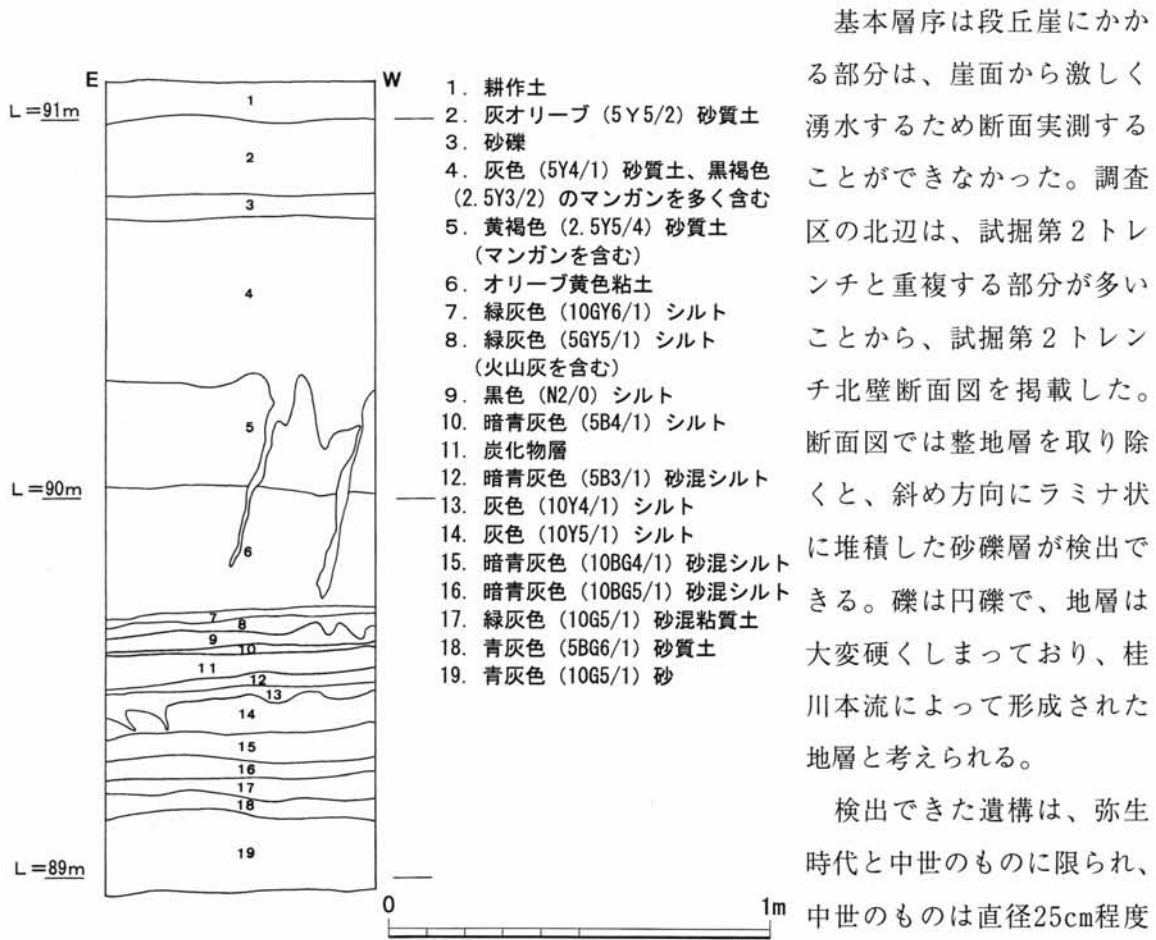
試掘第3トレンチ南壁

1. 茶褐色粘砂質土
2. 砂礫
3. 青灰褐色粘砂質土
4. 黄灰色粘砂質土
5. 黄灰色礫混砂質土
6. 暗灰褐色粘砂質土
7. 緑黄灰色粘質土
8. 暗灰褐色シルト
9. 暗緑黄灰色粘質土
10. 暗灰色シルト
11. 灰色シルト
12. 緑灰色粘砂質土
13. 緑黄灰色粘砂質土

第8図 試掘第2トレンチ北壁断面図



第9図 第6次調査第2トレンチ土坑S K17内弥生土器出土状況



第10図 第6次調査第3トレンチ深掘南断面

る柱穴であるが、建物としてまとまるほどは検出できていない。

土坑S D13 トレンチ中央部で検出した、段丘崖に対して直行する断面が浅い「U」字状を呈する溝である。検出長約4.2m、幅1.4m、検出面からの深さ約0.35mを測る。埋土からは弥生時代中期前葉の甕が出土している。

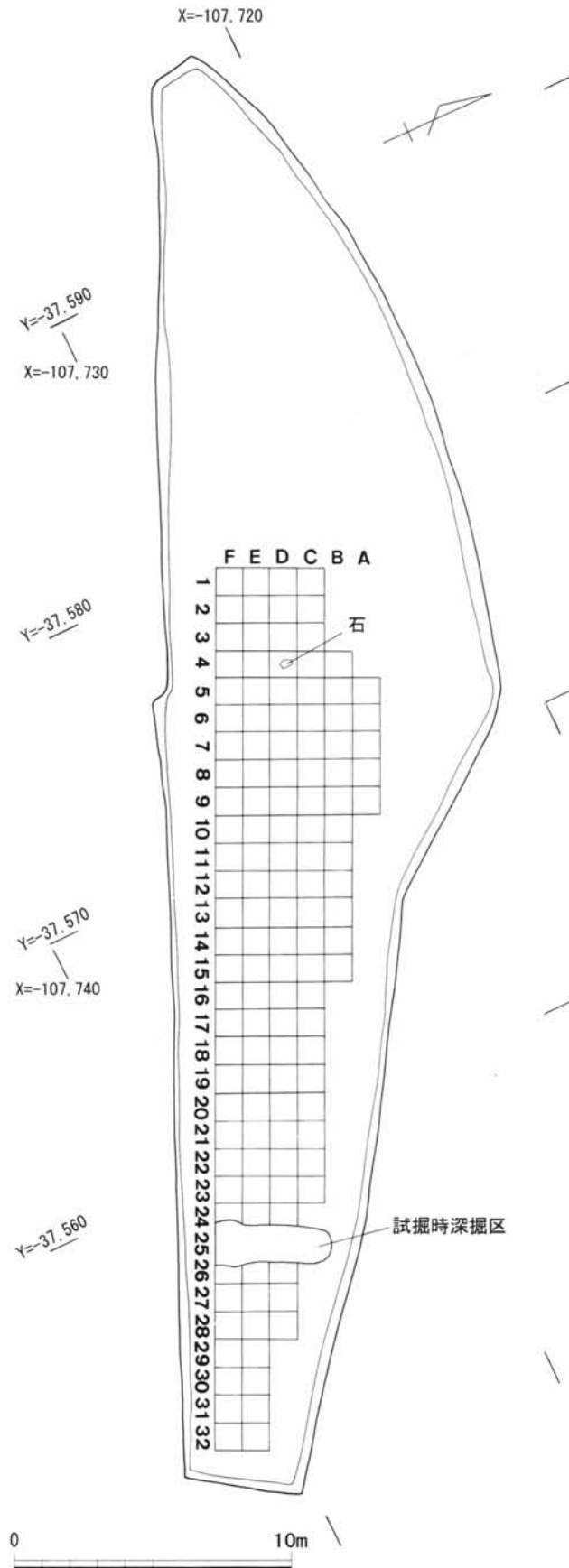
土坑S K 14・15 それぞれ平面形が楕円形を呈する土坑で、検出面からの深さは約0.1mと浅く、出土遺物は認められなかった。

土坑S K 17 平面形が楕円形を呈していたと考えられる土坑であるが、攪乱や試掘トレンチの側溝掘削によって潰されており規模が不明である。土坑の中からはほぼ完形の弥生土器の壺が出土している。土器は口縁部を底部に比べやや高く横位に埋納されていた。土器棺の可能性が指摘できる。土器の内部からは石庖丁が出土している。

③第3トレンチ

第3トレンチは、試掘第4トレンチで縄文時代早期の遺物包含層を確認できた場所に設定したトレンチである。試掘第3トレンチの記述で述べたように薄い砂礫層が耕作土、床土の下層に見られるがこの層を取り除いた4層上面が安定した層理面と考えられたため第4層上面で遺構精査を行ったが、検出できなかった。

重機掘削によって火山灰層上面でとどめ、第11図で示したように北からA～F西から1～32に1m四方のグリッドを設定して縄文時代早期の地層を掘削した。グリッドは千鳥状に掘削し、遺物が確認できた地域は掘り残した部分も広げ掘削した。その結果縄文時代早期の土器は試掘時深掘区南壁とそれに隣接したF 26・24でのみ出土した。検出層位は第12層で出土土器は例外なくこの薄層の中で検出できた。この地層および上下の層らは冠水した状況で堆積し陸化したことがなかったと考えられる。また、出土層前後の



第11図 第6次調査第3トレンチ平面図

地層からは炭化物や木材、木葉などが確認できた。また、シルト質の地層には含まれない大型の円礫がD4で検出できた。平らな面を上水平の状態に出土した。台石に利用されたような顕著な打痕などは認められなかった。

#### 4. 出土遺物

##### (1) 第1トレンチ

弥生時代の遺物はすべて土坑内から出土している。加工痕の認められない棒状の木製品以外はすべて土器で、壺、甕のみが出土しており甕が主体である。

3は土坑SK12で出土した複合口縁をもつ壺である。内外面はナデ調整が施される。1・2は複合口縁をもつ小型の甕である。外面はハケ調整、内面はナデ調整が施される。1は土坑SK12、2は土坑SK10から出土している。3・4は甕の口縁部で内外面ともナデ調整である。4は土坑SK06、5は土坑SK05出土である。6～9・12～14は土器の底部である。6～8・12は内外面ハケ調整である。6は土坑SK09、7・8・12は土坑SK12で出土した。13は外面の調整ナデ、内面ハケ調整で土坑SK06出土である。9は土坑SK12で出土し、外面タタキ内面はハケ調整である。14は土坑SK12で出土し、調整は外面タタキ、内面ユビオサエ後ナデである。10は土坑SK12出土の甕で、口縁内外面はナデ、体部外面はタタキで、最大径付近はハケ調整が施される。内面はハケ調整である。11は第1トレンチ西壁が崩落した部分で出土した甕である。口縁内外面はナデ、体部外面はタタキで、最大径付近はハケ調整が施される。内面はハケ調整である。体部下半部には接合痕が認められる。

16は土坑SK01出土の甕である。口縁内外面はナデ、体部外面内面はハケ調整である。この土坑でのみ弥生時代中期の遺物が出土しているが、図示した大型の破片以外出土遺物がなかった。

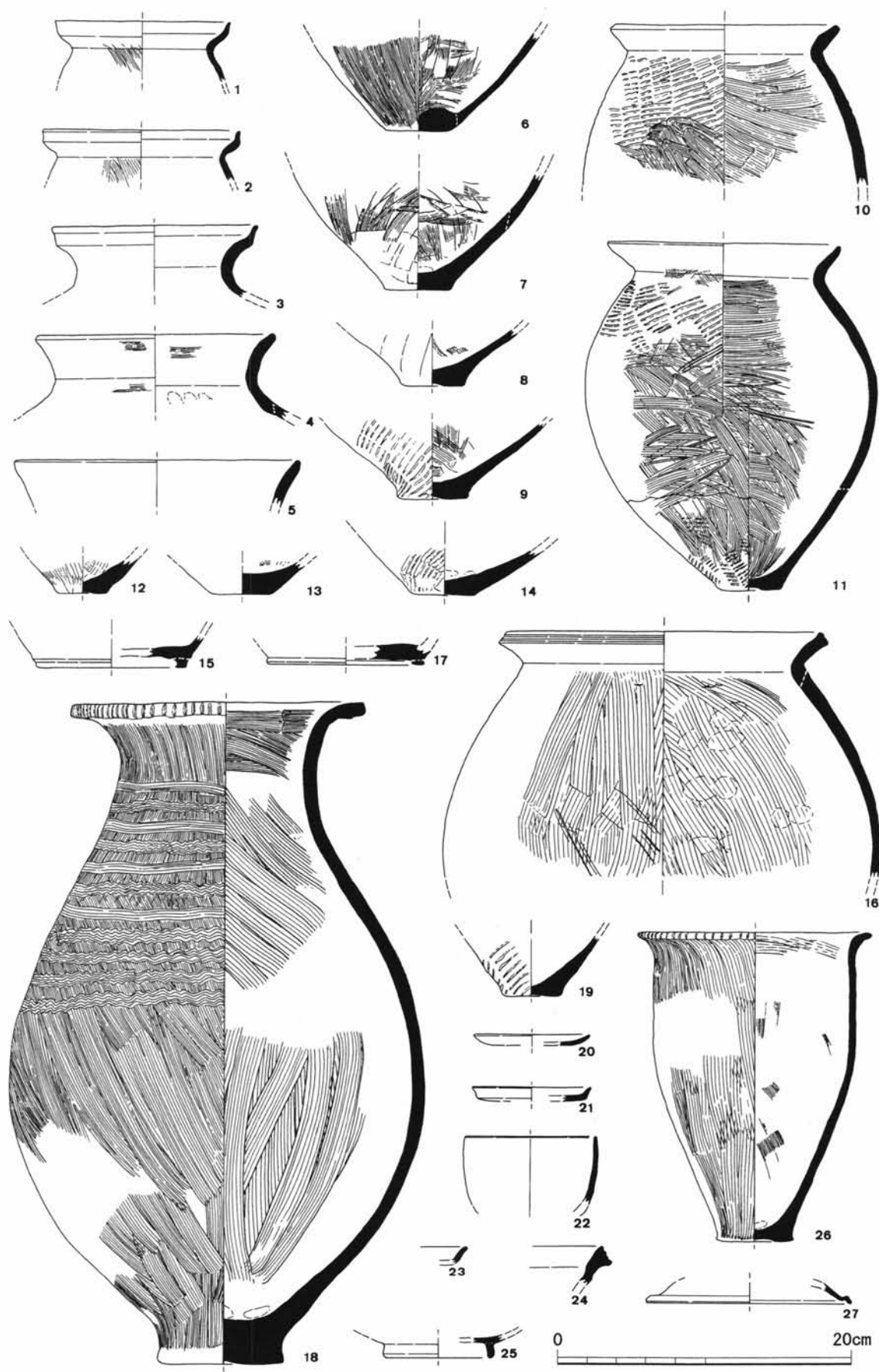
包含層出土遺物には、15は奈良時代後期の須恵器の杯Bがある。この時期の遺構は発見されていないが、奈良・平安時代の遺物は第4次調査でも出土していることから、付近に当該期の遺構が存在しているものと想定されるが、案察使という地名と関連して今後の調査によって明らかにされることが課題として残される。

##### (2) 第2トレンチ

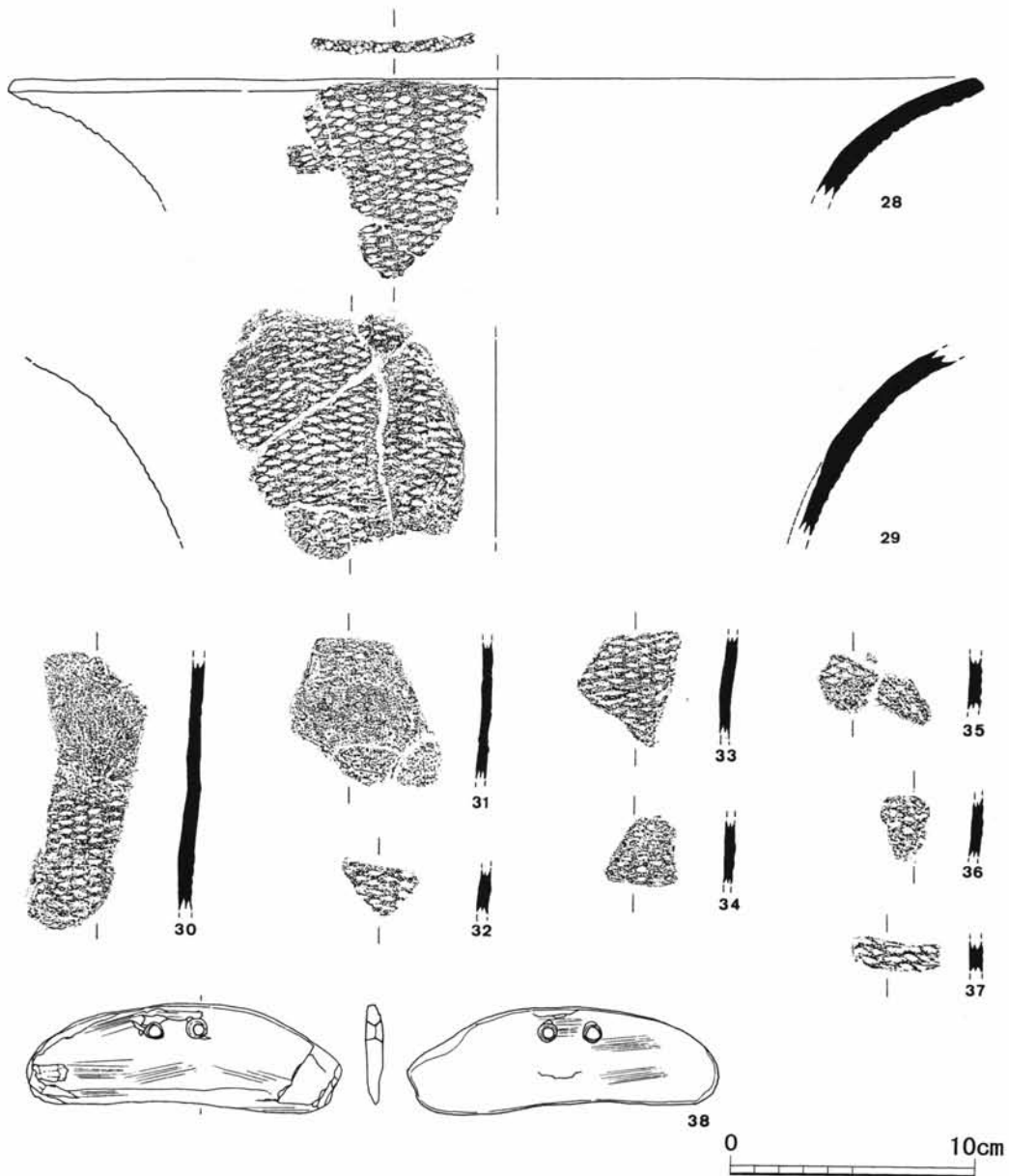
18は土坑SK17から完形で出土した弥生時代中期の壺である。口縁部端は面をもちキザミが施される。内外面はハケ調整で、外面頸部から体部にかけてクシ描直線文、波状文によって加飾される。底部には、破碎された土器片が含まれる。19は調査区南部の包含層から出土した弥生時代の甕である。外面にはタタキが認められる。26は溝SD14出土の弥生時代中期前葉の甕である口唇部にはキザミが施され、内外面はハケ調整である。

38は灰色を呈した粘板岩素材の石庖丁である。穿孔部2か所はいずれも両面から穿孔されており、部分的に紐ずれも認められる。刃部は片刃であるが、磨耗のため明確な刃部を形成していない。

20は溝SD14と重複して検出した柱穴から出土した土師皿である。内外面はナデ調整である。16は包含層から出土した須恵器の杯Bである。21は包含層出土の土師皿で内外面はナデ調整であ



第12図 出土遺物実測図(1)



第13図 出土遺物実測図(2)

る。23は包含層出土の瓦質の皿である。22は唐津の鉄釉を施した椀である。24は包含層出土の須恵質の播鉢口縁部である。25は包含層出土の灰釉陶器の椀の底部である。貼り付け高台で内外面に施釉される。27は須恵器の蓋である。遺物は遺構外から出土したもの意外は、ほとんど南部落ち込み部分に堆積した包含層内からの出土である。

### (3)第3トレンチ

28は試掘時深堀区南壁から出土した縄文時代早期の押型文土器である。口唇部には斜め方向にLR単節の縄文圧痕が施される。また、器表面は3つが1単位になるネガティブ楕円押型文が同一方向で施文される。器形は尖底の深鉢と考えられ、口縁部は大きく外反する。29は第6次調査時に5次調査時の深堀区西壁精査中に検出した土器片である。地区ではF24東部に当たる。28同様に同一方向に3つが1単位になるネガティブ楕円押型文が器表面に施される。口縁部は欠損し

ているが、屈曲の具合から口縁部付近の破片と考えられる。3連の施文の規格は28と同じで胎土と出土位置から同一個体と考えられるが、接点は存在しない。28・29ともに暗褐色を呈し、金雲母やカクセン石が顕著に認められる。

30～34は出土状況から本来は接合関係が認められるはずであるが、破断面が脆く接合部位を正確に特定することが困難であった。出土位置はF26グリット南壁精査時に検出できた。28・29は部分的な剥落のため施文が認められない部分が存在するが本来は、全面に1方向からの施文が施されていたものと考えられる。施文は3つが1単位になるネガティブ楕円押型文で、3連の施文の規格は28と同じである。しかし、28・29のものとは器壁の厚さが異り、雲母片の量が若干異なる。土器片はいずれも体部片で28・29とは部位が異なるため同一個体の可能性も排除できない。35はF26グリット出土の押型文土器片である。36はF24・23グリット間のセクション出土の押型文土器片である。37は試掘第4トレンチ深堀区南壁を第6次調査で再精査したとき出土した押型文土器片である。縄文土器はF列の24～26で出土しており、出土地点が限られた範囲内である。また、出土地層は第10図12の暗青灰色砂混じりシルト層からのみ出土している。土器片の多くには外面にススが付着しており、器表面もよく保存されている。包含されている土層の検討からもほぼ原位置で出土しているものと考えられる。出土遺物はすべて大川式の新断階と考えられる。

## 5. まとめ

案察使遺跡の調査は、平成16年度の調査で第6次を数えるが、第5・6次調査において初めて縄文時代の遺物が確認できた。亀岡盆地ではもっとも古い時期の土器片であるとともに、縄文早期前半代の安定した地層が一定の広がりを持っていることが明らかになった。地層の検討から陸化した場所でないことがわかり、近隣に本来の生活場所があったものと想定される。

第1・3トレンチ、試掘第3トレンチの置かれた段丘下の沖積地は、縄文時代には桂川本流に洗われることなく安定した状況で、浅い湿地状地形であったが、段丘上部には第2トレンチで見られるように弥生時代になると溝や土坑が作られるようになる。特に土坑SK17は土器棺墓と考えられることから、生活域が近くにあるものと考えられる。段丘上は桂川の本流によって作られたと考えられる大きな円礫を含む堅くしまった砂礫層のラミナ状堆積が見られ、それを切り込むように大きな円礫を含む粘砂質土層がある。この土層は土石流堆積物と考えられる。

第1トレンチで検出された円形のを主体とする土坑群は、前述したように第4次調査においても多数検出された。同調査の調査概要では、土器に用いる粘土採掘坑と位置づけられている。今回の調査で検出した土坑も同様に、黒色の粘質土まで掘られ掘削が礫層まで及ばない。また、良質な粘土部分では土坑の壁が抉り込まれている。内部から出土した土器の時期も第4次調査のものと大半は変わらないことから同じような性格の土坑と想定される。八木町池上遺跡の土器の態度分析を行った結果多くの火山ガラスが含まれる土器があり、濃縮されたガラス層あるいは火山灰層そのものを含む粘土が土器づくりに用いられたと考えられた。第1トレンチの良好な粘土層にも火山灰がレンズ状に含まれていることから、このような桂川の後背湿地の粘土を土器づく



りに好んで用いた可能性も指摘できる。

案察使遺跡の名前に有る「案察使」と言う古代の官職名と土地との関連を今回は明らかにすることができなかった。ただ、奈良・平安時代の遺物が散見できることと、段丘下の堆積環境を考え合わせると何らかの当該時期の遺構が段丘上に展開していたと考えられる。

(中川和哉)

#### 参考文献

- 戸原和人 2002 「国営農地再編整事業(亀岡地区)関係遺跡」『京都府遺跡調査概報』第103冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 戸原和人・福島孝行 2003 「国営農地再編整事業(亀岡地区)関係遺跡」『京都府遺跡調査概報』第108冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 山田猛・松田真一・矢野健一ほか 1992 『前半期押型文土器の諸問題』(第12回三重県埋蔵文化財展研究集会資料) 三重県埋蔵文化財センター
- 京都府教育委員会 2002 『京都府遺跡地図』第2分冊
- 亀岡市史編さん委員会編 2000 『新修 亀岡市史—資料編—』第1巻 亀岡市
- 森下衛ほか 1992 『千代川遺跡』(京都府遺跡調査報告書第16冊) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 田代弘 1992 「池尻遺跡」『京都府遺跡調査概報』第48冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中川和哉・高野陽子・筒井崇史 2000 「池上遺跡第5次」『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 2. 内里八丁遺跡<sup>うちさとほっちょう</sup>第20次発掘調査概要

### 1. はじめに

内里八丁遺跡は、京都府八幡市内里に所在し、木津川西岸の自然堤防上に位置する、広範囲にわたる集落遺跡である。これまで第二京阪道建設や府道新設工事に伴って調査が行われ、弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが確認されている。主な遺構としては、弥生時代の水田跡や古墳時代の竪穴式住居跡、古代・中世の掘立柱建物跡や井戸跡などが検出されている。また、奈良時代の古山陰道の側溝と考えられる溝なども検出されている。

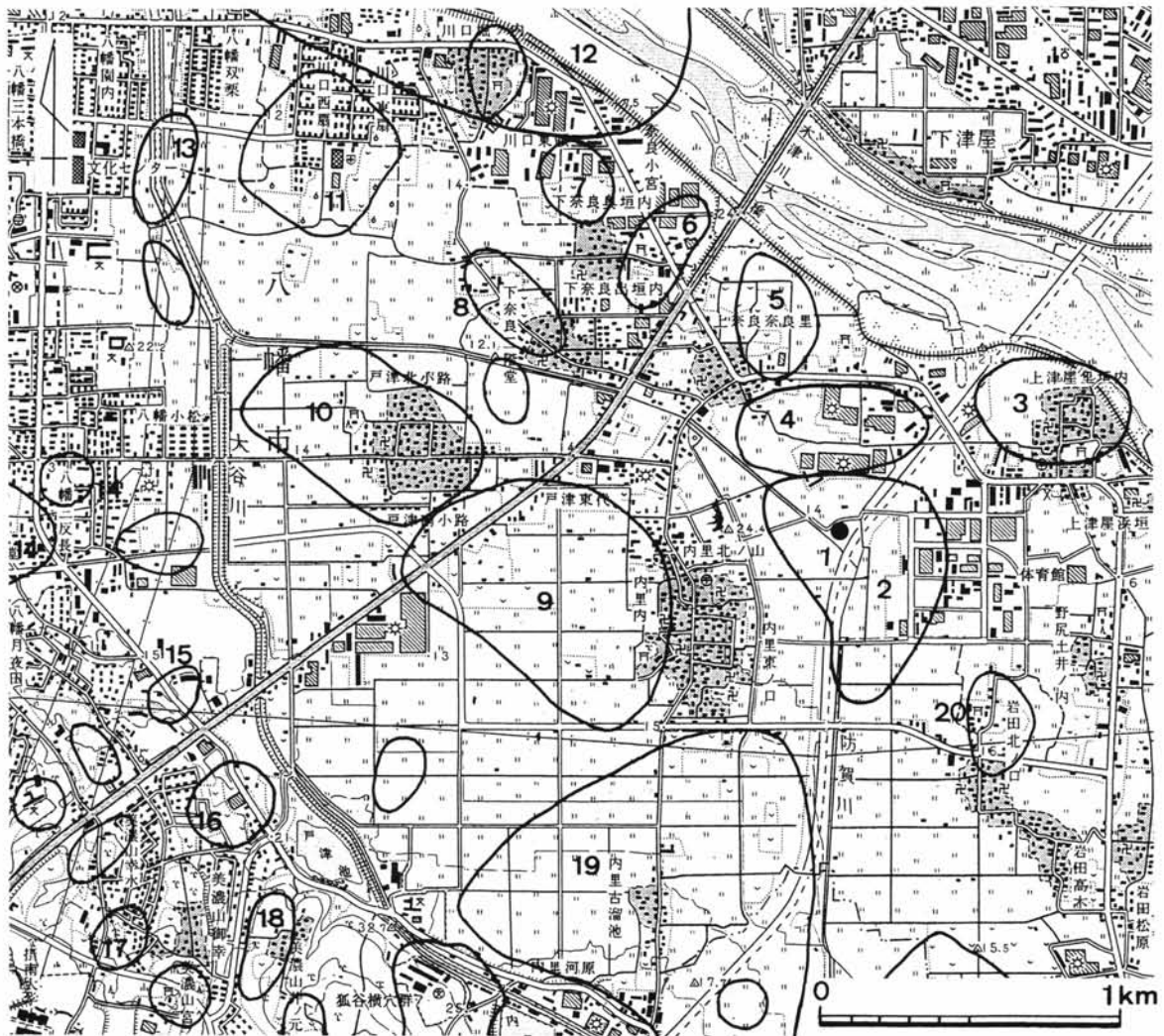
今回の調査は、主要地方道八幡木津線道路新設改良事業に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。現地調査は、平成15年4月24日から開始した。

当初、第18次調査時に試掘調査できなかった上奈良遺跡の範囲内で約40m<sup>2</sup>のトレンチを設けて遺構・遺物の有無を確認した。その結果、このトレンチでは河川堆積状の砂質土の水平堆積を確認したのみで、顕著な遺構・遺物は残存していなかった。

つぎに、内里八丁遺跡内において、5月6日から、第1トレンチ、約2,400m<sup>2</sup>の調査に着手した。まず、包含層・遺構面に至るまでの表土および旧耕土などを原因者側で除去し、さらに、そ

付表 調査回数一覧表

回数	調査年度	調査地	調査主体	調査原因	文献
1	昭和63	試掘（今福・内垣内）	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書26
2	平成元	試掘（八丁・中島・日向堂）	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書26
3	平成2	第二京阪A地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書26
4	平成3	第二京阪A地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書26
5	平成3	試掘	八幡市教育委員会	土地区画整理	八幡市埋蔵文化財発掘調査概報13
6	平成4	試掘	八幡市教育委員会	土地区画整理	八幡市埋蔵文化財発掘調査概報13
7	平成4	第二京阪A・B地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書26
8	平成5	第二京阪B地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書30
9	平成6	第二京阪D地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書30
10	平成7	第二京阪D地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書30
11	平成7	第二京阪G地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書30
12	平成8	第二京阪G地区	京都文化博物館	第二京阪道路	京都文化博物館調査研究報告13
13	平成8	第二京阪C・F地区	京都文化博物館	第二京阪道路	京都文化博物館調査研究報告13
14	平成9	第二京阪E・F地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書30
15	平成10	第二京阪E地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書30
16	平成12	府道A・B地区	京都府埋文センター	府道新設改良	京都府遺跡調査概報103
17	平成13	府道A・B地区	京都府埋文センター	府道新設改良	京都府遺跡調査概報103
18	平成14	試掘（内里・上奈良）	京都府埋文センター	府道新設改良	京都府遺跡調査概報106
19	平成14	府道日向堂	京都府埋文センター	府道新設改良	京都府遺跡調査概報109
20	平成15	府道内里・上奈良	京都府埋文センター	府道新設改良	京都府遺跡調査概報116



第14図 調査地位置図(国土地理院1/25,000京都西南部・京都東南部・大阪東北部・奈良)

- |           |             |              |           |           |
|-----------|-------------|--------------|-----------|-----------|
| 1. 調査地    | 2. 内里八丁遺跡   | 3. 上津屋遺跡     | 4. 上奈良遺跡  | 5. 上奈良北遺跡 |
| 6. 出垣内遺跡  | 7. 下奈良遺跡    | 8. 今里遺跡      | 9. 内里五丁遺跡 | 10. 戸津遺跡  |
| 11. 河口扇遺跡 | 12. 木津川河床遺跡 | 13. 嶋遺跡      | 14. 女郎花遺跡 | 15. ヒル塚古墳 |
| 16. 幸水遺跡  | 17. 西ノ口遺跡   | 18. 金右衛門垣内遺跡 | 19. 新田遺跡  | 20. 魚田遺跡  |

の下層を重機掘削して、その後、人手で掘削・精査を行った。次に、同様に、第2トレンチ、約900m<sup>2</sup>を調査した。第3トレンチについては約300m<sup>2</sup>を重機掘削し、その後、人手で掘削・精査を行った。また、工事の都合で、第1トレンチについては、調査期間中に引き渡した。全ての調査は、平成16年2月26日に終了した。この間、平成16年2月20日に現地説明会を実施し、169名の参加があった。

調査を担当したのは、当調査研究センター調査第2課調査第3係長石井清司、主任調査員引原茂治・増田孝彦、専門調査員竹井治雄・石尾政信、調査員高野陽子である。

調査にあたっては、京都府教育委員会・八幡市教育委員会からご協力いただき、さまざまな方々に専門的なご教示をいただいた<sup>(注1)</sup>。また、猛暑の夏、酷寒の冬を含むほぼ一年弱の期間にわたって、現地調査に多くの方にご参加いただいた。また、整理作業にも多くの方に参加していただいた<sup>(注2)</sup>。感謝したい。

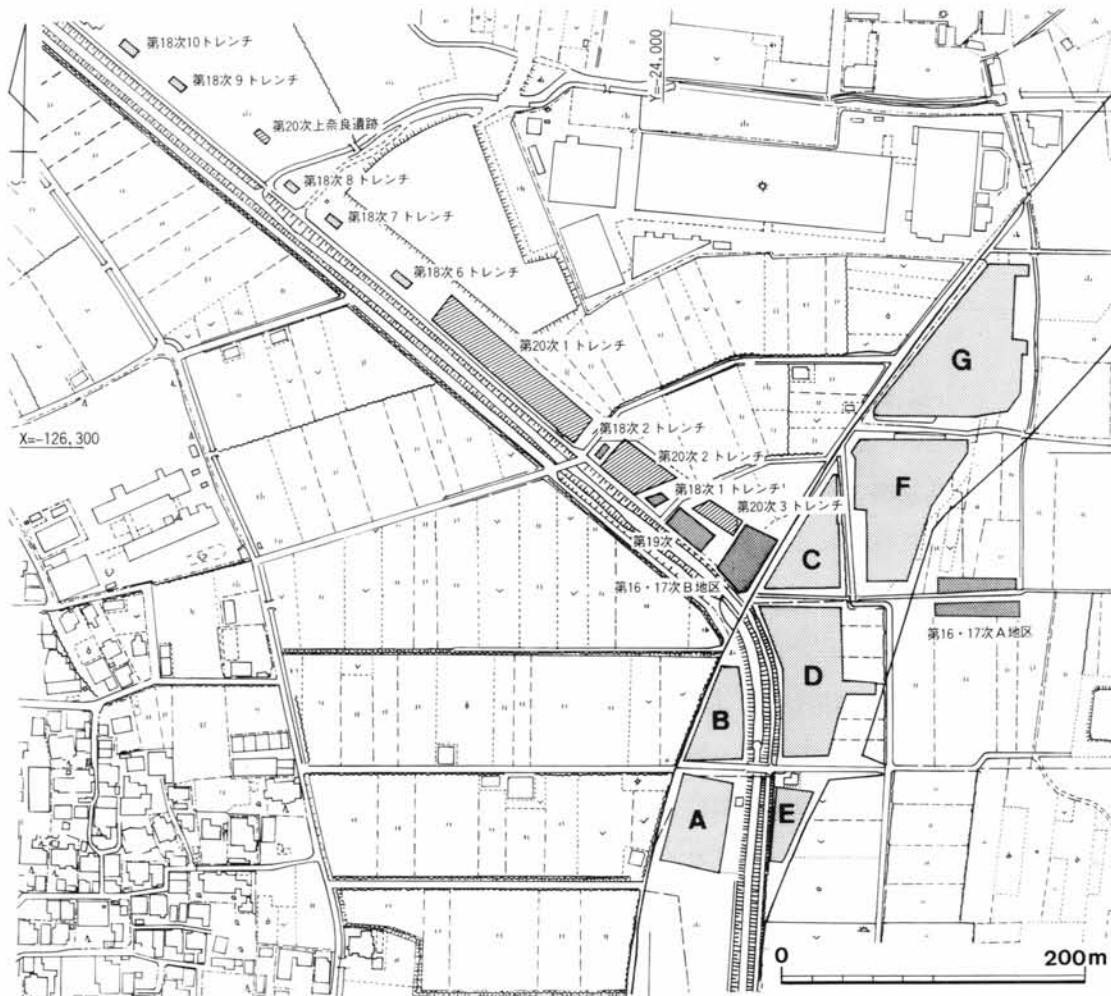
第16・17次調査では、多大な調査成果が得られているが、さまざまな制約により、十分に報告できなかった。この概要報告は、第20次調査の調査成果の報告が主であるが、それとともに、第16・17次調査の調査成果の内で欠かすことのできないものを、あわせて報告することとしたい。

なお、今回の調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

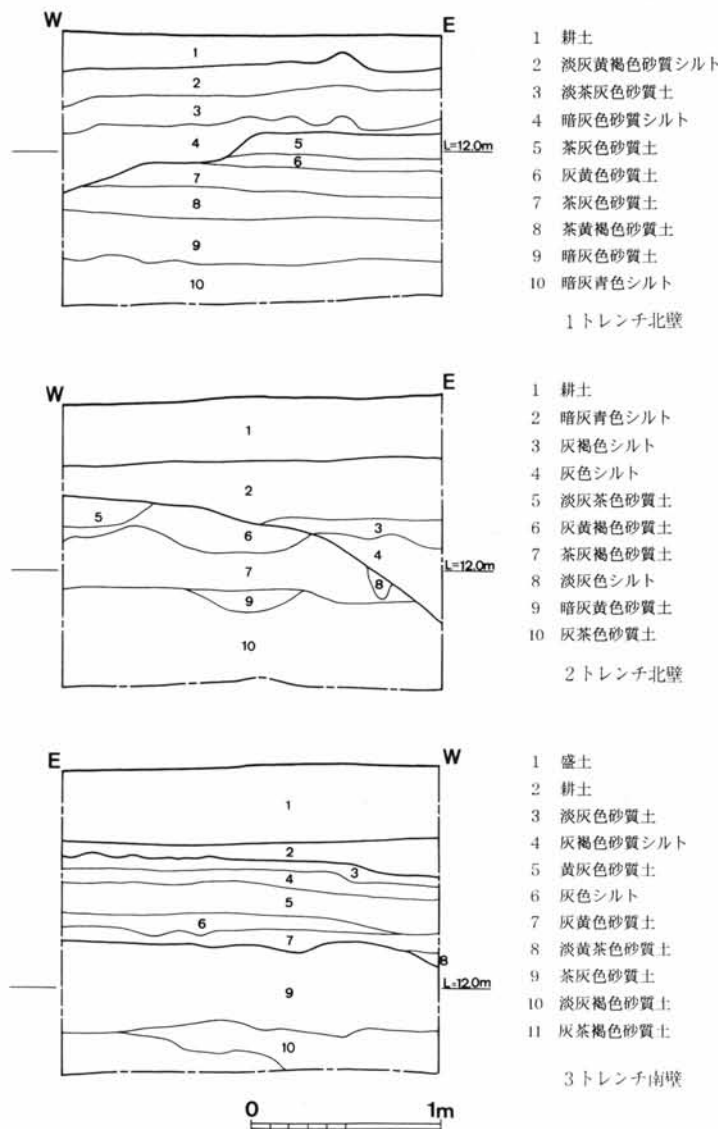
## 2. 位置と環境

内里八丁遺跡の所在する八幡市は、京都府南部の山城盆地西部に位置する。市の西側には、大阪府との境となる男山丘陵、美濃山丘陵が南北に横たわる。東および北側には、木津川が湾曲して流れる。この丘陵部と木津川の間広がる沖積平野部の自然堤防上に、内里八丁遺跡は営まれている。

八幡市における旧石器時代の遺跡としては、ナイフ形石器が出土した荒坂遺跡や宮ノ背遺跡がある。縄文時代の遺跡としては、金右衛門垣内遺跡や晩期の土器が出土した内里八丁遺跡がある。弥生時代以降は、遺跡の確認例が増える。弥生時代中期では、集落跡として内里八丁遺跡、金右衛門垣内遺跡、方形周溝墓群として幸水遺跡がある。弥生時代後期では、幣原遺跡、西ノ口遺跡、宮ノ背遺跡、中の山遺跡、木津川河床遺跡、内里八丁遺跡などがある。



第15図 トレンチ配置図



第16図 各トレンチ層序図(部分)

古墳時代前期から中期にかけては、男山丘陵周辺に、石不動古墳、茶白山古墳、西車塚古墳、東車塚古墳などの前方後円墳、前方後方墳が築造される。また、ヒル塚古墳は、粘土槨を主体部とし、方格規矩鏡や武器類を副葬する。後期には、横穴墓が美濃山丘陵を中心に多数営まれる。狐谷横穴群、女谷横穴群、荒坂横穴群などである。女谷横穴群からは鉄地金銅貼胡籐金具が出土している。古代の遺跡としては、志水廃寺、西山廃寺、美濃山廃寺などの寺院跡があげられる。志水廃寺、西山廃寺では、堂塔跡や瓦窯跡が確認され、7世紀後半から末頃の創建と考えられている。美濃山廃寺では、建物跡や溝などが検出され、奈良三彩壺片などが出土している。集落跡としては、内里八丁遺跡、上

奈良遺跡、女郎花遺跡、荒坂遺跡などがある。内里八丁遺跡では、瓦や墨書土器などが出土しており、その性格が注目される。また、古山陰道の側溝かと考えられる溝も検出されているが、第17次調査の結果から再検討が必要との見方もある。上奈良遺跡は、『延喜式』に記載されている「奈良園」の候補地とみられており、則天文字などを記した墨書土器が出土している。生産遺跡としては、四天王寺の創建瓦を焼成した平野山瓦窯がある。また、平安時代には、木津川に面した男山丘陵北側の頂部に、石清水八幡宮が勧請される。

中世の遺跡としては、内里八丁遺跡、上奈良遺跡、上津屋遺跡などがある。内里八丁遺跡では、掘立柱建物跡や井戸跡などが確認されている。上奈良遺跡では、中世の井戸跡から木造仏座像の膝部が出土している。上津屋遺跡では方形に堀をめぐらした館跡が確認されている。また、この地域独特の景観となっている島島が中世頃に形成されたと考えられている。

(引原茂治)

### 3. 調査の概要

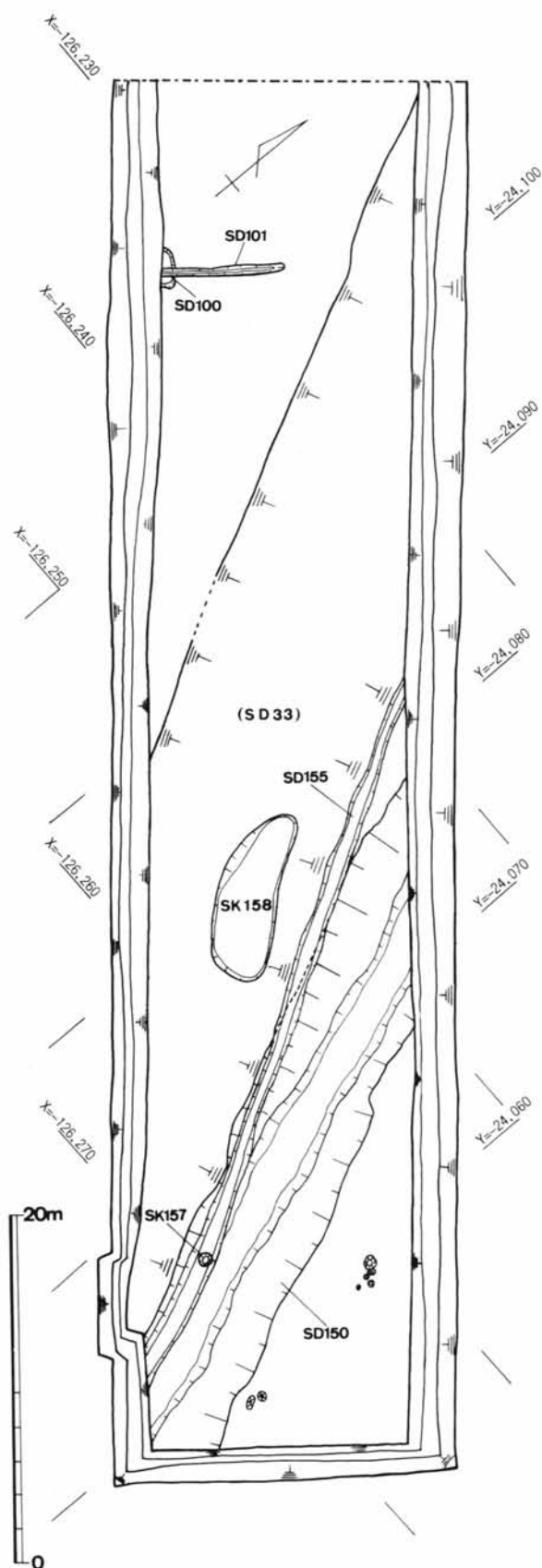
#### (1) 第1トレンチ

調査区の設定にあたっては、平成15年度の内里八丁遺跡第18次調査<sup>(注3)</sup>、および平成16年度の本掘前の試掘調査の成果をもとに設定した。第1トレンチは、今回設定した3か所の調査区の中なかでも、最も西に位置するもので、第18次試掘調査の第3～5トレンチを拡張して設定した。規模は約120×20mを測り、面積は約2,400m<sup>2</sup>である。

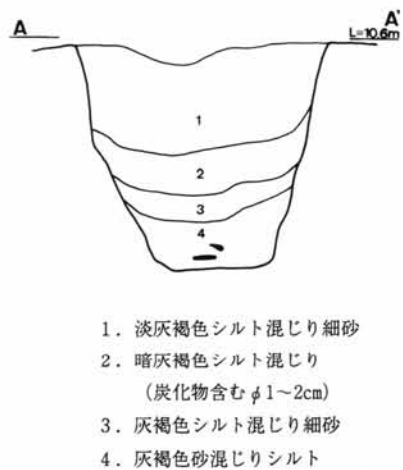
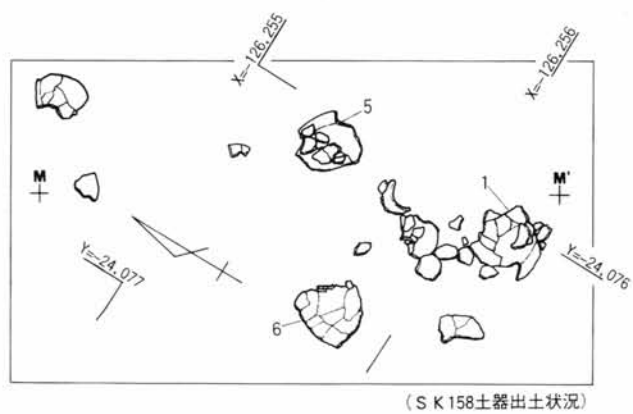
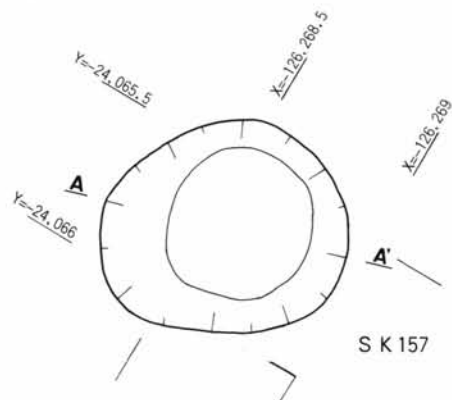
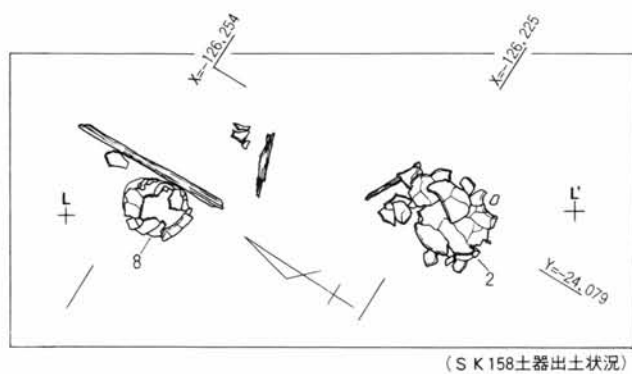
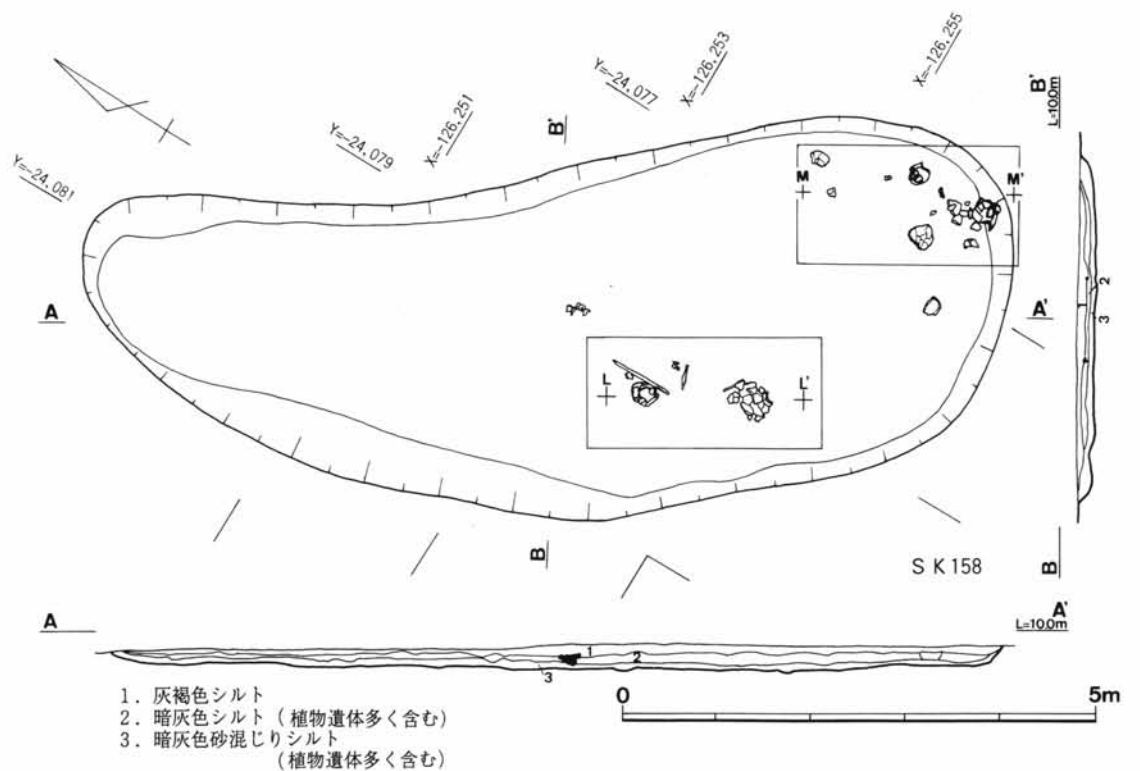
#### 1) 下層遺構(古墳時代初頭～古墳時代後期)

調査は、上層と下層の2面で行った。下層遺構には、古墳時代初頭～古墳時代後期の遺構が含まれる。検出遺構は、トレンチ中央～南側に集中し、トレンチ西部では、包含層中や古代～中世の遺構から若干の古墳時代初頭の土器が出土したものの、明確な遺構は認められなかった。内里八丁遺跡の過去の調査では、今回の調査地の東方約150mの第二京阪道路の路線帯の調査となっているA～D区(第15図)で竪穴式住居跡群を検出し、今回の調査でも第2トレンチにおいて古墳時代初頭～古墳時代前期の竪穴式住居跡群を検出している。こうしたことから、古墳時代の集落の中心は、遺跡範囲の中なかでも東の地区で展開するとみられる。第1トレンチの中央南寄りで見出した溝SD150は、古墳時代初頭に掘削された溝で、これより西側の地区で竪穴式住居跡が検出されていないことから、集落が立地する東部の微高地と西部の低地を画する溝であったと推定される。

土坑SK158 トレンチ東部で見出した土坑である。規模は、約9.7×3.7mの楕円形

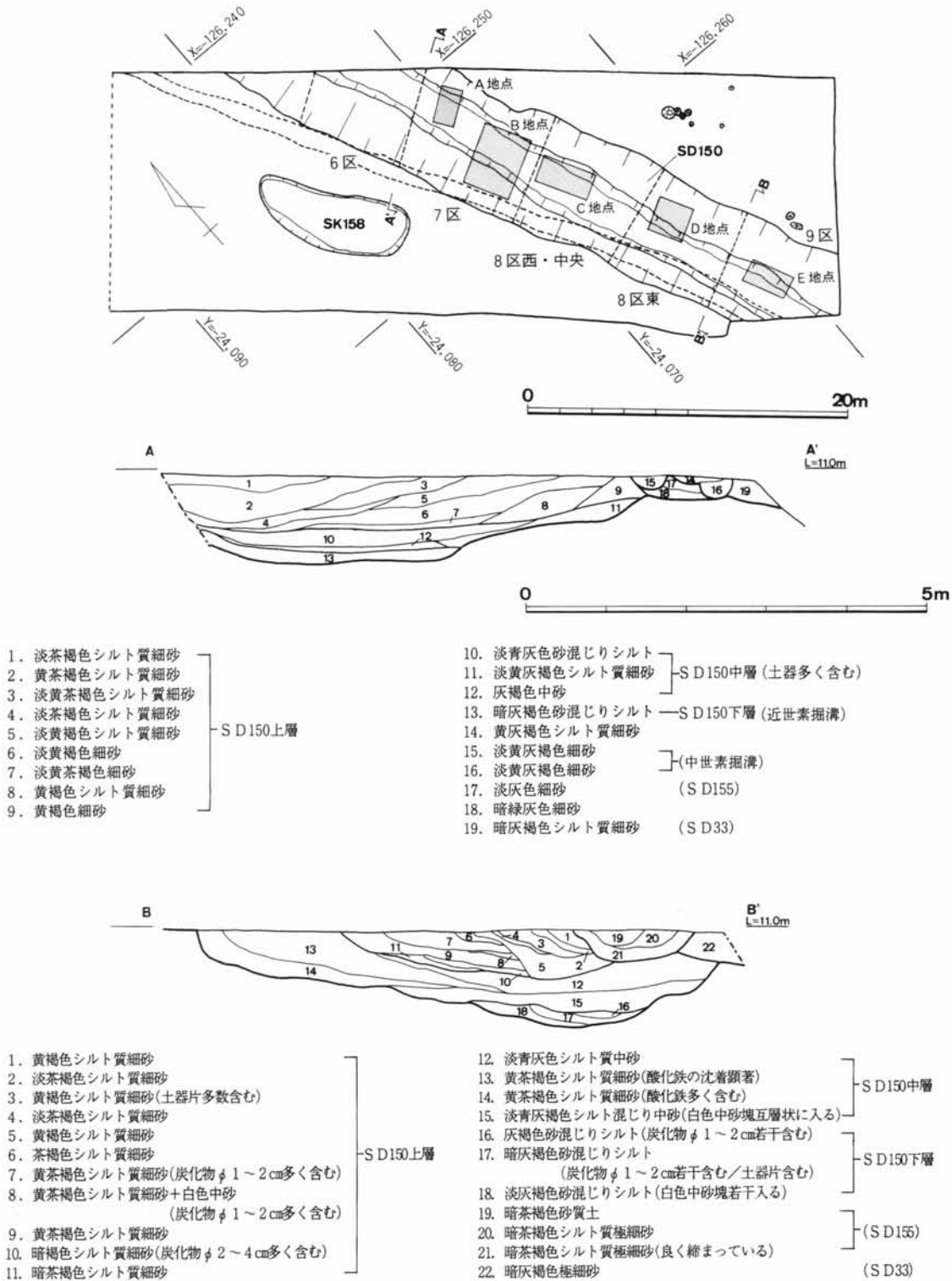


第17図 第1トレンチ平面図



1. 淡灰褐色シルト混じり細砂
2. 暗灰褐色シルト混じり  
(炭化物含むφ1~2cm)
3. 灰褐色シルト混じり細砂
4. 灰褐色砂混じりシルト

第18図 土坑 S K 158・157実測図

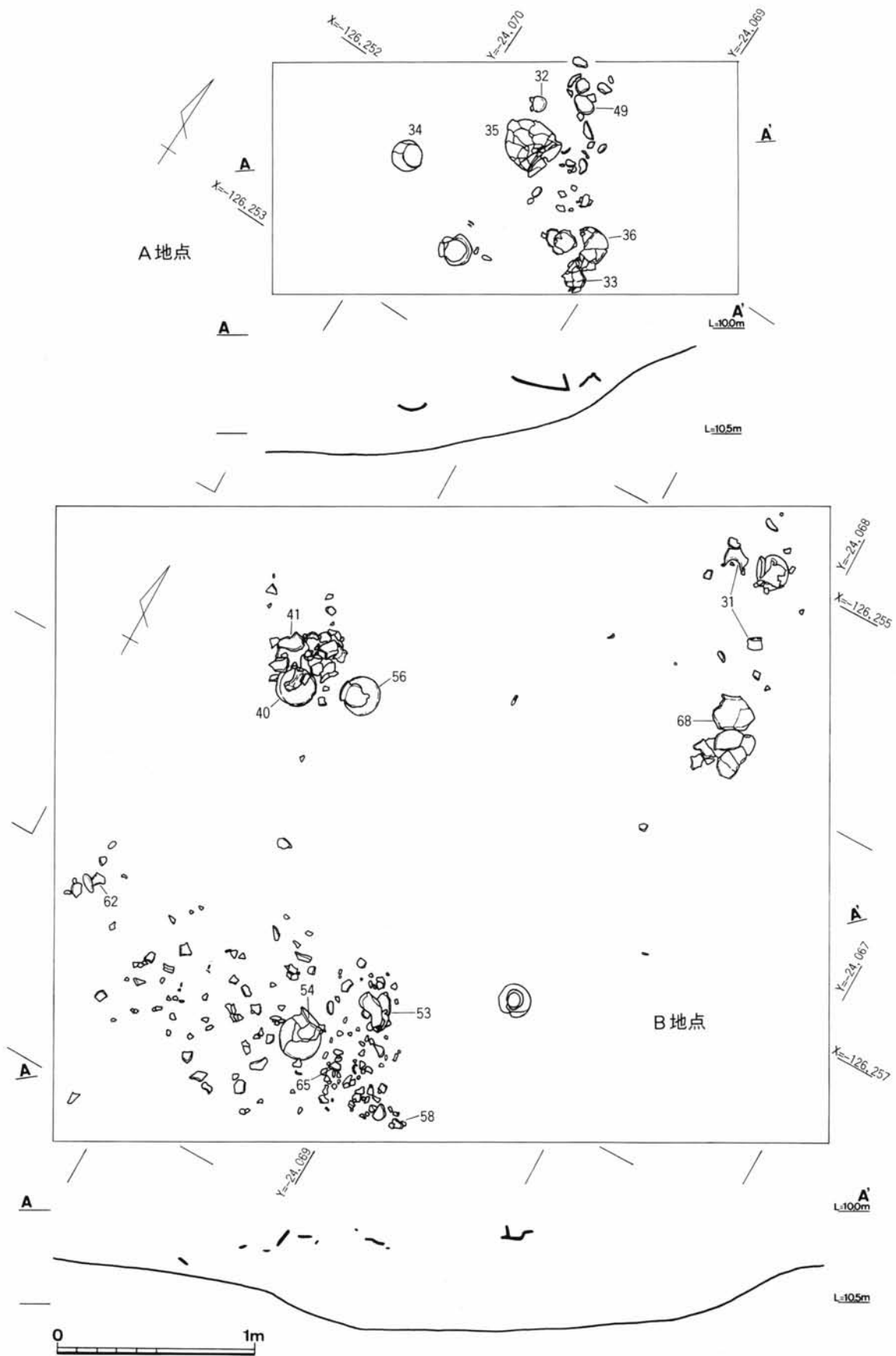


第19図 溝S D 150平・断面図

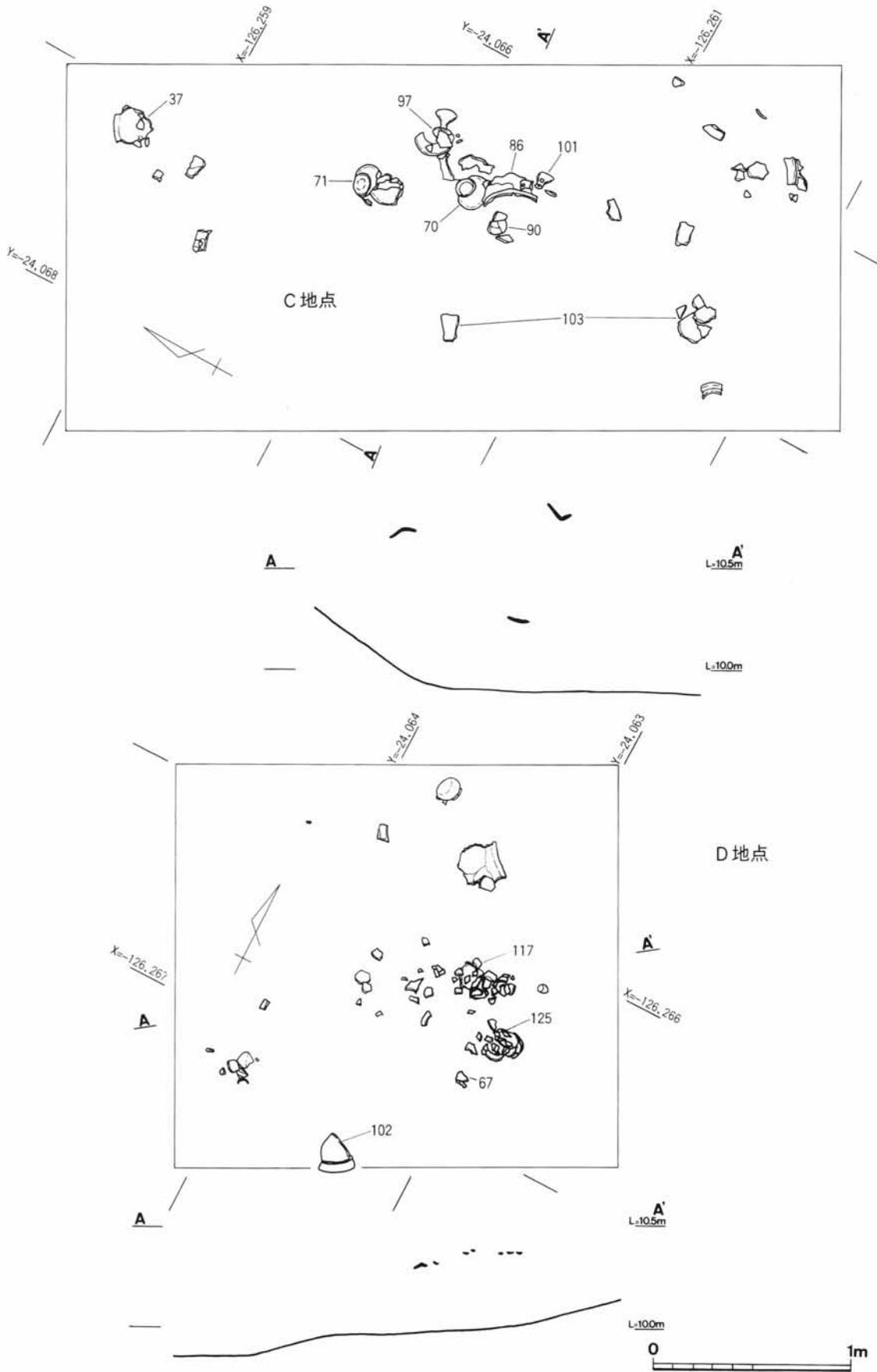
状を呈する。S K 158は、上層の溝S D 33の完掘後に、溝底で検出したもので、深さは約0.25mを測る。土坑の規模に対して、深さが浅いことから、上層は島島の溝S D 33に大きく削平されたとみられる。土坑内では、炭化物とともに、完形個体を含む庄内式甕や、初期布留式甕が出土した。出土遺物から、布留式最古相に対応する佐山Ⅱ-4式段階<sup>(注4)</sup>に掘削されたと推定される。

土坑S K 157 トレンチ南部で検出した土坑である。溝S D 155の掘削後、溝底の標高約10.6m

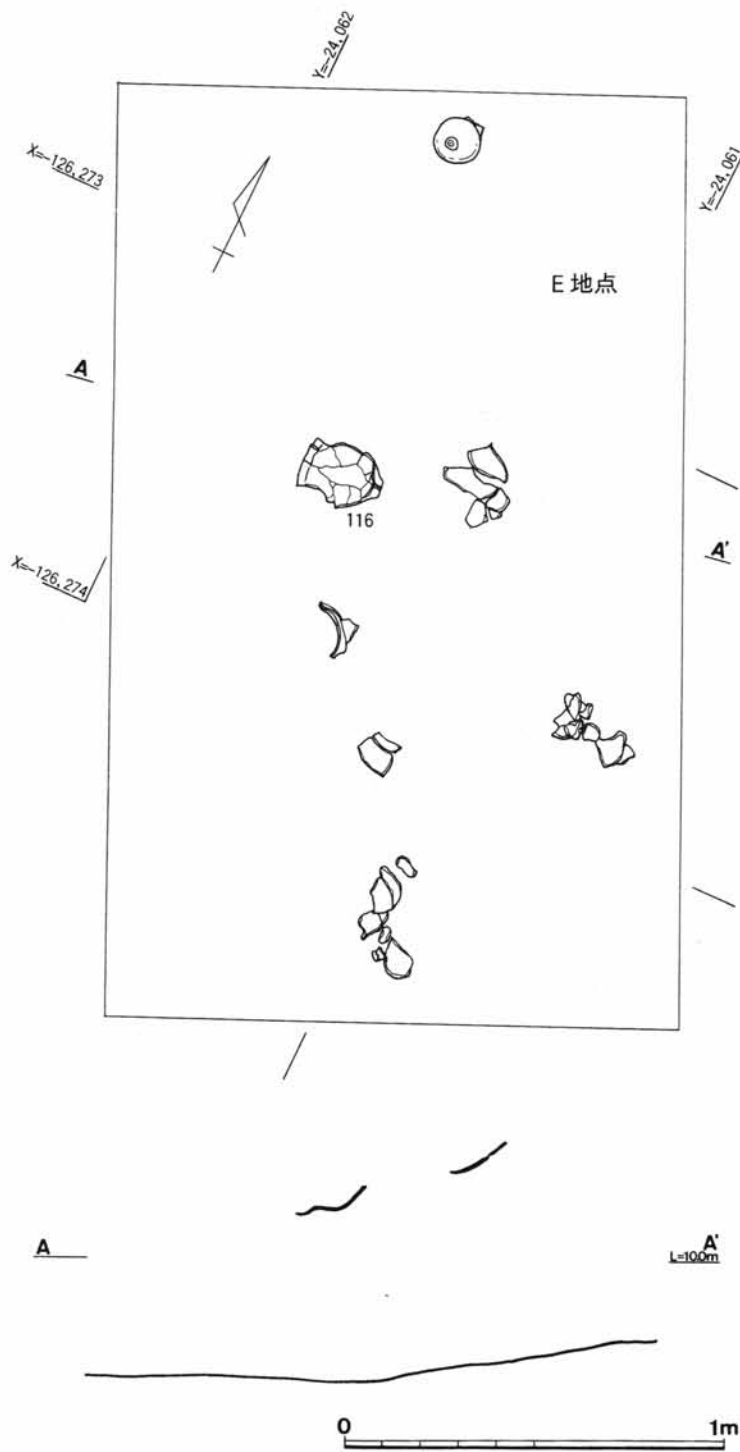




第20図 溝 S D 150 A・B地点遺物出土状況図



第21図 溝S D150C・D地点遺物出土状況図



第22図 溝 S D 150 E 地点遺物出土状況図

約1.1mを測る。上層には、一部重複して古墳時代後期の溝 S D 155が掘削される。溝幅は南東部で狭くなるが、これは南東部の立ち上がりが高島の溝 S D 33によって大きく削平されていることによるとみられる。こうしたことは、溝の最深部が南東部では東寄りに位置を遷すことから推察できる。溝底は平坦ではなく、断面はゆるやかに立ち上がる。溝の土層断面は、上層・中層・下層と大きく3層に分層することが可能である。堆積土は、下層は暗灰褐色細砂を、また中層は淡青灰色シルト質細砂を、さらに上層は淡黄褐色シルト質細砂を基準層とする。

付近で検出した。土坑の平面形は楕円形状を呈し、規模は約0.6×0.4m、深さ約0.7mを測る。土坑の底部から須恵器杯身1点が出土した。須恵器の型式は、陶邑編年 T K 209 型式におおよそ該当し、古墳時代後期末の遺構と推定される。

**溝 S D 100** トレンチ中央南壁際で検出した溝である。「コ」の字状に一部を検出したもので、竪穴式住居跡の排水溝となる可能性もあるが、柱穴などは認められなかった。溝内から土師器片が出土し、溝 S D 101 に一部を削平されることから、古墳時代初頭の溝と推定される。

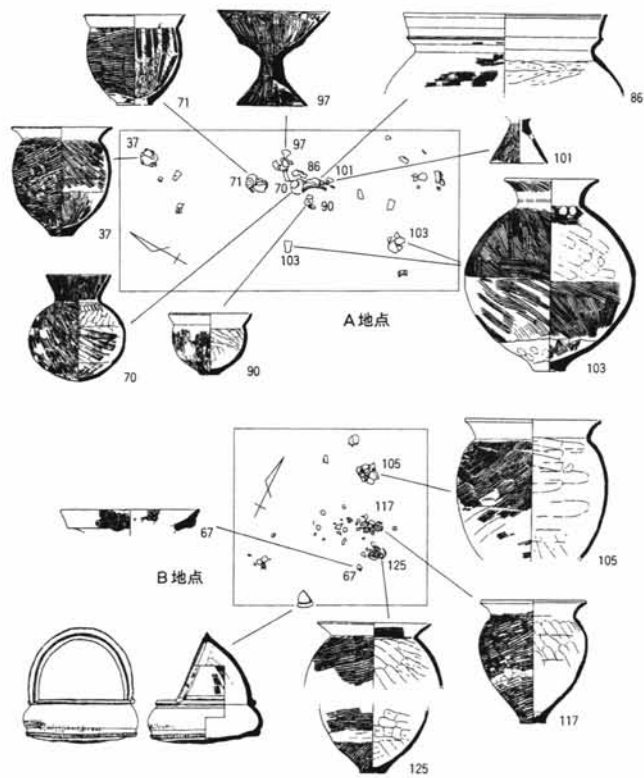
**溝 S D 101** トレンチ中央部で検出した北東から南西にのびる溝である。規模は、幅約0.5m、長さ7.5m以上、深さ約0.4mを測る。溝内から古墳時代初頭の土器が出土した。

**溝 S D 150** トレンチ東部で北西から南東にかけて、約40mにわたって検出した古墳時代初頭の溝である。幅約6～8mを測り、深さは最深部で

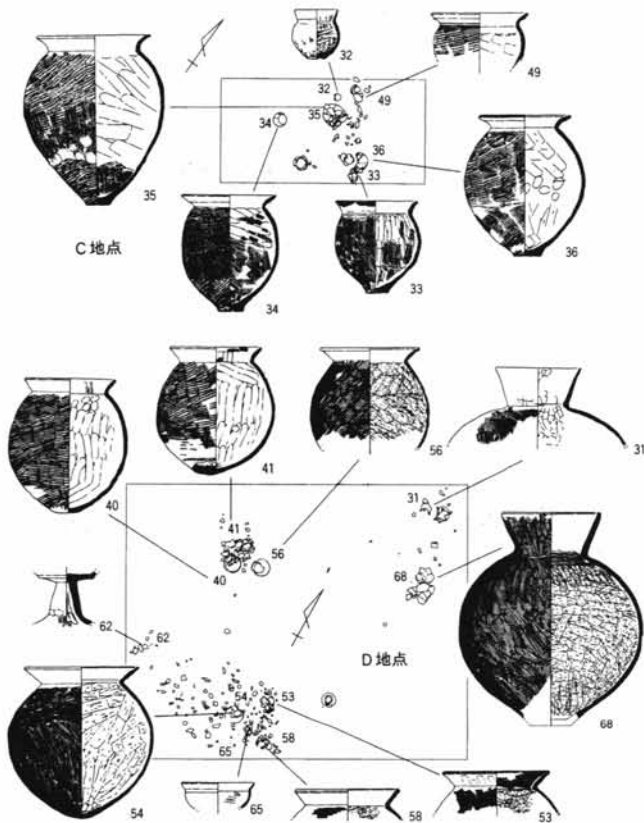
出土遺物は、溝の各所で多数の土器が出土した。これらのなかにはほぼ完形に近い土器も多く含まれる。層位別にみると、溝の下層からは、土器片がわずかに出土するにとどまり、出土土器のほとんどは中層から出土した。土器の取り上げは、溝を8区に分割して取り上げ、さらに土器が集中的にみられる地点をA地点からE地点の5か所とし、出土状況を示した(第20~22図)。溝中央の7区と8区では、完形に近い土器を多く出土している。出土土器の器種は多様で、壺・甕・高杯・器台・手焙形土器などを含む。出土土器のうち、特に注目されるのは、南東部溝中央北寄りで出土した手焙形土器(第21図D地点102)であり、内部から多量の炭化物が出土した<sup>(注5)</sup>。理化学分析の結果、これらはクリ科の樹木であることが判明している。溝の埋没の最終段階に何らかの祭祀が行われたと考えられる。また、遺物の出土状況や土層の堆積状況から、溝は滞水を常としたものでないことは明らかである。出土土器は、庄内式古~中相にあたる佐山Ⅱ-2式を中心とするが、一部庄内式新相の佐山Ⅱ-3式に下る土器を含む。最も時期の下がる土器として布留系甕を含むが、小片であることから混入遺物とみられる。

溝S D 155 溝S D 150と南側で、S D 150を削平して掘削された溝である。約38mにわたって検出し、幅0.8~1.6m、検出面での深さは約10~20cmを測る。溝内から、陶邑編年TK43型式並行の須恵器が出土した。

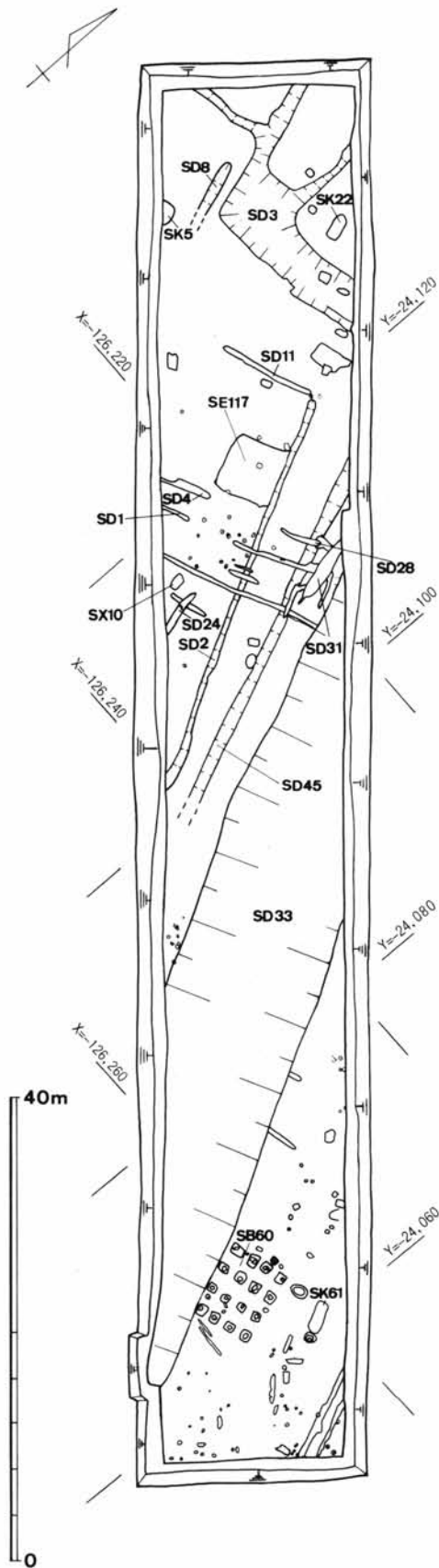
(高野陽子)



第23図 溝S D 150出土土器図(1)



第24図 溝S D 150出土土器図(2)



第25図 第1トレンチ平面図(上層遺構)

## 2) 上層遺構

上層においては、7世紀から中世にかけての時期の遺構を検出した。

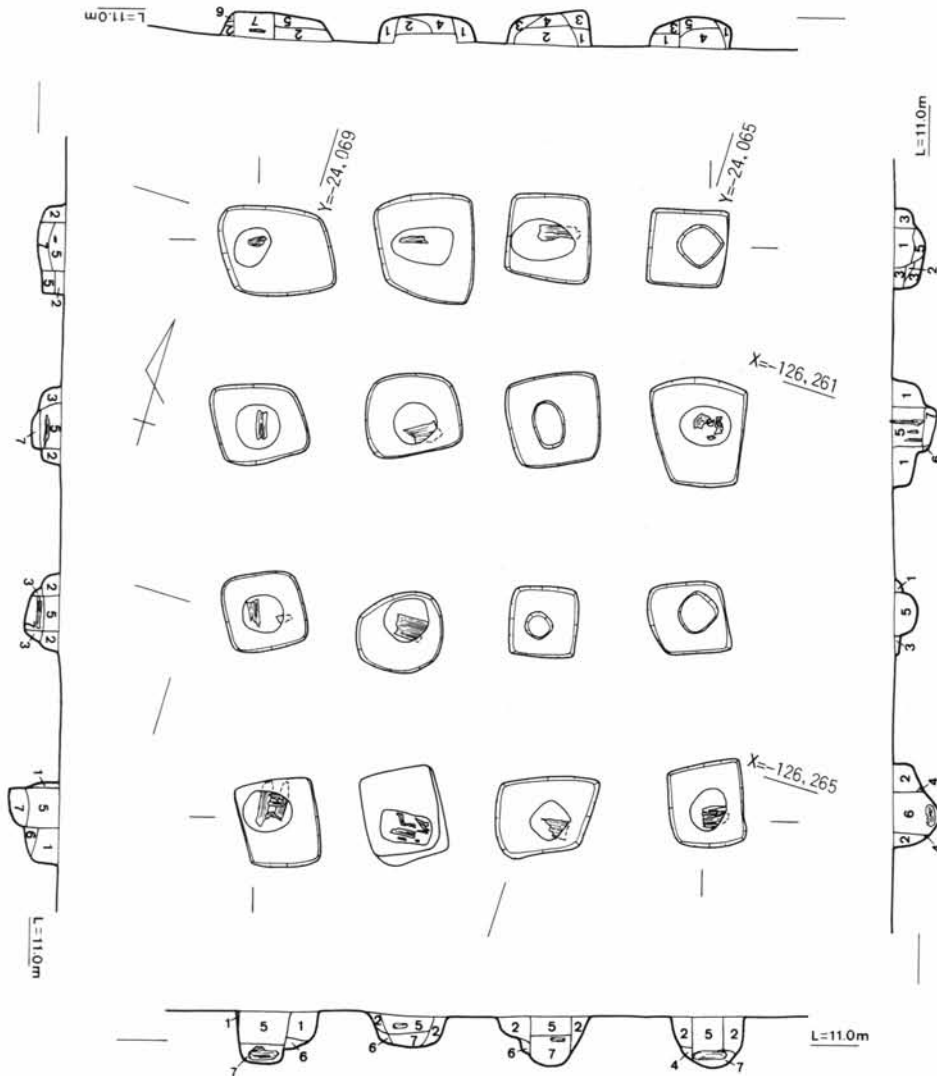
**土坑SK5** トレンチ北西側で検出した。調査地の都合により全容は不明であるが、深さ約0.4mを測る。7世紀頃の遺物が出土した。

**溝SD8** 土坑SK5の東側で検出した。幅約0.7m、深さ約0.2mを測り、ほぼ南北方向にのびる。7世紀頃の遺物が出土した。

**掘立柱建物跡SB60** トレンチ南東側で検出した。3間×3間の総柱建物である。東西の柱間は約1.5m、南北の柱間は約2mを計り、全体的には、4.5×6.0m規模の建物となる。柱穴掘形は一辺0.6~1.0mの方形を呈する。柱の径は、0.4m前後とみられる。柱穴のなかには、柱根や礎盤が残存するものがある。礎盤は、板状の木材を用いるものと、細い丸太を井桁状に組み合わせるものなどがある。柱穴からは、8世紀末~9世紀前半頃の遺物が出土しており、その頃の建物と考えられる。倉的な建物であったとみられる。

**井戸SE117** トレンチ西半部ほぼ中央付近で検出した。井籠組井戸枠内に円形縦板組の井戸枠を設ける。掘形は、ほぼ5.8m四方の方形を呈する。掘形検出面から約0.7m掘り下げた箇所、拳大の礫を一辺約1m四方に敷き並べた遺構を確認した。井戸を埋め戻す途中に何らかの祭祀を行ったと思われる。井戸枠は、掘形検出面から約1.2m下部で検出した。

井籠組井戸枠は、内法約1mを測る。すでに地中に埋まっていた巨木を若干加工して基礎として、井戸枠を組み上げている。井戸枠は、板材を7段積み上げているが、下部5段は、長さ約1.5mの角材に近い材を用いている。この井戸枠材は、丸太を粗く角柱状に面取りし、それを半裁して使用している。半裁面を内側にする。また、柄が残



1. 茶褐色系砂質土
2. 灰褐色系砂質土
3. 黄褐色系砂質土
4. 茶褐色系シルト
5. 灰褐色系シルト
6. 黄褐色系シルト
7. 灰青色系シルト



第26図 掘立柱建物跡 S B 60実測図

る材もあり、何らかの建築部材を転用したものと考えられる。なお、井戸枠最下段の内面には、補強のためか、板材を当てている。

この井籠組井戸枠材の内、下部の5段分には、外面に「北三」「南四」のように井戸枠の位置と組み立て順を記した墨書が残るものがある。上部2段の板材は、風化が進んでおり、墨書などは

確認できなかった。井籠組井戸枠の最上部の四周には板材が敷かれたような状況がみられた。あるいは、その面が汲み上げ口であったものと思われる。

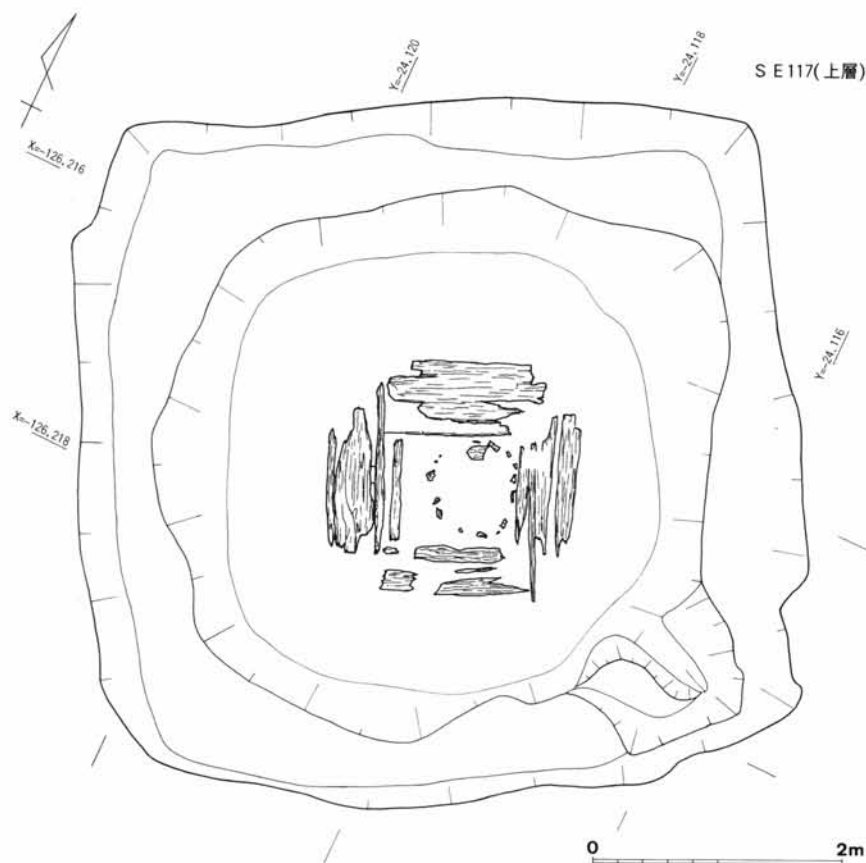
円形縦板組井戸枠は、内法約0.7mを測る。丸く組みあがるように側面を斜めに削った縦板材を用いる。縦板材の両側面に柵穴を設け、そこに別材の柵を差込み各部材を連結する。また、この縦板材には下部に柵穴をもつものがある。井戸底部から角材が1点出土したが、あるいは、対面する材に角材を通して補強していたものと思われる。円形縦板組井戸枠内には、拳大の円礫が敷かれている。内部からは多数の遺物が出土した。墨書された土師器杯や須恵器、緑釉陶器などのほか、斎串、曲物片、銅製黒漆塗鈍尾、皇朝銭の「承和昌寶」などである。「承和昌寶」は、835年初鑄であり、この井戸は、9世紀前半頃までは機能していたものと考えられる。

**土坑 S K 61** 掘立柱建物跡 S B 60の東側で検出した。長さ約3 m、幅約1 mを測る、楕円形状土坑である。北半部から土師器甕1個体が出土した。

**土坑 S K 22** トレンチ北側で検出した。長さ約2.2m、幅約1 mを測る、長方形土坑である。土師器甕などが出土した。

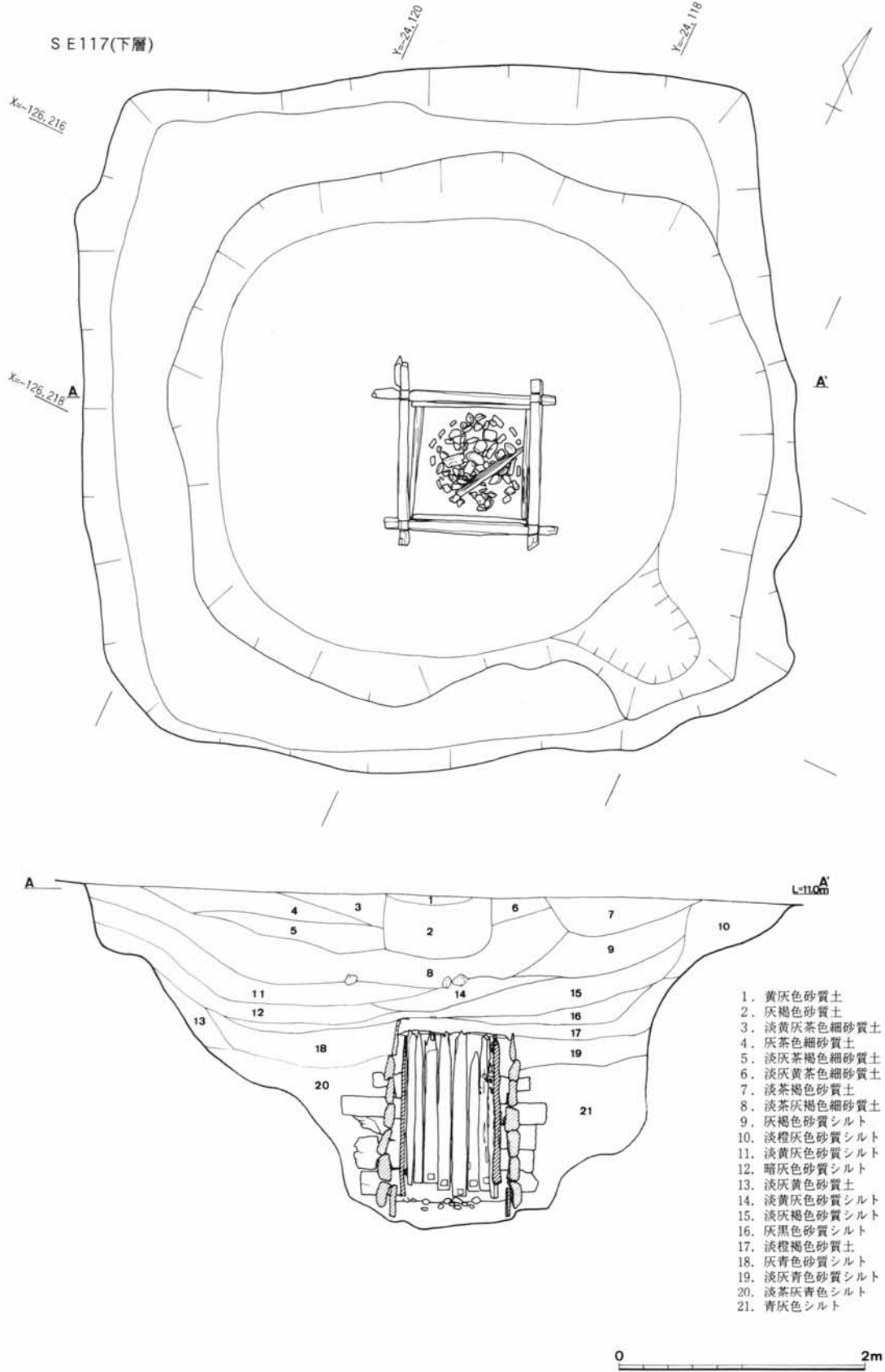
**集石遺構 S X 21** トレンチ北側で検出した。性格は不明である。中世瓦などが出土した。

**中世墓 S K 10** トレンチほぼ中央やや北西側で検出した。長さ約1.2m、幅約1 m、深さ約0.5 mを測る楕円形状土坑である。上部から、青磁碗1点、瓦器碗4点、土師器皿1点、鉄製短刀1振が出土した。以上のような状況から、墓であろうと判断した。



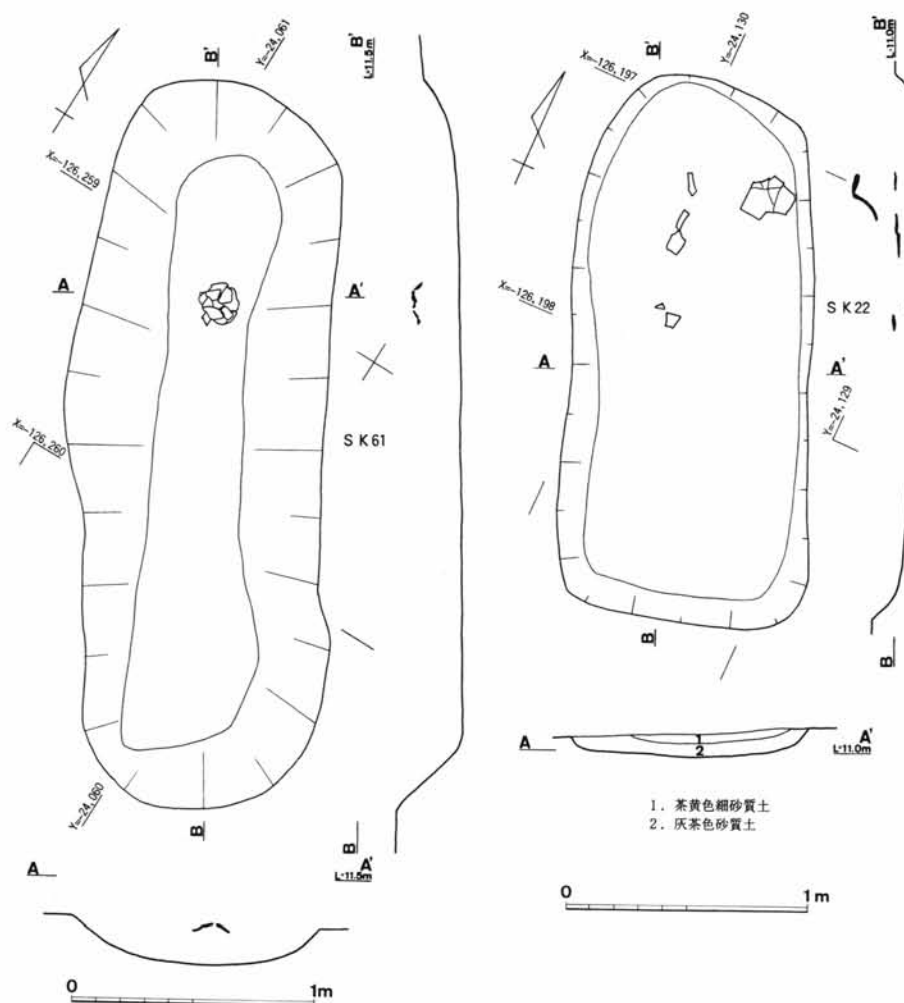
遺物の下部には、白灰色系のシルト層が薄くみとめられ、あるいは、板状のものの上へのせられていた可能性もある。下部には長さ約0.6m、幅約0.5mの長方形の落ち込みがみとめられる。棺もしくは蔵骨器の痕跡と思われる。この中世墓は、出土遺物からみて、12世紀末～13世紀初頭頃のものと思われる。なお、出土

第27図 井戸 S E 117(上層)実測図



第28図 井戸 S E 117実測図





第29図 土坑S K 61・22実測図

のびており、幅約0.3~0.4mを測る。内部から、多数の瓦器椀、土師器皿が出土した。これらの遺物は完形率が高く、溝の東側に集中する傾向がある。この溝の性格は不明である。12世紀後半頃の溝と思われる。

**溝S D 4** 溝S D 1の北側で検出した。溝S D 1と平行してのびており、東側で幅約0.6m、西側で幅約0.3mを測る。溝S D 1ほど多くはないが、瓦器椀、土師器皿が出土している。やはり、東側に分布する傾向にある。時期的には溝S D 1とほぼ同時期とみられる。

**溝S D 2** トレンチ北西半部で検出した。ほぼ南北方向にのびる溝で、幅約0.4mを測る。墨書土器などが出土しているが、中世の遺構とみられる。

**溝S D 11** 溝S D 2北端部付近から東西方向にのびる溝で、幅約0.4を測る。土師器皿などが出土している。溝S D 2と関連して、何らかの区画溝となっているものともみられる。

**溝S D 28・31** トレンチほぼ中央北西側で検出した。中世の耕作に伴う溝と考えられる。中世の遺物が出土している。

**溝S D 45** トレンチほぼ中央で検出した。鳥島の東辺に沿って、ほぼ南北方向にのびる。幅約1m、深さ約0.2mを測る。庄内式並行期の土器なども出土しているが、中世の耕作に伴う溝と

した青磁椀は、中国同安窯系のものである。京都府内において、完形での出土は初めての例である。

**溝S D 24** 中世墓S K 10の東側で検出した溝で、ほぼ南北方向にのびる。幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。中世墓S K 10に近接してのびており、区画など何らかの関連がある溝とも考えられる。

**溝S D 1** 調査地西半部で検出した。ほぼ東西方向

考えられる。

溝SD3・33 島島間の水田部分にあたる。中世以降の耕作土が何層も堆積している。さまざまな時期の遺物が出土している。

## (2) 第2トレンチ

### 1) 下層遺構

下層からは、古墳時代前期頃と考えられる竪穴式住居跡や溝などを検出した。遺構の分布状況はまばらである。

竪穴式住居跡SH12 トレンチ西側で検出した。4.0×4.8mを測る方形の住居跡である。床面には4か所の柱穴が

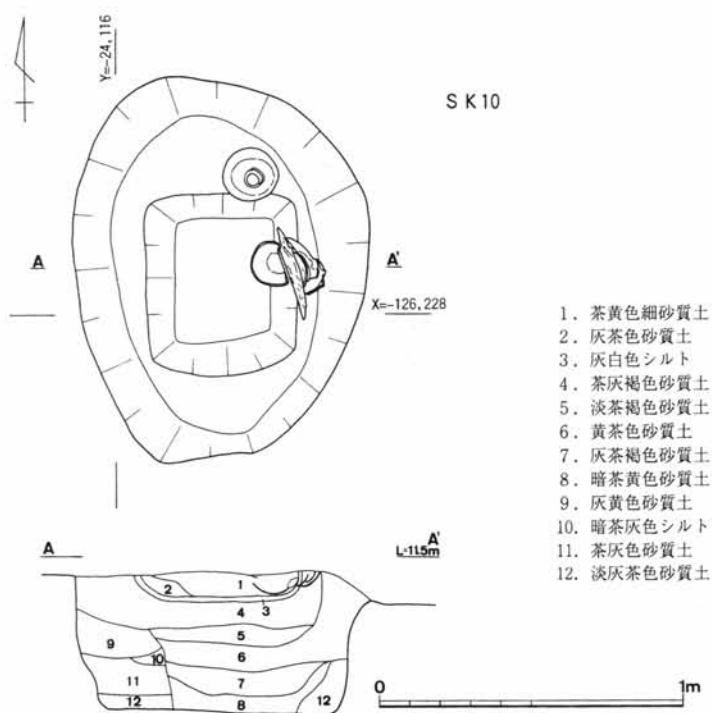
あり、南辺中央寄りに貯蔵穴状の土坑をもつ。また、床面のほぼ中央には、炉跡と考えられる被熱部分がみとめられる。埋土から多量の土師器片が出土した。古墳時代前期頃の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡SH188 竪穴式住居跡SH12の東側で検出した。東壁は、島島造成によって削平されている。約5×5m以上を測る方形の住居跡である。床面には柱穴とみられるピットがある。中央やや北寄りに、上面が平坦な石を据える。ほぼ中央部付近には焼土・炭が堆積したピット状の窪みがあり、土師器甕1個体が横転した状態で、完形で出土した。炉跡と思われる。床面周囲には、周壁溝がめぐる。なお、この住居跡内には、垂木状の炭化材や、焼土などが堆積しており、焼失住居とも考えられる。古墳時代前期頃の住居跡と考えられる。

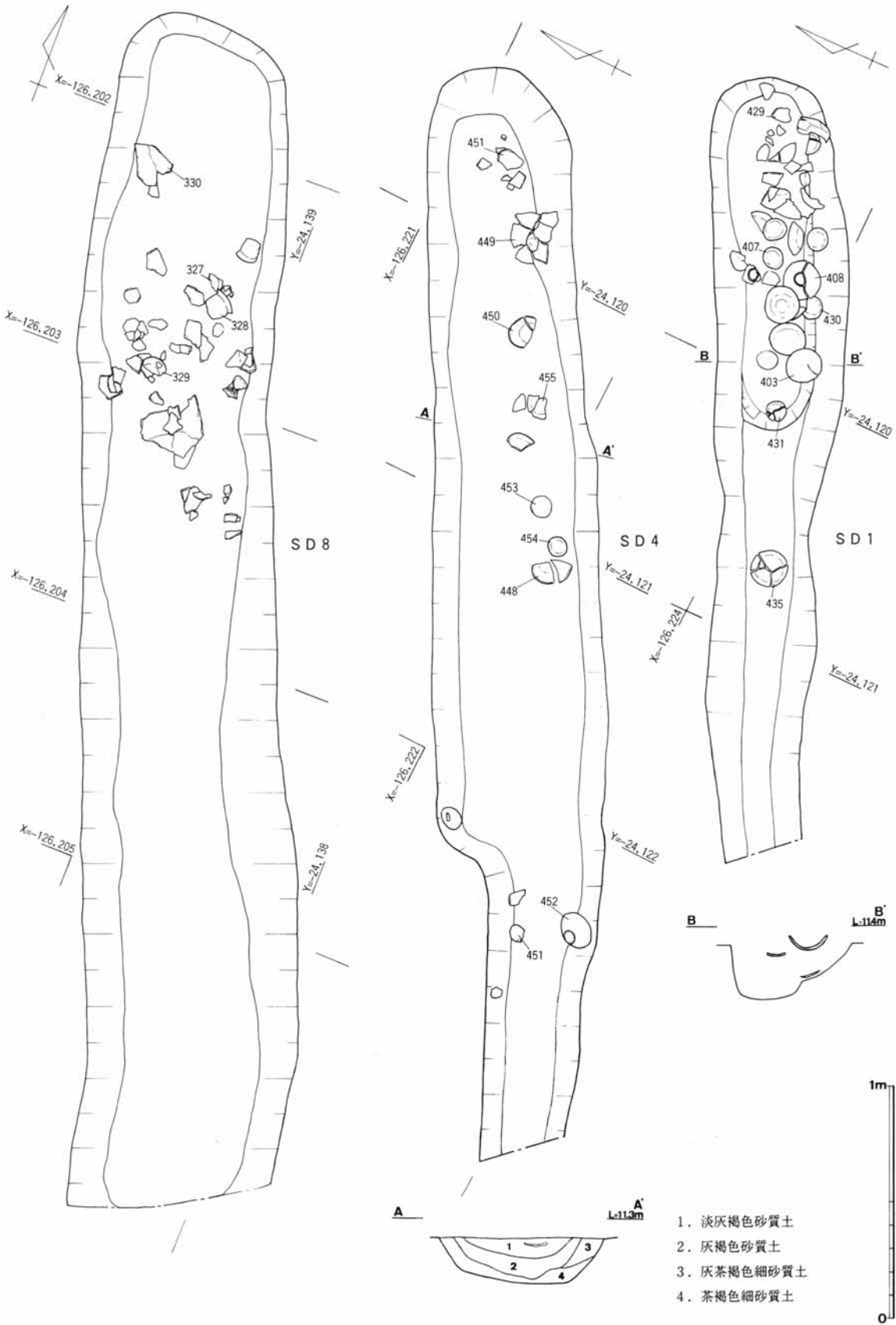
竪穴式住居跡SH182 トレンチ南東側で検出した。6.0×6.3mの方形の住居跡である。床面には4か所の柱穴がある。床面中央やや北西寄りに被熱した部分があり、炉跡と考えられる。北辺および西辺の一部に周壁溝が残る。南辺中央やや西寄りに貯蔵穴状の土坑をもつ。この土坑内から、土師器甕が出土した。古墳時代前期頃の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡SH192 トレンチ北隅部で検出した。部分的な検出であり、全容は不明である。柱穴とみられるピットなどがある。また、中央部付近で「L」字状の細い溝状遺構を検出しており、あるいは、建替えなどで住居跡が重なっている可能性も考えられる。埋土から土師器片などが出土しており、古墳時代前期頃の住居跡と考えられる。

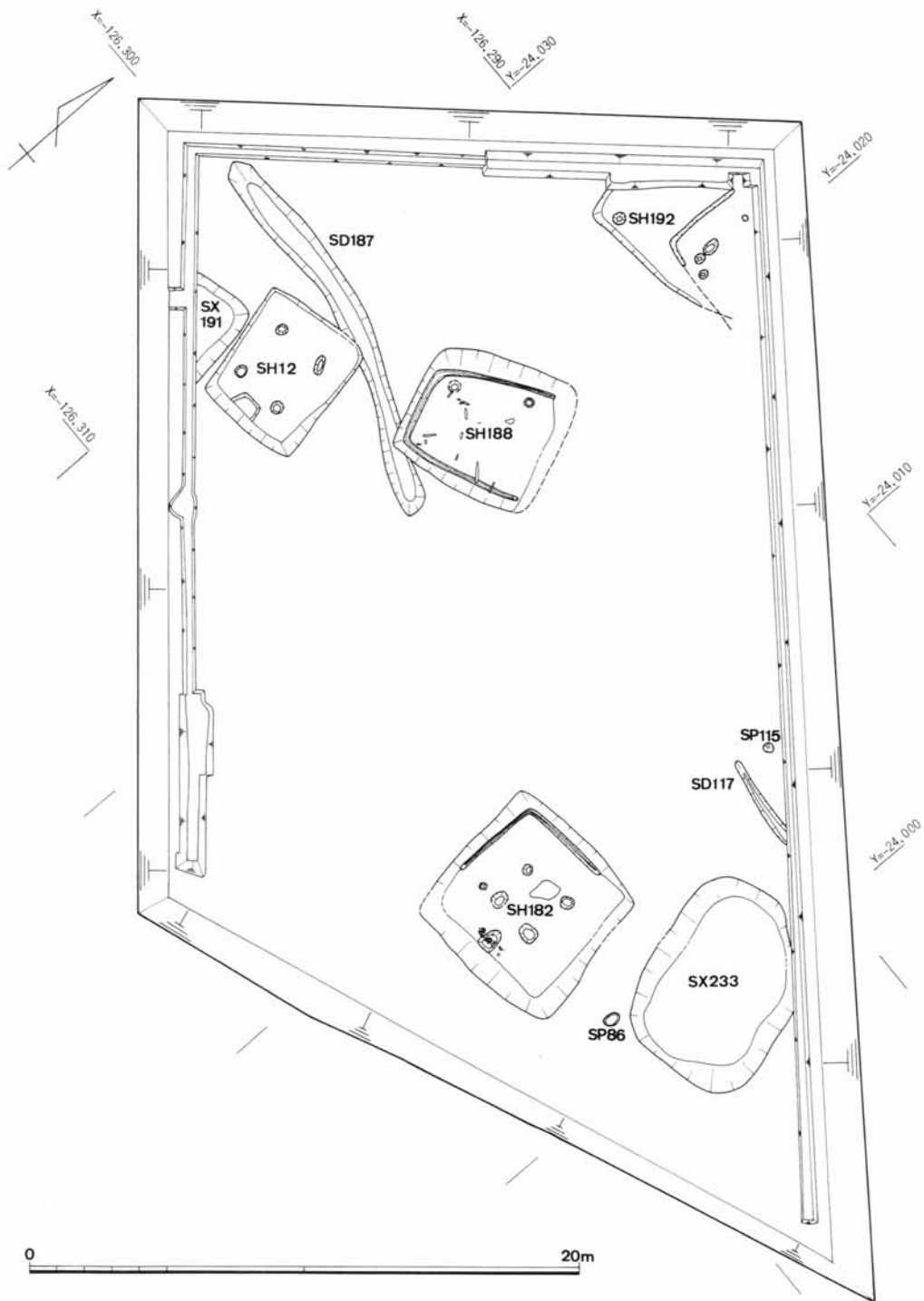
落ち込みSX191 竪穴式住居跡SH12の西側で検出した。北東隅部にあたりとみられる部分のみの検出であり、規模・性格等については不明である。あるいは、竪穴式住居跡の一部か。



第30図 中世墓SK10実測図



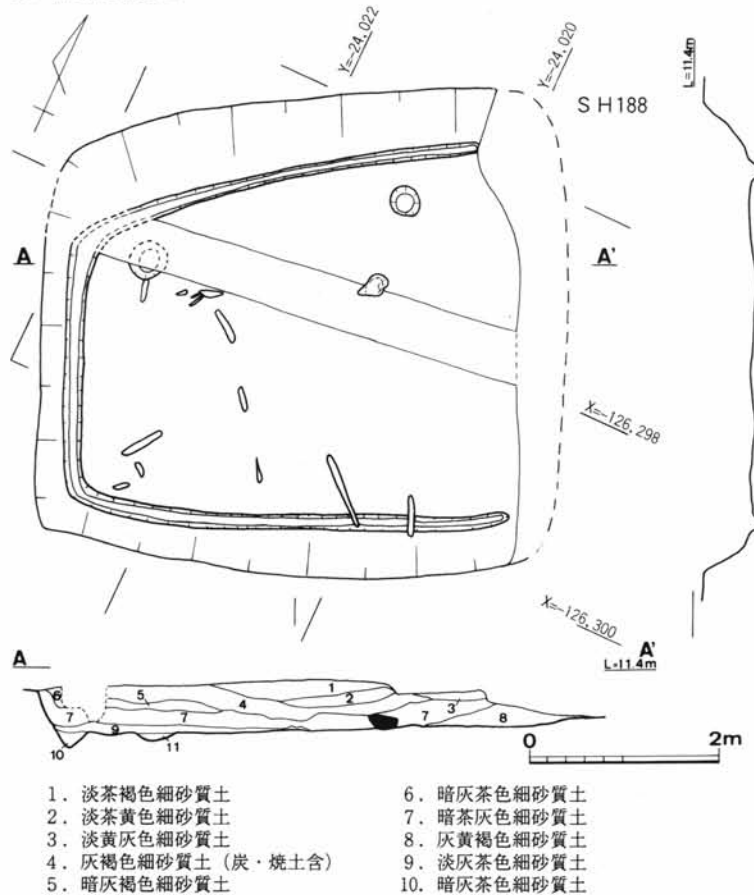
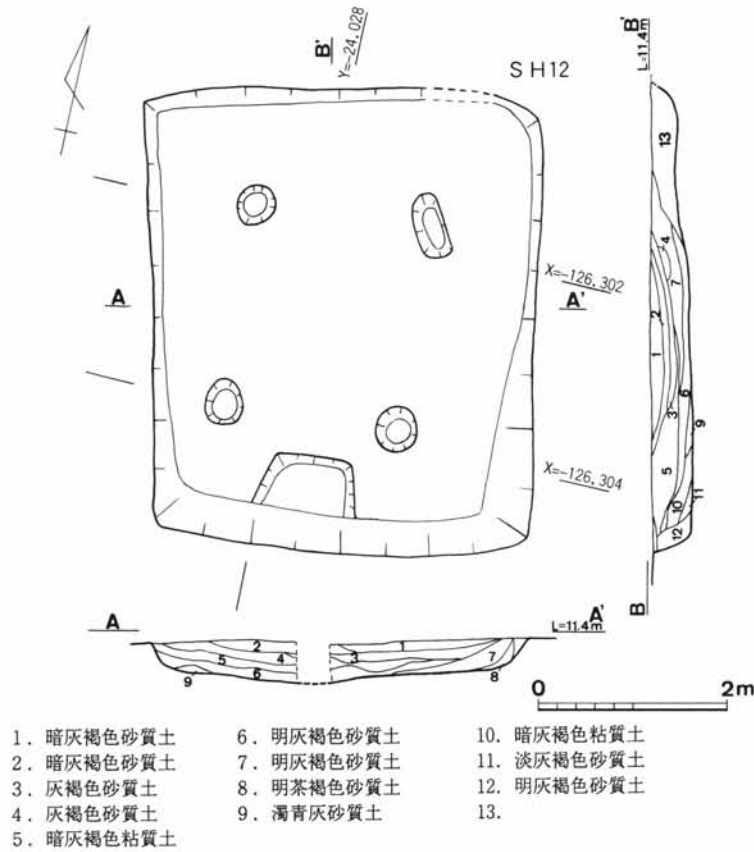
第31図 溝SD 1・4・8実測図



第32図 第2トレンチ平面図(下層遺構)

落ち込みSX233 竪穴式住居跡SH182の東側で検出した。長方形土坑状で、当初、竪穴式住居跡かと思われたが、床面に柱穴や炉跡などがみとめられず、不明遺構とした。多数の遺物が出土したが、時期的には庄内式並行期から古墳時代前期頃まで、時期幅があるようすである。

溝SD187 トレンチ西側で検出した。幅約0.8m、深さ約0.3mの溝で、東西方向に蛇行気味にのびる。竪穴式住居跡SH12やSH188の一部を切っており、竪穴式住居跡の廃絶後に設けられた溝とみられる。時期的には、古墳時代前期頃の遺構と考えられる。



第33図 竪穴式住居跡SH12・188実測図

溝SD117 トレンチ東辺部で検出した。幅約0.3~0.4m、深さ約0.1mを測る溝で、東西方向にのびる。層位的にみて古墳時代前期頃の遺構と考えられる。

2) 上層遺構

上層では、古代から中世にかけての遺構を検出した。ほぼトレンチ全域にわたって柱穴とみられるピットが分布しているが、建物としてまとまる可能性があるものは少ない。また、中世の井戸と考えられる遺構なども検出している。

掘立柱建物跡SB271 トレンチ北西側で検出した。2間×1間以上の建物で、北側部分については島島間の溝で削平されている。周辺状況からみて、2間×2間の総柱建物の可能性がある。柱間は、南北方向が約2m、東西方向が約2.2mとなる。柱穴掘形は、一辺約0.8~1.0mの方形を呈する。柱の径は0.3~0.4mとみられる。

柵列SA9 トレンチほぼ中央東寄りで検出した。5個の柱穴がほぼ南北方向に並ぶ。柱間は約2.3~2.4mを測る。柱穴掘形は0.7~0.9mである。西側が島島造成により削平されており不明であるが、掘立柱建物跡の一部の可能性も考

えられる。柱穴掘形から8世紀末～9世紀前半頃の遺物が出土した。

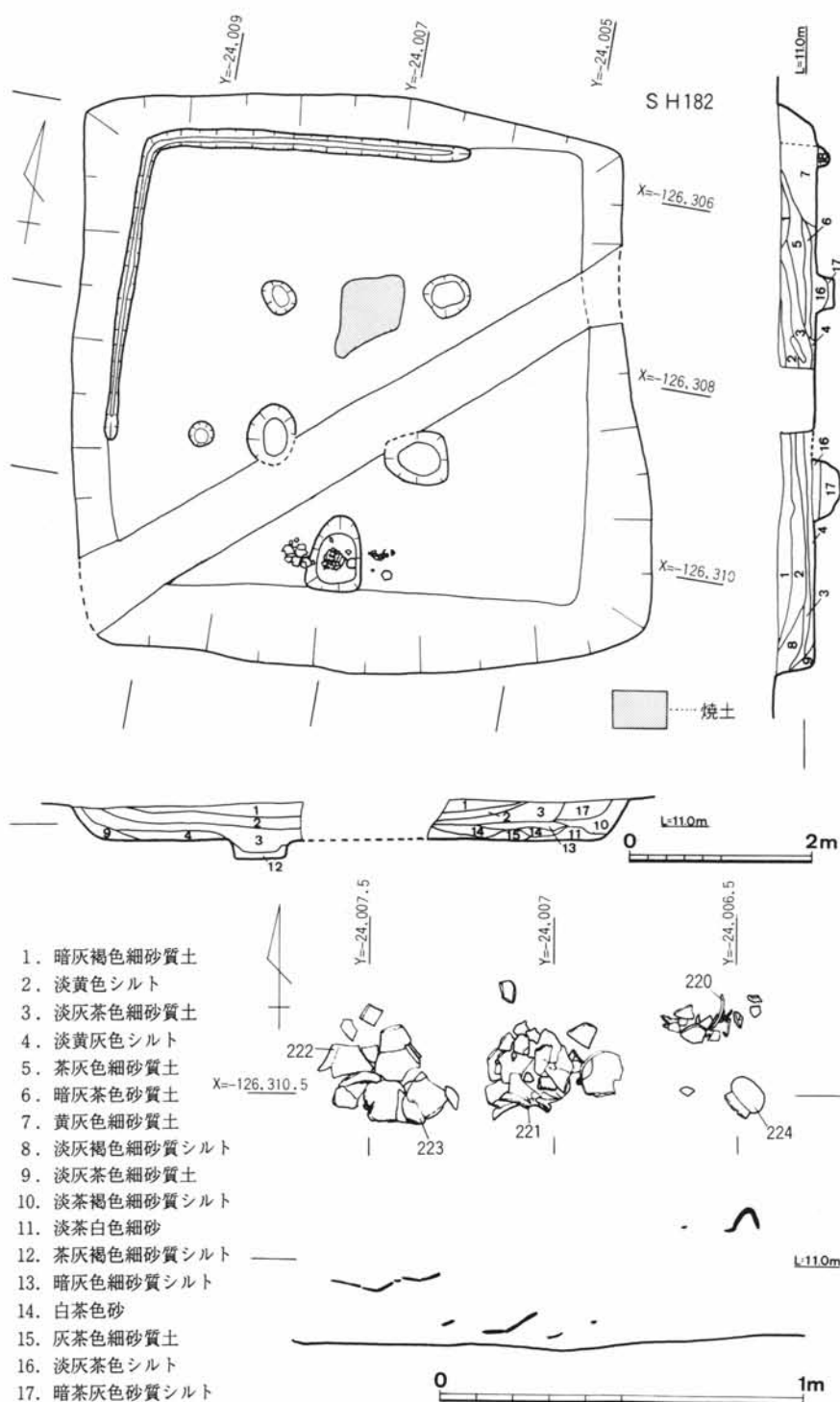
柵列SA10 柵列SA9と重なるような位置で検出した。5個の柱穴が南北からやや西側に振った方向に並ぶ。柱間は約1.6～2mを測る。柱穴掘形は0.7～1.2mである。西側が島嶼造成により削平されており不明であるが、掘立柱建物跡の一部の可能性も考えられる。柱穴掘形から8世紀末～9世紀前半頃の遺物が出土した。

柵列SA273 柵列SA10の東側で検出した。5個の柱穴がほぼ南北方向に並ぶ。柱間は、0.9～1.2mとまばらである。柱穴は一辺約0.6mの方形のものを最大とする。柵列SA10とほ

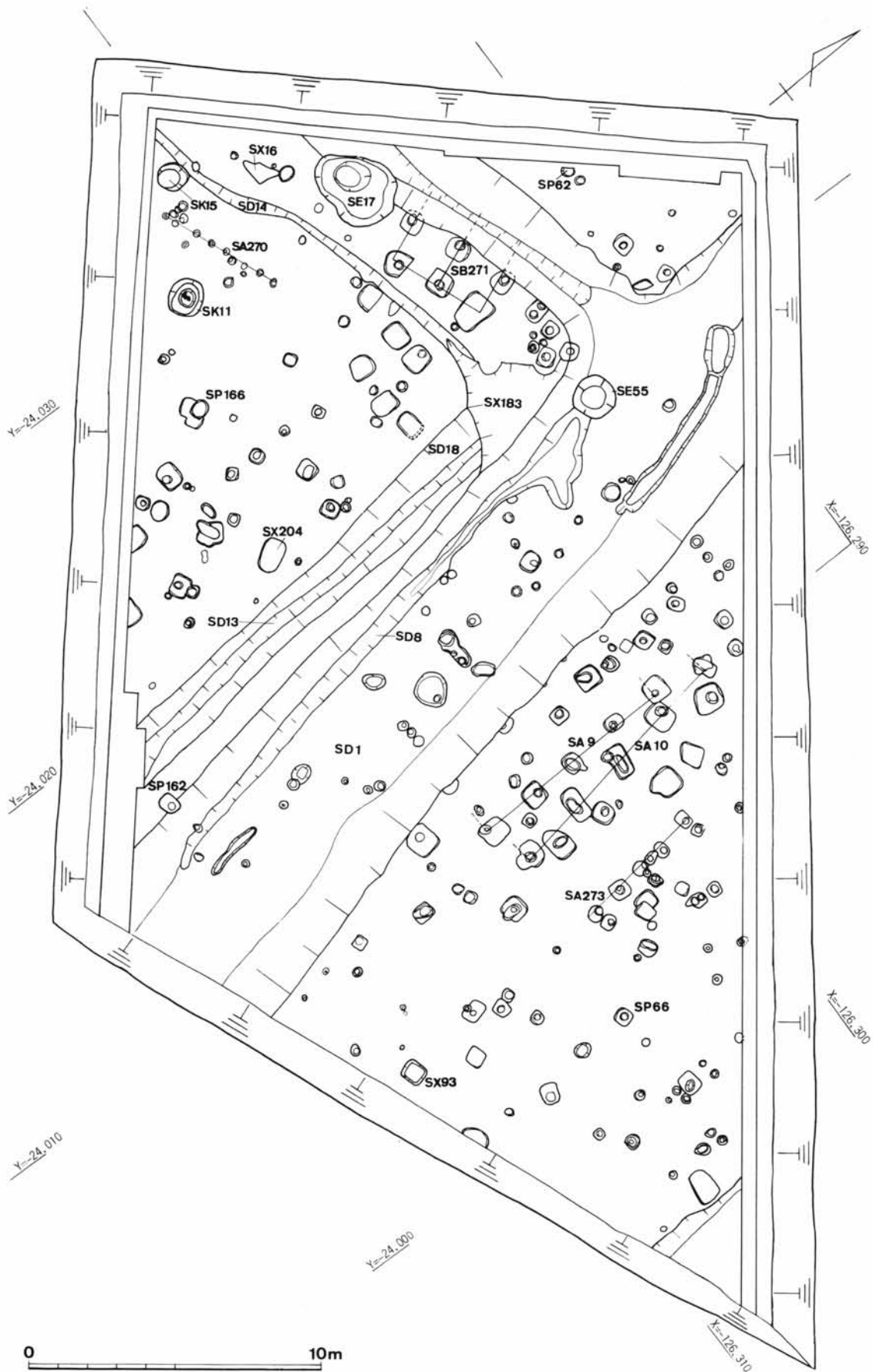
ぼ方向が同じであり、あるいは同時期のものか。柱穴から、8世紀末～9世紀前半頃の須恵器などが出土した。

柵列SA270 トレンチ北西側で検出した。径約0.25mのピットが東西方向に並ぶ。柱間は、ほぼ0.6～0.8mである。近世頃の耕作に伴う遺構か。

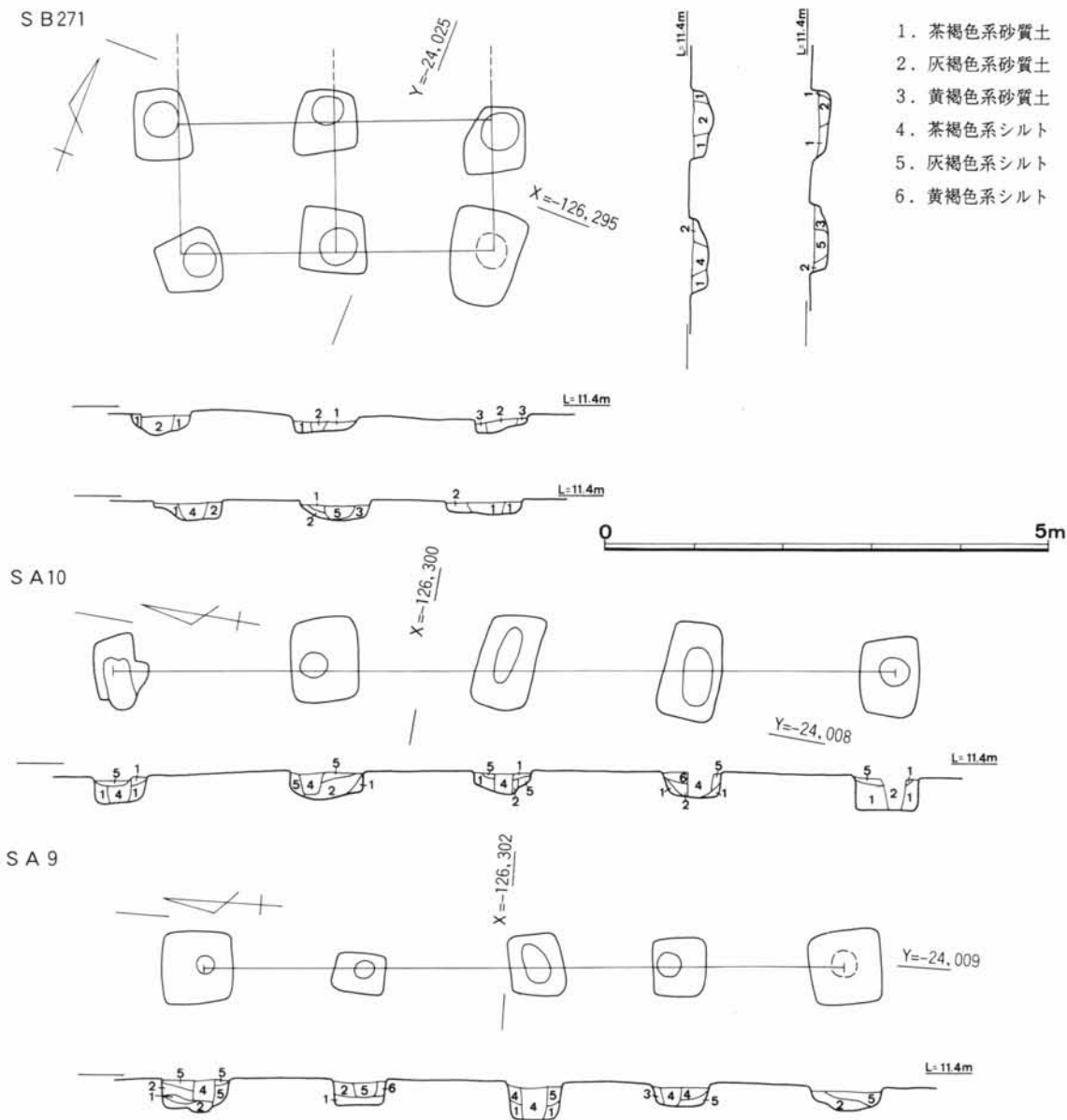
井戸SE17 トレンチ西側で検出した。2段に掘り込まれており、上部径約2.3m、下部径約



第34図 竪穴式住居跡SH182実測図



第35図 第2トレンチ平面図(上層遺構)



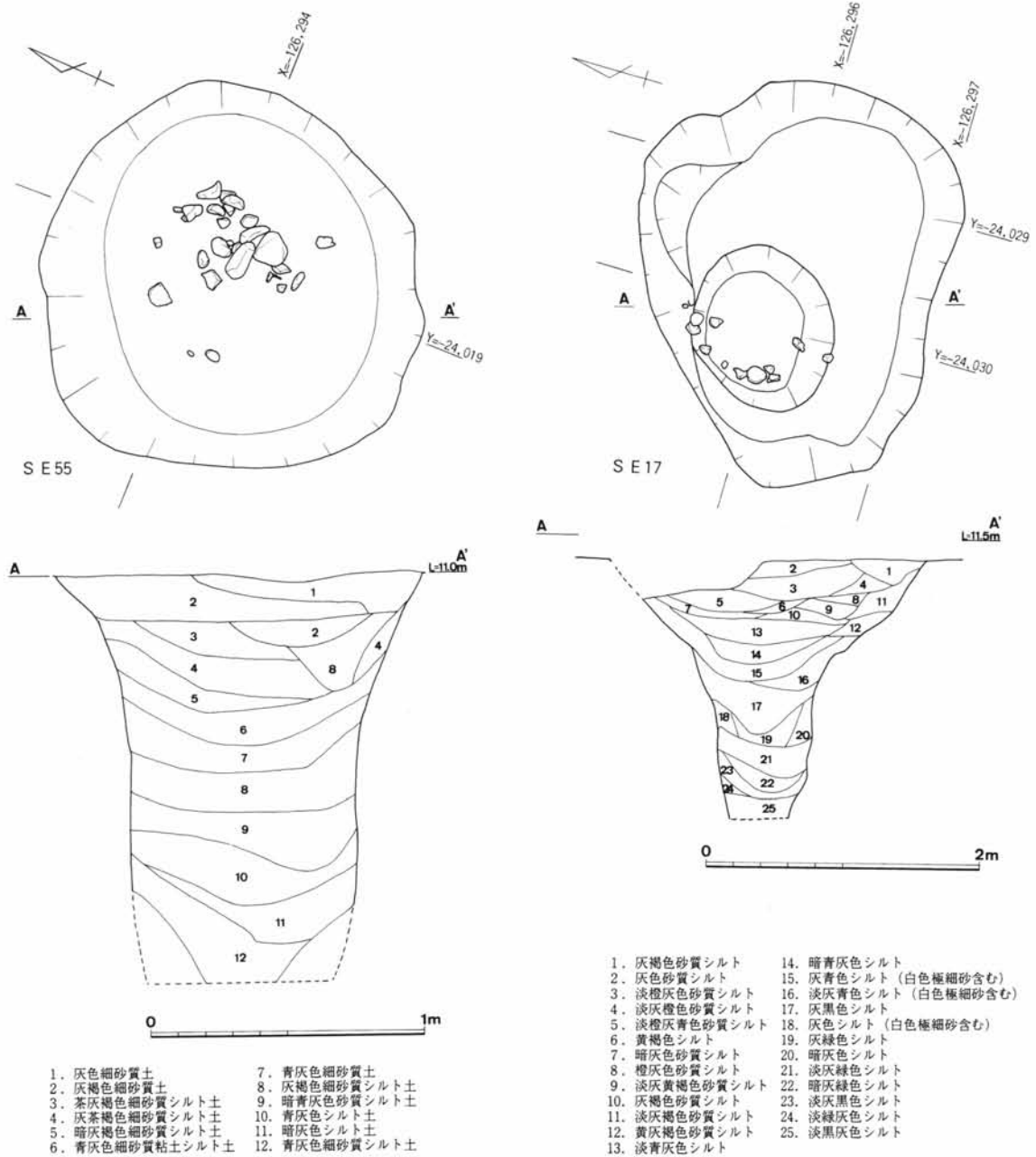
第36図 掘立柱建物跡S B271、柵列S A 9・10実測図

1 mを測る。底部については、崩落の危険があるため、確認できなかった。また、現状では井戸枠はみとめられなかった。内部から瓦器椀、土師器皿、木球とみられる木製品などが出土した。12世紀頃の井戸と考えられる。

**井戸S E 55** トレンチ北側の島畠間の溝底部から検出した。径約1.6mを測る、円形の井戸である。底部は、崩落の危険があるため確認できなかった。また、井戸枠についても現状ではみとめられなかった。内部から瓦器椀片などが出土した。井戸S E 12よりやや新しい時期の遺構とみられる。

**土坑S K 11** トレンチ西端部で検出した。径約1.5mのほぼ円形状の土坑である。底部中央が径約0.7mの円形に窪む。この遺構の性格については不明である。内部から瓦器椀、土師器皿などが出土した。13世紀頃の遺構と考えられる。





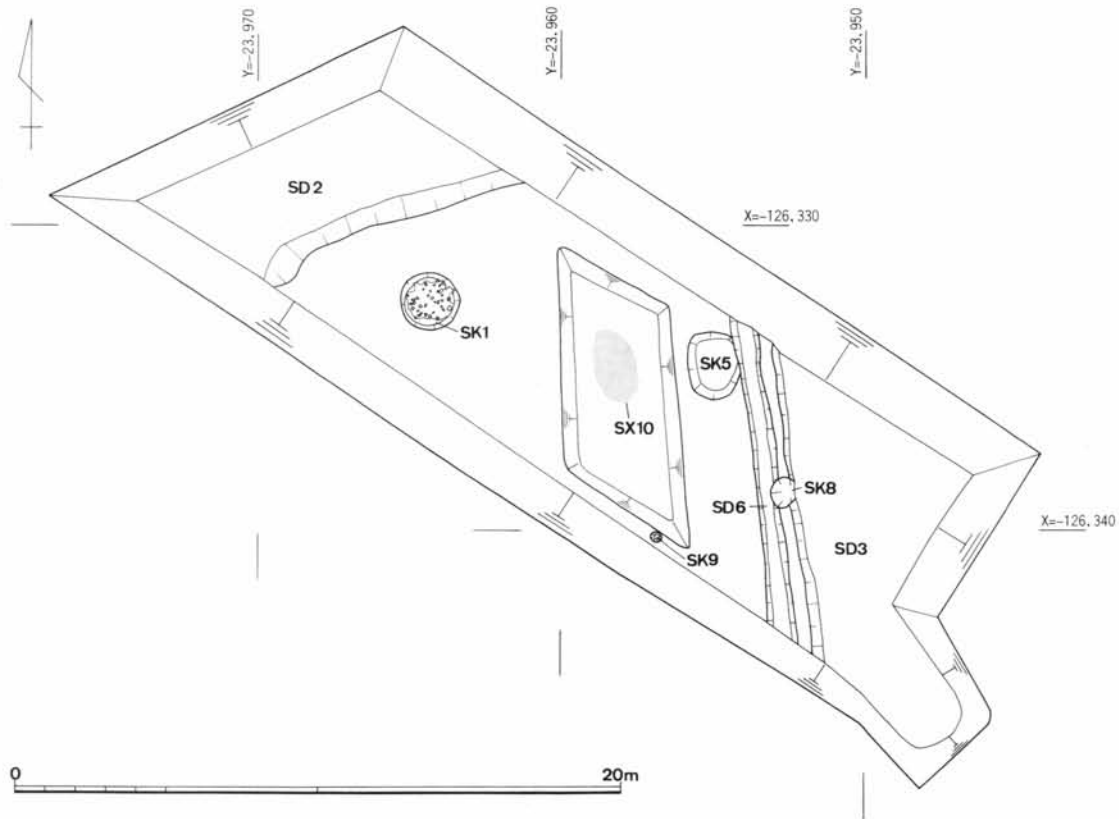
第37図 井戸 S E 17・55実測図

溝 S D 14 トレンチ北側で検出した。鳥島の北辺にそって、ほぼ東西方向にのびる。幅約0.5mを測る。中世の耕作に伴う溝と考えられる。

溝 S D 18 トレンチほぼ中央で検出した。鳥島の東辺に沿って南北方向にのびる。幅約1.4～1.8m、深さ約0.3mを測る。中世の耕作に伴う溝と考えられる。

溝 S D 13 溝 S D 18ほぼ中央部に重なって検出した。溝 S D 18の埋没後に掘削されたものとみられる。幅約0.4～0.5m、深さ約0.1mを測る。中世の耕作に伴う溝と考えられる。

溝 S D 1 鳥島間の溝状の低地水田部である。近世にいたる各時期の遺物が出土している。南北方向部分で、幅約7.6mを測る。



第38図 第3トレンチ平面図

落ち込みS X 183 トレンチ北側で検出した。溝S D 14や溝S D 13・18などを切っており、それらより新しい時期の遺構と考えられる。出土遺物には、須恵器や灰釉陶器などがある。

### (3)第3トレンチ

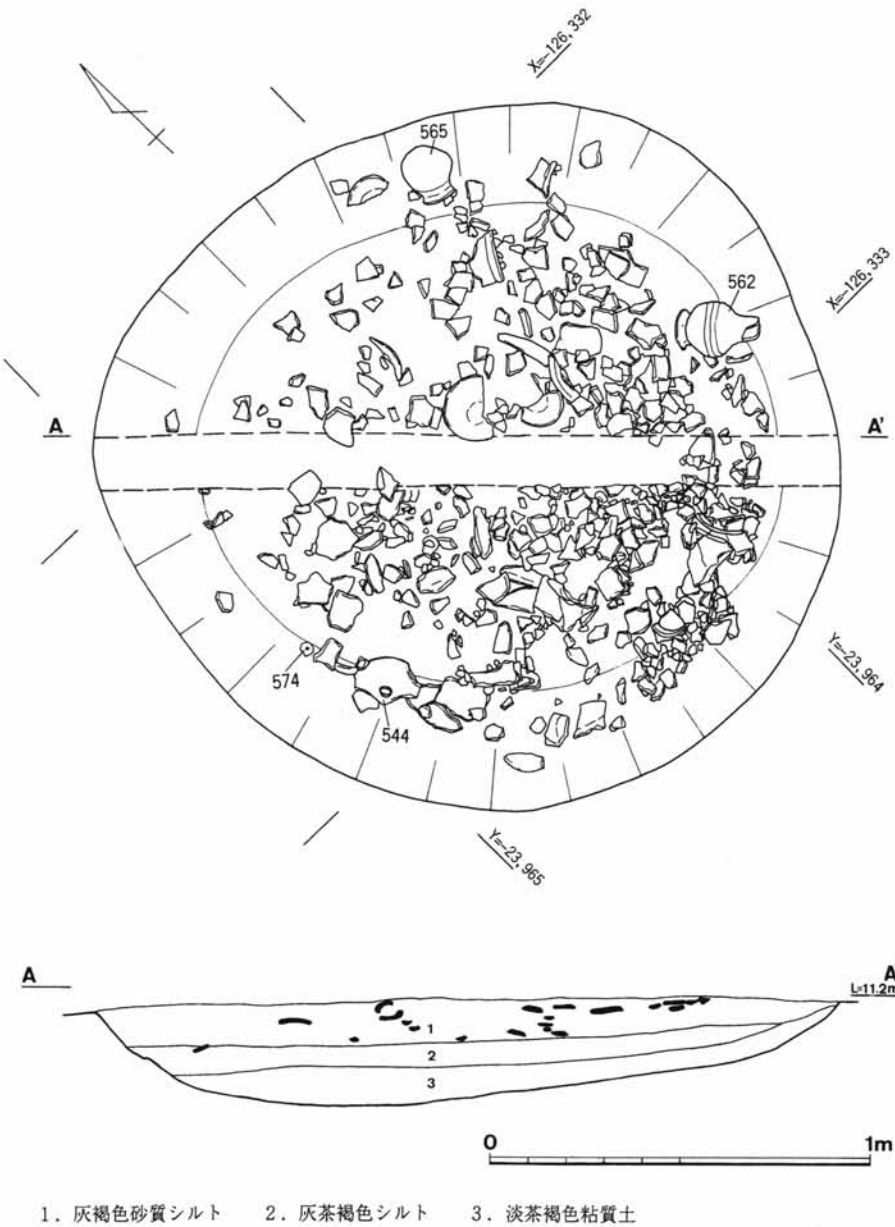
第3トレンチは、平成14年度に実施した第19次調査地の北側に隣接する地点に設定した。このトレンチでは、庄内式並行期から中世にかけての遺構を検出した。遺構の分布状況は、ややまばらである。また、このトレンチでは、1か所の島畠を確認した。この島畠は、第19次調査で確認した島畠2の北側延長部分にあたると思われる。

焼土S X 10 トレンチ中央部の断ち割り部分で検出した。竪穴式住居跡に伴う炉跡などの可能性もあるが、土壌が還元化しており、明確な遺構の輪郭を確認することができなかった。焼土層の周囲から庄内式並行期の土器が出土している。

土坑S K 9 トレンチ南側で検出した。径約0.8mを測る円形土坑である。土坑内に土師器甕1個体が横転した状態で埋納されていた。

土坑S K 1 トレンチ西半部で検出した。径約1.9m、深さ約0.3mを測る円形土坑である。土坑内から多量の土師器片、須恵器片などが出土した。出土状況は、破損した器物を投棄したような状態であり、この土坑は一種の廃棄土坑と考えられる。また、投棄は南東側から行われたものとみられる。出土遺物は7世紀から8世紀前半頃にかけてのものとみられる。また、絞胎陶枕片が出土しているのが注目される。

土坑S K 5 トレンチ東半部で検出した。長径約1.9mの楕円形状土坑である。8世紀前半頃



第39図 土坑SK1実測図

幅約0.7m、深さ約0.1mを測る。

溝SD2・3 島島北側の低地水田部である。数層の旧耕土層がみとめられる。溝SD2の旧耕作土中から明銭の「洪武通寶」が出土した。

(引原茂治)

#### 4. 出土遺物

##### (1) 弥生時代～古墳時代前期の遺物

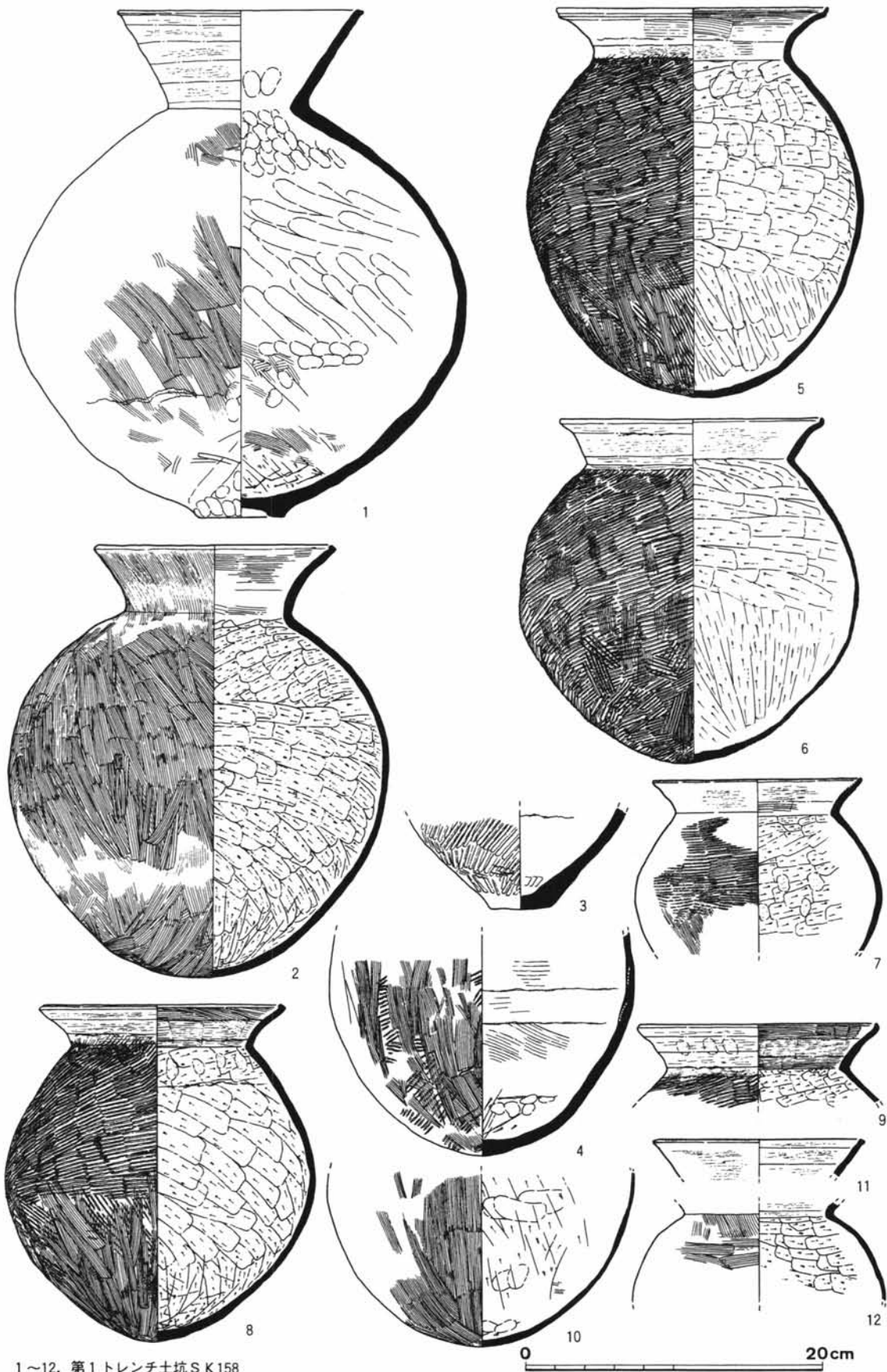
##### ① 第1トレンチの出土土器(1～182)

1～16は、土坑SK158から出土した。土坑上層は、溝SD33に大きく削平されるが、底部か

の須恵器などが出土している。土坑SK1とほぼ同時期とみられるが、遺物の出土量がかなり少なく、あるいは、有機物を主体とする廃棄土坑であったものとも思われる。

土坑SK8 トレンチ東側で検出した。径約1m、深さ約0.3mを測る円形土坑である。出土遺物がなく、明確な時期は不明であるが、切り合い関係から、近世頃の耕作に伴う遺構とも考えられる。

溝SD6 島島の東縁部に沿い、中世の耕作に伴う溝と考えられる。

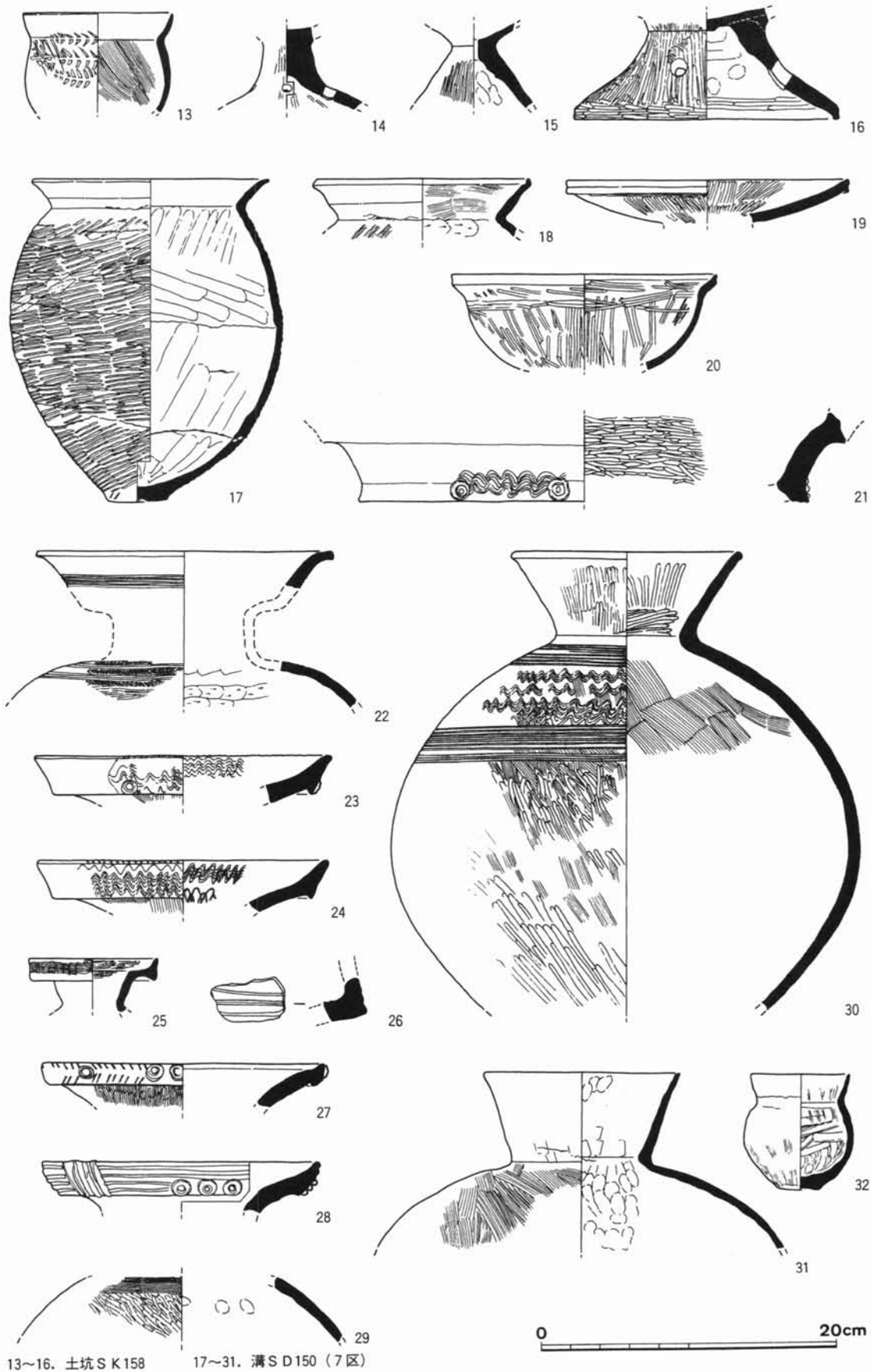


1~12. 第1トレンチ土坑SK158

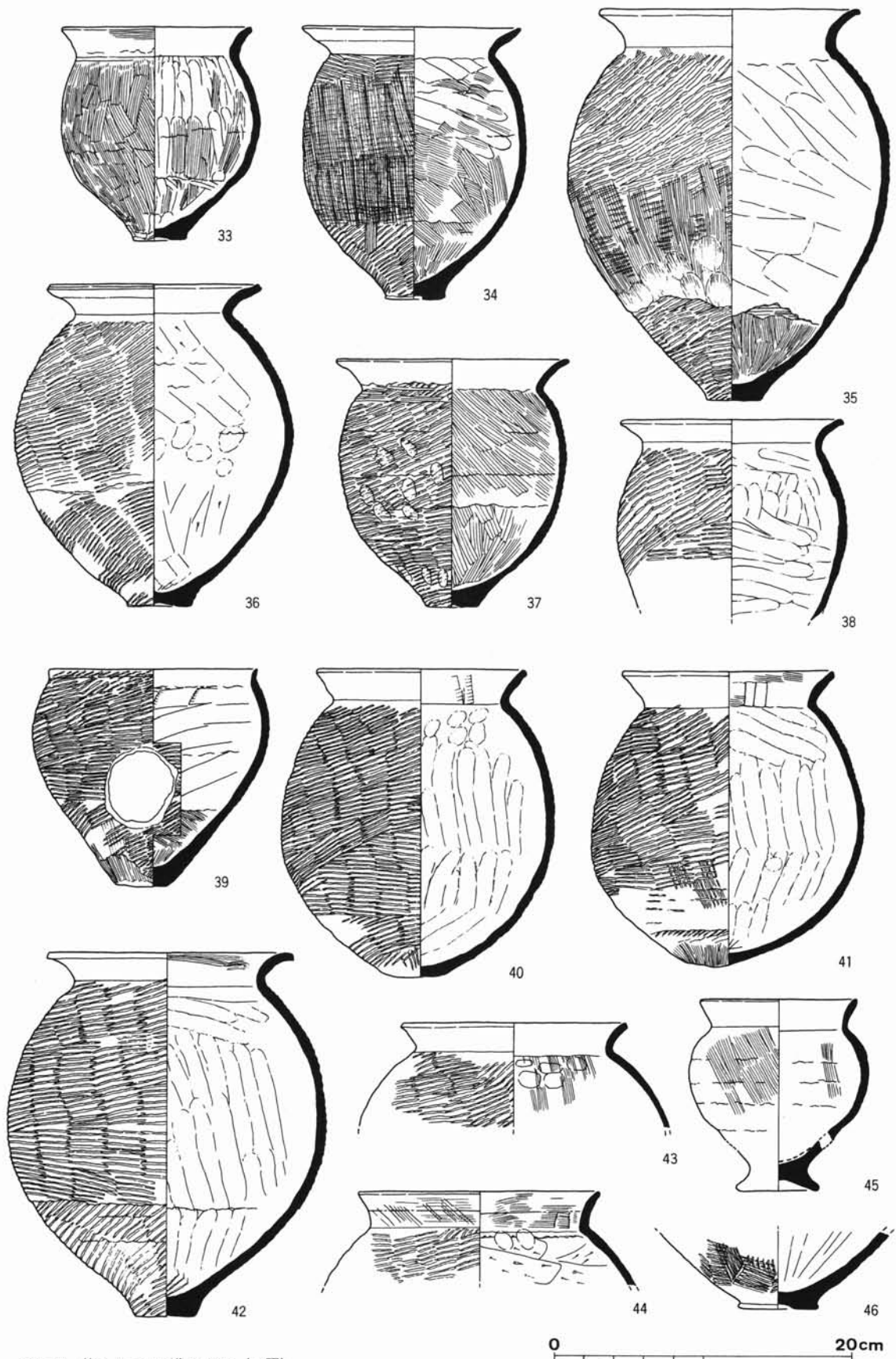
第40図 出土遺物実測図(1)

ら完形率の高い土器群が出土した。壺は、口縁部が直線的に拡張する1の直口壺と、2の外反気味に立ち上がり、口縁端部を摘みあげる壺がある。甕には、弥生系甕、庄内式甕、布留式甕が混在してみられる。3は、外面にタタキを施す弥生系甕である。4は丸底の底部を特色とするが、外面の一次調整にタタキを施す折衷系の甕である。5～9は庄内式甕である。いずれも口縁部の立ち上がり角度が大きく、やや反り気味に立ち上がる山城地域に特徴的な庄内式甕の口縁部形態をなす。外面調整のタタキは細く、シャープで、右上がりに施される。また色調は、5・7は灰白色、6・8は淡黄灰色を呈する。庄内式甕の口径はややばらつきがあり、5は口径18.1cm、器高25.8cm、6は口径17.4cm、器高23.0cm、8は口径15.4cm、器高22.6cmを測る。12は、体部肩部外面に横方向のハケを施す布留式甕である。13の小形甕は矢羽タタキを施す。本遺跡では、矢羽タタキの甕が特徴的にみられるが、13はそのなかでも最終段階の資料である。

17～152は、溝S D150から出土した。溝S D150は規模が大きく、遺物は溝の各所から出土したため、遺物の取り上げについては、調査区を6～9区に分けて行い、そのなかでも土器の集中する地点を7区のA・B地点、8区西・中央のC地点、8区東のD地点、9区のE地点とした。土器の多くは中層から出土し、上層および下層出土の遺物はわずかである。19は、6区から出土した近江・東海系器台である。21～68は、7区およびA地点から出土した。7区出土資料では壺類に特に近江・東海系の要素が顕著にみとめられる。21は大形二重口縁壺の口縁部である。口縁端部が大きく拡張する形式と推定される<sup>(注3)</sup>。22は口縁部外面にヘラ描沈線を施し、体部外面にヘラ描沈線と綾杉文を交互に配するもので、二重口縁壺と推定される。焼成は良好で、暗橙灰褐色を呈する。27は、口縁部に綾杉文を配する近江・東海系要素の強い広口壺である。28は東海系パレス壺の口縁部である。26は、讃岐産大形二重口縁壺の口縁受部とみられる。甕には、弥生系甕、庄内式甕がみられる。弥生系甕では外面縦ハケ調整の甕(33)と、タタキ甕(34～44)のほか、口縁部に面をなし、受口状を呈する甕(47～49)があり、山城地域と近江地域との折衷土器として注目される。51は、近江系甕の口縁部である。庄内式甕には、54の前述した庄内河内形甕と、53の山城地域に特徴的な外反気味に立ち上がる口縁をなす甕がある。54は口径17.3cm、器高23.9cm、55は口径14.6cm、16.3cmを測る。53は口径16.3cmを測り、黄橙灰色を呈する。56は口径15.0cmを測り、灰白色を呈する。58は小片であるものの、頸部内面最上端までケズリが施す庄内式甕と同様の特徴をもつ一方、外面にヨコハケがみられ、布留式甕との折衷的要素をもつ。59の高杯脚部は縦に3連の透かしを特徴とし、近江・東海系の高杯とみられる。また、64も同様の系譜をもつ器台である。63は、脚部に段をなし、北陸系の器台脚の可能性がある。69～102は、8区西・中央およびB・C地点から出土した。甕では、特に矢羽タタキを施す弥生系甕(77～80)が特徴的にみとめられる。山城地域では、この形式の甕がまとまって出土した例は無く、注目される。73は、タタキ原体の細筋化、底部形態、内面ヘラケズリの特徴から、初期庄内式甕としての特徴をもつ。口径15.4cm、器高15.7cmを測る。83は山城地域に特徴的な庄内式甕である。84は北陸系の有段口縁甕、86～88は山陰系複合口縁甕である。95～97の高杯は、杯部に稜をなし、脚部は屈曲して開き、いずれも中実を特徴とする。98は、脚上部に沈線を施す東海系高杯である。102は、手焙形

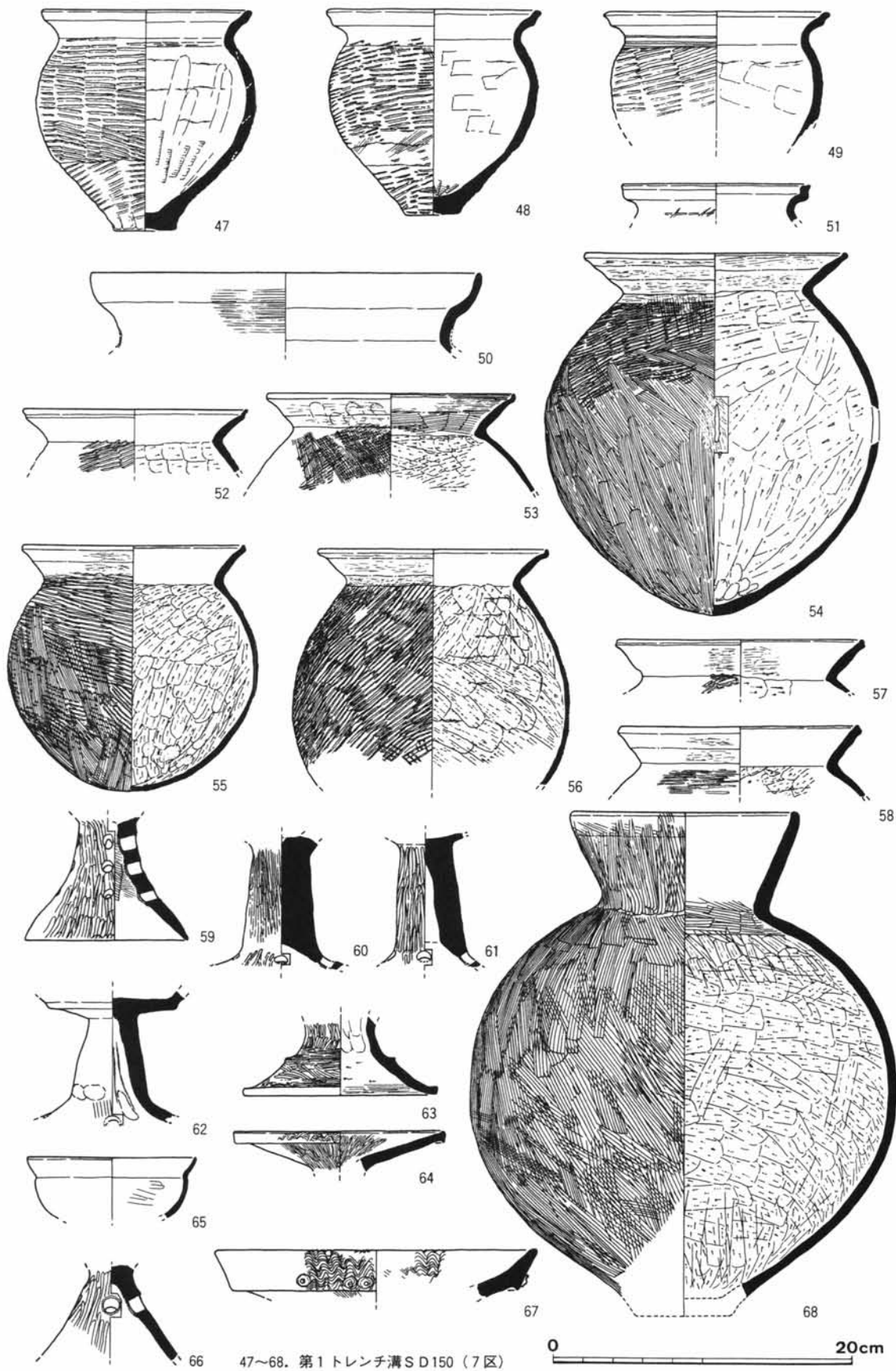


第41図 出土遺物実測図(2)



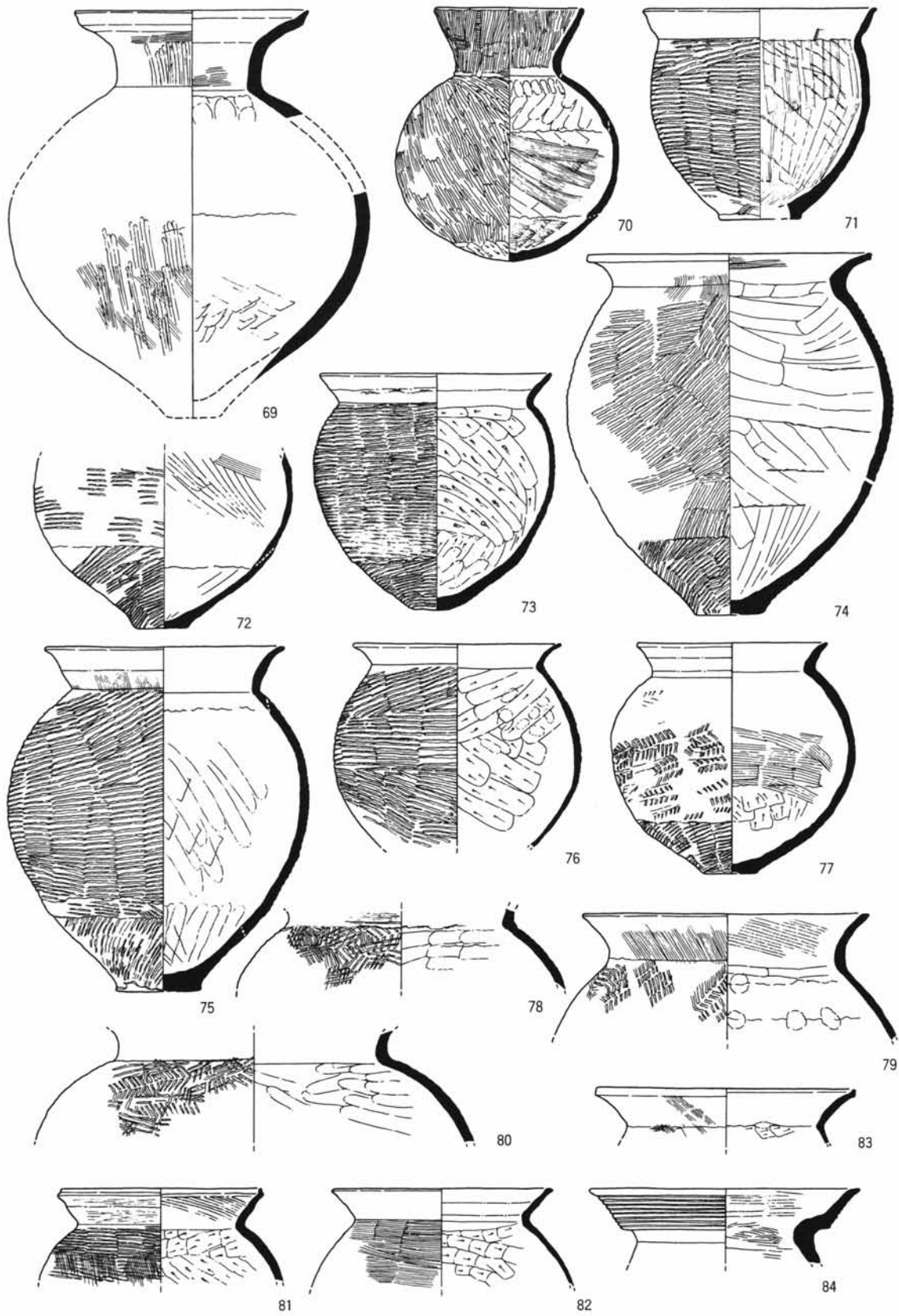
33~46. 第1トレンチ溝SD150 (7区)

第42図 出土遺物実測図(3)



第43図 出土遺物実測図(4)

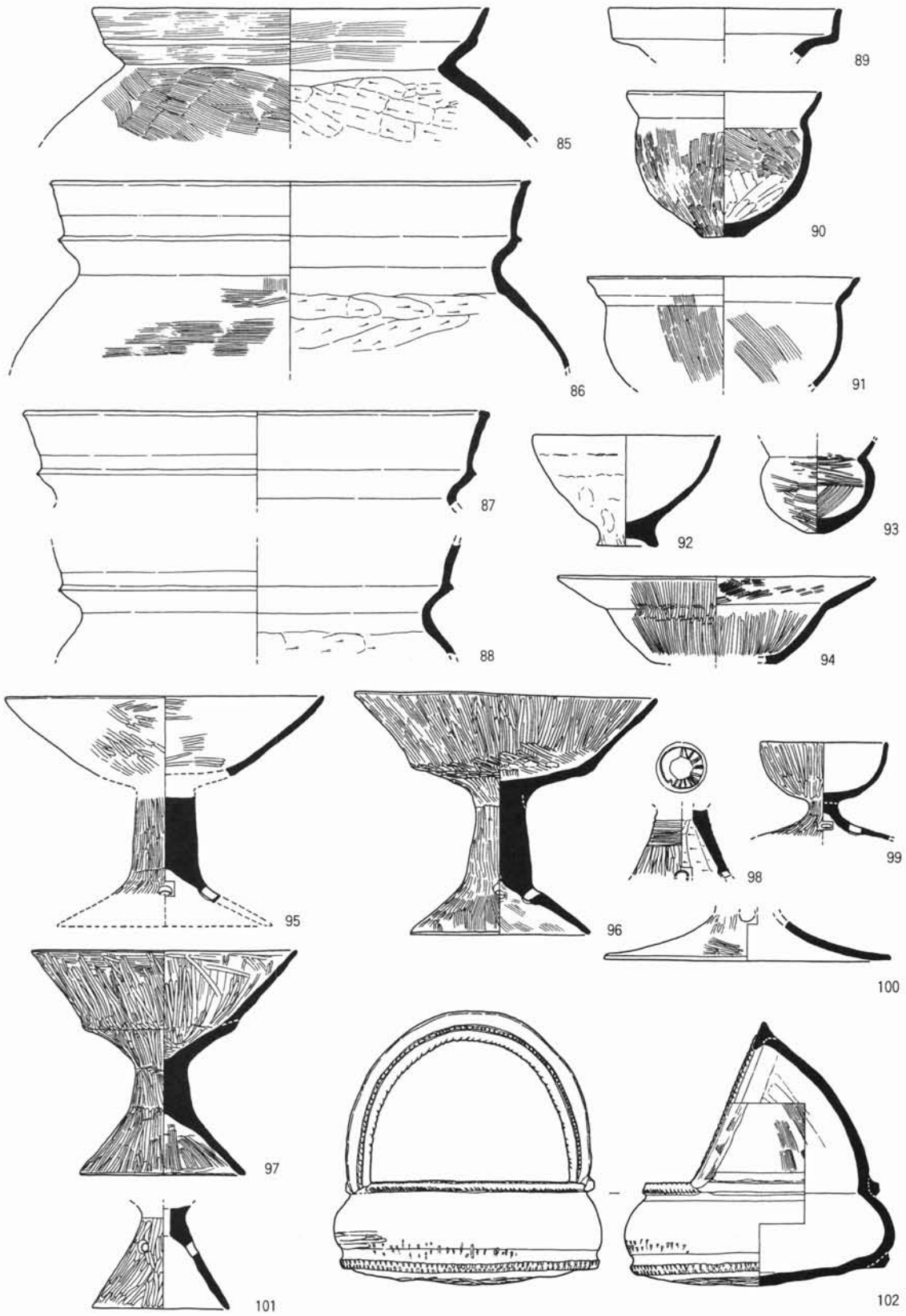




69~84. 第1トレンチ溝SD150(8区西・中央)

0 20cm

第44図 出土遺物実測図(5)



85~102. 第1トレンチ溝SD150(8区西・中央)

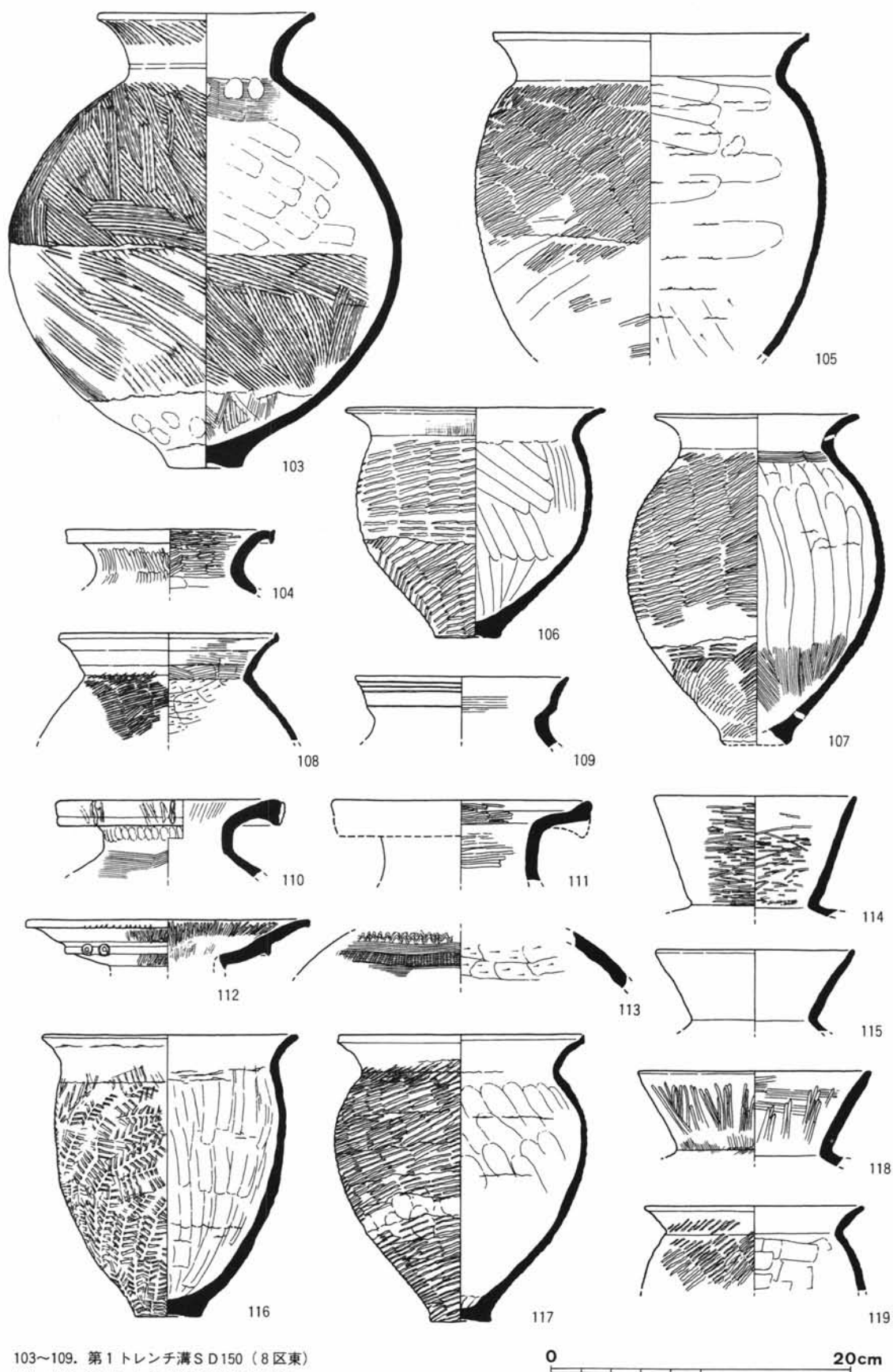
0 20cm

第45図 出土遺物実測図(6)

土器である。鉢部は、わずかに外反する口縁部をなし、端部に綾杉状の刻みを施す。鉢部下半の突帯には縦方向の刻みが施され、体部中位にも縦方向のヘラ描文様が認められる。覆部は、内外面にハケ調整がみられる。103～109は、8区東およびD地点から出土した。甕には弥生系甕(105～107)や、庄内式甕(108)、北陸系甕(109)が認められる。110～152は、9区およびD地点から出土した。113は壺の体部であるが、波状文・直線文のほか、簾状文状の文様が施され、東海系の文様要素をもつ壺として注目される。甕には、弥生系甕と庄内式甕に加えて、わずかながら布留式甕がみられる。116は、頸部径が大きく、ゆるやかに外反する口縁部を特色とする甕である。外面に矢羽タタキ、内面に縦方向のナデを施す。弥生系甕には、口縁端部が立ち上げる甕(117)と、単純に外反する甕(119～122・124～127)がある。123は、口径15.6cm、器高15.5cmを測る。123は、外面タタキが細筋化し、内面ケズリ、さらに底部の尖底化が顕著な初期庄内式甕である。口径17.0cm、器高19.2cmを測る。128～131は、矢羽タタキを施す弥生系甕である。133～135は庄内式甕、136は北陸系甕、139は近江系の系譜をひく甕、137・138は布留式甕である。高杯には、140～142は杯部に稜線をもつ畿内系高杯と、近江・東海系高杯(144)がある。145は矢羽タタキを施す鉢である。146は、甕ないしは壺の体部であり、肩部と推定される位置に円形の小さな摘み状の突起を付す。外面はナデ、内面はハケ調整し、色調は灰白色を呈する。小片であり、全体の形状を窺うことが困難ではあるが、小さな摘み状の突起を有すことから、朝鮮半島系土器の可能性のあるものと考えておきたい。147は手焙形土器である。鉢部は前面を大きく欠損しているが、覆部との接合部の形状から受口状をなすとみられる。外面は鉢部、覆部ともハケ調整を施す。148は山陰系の複合口縁の甕である。149・150は小形器台、152は畿内系有段口縁高杯の口縁部の一部とみられる。

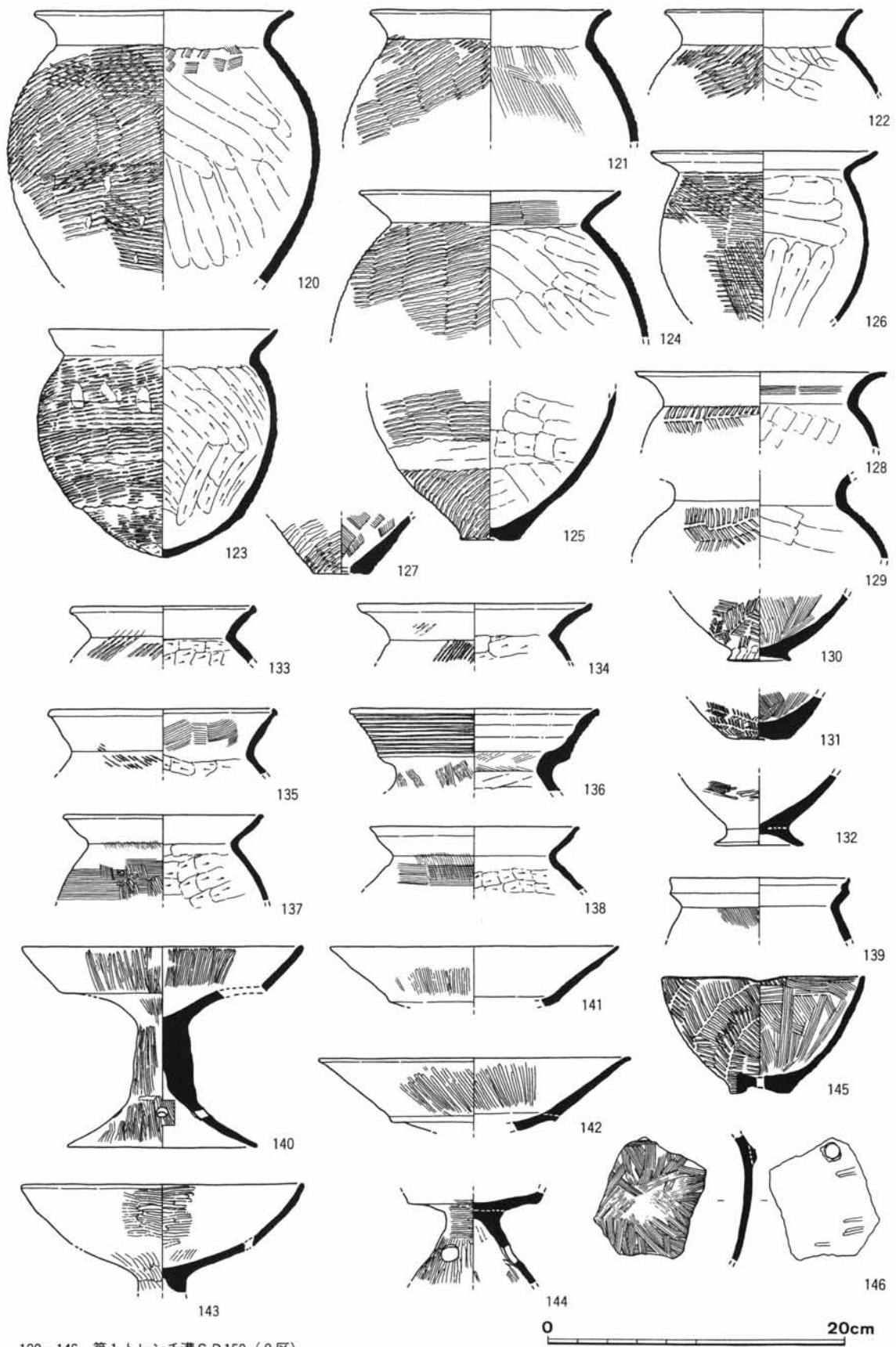
153～182は、第1トレンチ出土の土器である。153は、奈良時代後期の井戸SE117から出土、168～182は鎌倉時代の溝SD33から出土した。

153は、受部内外面にともに波状文で加飾する近江・東海系の広口壺である。155は、外面に荒いハケ、内面にケズリを施す直口壺である。156・157は弥生系甕であるが、内面にケズリを特色とする。弥生系甕には、口縁端部に面をなし、摘み上げる160がみられる。162～164は庄内式甕である。山城地域に特徴的な外反気味に立ち上がる口縁をなす甕である。166は、脚部で屈曲して開く畿内系高杯、167はやや内湾気味の脚部を特色とする中空の小形器台である。168～182の溝SD33出土土器は、その多くが古墳時代初頭の土器であるが、一部に古墳時代中期後半の土器(177・178)が含まれる。168は、山陰系の二重口縁壺である。171～173は弥生系甕であるが、173の小形甕には、一部に矢羽のタタキがみられる。174は、有段口縁をなし、外面にタタキを施す甕である。畿内系甕と北陸系甕の折衷形態をなす。175は、端面に沈線をもつ庄内式甕である。口縁部の立ち上がり角度が大きく、上半で開き気味に立ち上がる山城に特徴的な形態をなす。口径18.1cmを測り、淡黄灰色を呈する。176は最古段階の布留式甕である。177・178の「く」の字口縁甕は、口縁端部が肥厚するが、体部外面はすでに縦方向のハケに変化しており、内面にナデ調整がみられることから、布留式直後の形式と考えられる。179は外面にタタキを施す鉢である。



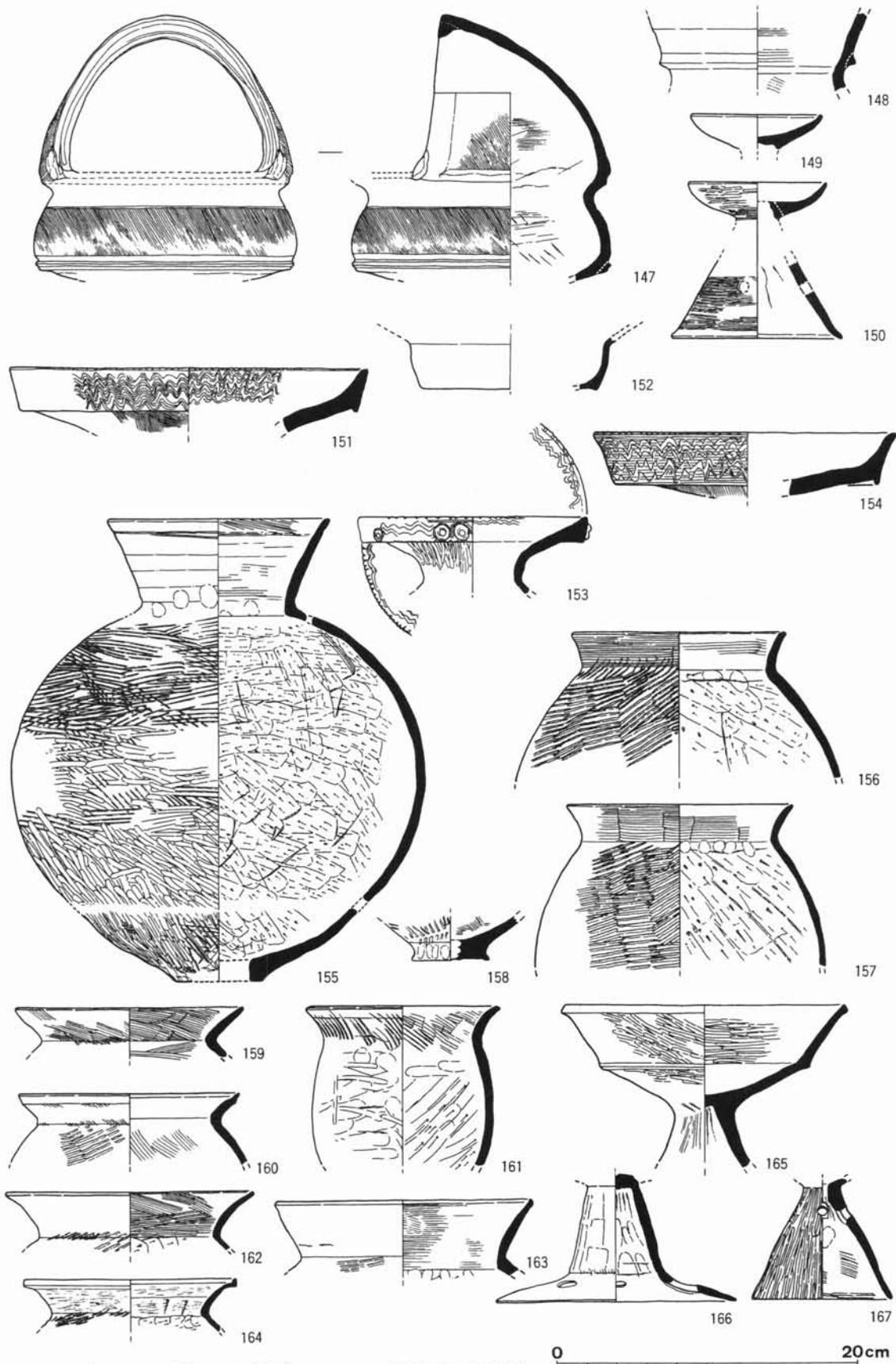
103~109. 第1トレンチ溝SD150(8区東)  
110~119. 第1トレンチ溝SD150(9区)

第46図 出土遺物実測図(7)



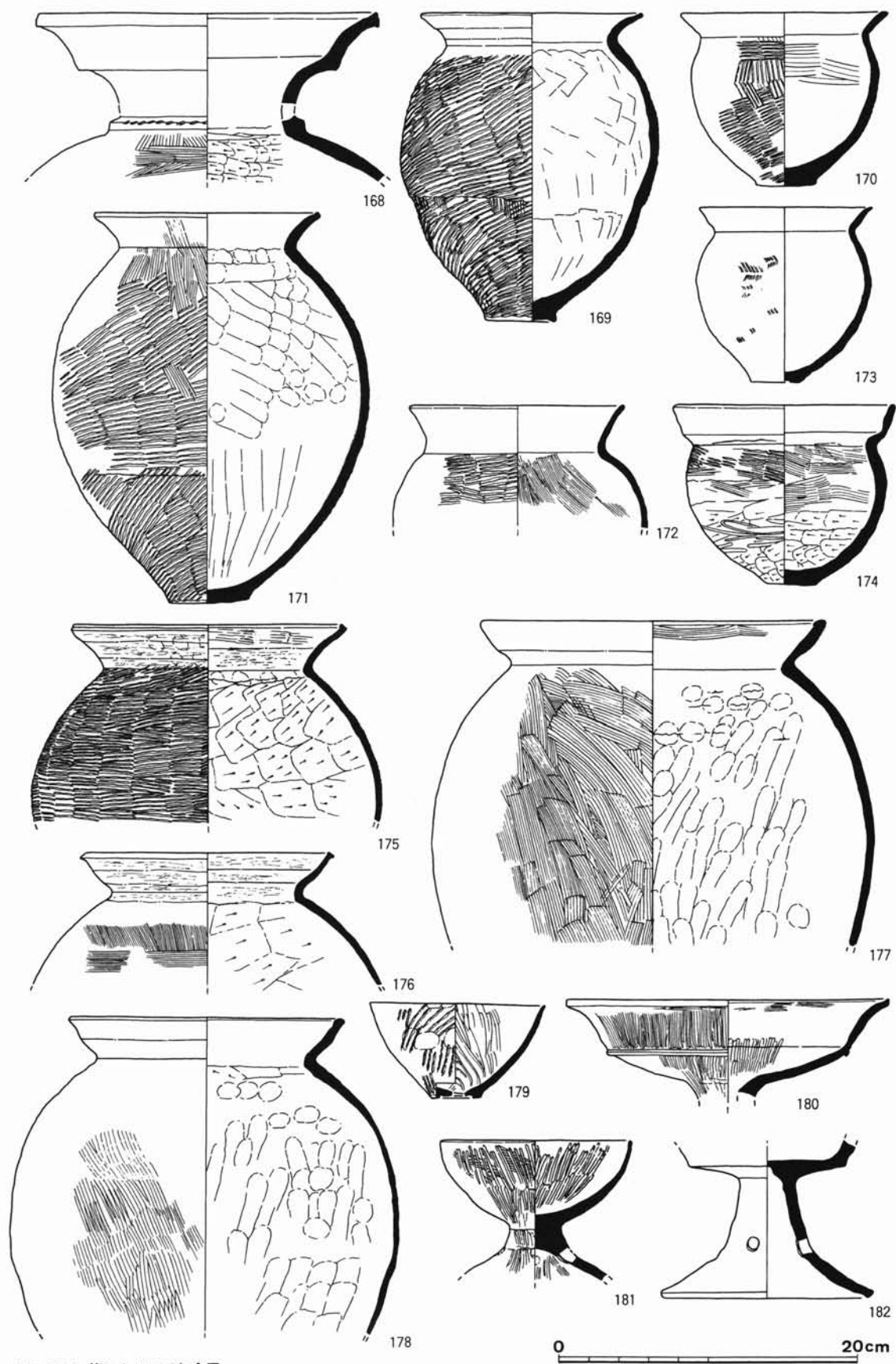
120~146. 第1トレンチ溝S D150 (9区)

第47図 出土遺物実測図(8)



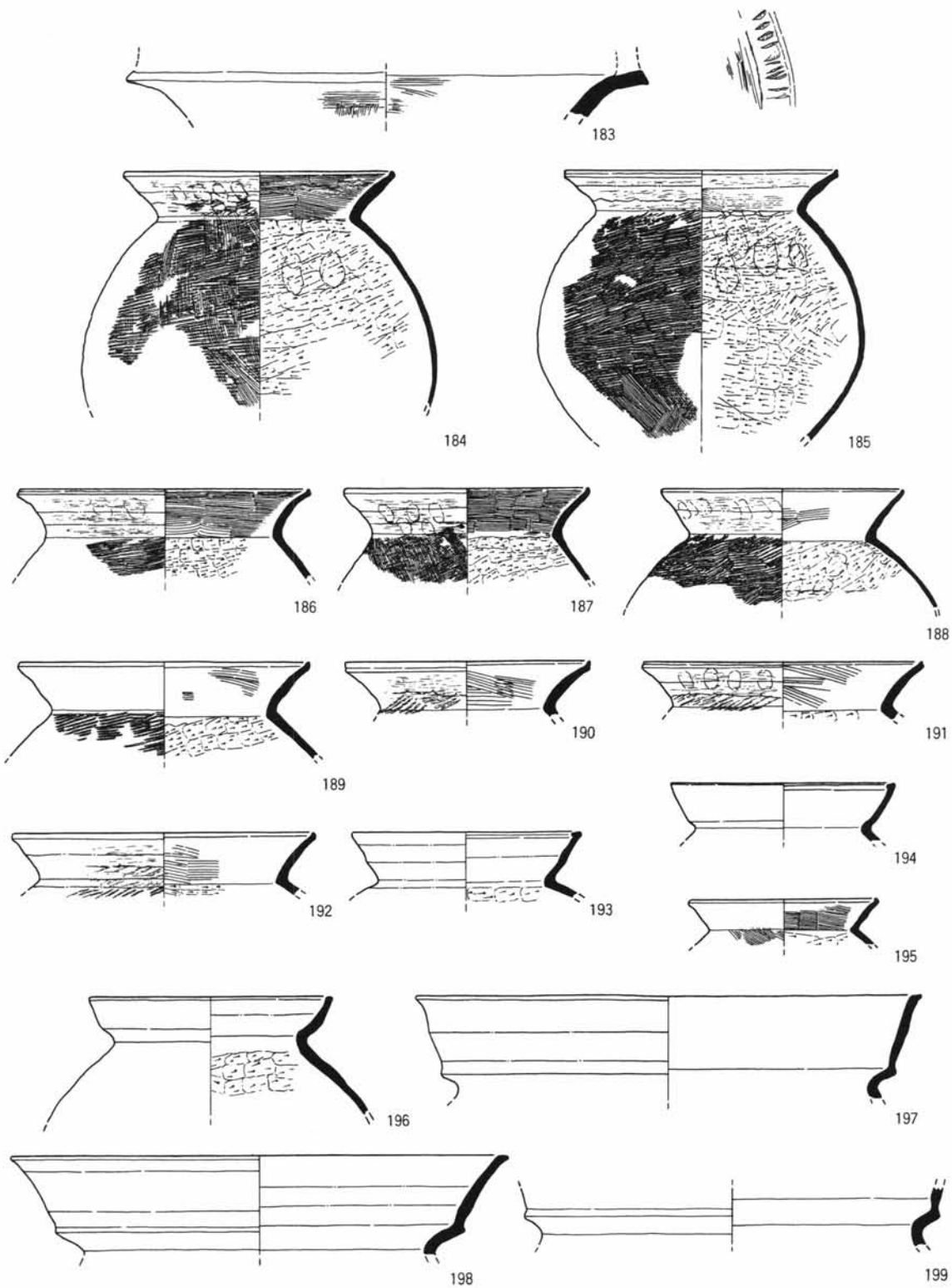
147~152. 第1トレンチ溝SD150(9区) 154~167. 第1トレンチ包含層

第48図 出土遺物実測図(9)



168~182. 第1トレンチ包含層

第49図 出土遺物実測図(10)



183~199. 第2トレンチ竪穴式住居跡SH12

0 20cm

第50図 出土遺物実測図(11)



②第2トレンチの出土土器(183～280)

183～216は、竪穴式住居跡S H12の出土土器である。183は、讃岐産複合口縁大形壺の受部の一部とみられる。胎土に角閃石を多く含む。184～192は、庄内式甕である。いずれも口縁部の立ち上がり角度が大きく、上半部で外反気味に立ち上がる。タタキは細くシャープであり、色調は淡褐色、ないしは淡黄灰色を呈する。山城に特徴的な庄内式甕である。184は口径16.8cm、185は17.0cmを測る。193・194・196は布留式甕であり、197～199は山陰系複合口縁甕である。200～202は、口縁部が大きく拡張する小形丸底鉢である。203～209は、有段口縁丸底鉢である。口縁部には、受部が短く、二次口縁が短く外反する(203～206)と、長い受部をなす(207・209)がある。210～215は小形器台である。いずれも残存状況が悪く、全体の形状が不明であるが、脚部が中実の(210・216)と、中空の(211～213)がある。

217は、竪穴式住居跡S H121から出土した小形丸底鉢である。外面にハケを施す。

218は、竪穴式住居跡S H120から出土した布留式甕である。

219～227は、竪穴式住居跡S H182から出土した。211～223は布留式甕である。224・225は小形丸底壺である。226は、脚部内面に穿孔を施す山陰系高杯である。佐山Ⅲ式並行の土器群である。219の弥生系甕口縁部と、227の近江・東海系高杯の脚部は、佐山Ⅱ式古相の土器群であり、混入遺物とみられる。

228～240は、竪穴式住居跡S H188から出土した。230・231は庄内式甕である。232～236は、布留式甕であるが、口縁端部をわずかに肥厚する布留式最古段階の甕(232)がみられる一方、端部が顕著に肥厚する(235)や、肩部の張りが顕著でない(236)なども含まれており、型式差がみとめられる。239・240は中空の小形器台である。竪穴式住居跡S H188出土土器のうち、甌として用いられたとみられる底部穿孔のみられる鉢(238)は、いずれも他の土器群と時期差があり、混入したものであろう。228・229の弥生系甕もまた混入の可能性が高いが、山城南部では、布留式初頭まで弥生系甕が一部に残存するため、断定はできない。以上から、竪穴式住居跡S H188出土土器の帰属時期は、おおよそ佐山Ⅲ式古相と考えられる。

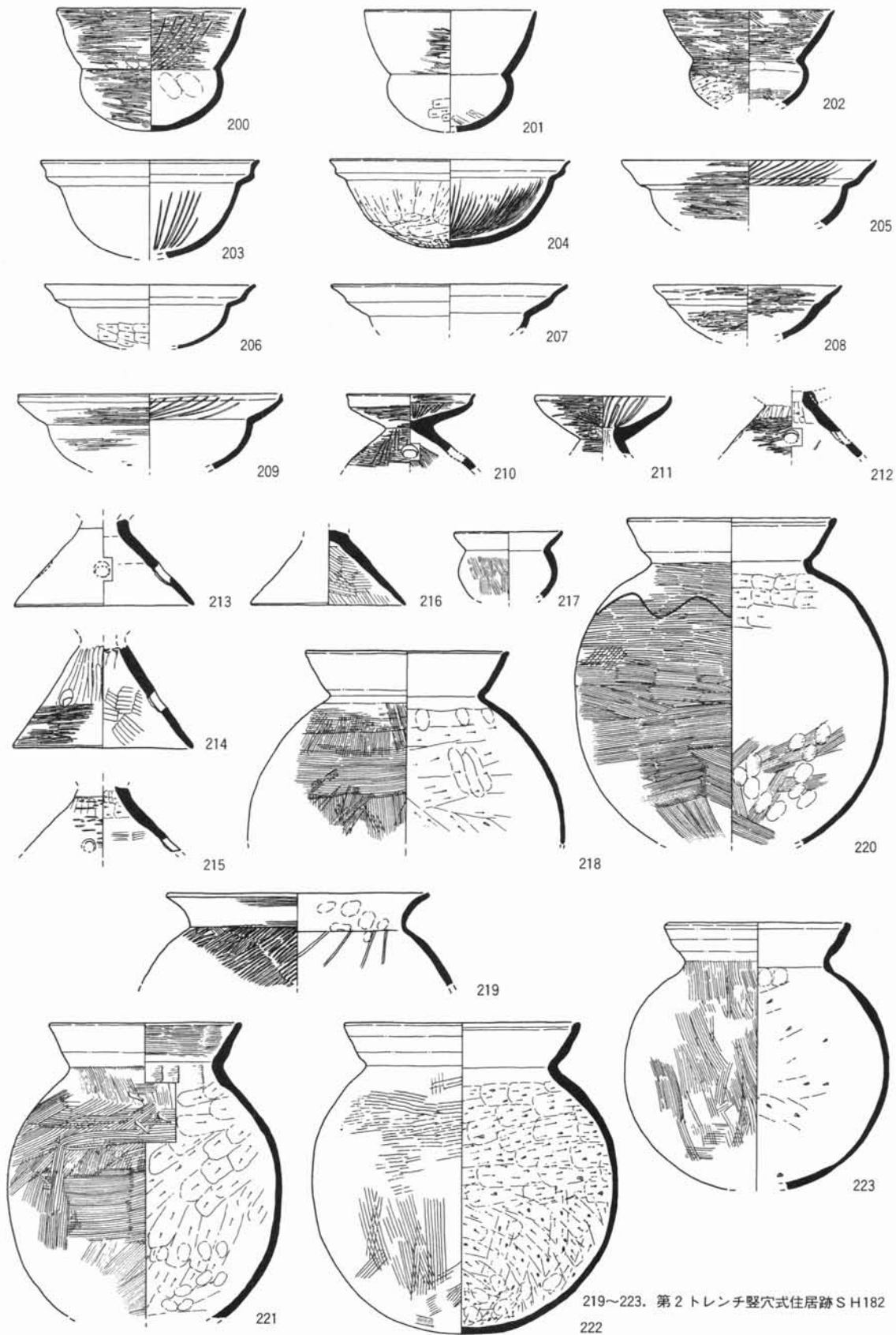
241・242は、竪穴式住居跡S H192から出土した。241は、椀状の杯部をもつ低脚高杯である。242は、口縁外面に面をなし、端部を摘みあげる弥生系甕である。

244～247は、土坑S K 5から出土した。245は庄内式甕である。口径は14.8cmを測り、色調は淡黄灰褐色を呈する。246は杯底部外面に指圧痕を施す山陰系高杯である。247は、口縁部が拡張する小形丸底鉢である。244は弥生系甕であるが、肩部が張らないプロポーションには、新しい要素が認められ、一括資料とみる事が可能である。時期は、おおよそ佐山Ⅱ-4～ⅢA-1時期と考えられる。

248は、土坑S K 7から出土した。杯部外面下端に刻み目を施す東海系高杯である。

249は、落ち込みS X191から出土した。杯底部外面に指頭圧痕を施す山陰系高杯である。

252～265は、落ち込みS X233から出土した。251は、讃岐産大形複合口縁壺の受部とみられる。252・253は、外面タタキ、内面はナデ調整の弥生系甕である。256は、山城に特徴的な口縁部が



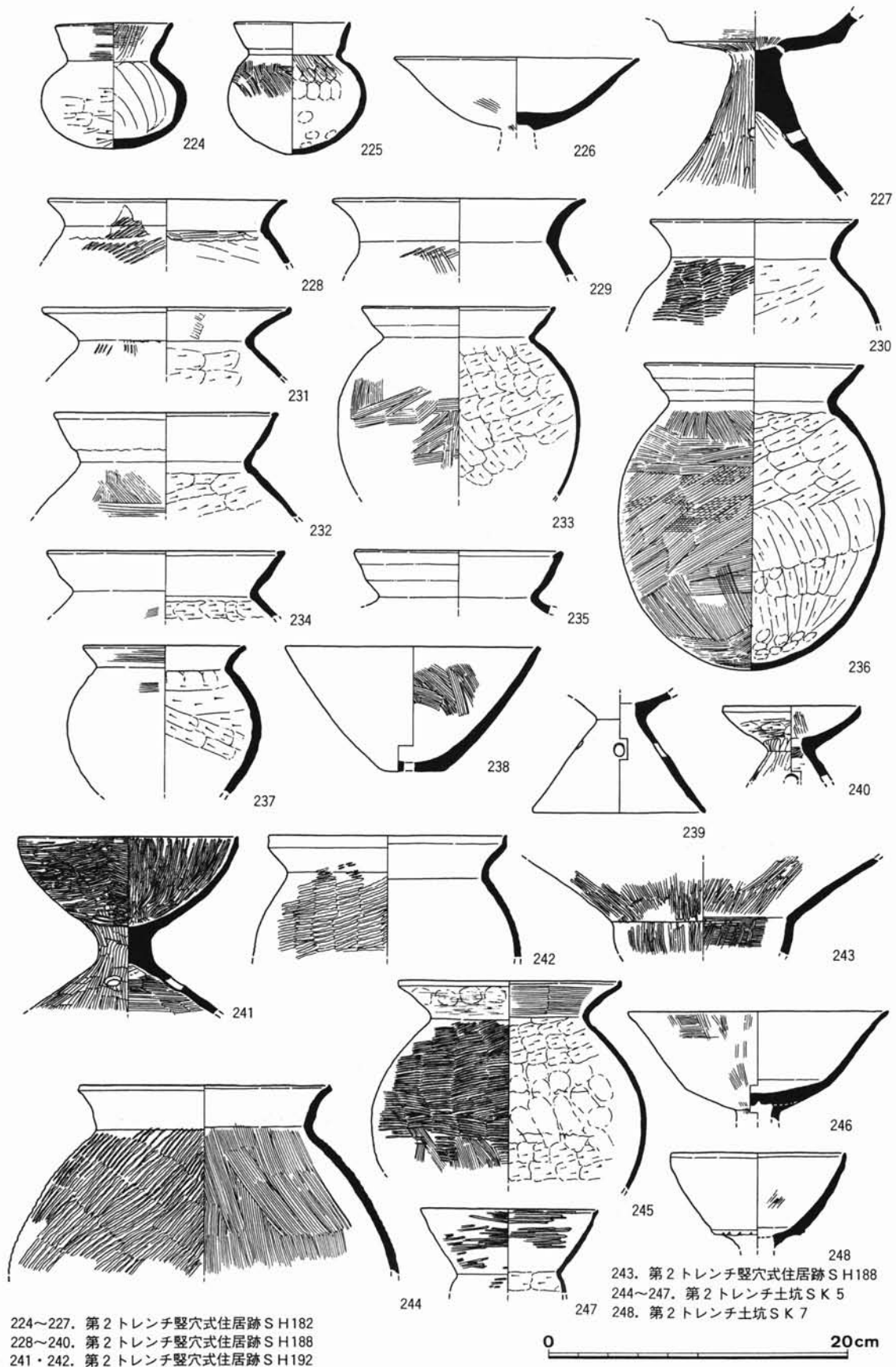
200～216. 第2トレンチ竪穴式住居跡SH12

217. 第2トレンチ竪穴式住居跡SH121 218. 第2トレンチ竪穴式住居跡SH120

219～223. 第2トレンチ竪穴式住居跡SH182  
222

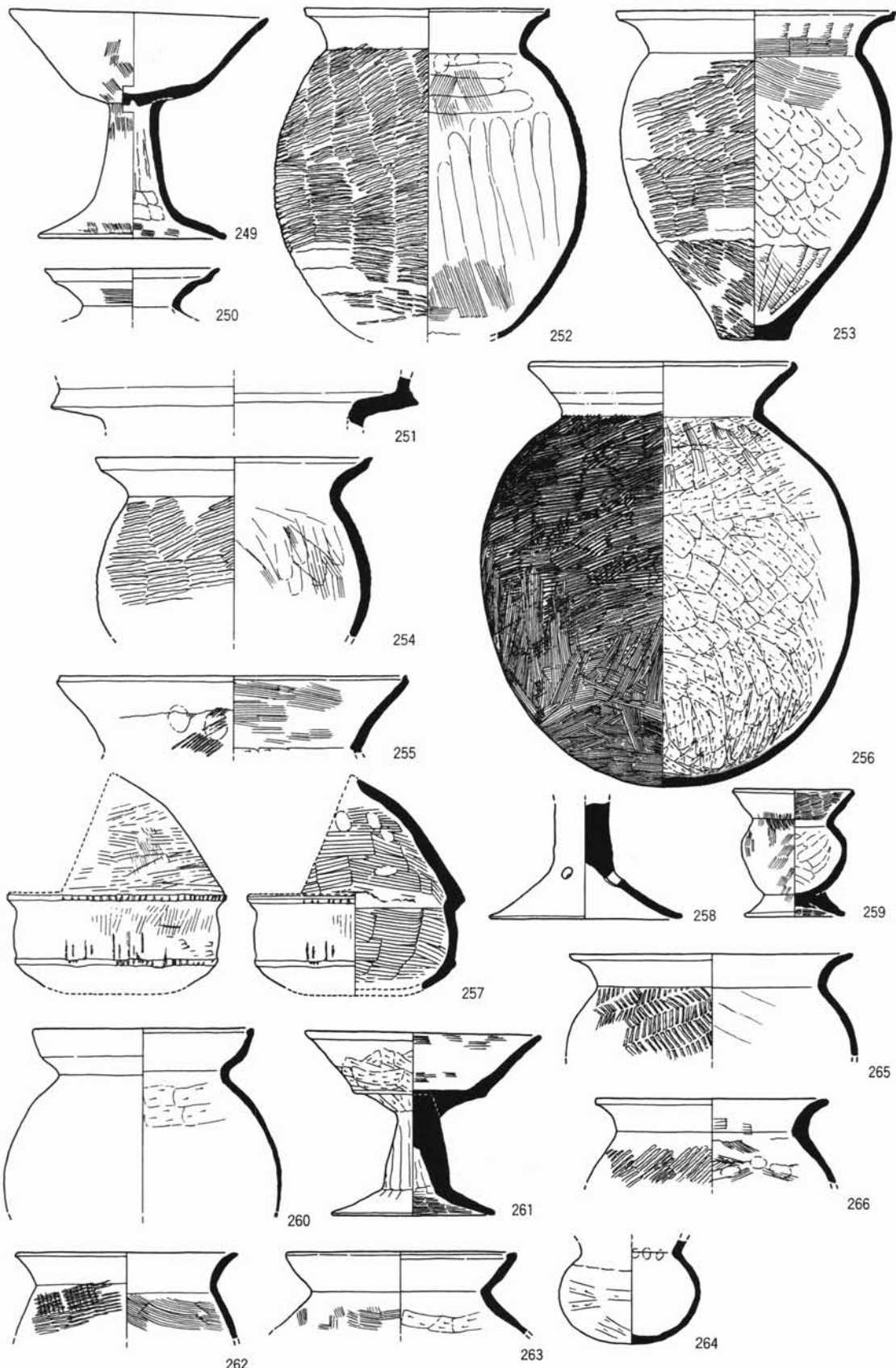
0 20cm

第51図 出土遺物実測図(12)



224~227. 第2トレンチ竪穴式住居跡 S H182  
 228~240. 第2トレンチ竪穴式住居跡 S H188  
 241・242. 第2トレンチ竪穴式住居跡 S H192

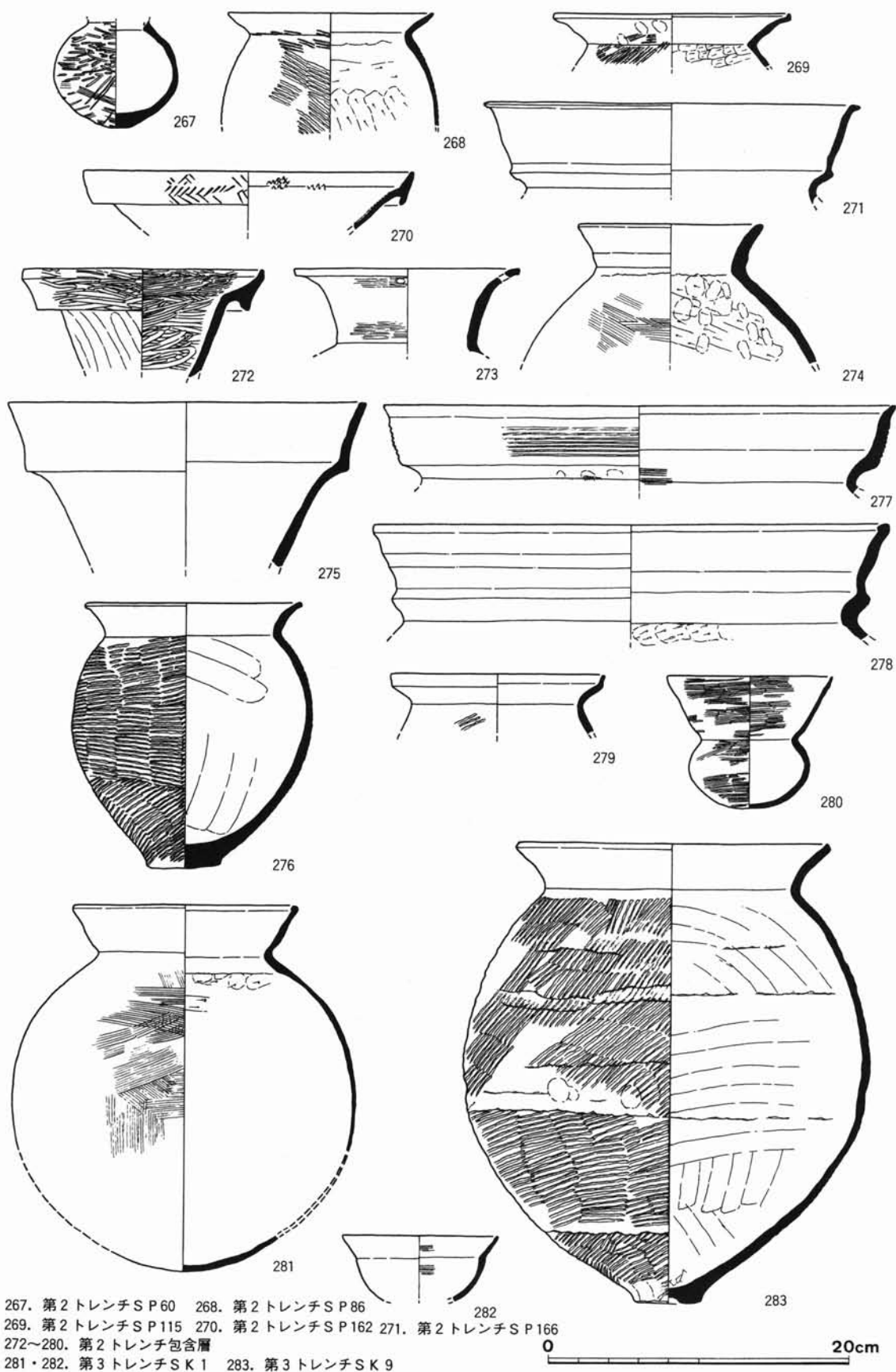
第52図 出土遺物実測図(13)



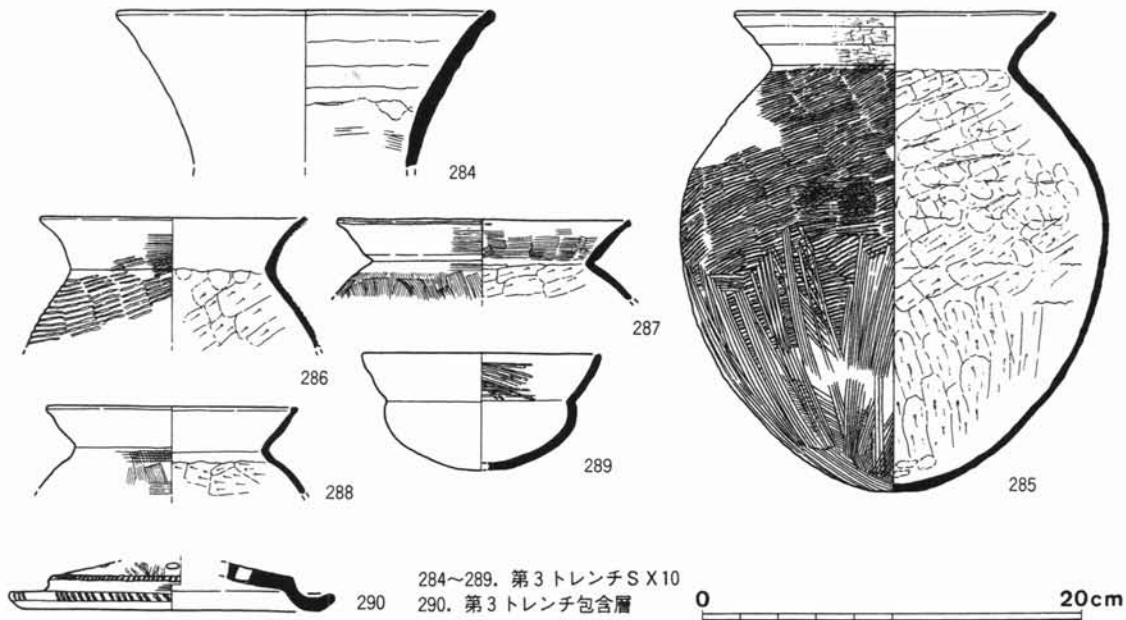
249. 第2トレンチ落ち込みS X 191 265・266. 第2トレンチ溝S D 187  
252~264. 第2トレンチ落ち込みS X 233

0 20cm

第53図 出土遺物実測図(14)



第54図 出土遺物実測図(15)



第55図 出土遺物実測図(16)

外反気味に立ち上がる庄内式甕である。体部下半のプロポーシオンはやや長胴の傾向が強く、型的には最も新しい様相を示す。口径、17.0cm、器高27.6cmを測る。255は大形の庄内式甕の口縁部である。257は、内外面にハケを施す手焙形土器である。鉢部の口縁部は「く」の字状を呈す。炭化物などの付着はみとめられない。259は、東海系とみられる脚付小形壺である。260・263は布留式甕であり、261は杯部と脚部に稜をなす畿内系高杯である。落ち込みS X 233は、竪穴式住居跡の可能性があるが、佐山Ⅱ-2～佐山ⅢA-1式まで、やや時期幅をもつ。

265・266は、溝S D 187から出土した弥生系甕である。265は矢羽タタキを施す。267～271は、ピット内出土遺物である。269は、角閃石を多く含む胎土をもつ河内庄内形甕である。270は、口縁部に羽状文をもつ東海系壺である。橙褐色を呈す。271は、山陰系甕である。口縁部端部を外方に引き出す。272～280は、第2トレンチ包含層出土の土器である。272は、内外面にていねいにミガキを施す東海系壺である。275は、東海系「伊勢型二重口縁壺」の系譜をひく二重口縁壺である。暗橙褐色を呈する。277は、月影式の北陸系甕である。278は、大形の山陰系複合口縁甕の口縁部である。279は、口縁部に面をなす弥生系甕である。

③第3トレンチの出土土器(281～290)

281・282は、土坑S K 1から出土した。281は、おおよそ佐山ⅢA-1式に該当する布留式甕である。283は、土坑S K 9から出土した完形の弥生系甕である。体部最大径が、やや体部中位下半にあり、長胴気味のプロポーシオンを示すことから、最終段階の弥生系甕とみられる。ピット状の土坑内から単体で出土した。284～289は、落ち込みS X 10から出土した。285・286は庄内式甕であり、288は初期布留式甕である。285の庄内式甕は、山城に特徴的な口縁部をなす庄内式甕である。外面には精緻は細かいタタキを施し、内面にはケズリのほか上半に指頭圧痕が認められる。口径16.6cm、器高25.2cmを測り、淡黄灰褐色を呈する。土坑S K 1の出土遺物は、おおよそ

佐山Ⅱ－4式の様相を示す。

290は、包含層中から出土した器台の脚部である。脚部が有段となる庄内系の装飾器台である。有段の稜と脚部端面に刻みを施す。

(高野陽子)

## (2)古墳時代以降の遺物

### ①第1トレンチの出土遺物(291～464)

291～303は、溝S D155出土の遺物である。須恵器杯蓋(291)は、天井部が丸みをもち、口縁端部は丸く終わる。須恵器蓋(292)は、器形からみて、壺蓋と考えられる。須恵器杯身(293～297)は、やや小振りのもので、口縁部の立ち上がりも低い。須恵器短頸壺(298)は、外面肩部にカキ目、内面底部に同心円タタキの痕跡が残る。須恵器口縁部(299)は、提瓶もしくは平瓶の口縁部とみられる。須恵器(300・301)は、内面の自然釉の付着状態から、提瓶と考えられる。これらの須恵器は、蓋杯などの特徴からみて、陶邑編年のTK209期並行期のものとみられる。土師器高杯(302)は、杯部内面に放射状のミガキがみられる。土師器甕(303)は、口縁部が直立気味に立ち上がる。

須恵器杯身(304)は、土坑S K154出土の遺物である。小振りのもので、陶邑編年のTK209期並行期のものとみられる。

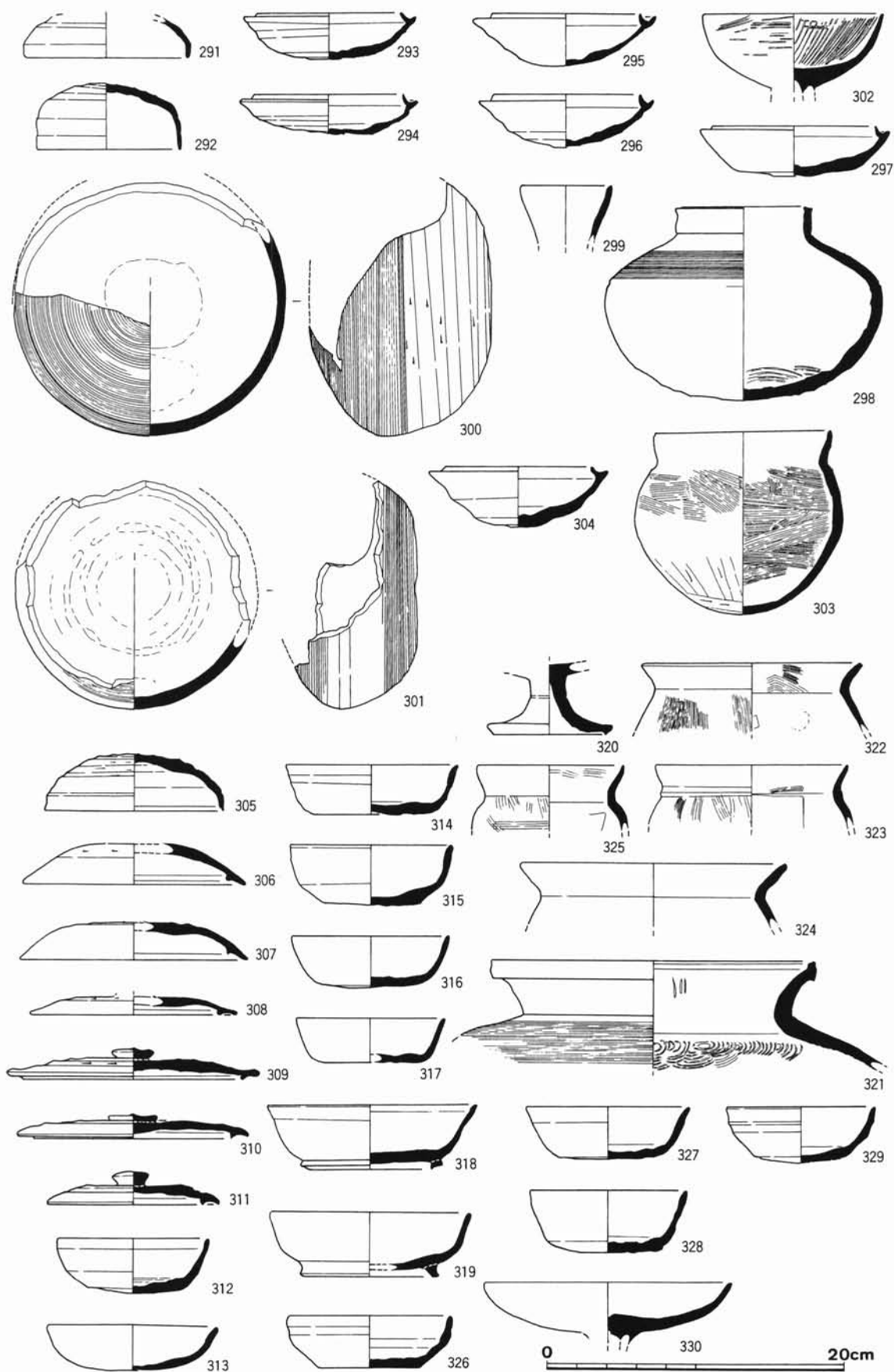
305～325は、土坑S K5出土遺物である。須恵器杯蓋(305)は、天井部が丸みをもち、口縁端部は傾斜した面になる。須恵器蓋(306～311)は、内面口縁端部に返りをもつ。306・307は、天井部がやや高く丸みをもつ。308～310は、扁平な器形で、319・310は宝珠形のつまみをもつ。311は、宝珠形つまみをもち、やや小型のものである。須恵器杯(312～317)は、小形のものである。須恵器杯(318・319)は、「ハ」字状に開く貼り付け高台付きのものである。須恵器高杯(320)は、やや小形のものである。須恵器甕(321)は、口縁部内面に縦方向の3条のヘラ描き沈線による窯印をもつ。322～325は、土師器甕である。これらの遺物は、ほぼ7世紀頃のものと考えられる。

須恵器杯身(326)は、溝S D03出土の遺物である。ほぼ7世紀頃のものと考えられるが、遺構は中世以降のものと考えられる。

327～330は、溝S D8出土の遺物である。須恵器杯身(327～329)は、小形のものである。330は、土師器高杯である。この溝の出土遺物は、土坑S K5出土のものとはほぼ同時期とみられる。

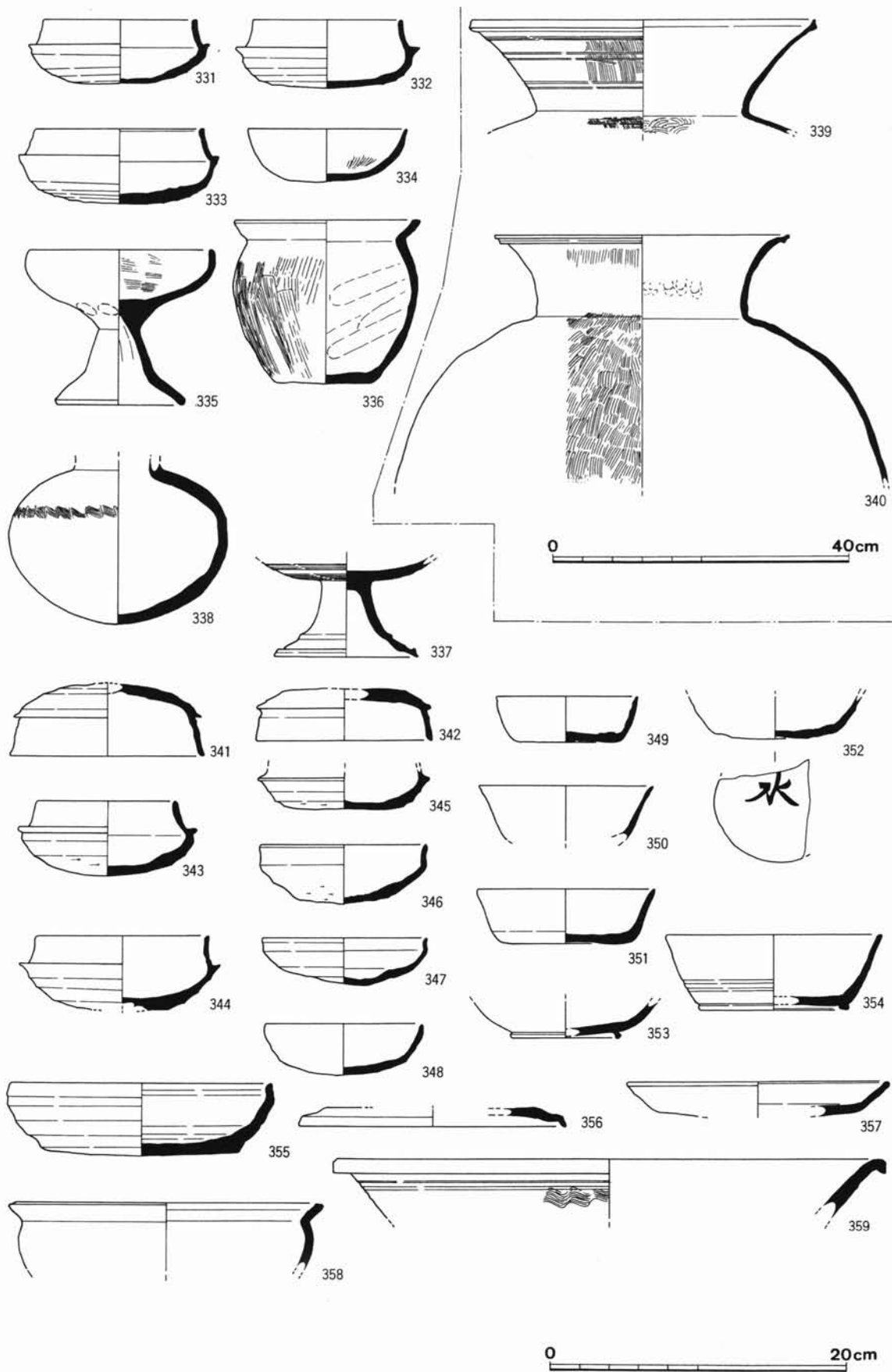
331～340は、溝S D33出土の遺物である。この溝は、島島間の低地部分で、中世以降、水田などに利用されていた所で、その耕土層から遺物が出土している。須恵器杯身(331・332)は、口縁部が高めに立ち上がる。須恵器杯身(333)は、口縁部が高めに立ち上がり、口縁端部に段をもつ。土師器杯(334)は、内面にハケ目調整が残る。土師器高杯(335)は、やや内湾気味の杯部をもつ。土師器甕(336)は、底部が平坦で、韓式系のものと考えられる。須恵器高杯(337)は、脚部が段状になる。須恵器甕(339)は、口縁部外面に、粗い縦ハケ調整の後、横方向の沈線を巡らす。須恵器甕(340)は、体部内面のタタキ目をナデ消す。

341～359は、包含層出土の遺物である。5世紀末頃から8世紀頃の遺物が出土している。須恵

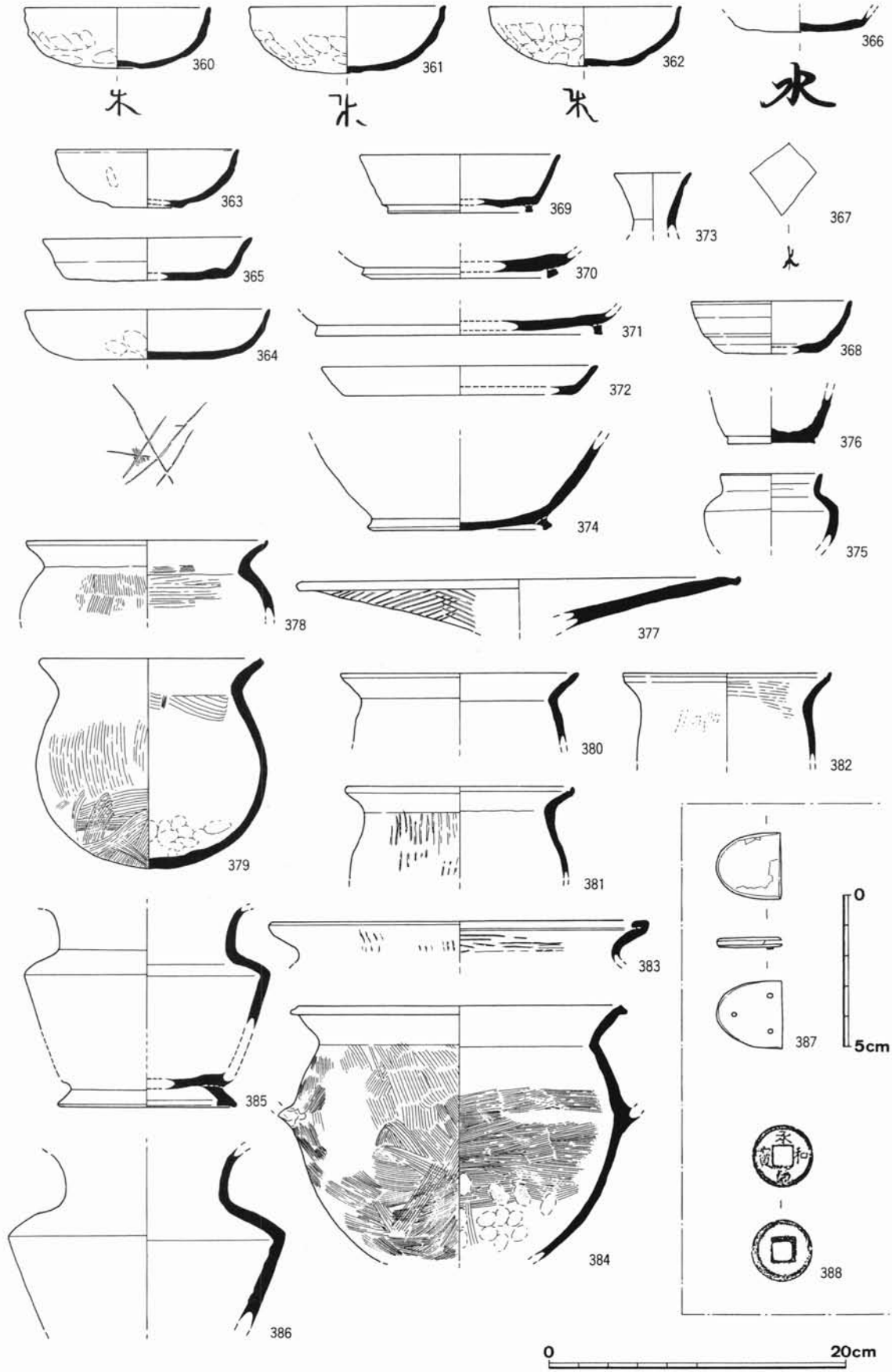


第56図 出土遺物実測図(17)

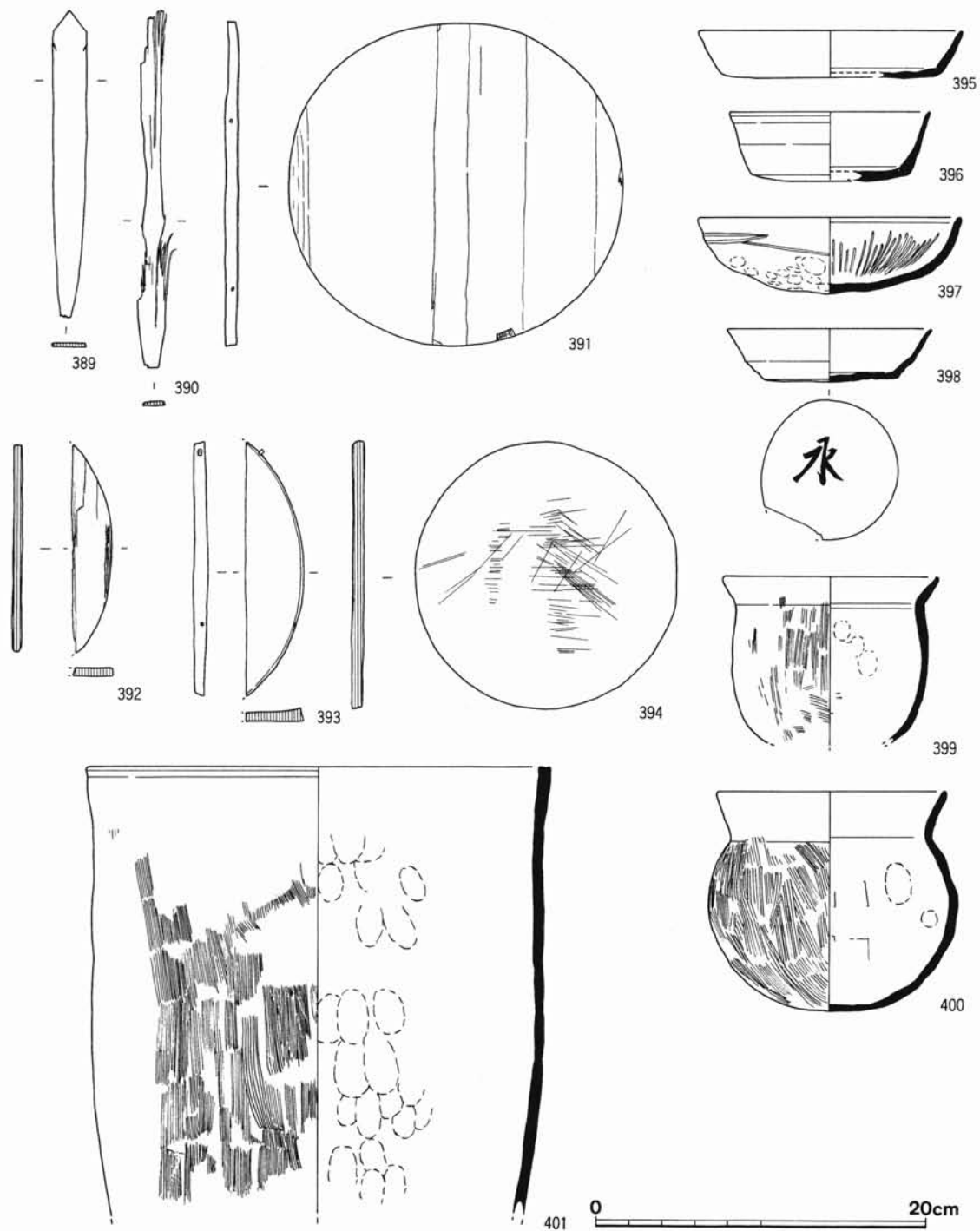




第57図 出土遺物実測図(18)



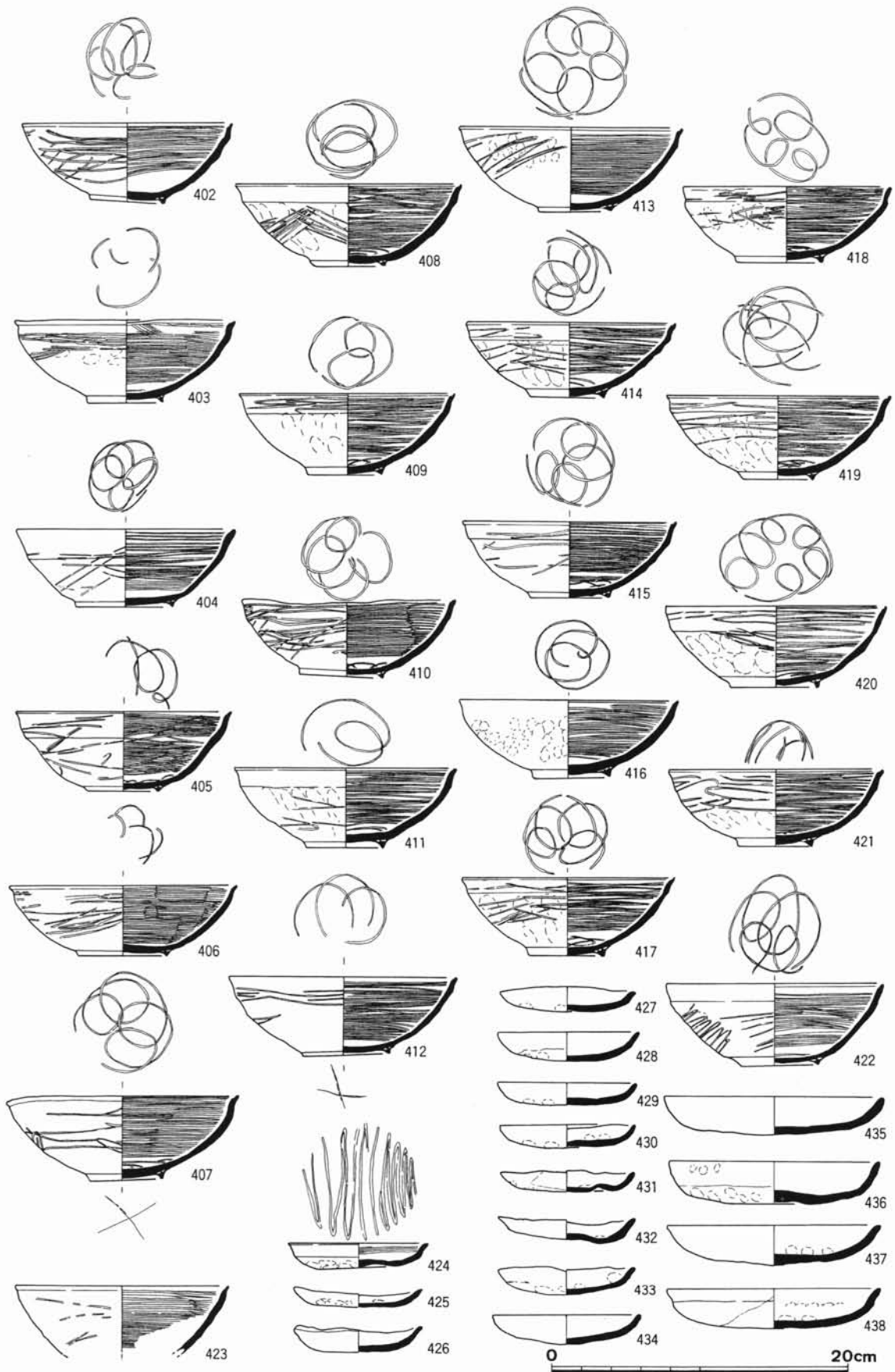
第58図 出土遺物実測図(19)



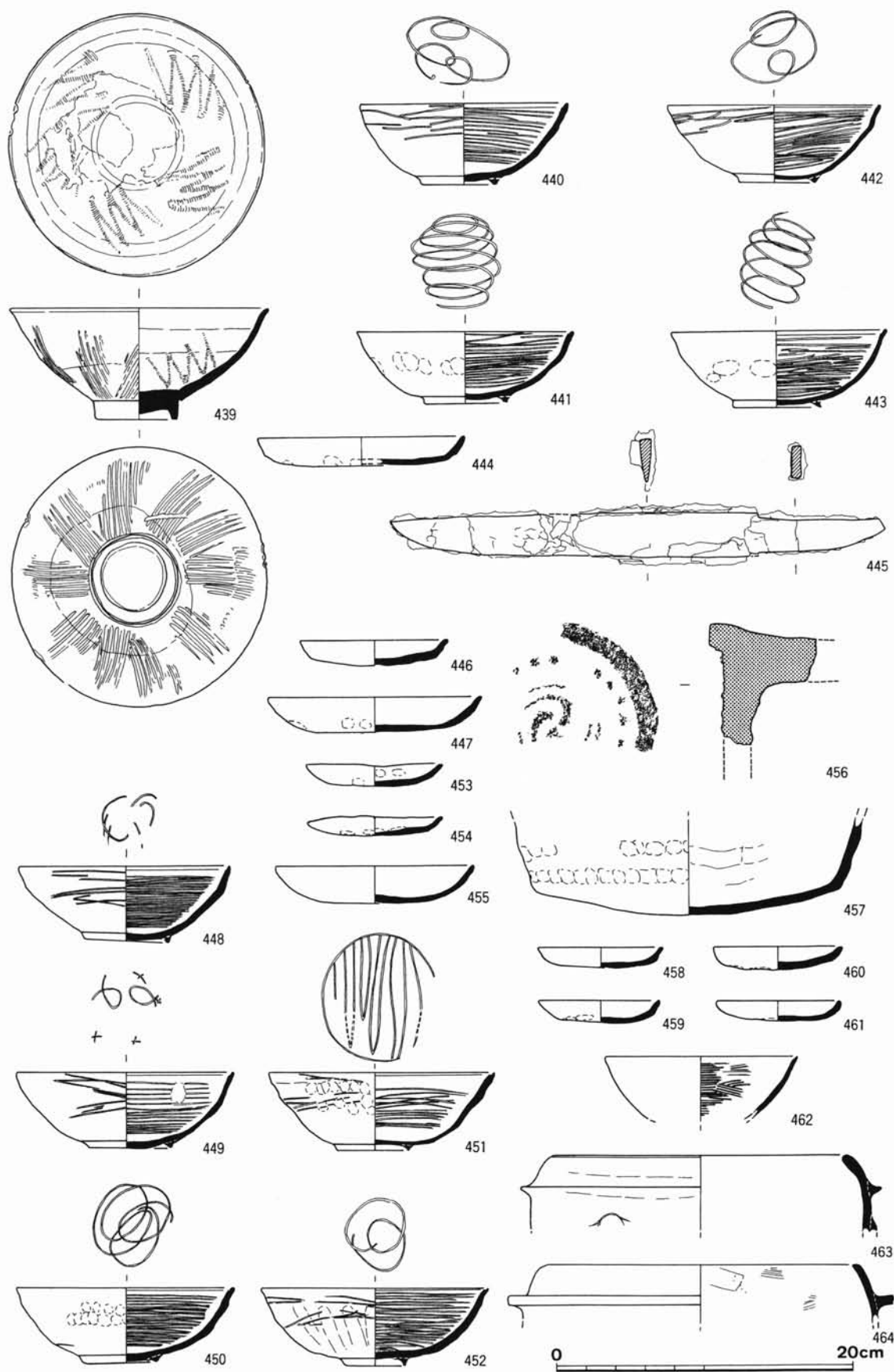
第59図 出土遺物実測図(20)

器杯(352)は、底部外面に「水」と墨書される。

360～394は、井戸 S E 117出土の遺物である。土師器杯(360～362)は、体部外面にユビ押さえ痕が残る。底部外面には不明な文字が墨書される。土師器杯(363)も同様のもので、墨書されていた可能性がある。土師器杯(364)は、底部外面にヘラ記号状の線刻がある。365～375は、須恵器である。杯・皿・壺などがある。須恵器杯(366)には、底部外面に「水」の墨書がみられる。また、杯底部とみられる(367)にも、360などと同様の文字かとみられる墨書がある。緑釉陶器



第60図 出土遺物実測図(21)



第61図 出土遺物実測図(22)

(376)は、硬質で、壺状の器形を呈する。高台畳付も含めて全面に施釉する。377～384は、土師器である。土師器高杯(377)は、杯部外面にミガキ調整を施す。土師器甕(384)は、把手付きのものである。須恵器壺(385・386)は、肩の張った器形である。金属製品としては、帯金具の鉞尾(387)や「承和昌寶」(388)がある。鉞尾は、銅製黒漆塗で、やや小形のものである。「承和昌寶」は、皇朝銭の一種で、西暦835年初鑄である。木製品としては、斎串(389・390)や曲物底部(391～394)などがある。以上の井戸S E 117出土遺物は、8世紀末～9世紀前半頃のものと思われる。

須恵器杯(395・396)は、掘立柱建物跡S B 60の柱穴出土のものである。底部から口縁部が明瞭に屈曲して立ち上がっており、8世紀末～9世紀前半頃のものと思われる。

397～399は、溝S D 2出土である。土師器杯(397)は、内面に放射状のミガキ調整が施される。須恵器杯(398)は、底部外面に「水」の墨書がある。これらの遺物は8世紀頃のものであるが、遺構は中世頃のものと考えられる。

土師器甕(400)は、土坑S K 61出土である。土師器(401)は、甑とみられ、土坑S K 22出土である。いずれも古代のものと思われる。

402～438は、溝S D 1出土の遺物である。瓦器碗(402～423)は、内面に密なミガキが施され、外面もミガキ調整がみられる。口縁端部に沈線をもつ。407・412のように、高台内に「×」のヘラ描きがみられるものもある。大和産のものが多く含まれる様子である。瓦器皿(424)は、見込みにジグザグ状のミガキを施す。土師器皿(425～438)は、口径9～10cm前後の小形のもの、口径14～15cm前後のやや大形のもの2種がみられる。

439～445は、中世墓S K 10出土の遺物である。青磁碗(439)は、口径17.6cm、器高7.4cmを測る、やや大振りのものである。体部内面に2条の沈線を巡らし、「W」状の櫛描き文を5か所に施す。外面には、縦方向の粗い櫛描き文を放射状に施す。外面高台の周囲は、無釉である。中国同安窯系の製品とみられる。瓦器碗(440～443)は、内面に密なミガキが施され、外面にもミガキがみられるものがある。口縁端部には沈線をもつ。土師器皿(444)は、やや大振りのものである。鉄製短刀(445)は、全長33cmを測る。錆化がはげしい。これらの遺物は、12世紀末～13世紀初頭頃のものと思われる。

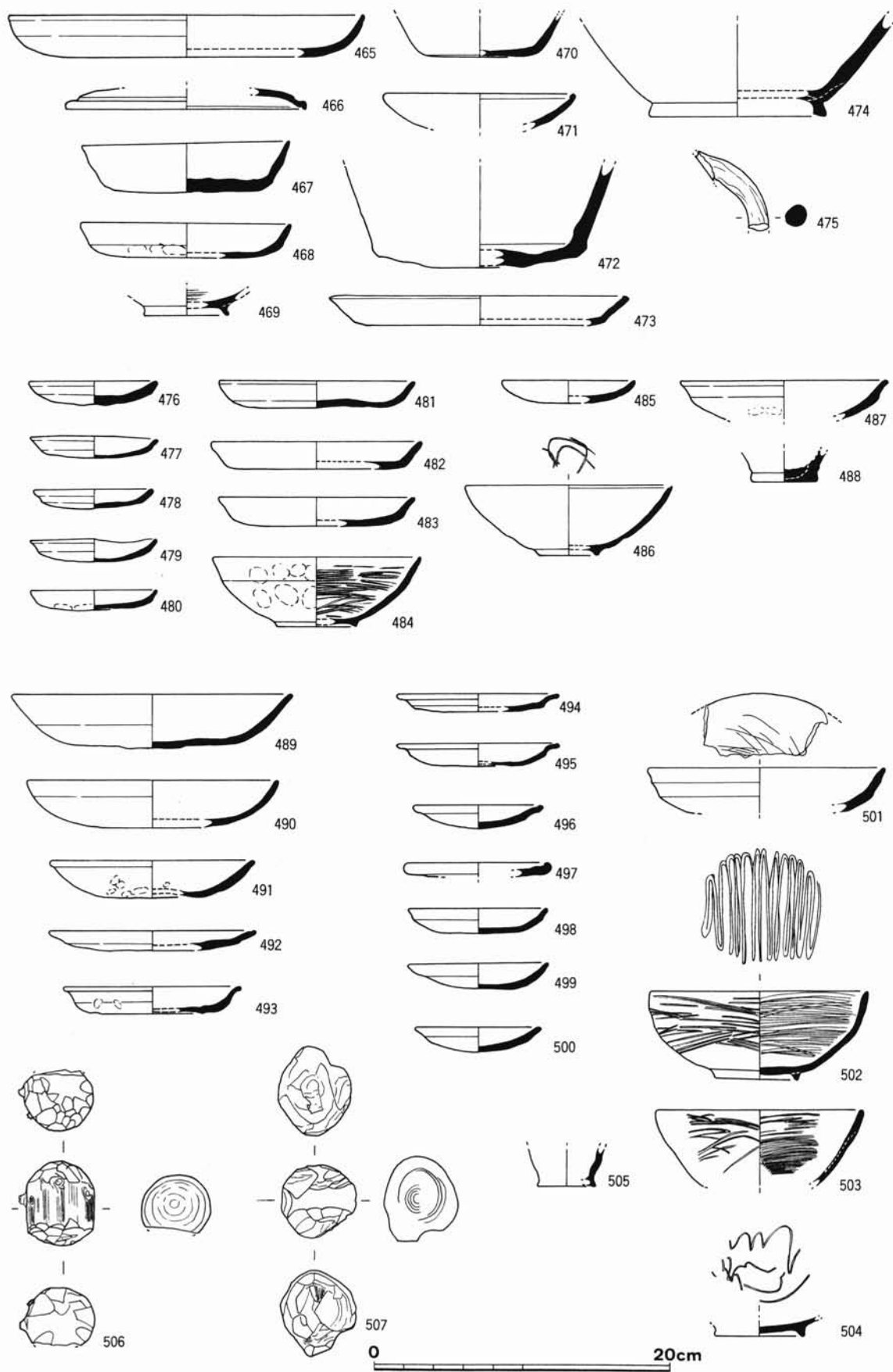
448～455は、溝S D 4出土の遺物である。瓦器碗(448～452)は、内面のミガキが密なものや疎なものがある。外面にもミガキがみられる。口縁端部に沈線をもつ。土師器皿(453～455)には、小形のものやや大形のものがある。

土師器皿(446・447)は、溝S D 28出土である。三つ巴文軒丸瓦(456)と瓦質鍋底部(457)は、集石遺構S X 21出土である。土師器皿(458～461)は、溝S D 11出土である。

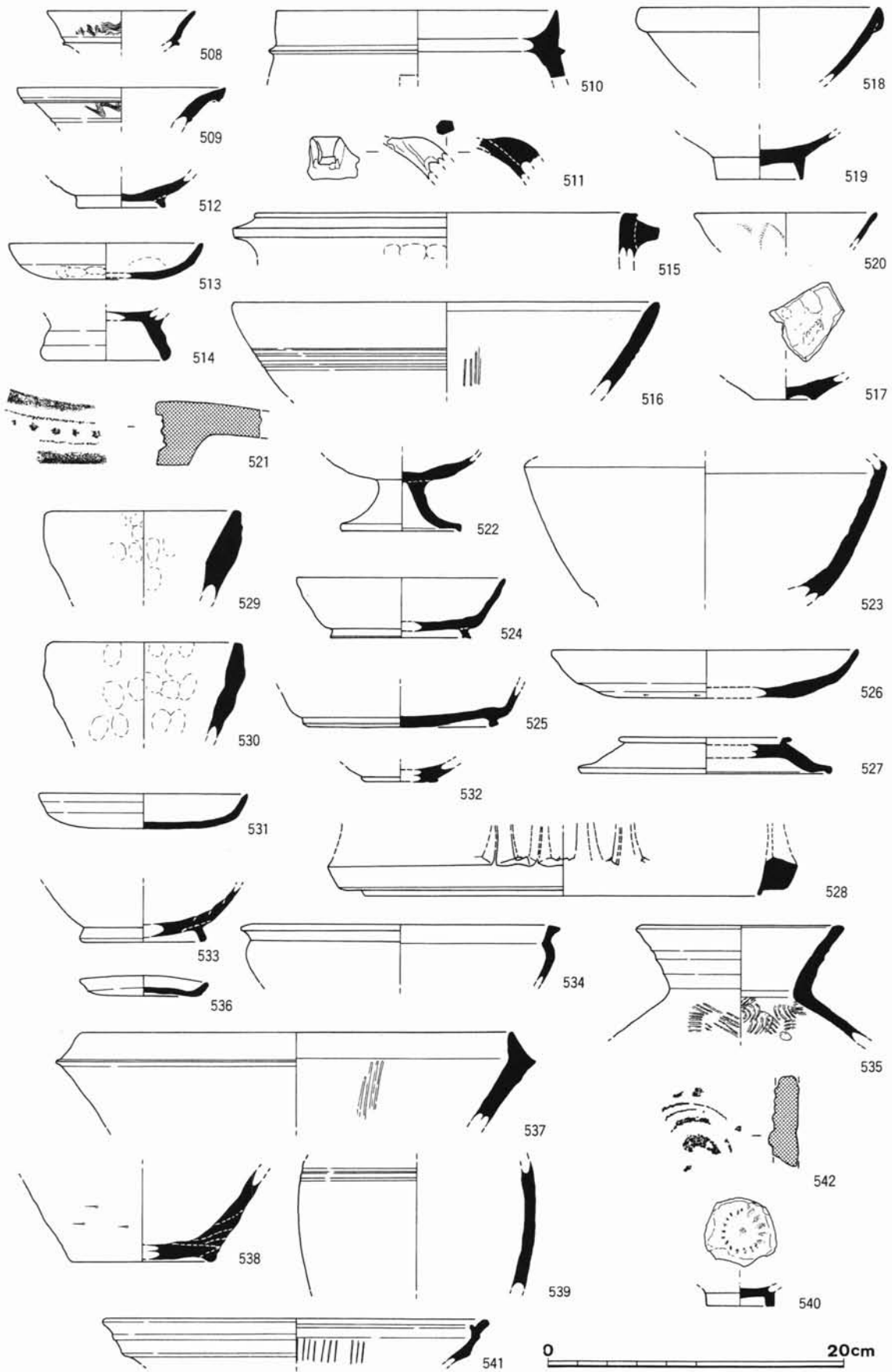
462～464は、溝S D 31出土である。瓦質羽釜(463)は、脚付きのものと思われる。462は瓦器碗、464は土師器羽釜である。

## ②第2トレンチの出土遺物(465～542)

土師器皿(465)・須恵器蓋(466)は、柵列S A 10の柱穴出土の遺物である。8世紀末～9世紀にかけてのものと思われる。須恵器杯(467)・土師器皿(468)は、柵列S A 9の柱穴出土の遺物であ

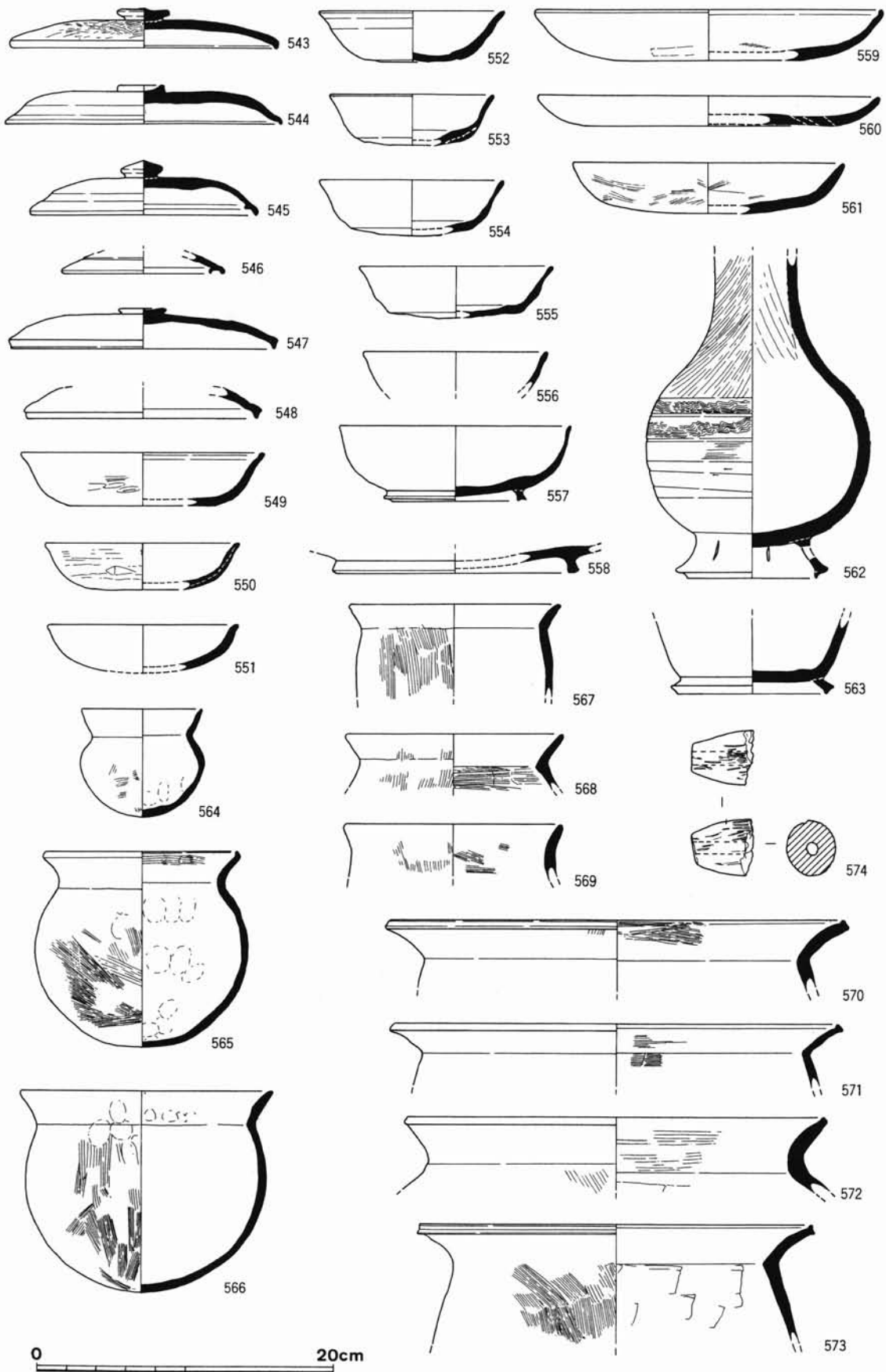


第62図 出土遺物実測図(23)



第63図 出土遺物実測図(24)





第64図 出土遺物実測図(25)

る。時期的には、柵列S A 10とほぼ同様と思われる。

470は、柱穴S P 31出土の須恵器杯、469は、柱穴S P 62出土の瓦器椀である。土師器皿(471)、須恵器鉢(472)、須恵器皿(473)は、柵列S A 273の柱穴出土遺物である。474は須恵器壺、475は灰釉陶器の把手とみられ、土坑状遺構S X 183出土である。

476～484は、土坑S K 11出土の遺物である。土師器皿(476～480)は口径8.5cm前後、土師器皿(481～483)は、口径13cm前後を測る。瓦器椀(484)は、外面にミガキがみられず、口縁端部に沈線をもたない。

土師器皿(485)・瓦器椀(486)は、井戸S E 55出土である。486は、調整は不明であるが、口縁端部に沈線をもつ。487・488は、溝S D 13出土の土師器皿と須恵器壺である。

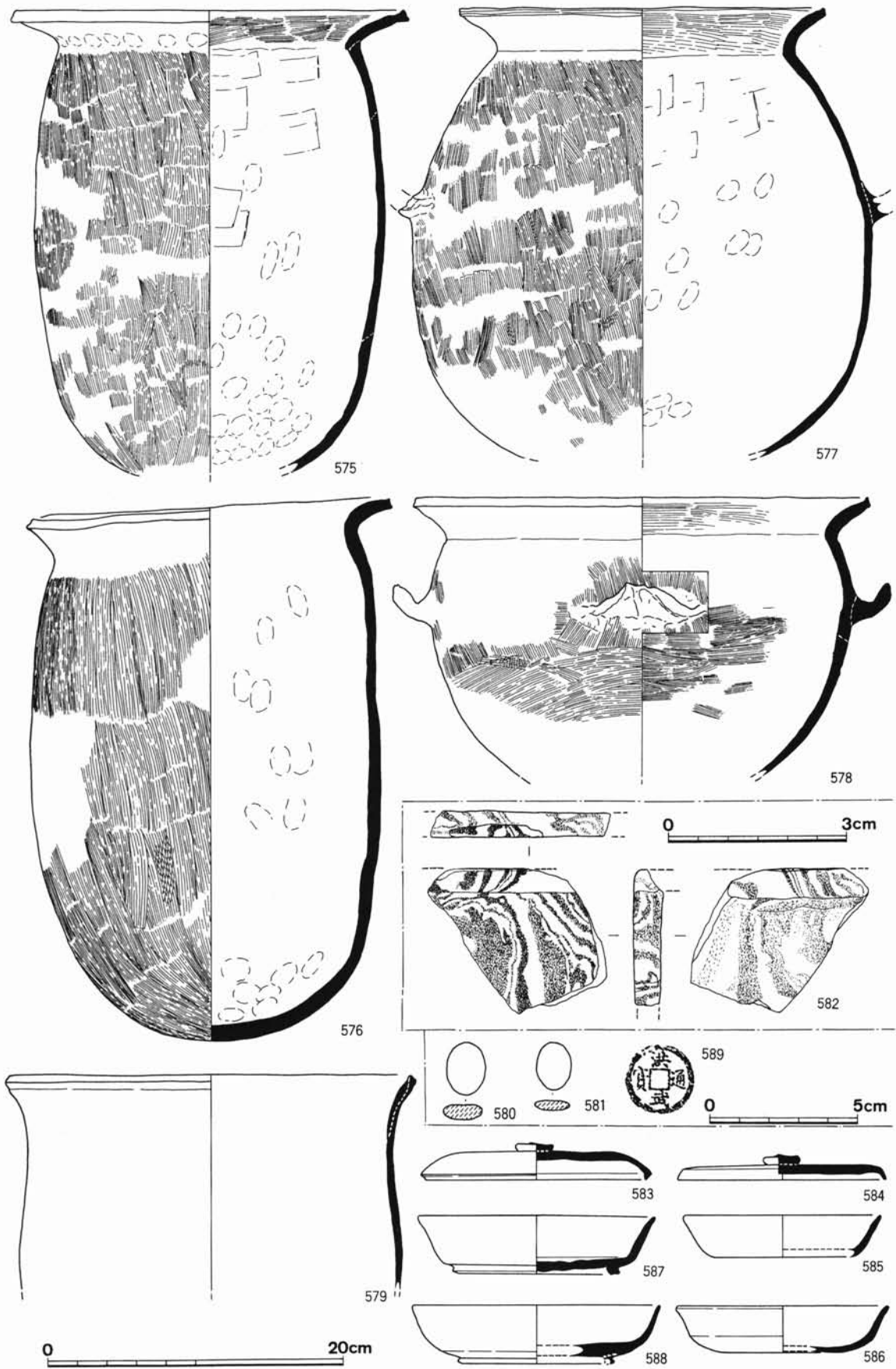
489～507は、井戸S E 17出土の遺物である。489～500は、土師器皿で、494～496のような「て」の字状口縁のものや、497のようなコースター形のものがある。瓦器椀(502)は、やや深めの椀形を呈し、内面に密なミガキ、外面にもミガキ調整がみられる。見込みにはジグザグ状のミガキがほどこされる。口縁端部に沈線をもたない。瓦器椀(503)も同様のもものとみられる。501は土師器皿、504は瓦器椀、505は須恵器壺である。木製品(506・507)は、輪切りにした細い丸太の上下を丸く削っており、木球とみられる。

508～521は、島島間の水田部分にあたる溝S D 1出土の遺物である。古墳時代から近世にかけての遺物が含まれる。510は須恵器円面硯、511は灰釉陶器の把手、518・519は白磁、520は青磁、521は連珠文軒平瓦、516は瓦質播鉢、517は肥前陶器椀である。

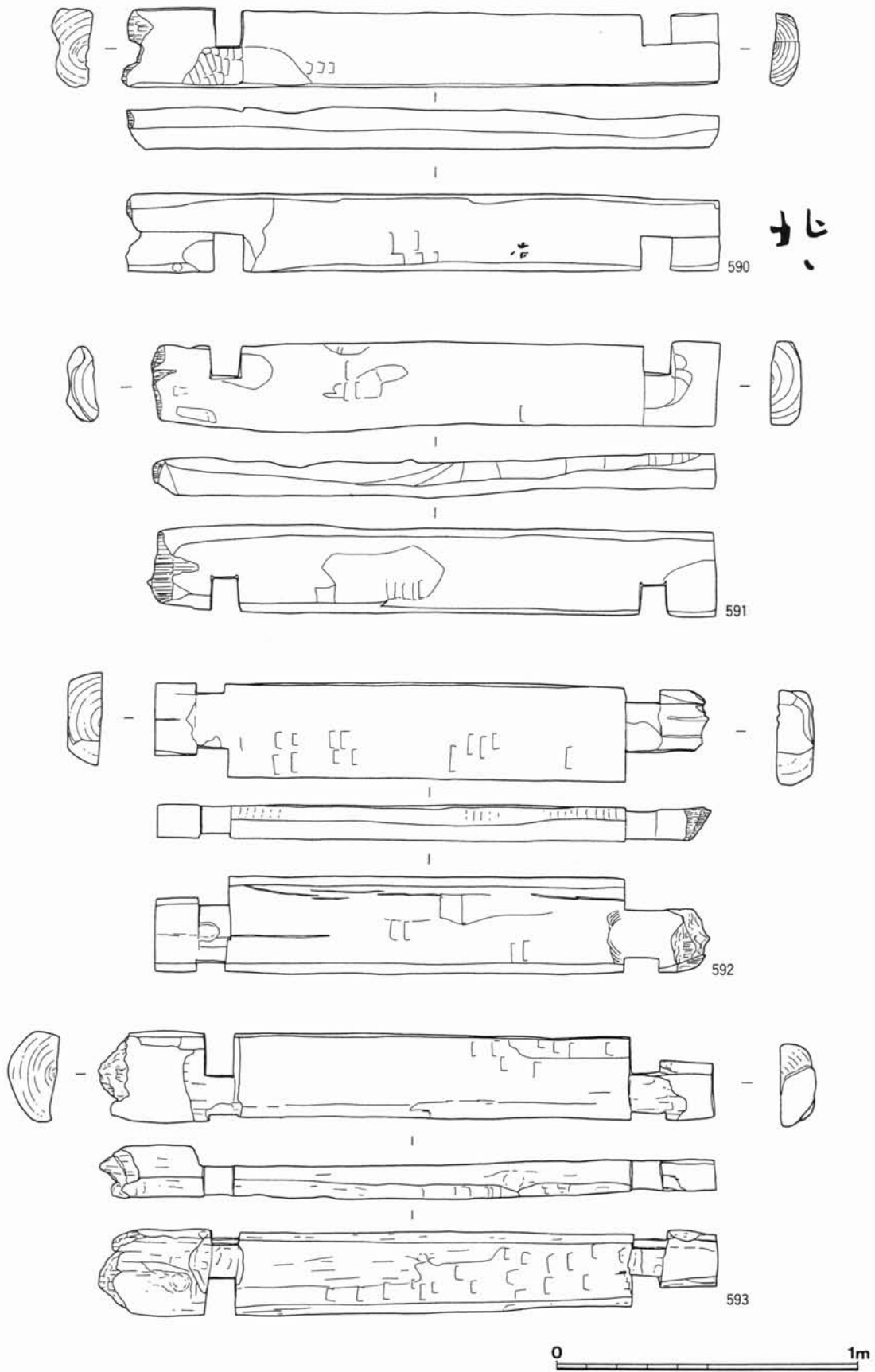
522～542は、包含層出土の遺物である。528は須恵器蹄脚円面硯、529・530は製塩土器、527は須恵器特殊蓋、535は陶器壺、537は備前陶器播鉢、539はいわゆる古瀬戸瓶、540は肥前磁器、541は美濃陶器播鉢である。

### ③第3トレンチの出土遺物(543～631)

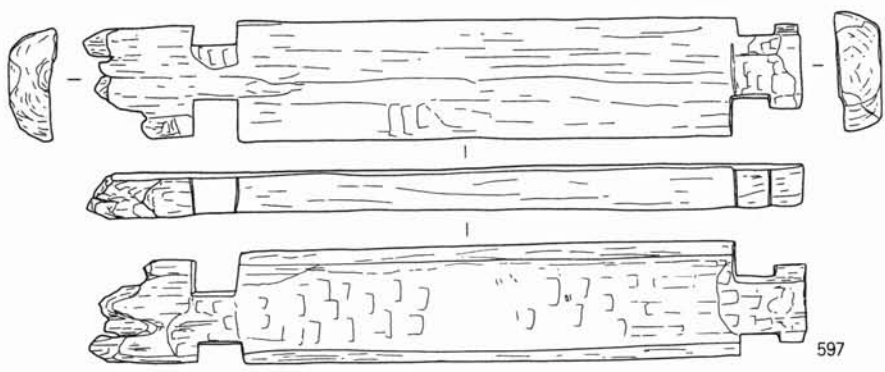
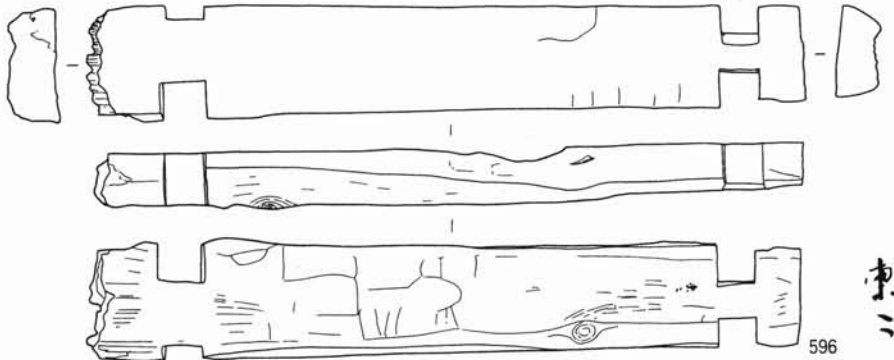
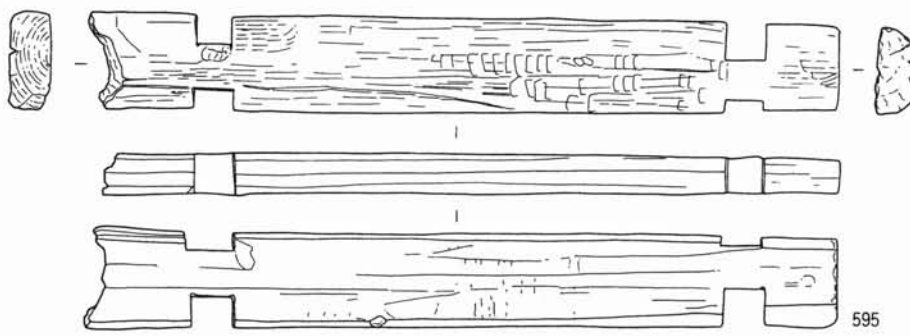
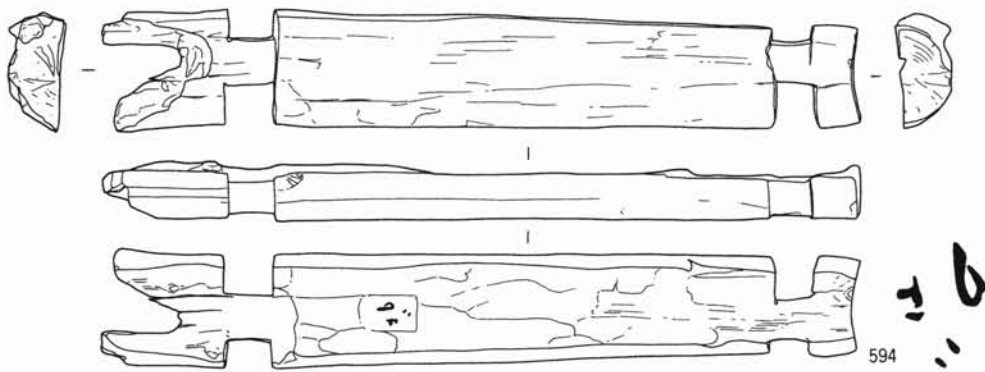
543～582は、土坑S K 1出土の遺物である。543・544は土師器蓋である。543は、扁平な宝珠ツマミをもち、ミガキ調整される。545～548は須恵器蓋である。545・546のように内面端部にかえりをもつものと、547・548のように口縁端部が垂下するものがある。549～551は土師器杯である。須恵器杯(552～555)は、高台がなく、口縁端部が外反気味である。須恵器杯(557)は、高台をもち、底部から口縁部が丸みをもって立ち上がる。須恵器(558)は、盤状のものと思われる。559～561は土師器皿である。559は、内面口縁端部に沈線をもつ。須恵器長頸壺(562)は、スリット状の透かし付の脚部を付し、体部に波状文を施す。須恵器壺(563)は、「ハ」字状に開く脚部を付す。土師器壺(564)は、小形のものである。土師器甕(565)は、丸い体部をもち、口縁端部を内側に屈曲させる。土師器甕(566)は、丸い体部をもち、口縁部が大きく開く。567～569はやや小形の土師器甕、570～573は大型の土師器甕の口縁部である。574は須恵器土錘である。575・576は、長胴の土師器甕である。577・578は、把手付の土師器甕で、577はやや下膨れの器形を呈し、578は、三角形の把手を付す。土師器(579)は甌と思われる。絞胎陶(582)は、中国唐代の製品で、白色および赤味をおびた茶褐色の粘土を練り込んだ板状の胎土を貼り合わせており、陶枕と



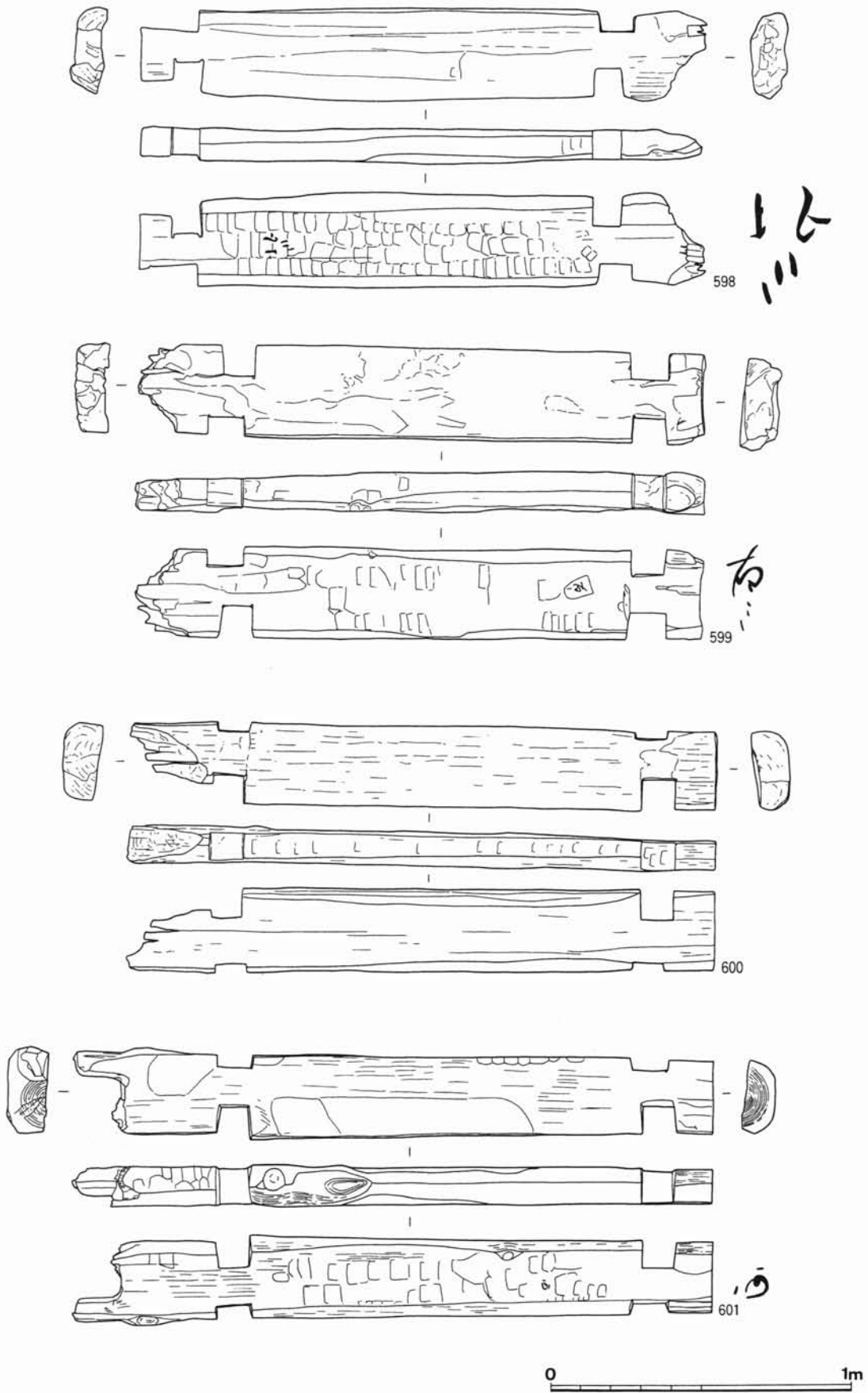
第65図 出土遺物実測図(26)



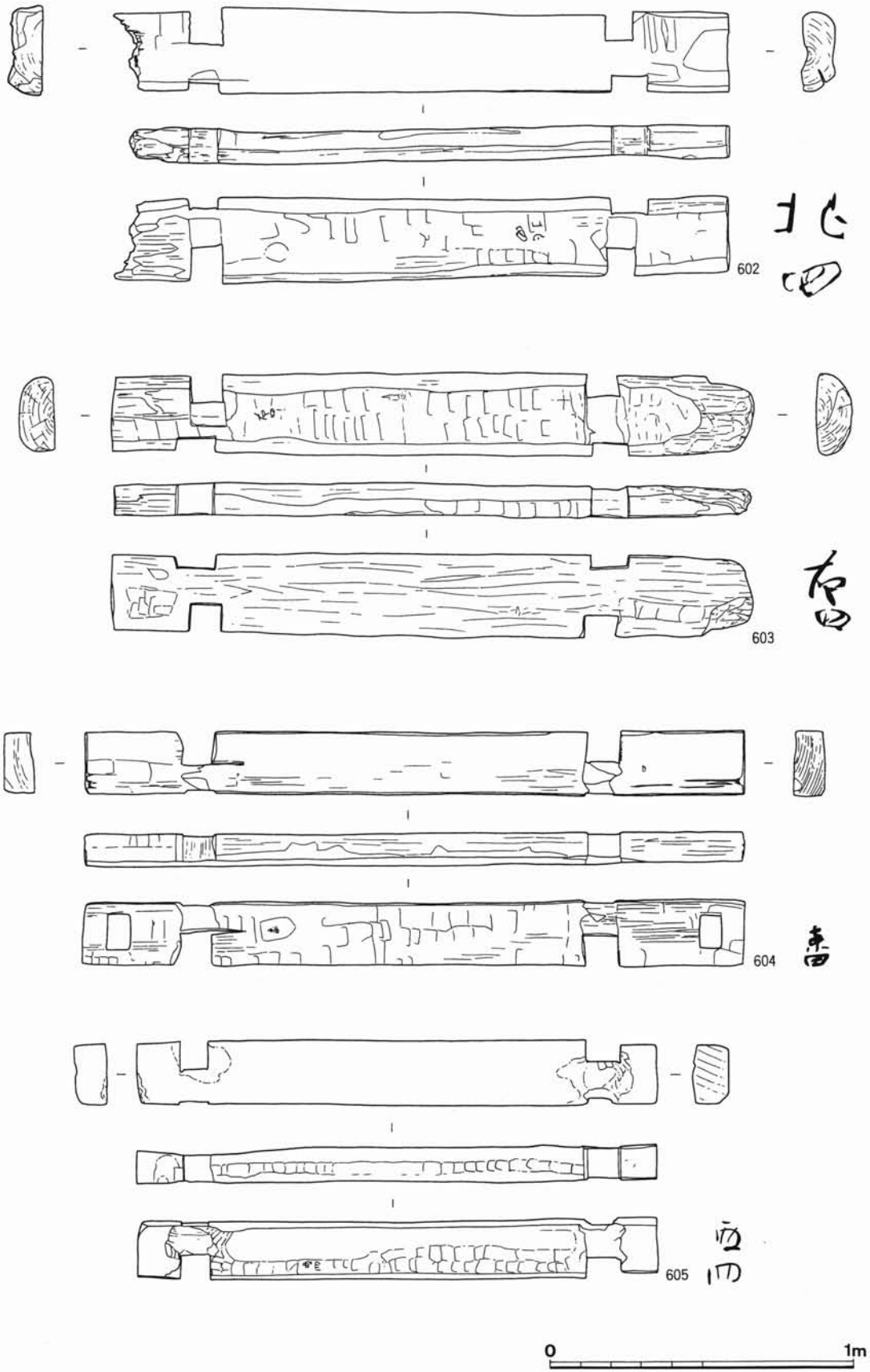
第66図 井戸枿実測図(1)



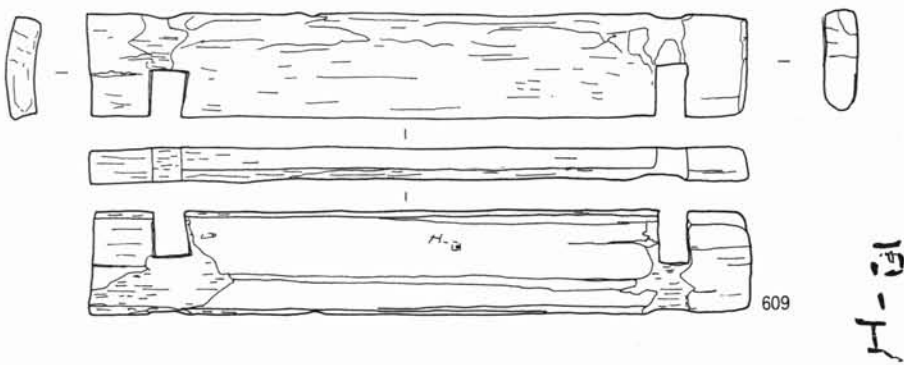
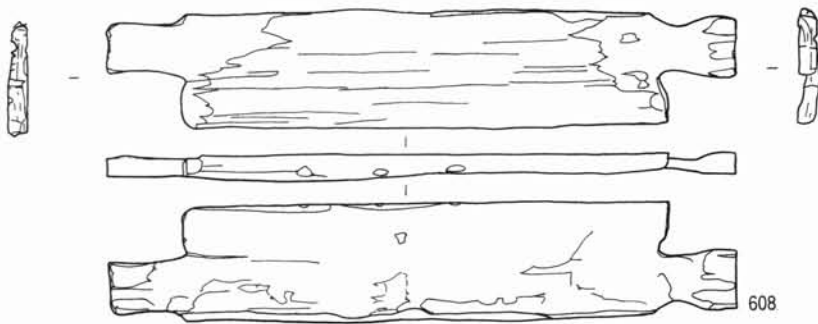
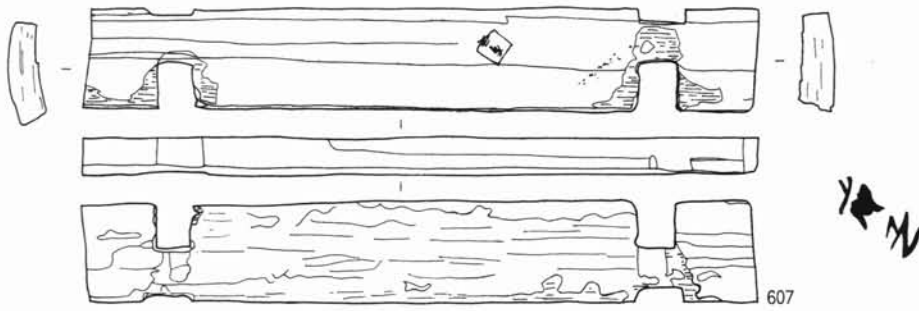
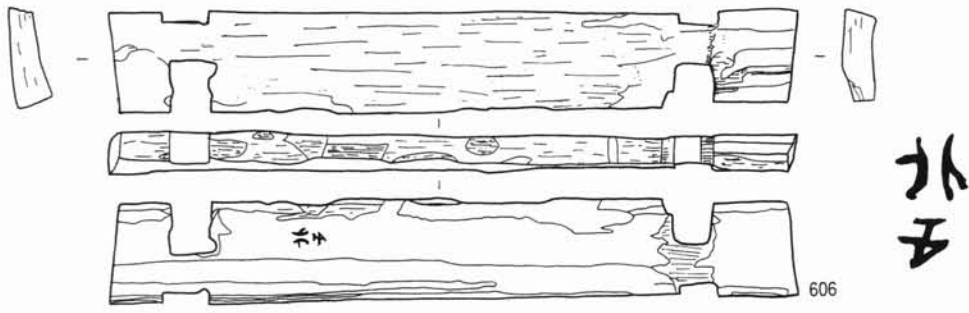
第67図 井戸柱実測図(2)



第68図 井戸杵実測図(3)

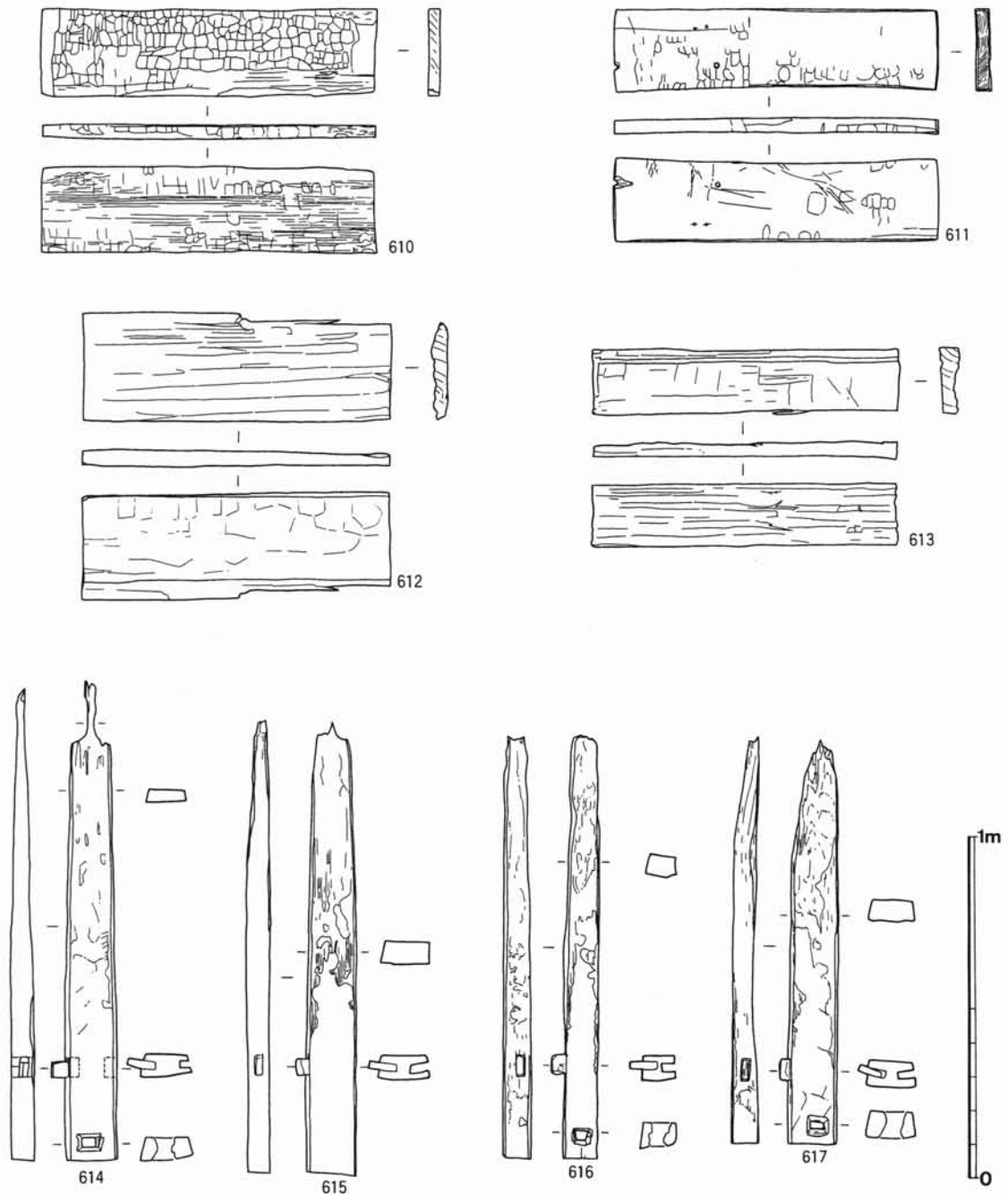


第69図 井戸杵実測図(4)



第70図 井戸杵実測図(5)

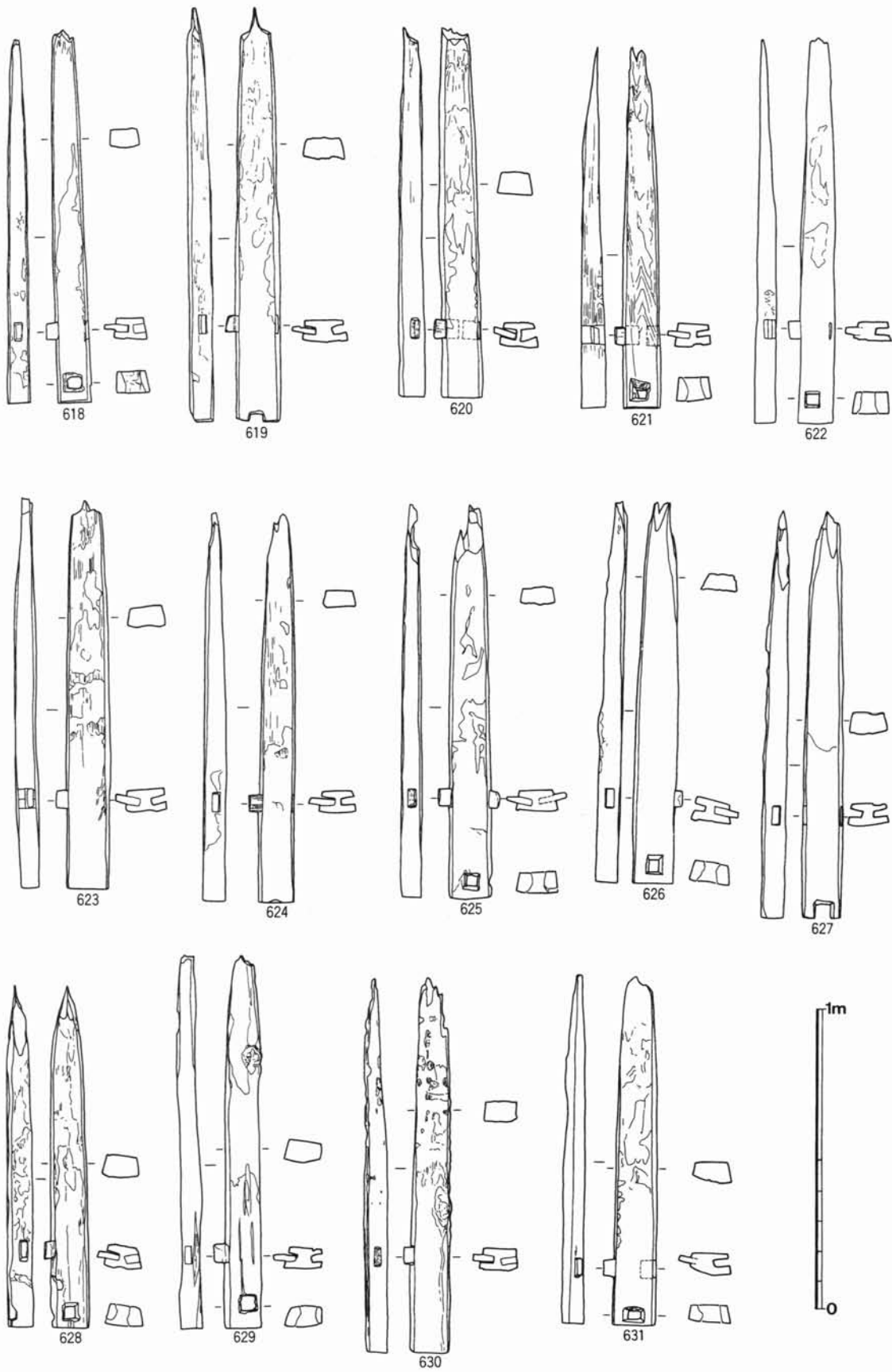




第71図 井戸枠実測図(6)

考えられる。外面に黄色味を帯びた透明釉を施し、内面は無釉である。器胎の厚さは、4～5mmを測る。貼り合わせの状況から、陶枕の側板および天板の一部とみられる。580・581は、楕円形の黒色の石で、あるいは基石と思われる。以上の遺物は、7世紀から8世紀前半頃のものと思われる。

583～588は、土坑S K 5出土の遺物である。須恵器蓋(583・584)は、宝珠つまみを付し、口縁端部が垂下するものである。須恵器杯(585～588)は、平底のものと高台を付すものがある。これらの遺物は、8世紀前半頃のものと思われる。



第72図 井戸杵実測図(7)

洪武通寶(589)は、明銭で、島島間の低地水田部である溝SD2の旧耕土層から出土した。

④第1トレンチ井戸SE117井戸枠(590～631)

590～609は、井籠組の井戸枠材である。「北三」や「南四」などの、組み立て順や枠材の位置を示す墨書が残るものがある。墨書は、井戸枠外面に記される。この材は、丸太を角柱状に粗く面取りし、それを半裁して、半裁面を内側として用いている。なお、604には柄穴があり、転用材とみられる。610～613は、井籠組井戸枠の最下段内側の補強材とみられる板材である。614～631は、井籠組井戸枠内に組まれていた円形縦板組井戸枠の一部である。縦板を別材の柄で連結する。また、下部に柄穴がある材があり、対面する井戸枠材に横木を通して補強していたものと思われる。

井戸枠材については、樹種同定を行った。井籠組井戸枠については最下段内側板材を含めて24点、円形縦板組井戸枠については縦板材2点と柄材2点である。その結果、井籠組井戸枠材では18点がヒノキ、6点がスギであり、ヒノキが多い。円形縦板組井戸枠材では板材、柄ともにスギであった。材質的にはスギよりもヒノキのほうが優れており、このような使用木材の違いは、あるいは時期差をあらわすものとも考えられる。

(引原茂治)

4. 補遺(内里八丁遺跡第16・17次調査)

内里八丁遺跡第16・17次調査は、第16次調査を平成12年12月20日～平成13年2月27日にかけて実施し、第17次調査を平成13年4月18日～9月27日にかけて実施した。調査の成果については、その概略を『京都府遺跡調査概報』第103冊に掲載した。この時点以降、遺物整理作業の進展に伴い、この遺跡を評価する上で重要な成果を得るに至った。そのため、今回は、17B地区第3遺構面で検出した遺構・遺物を中心に報告することとする。

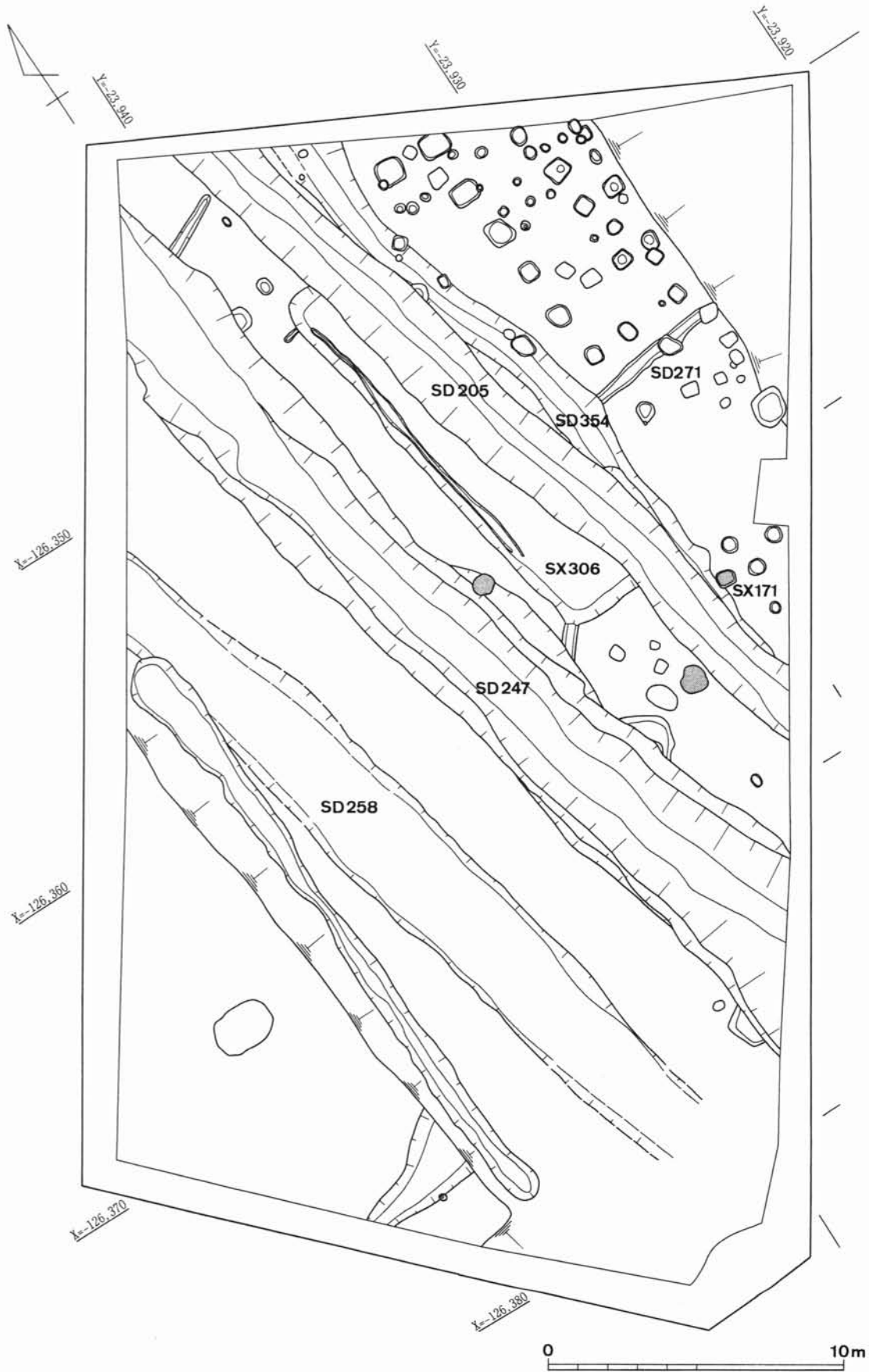
(1)検出遺構(第73図)

第3遺構面検出の遺構は、飛鳥～平安時代に属し、溝・土坑・掘立柱建物跡・竪穴式住居跡・焼土坑などがある。各遺構ごとに概観する。

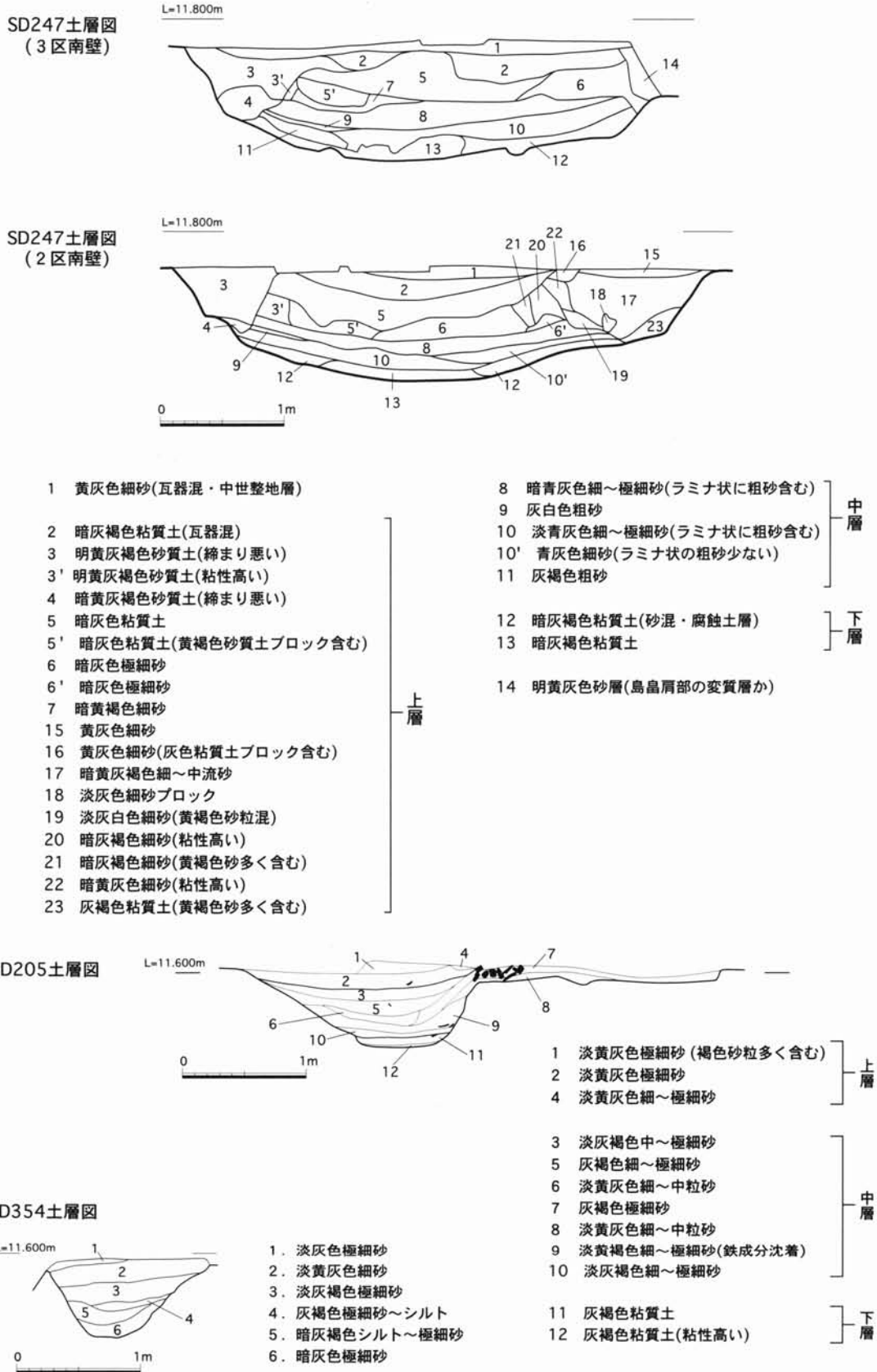
①溝

溝SD247 幅約5m、深さ1.1mを測る素掘り溝である。全長30mを検出した。断面は、逆台形を呈する。位置関係や埋土の状況から、『京都府遺跡調査報告書 第30冊(内里八丁遺跡Ⅱ)』(2001)における溝SD97218の延長部に相当するものである。埋土は大別して上・中・下層の3層に分離でき、最下層部では有機質腐蝕土層と考えられる暗灰色粘質土が堆積していた。なお、東西両肩部に小溝状の土色変化を確認したが、再掘削された溝などではなく、埋没後の環境の差などにより土質の変化がおこったもののご教示を寒川旭氏より頂いた。

なお、遺物の取り上げに際しては、南から1～5区の小地区に分割し、各々の地区で、上層・中層・下層の3層に分離して取り上げを実施した。また、1区西肩部中層(下層の上面)では、第75図に示すとおり完形個体がまとまって出土しており、溝機能時に一括投棄された一群の土器で



第73図 第17次調査B地区第3遺構面遺構平面図



第74図 各溝土層断面図

あると判断される。各層位から出土する遺物は、上層が瓦器を包含し、中層には奈良から平安時代の土器とともに黒色土器、施釉陶器が認められる。下層は奈良時代から平安時代を中心とするが、層位的に安定した資料ではなく、下層からも新相を示す土器群が出土している。瓦器は上層にのみ含まれているため、最終的な溝の埋没は中世であると考えられる。

溝S D 205 幅2.5m・深さ0.7mを測る素掘り溝である。全長27.5mを検出した。断面は、逆台形を呈する。他の遺構との切り合い関係は、溝S D 354・土坑S X 306を切る。位置関係・溝の規模、埋土の状況から過去の調査における溝S D 97217の北延長部に相当する。埋土は、上・中・下層の3層に大別され、中層を主体に須恵器・土師器・施釉陶器・製塩土器・瓦などが出土している。また、溝東肩部に遺物が集中する傾向がある。

溝S D 345 幅1.3m・深さ0.5mを測る素掘り溝である。全長24mを検出した。断面は、逆台形を呈する。溝S D 205に切られる。位置関係からみて溝S D 205の前身である可能性がある。

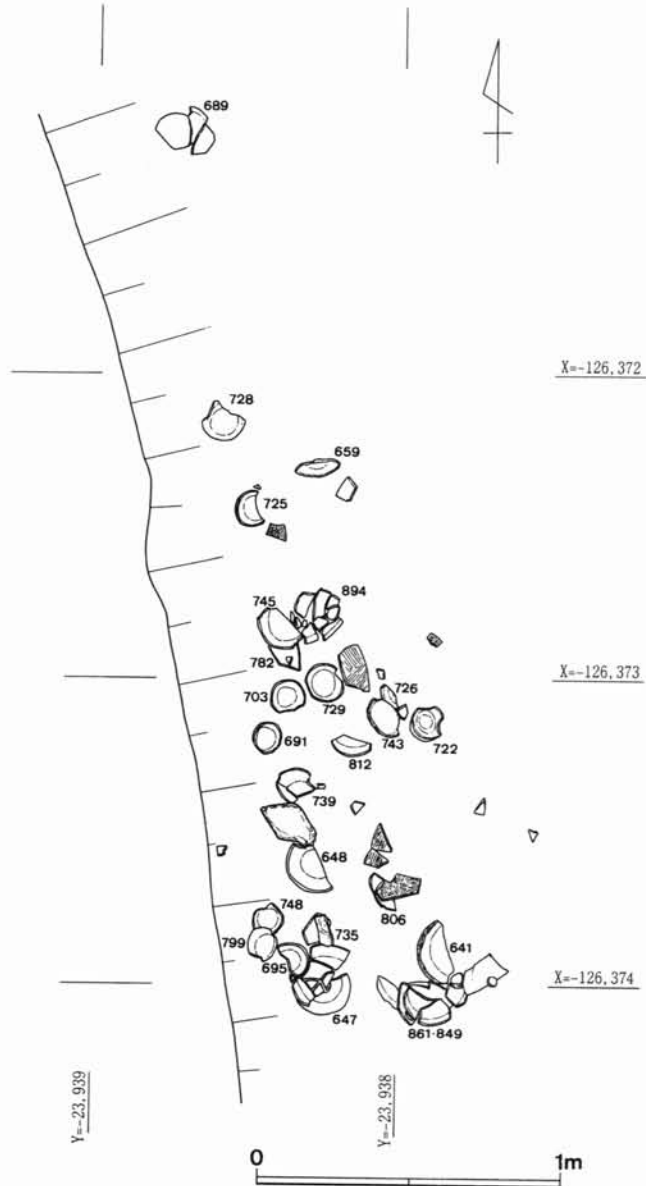
溝S D 258 鳥島間の底面で検出した幅3m・検出面からの深さ0.1mを測る素掘り溝である。当初、報告書Ⅱにおける溝S D 97219の延長部と想定したが、出土遺物や層位的な検討を行った結果、鳥島底面から掘り込まれる中世段階の遺構の可能性が高いものと判断した。

## ②土坑

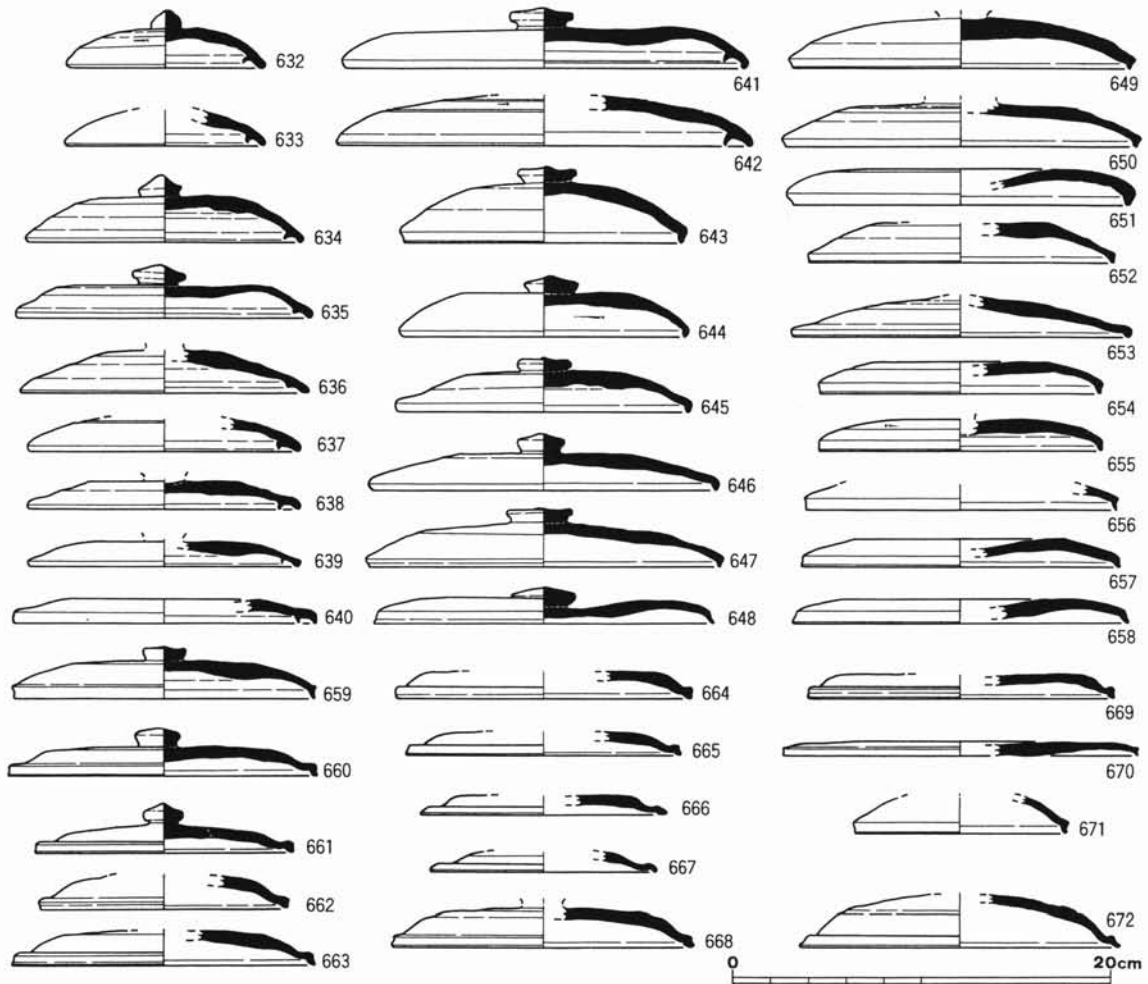
土坑S X 171(第73図) 後述する掘立柱建物跡群の南で検出した方形掘形をもつ焼土坑である。埋土には焼土塊や炭などがみられ、部分的に被熱し赤変した部分も認められた。

## ③掘立柱建物跡群

溝S D 205の北東で検出された柱穴群を建物群として認識する。柱穴は一辺50cm前後の方形プランのものを主体とする。上層鳥島の攪乱により個々の建物として明確には復原し得なかった。また、柱穴群の南で検出された東西方向の溝S D 271は建物群の区画溝の可能性が高い。



第75図 溝S D 247遺物出土状況図



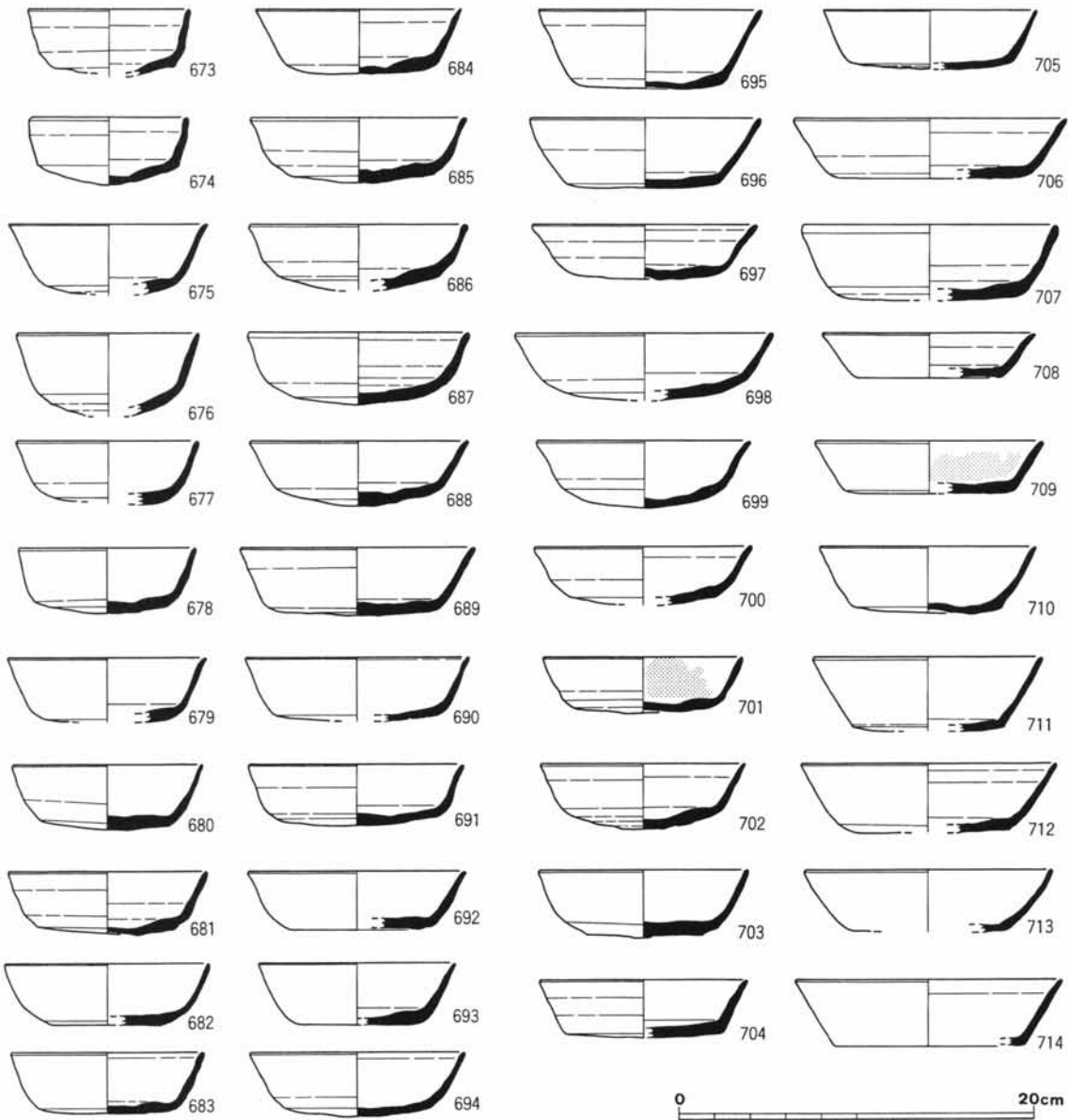
第76図 溝 S D 247出土遺物実測図(1)

④焼土坑群(第73図網かけ部)

埋土に炭・焼土を含む土坑である。2基を検出した。径60~90cm前後の不整円形を呈する。壁面が焼けているものではなく、屋外炉などの機能が想定される。

(2)出土遺物

溝 S D 247出土遺物(第76~87図) 溝 S D 24の出土遺物には瓦器・須恵器・土師器・黒色土器・無釉陶器・灰釉陶器・緑釉陶器・鞆羽口・硯・土馬・製塩土器・土錘・銭貨がある。層位的に取り上げを実施したが、出土遺物整理の結果、新相を呈する土師器碗などが下層から出土しているため安定した層位資料ではないものと考えられる。そのため、一定の量的資料を提示し、この溝の時期を考える基礎的な資料としたい。また、上層出土遺物に関しては提示していないが瓦器が含まれる。632~672は須恵器蓋である。大別して、返りをもつもの(632~642)、笠形天井から垂直に垂下する口縁端部をもつもの(643~659)、口縁部に水平にのびる面を作り出し端部を下方に折り曲げるもの(660~669)の3タイプがある。以上のほかに扁平な皿状のもの(670)、高い天井部を有するもの(671・672)がある。673~756は須恵器杯である。高台をもたないもの(673~732)と高台を有するもの(739~756)の2者が認められる。また、前者には平底で口縁部をやや内湾気味に仕上げる碗形状のもの(715~737)が多数含まれる。このタイプのものには漆が付着する



第77図 溝S D247出土遺物実測図(2)

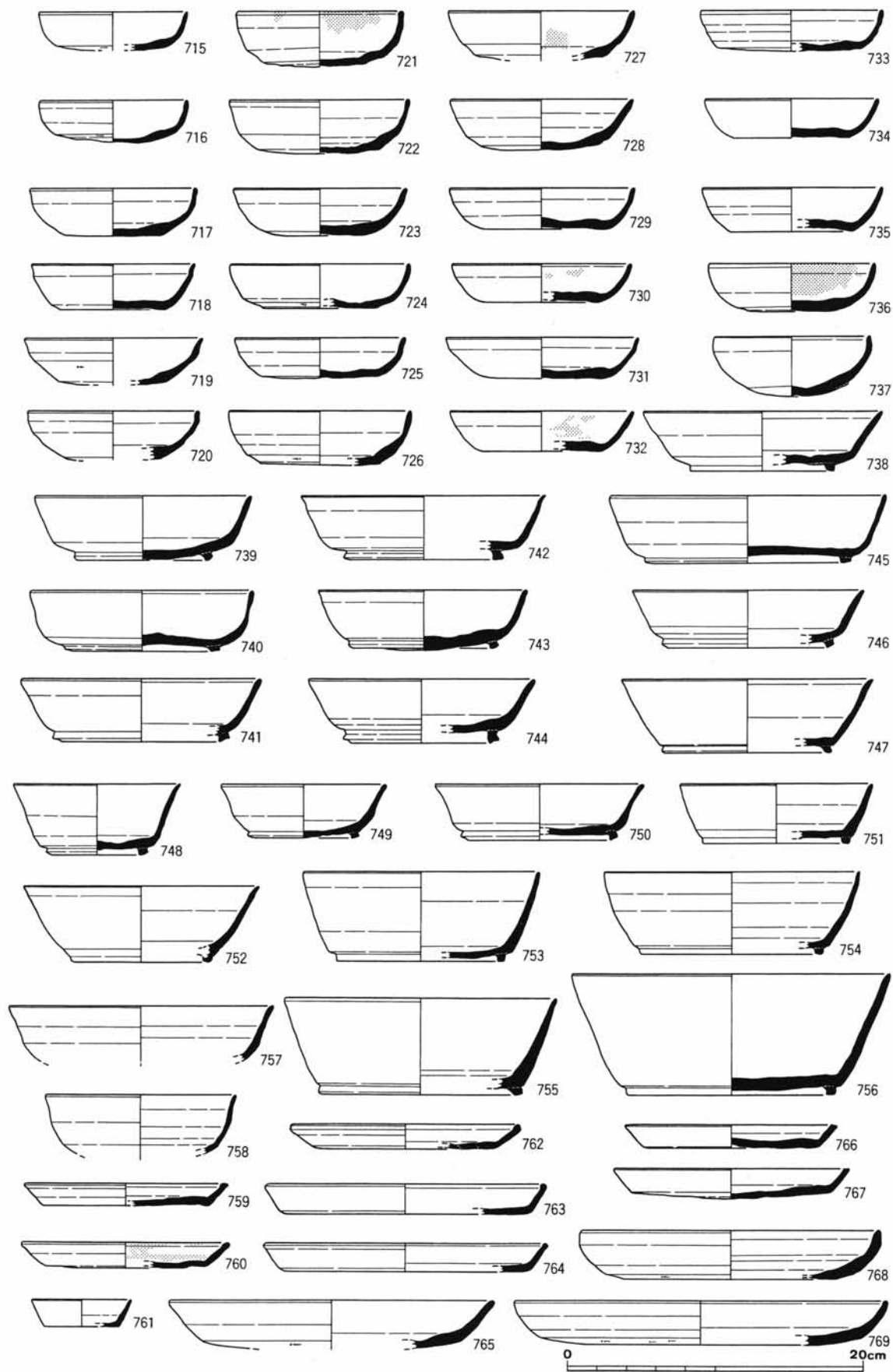
個体が多くみられ、漆のパレットとして使用されたものと考えられる。

757・758は須恵器碗である。量的には少なく、高台を有するものと推測される。759～769は須恵器皿である。外側面を直線的に仕上げるもの(759～767)と、内湾する碗状に仕上げるもの(768・769)に大別される。前者は口縁の形状から口縁端面を内側に肥厚させるものと、面をもたして仕上げるもの、丸く収めるものの3者に細分される。

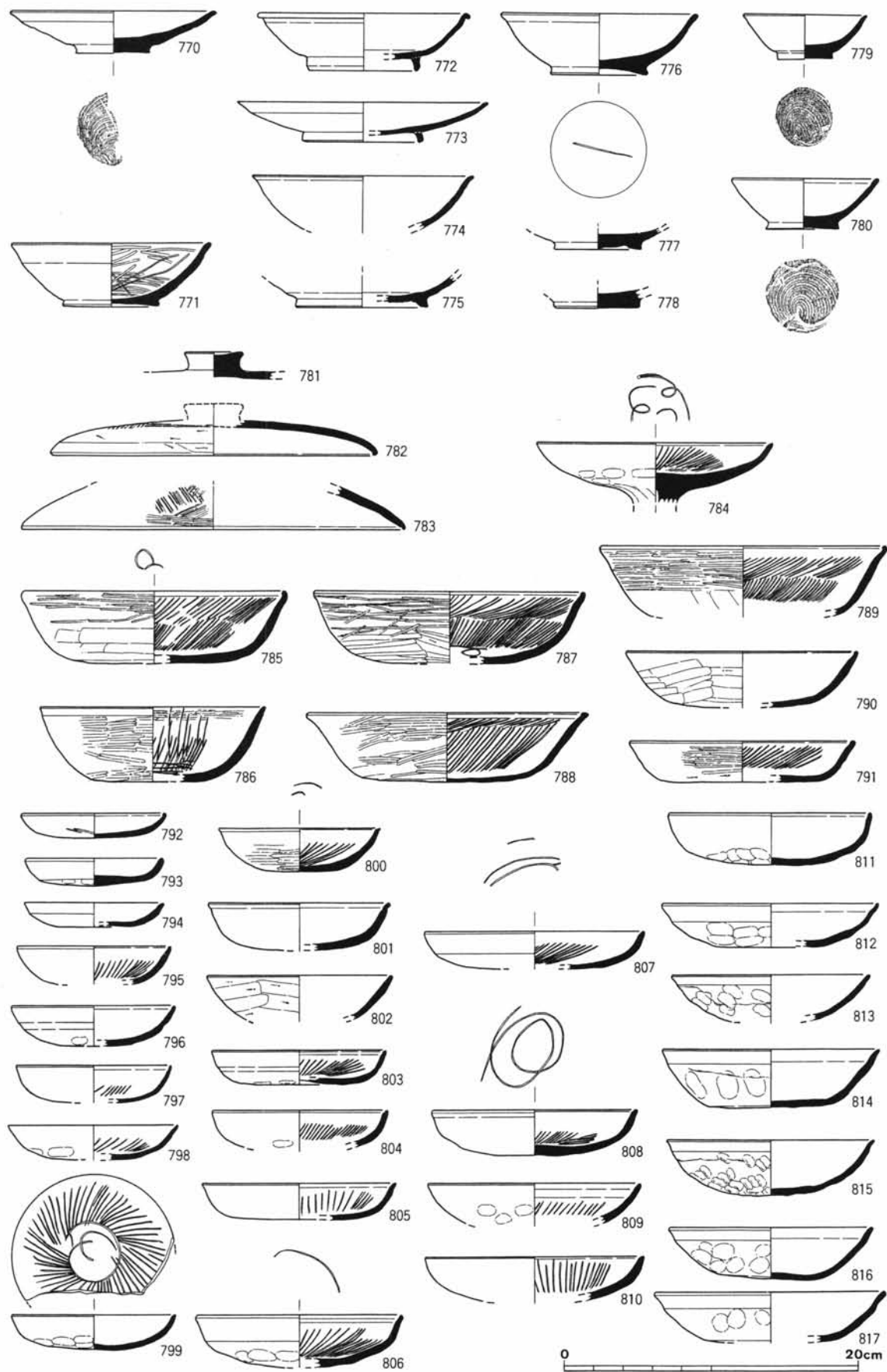
770・771は無釉陶器である。770は糸切り底をもつ皿。771は平高台の碗である。771は内面にいねいなミガキが認められる。772～775は灰釉陶器である。器種には皿・碗があり、いずれも輪高台をもつ。776～780は緑釉陶器碗である。いずれも平高台であり、776は底部外面にヘラ記号が認められる。779・780は小型の碗であり、底部外面に糸切り痕が認められる。

781～783は土師器蓋である。781は扁平なつまみをもつ。782・783は笠形天井を呈する。784は土師器高杯である。浅い碗状の杯部をもつ。杯部内面には螺旋状暗文と放射状暗文が施される。

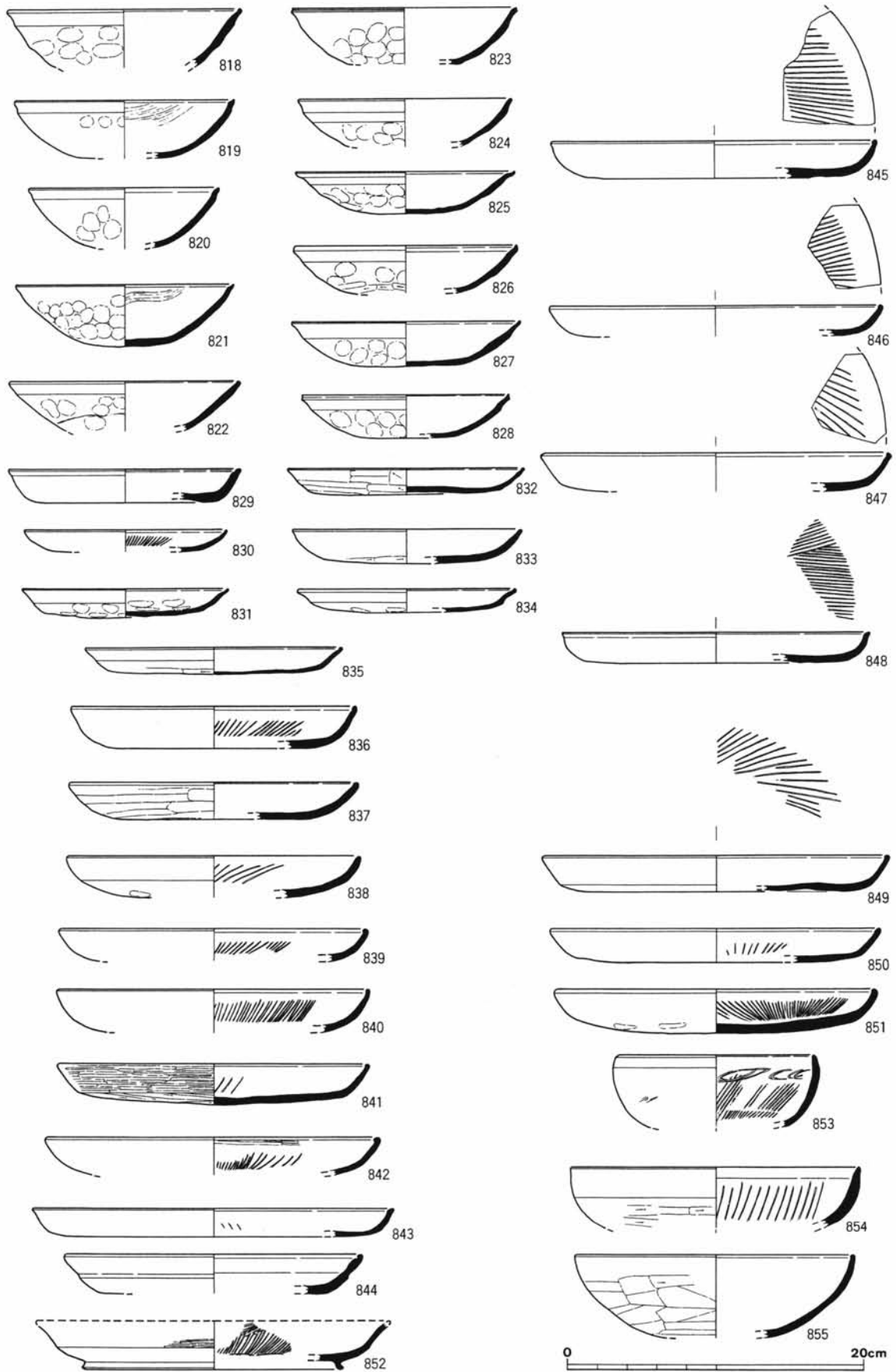




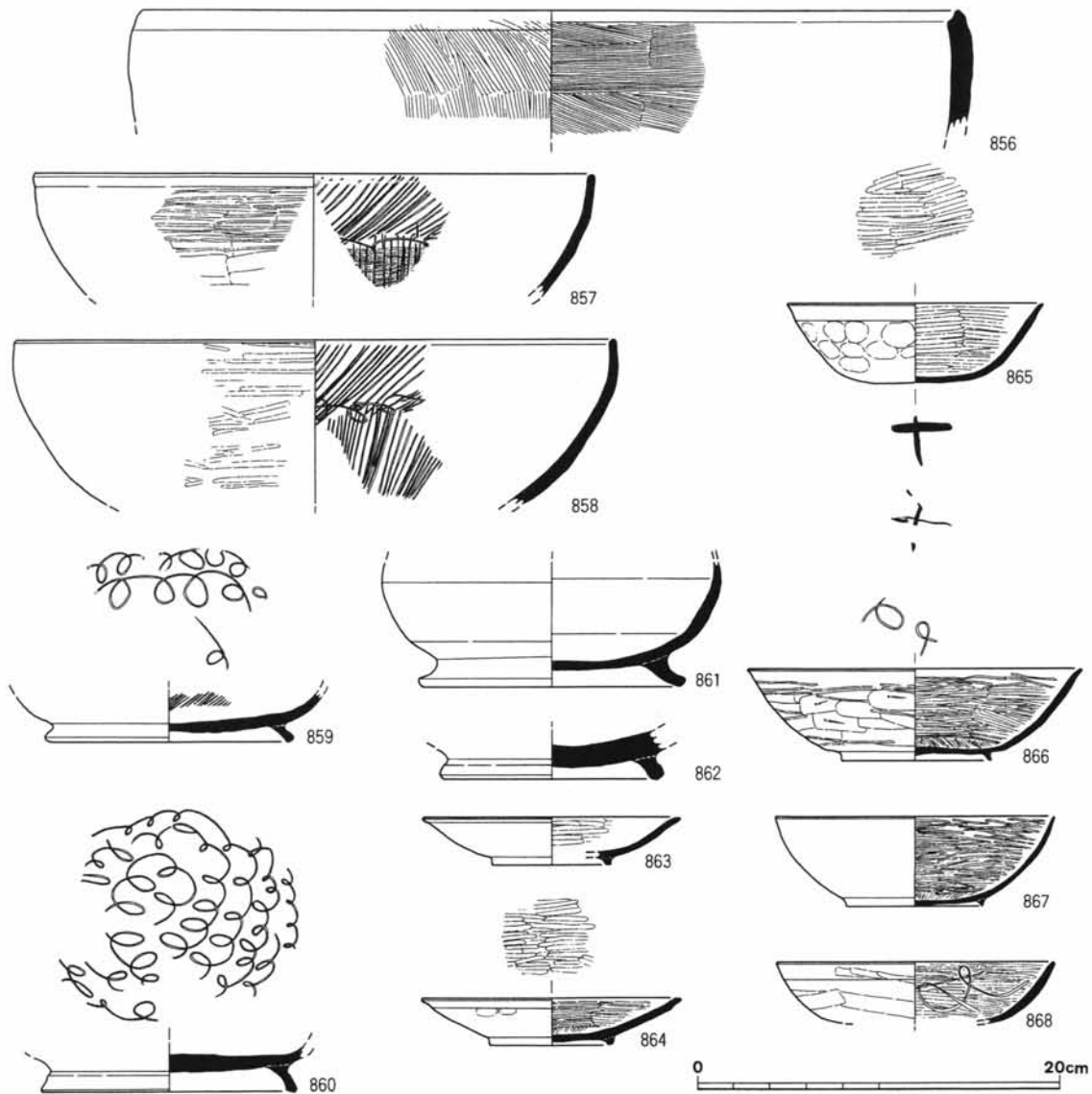
第78図 溝 S D247出土遺物実測図(3)



第79図 溝 S D247出土遺物実測図(4)



第80図 溝 S D 247出土遺物実測図(5)

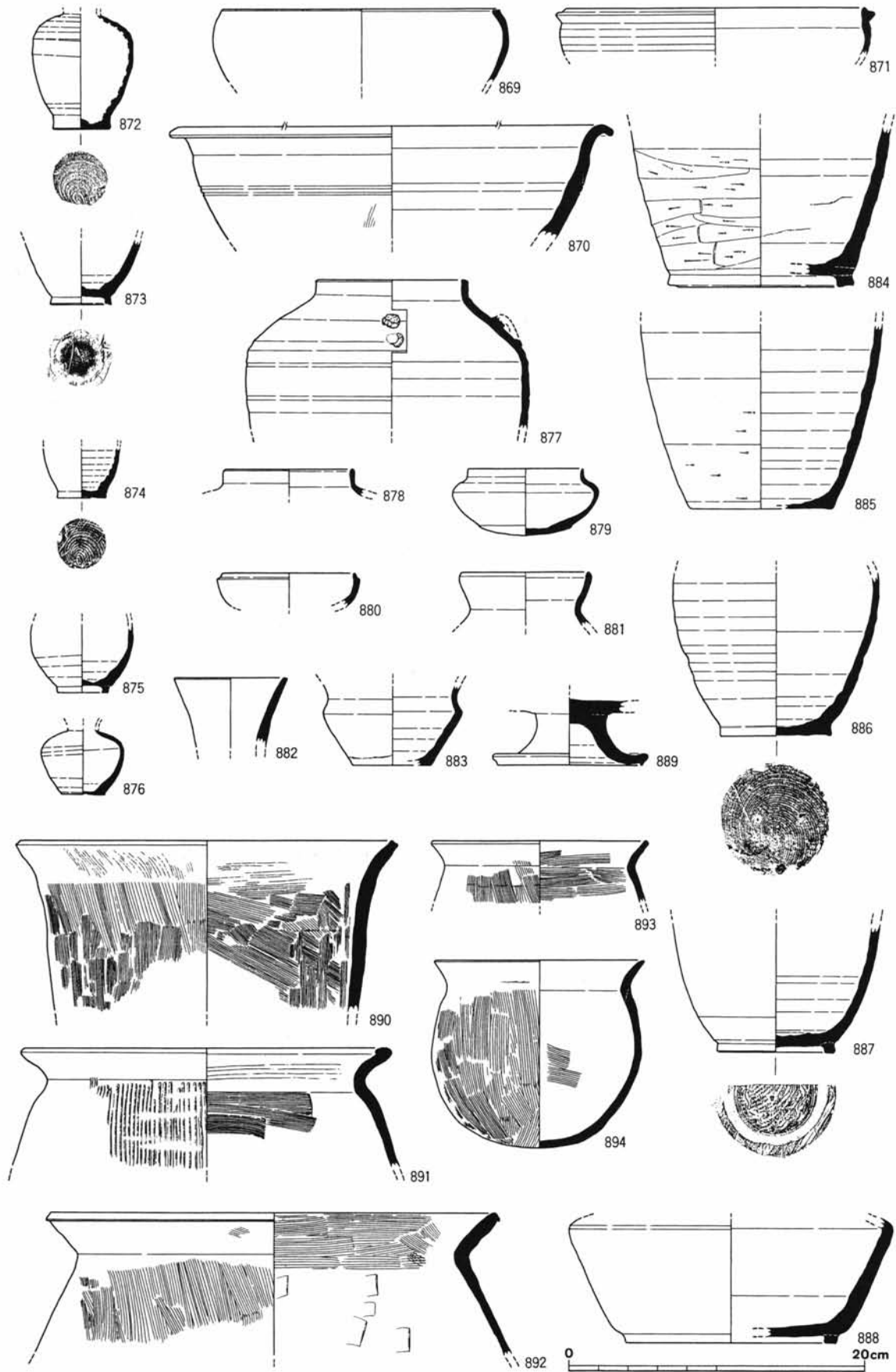


第81図 溝S D 247出土遺物実測図(6)

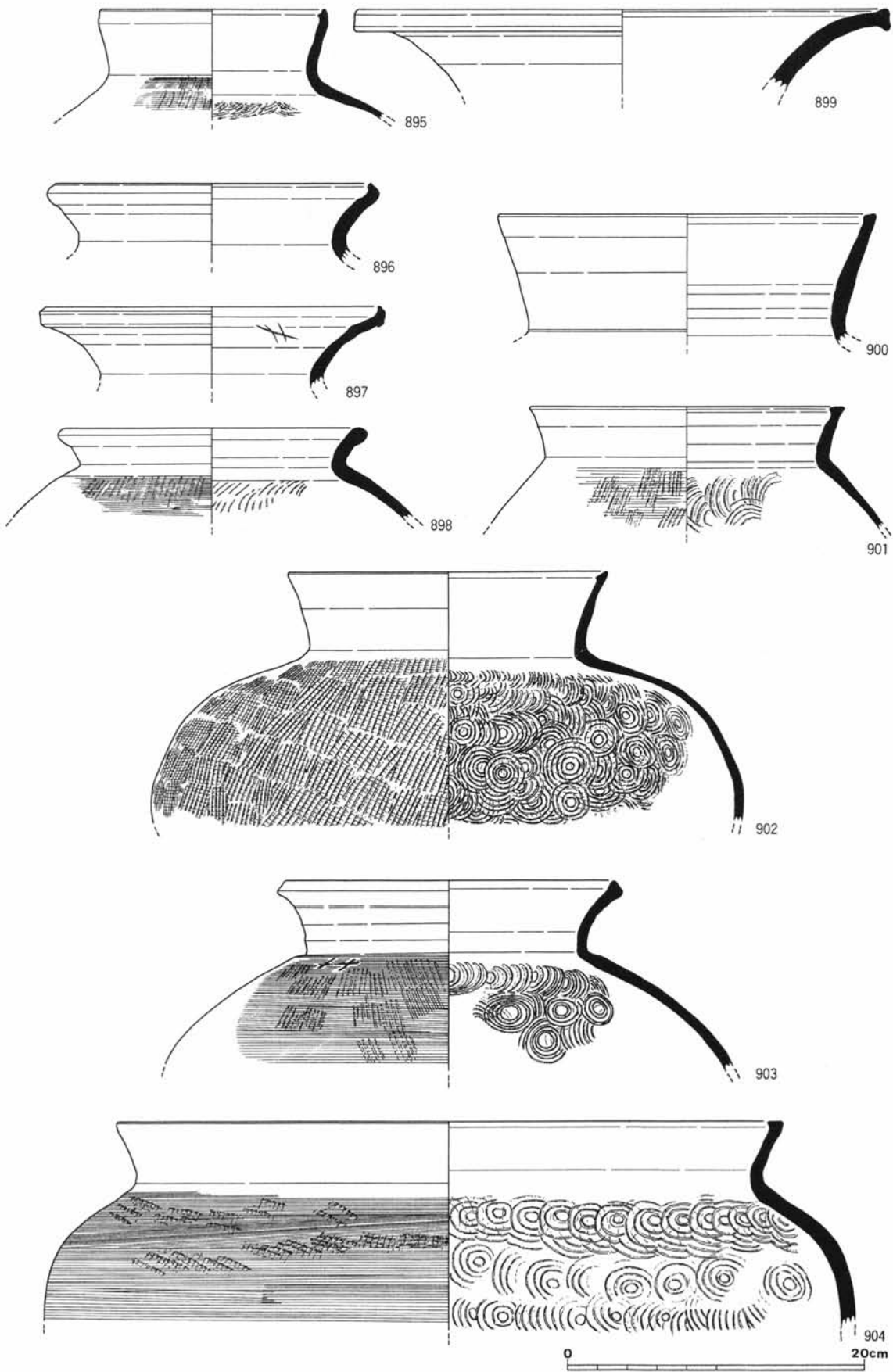
785～791は土師器杯である。内面に暗文を施し、外面はミガキにより調整するもの(785～789・791)と外面ケズリのみで調整し、暗文をもたないもの(790)が認められる。

792～828は土師器碗である。内面に基本的に暗文を施す精製品(792～800・803～810)、外面をケズリで仕上げるもの(802)、体部外面にユビオサエの痕跡を顕著に留め、口縁部は横方向のナデによりやや外反気味に仕上げるもの(812～828)が存在する。829～852は土師器皿である。内面に放射状暗文を施すものが多い。口縁端部は内面に肥厚させるもの、丸く収めるもののほか、外方にのばしてから内湾気味に仕上げる個体がある。また、高台をもつもの(852)も少量ながら確認できる。853～858は土師器鉢とした。暗文を施す精製品(853・854・857・858)と暗文をもたないもの(855・856)がある。855は外面をヘラケズリで調整する。856は内外面ハケにより調整する大型品である。859～862は脚台をもつ土師器である。暗文を施すもの(859・860)と施さないもの(861・862)がある。いずれも赤褐色の色調を呈する。

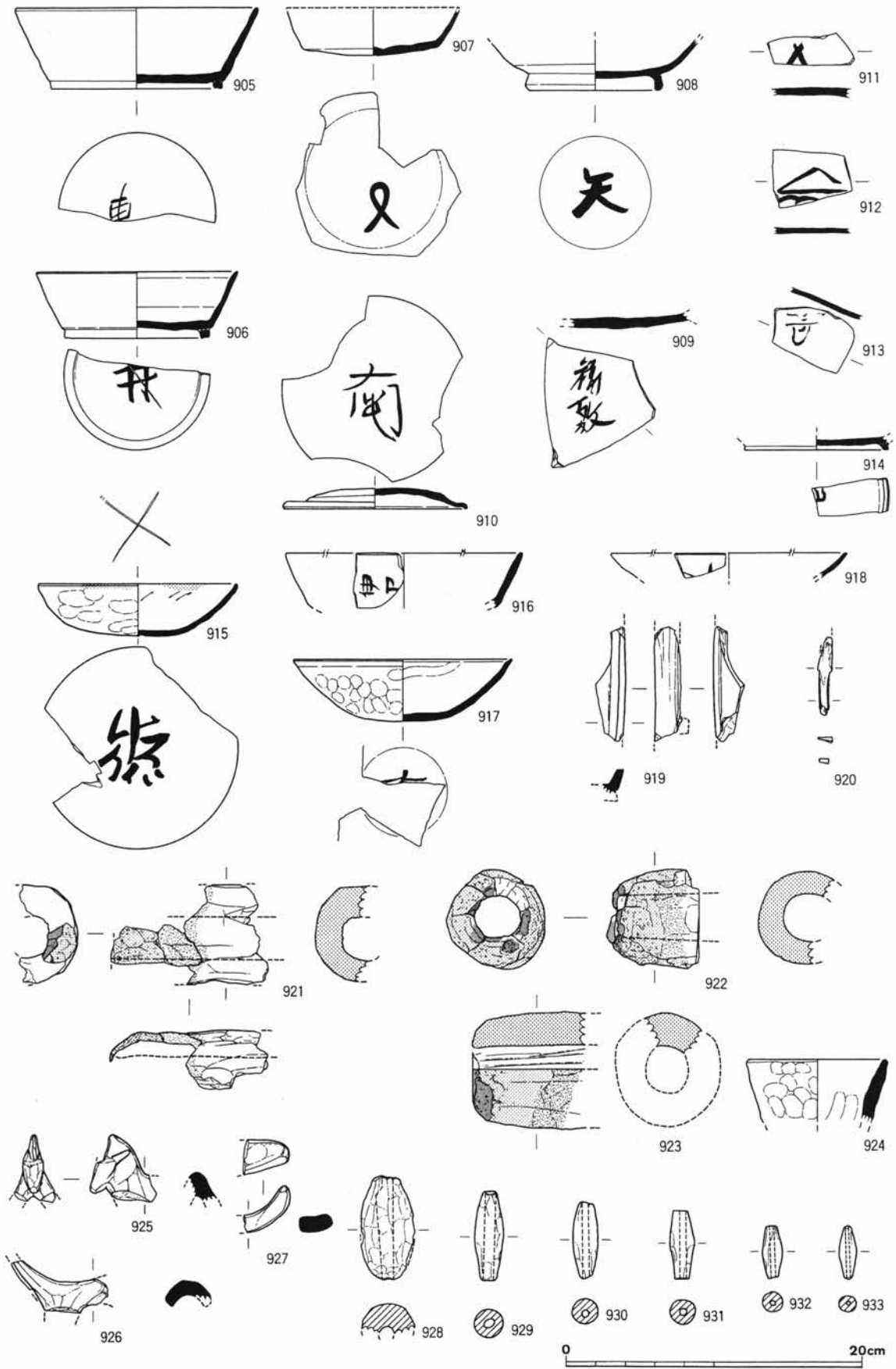
863・864は黒色土器皿である。いずれも黒色土器A類であり、輪高台をもつ。865～868は黒色



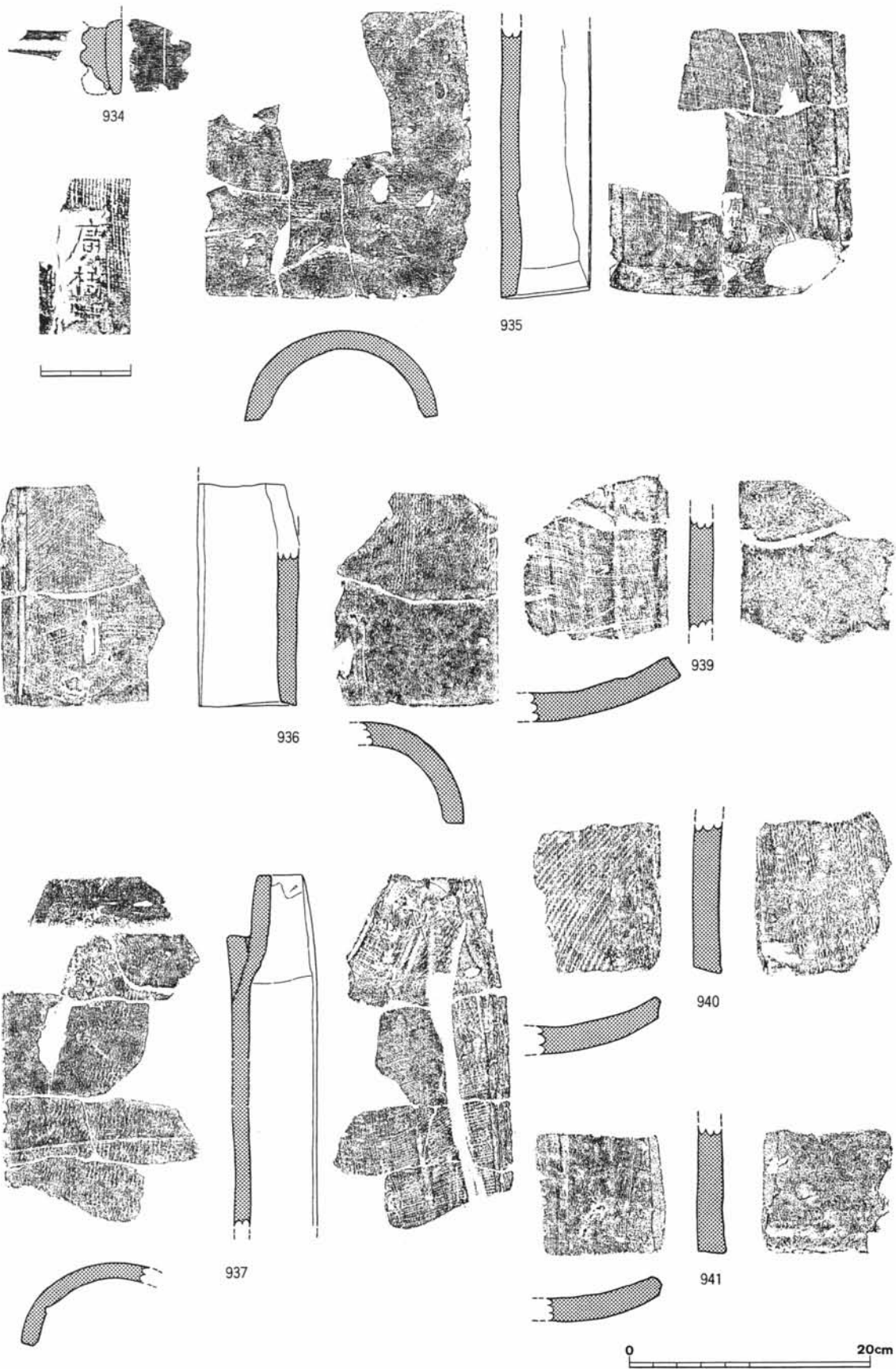
第82図 溝 S D247出土遺物実測図(7)



第83図 溝S D247出土遺物実測図(8)

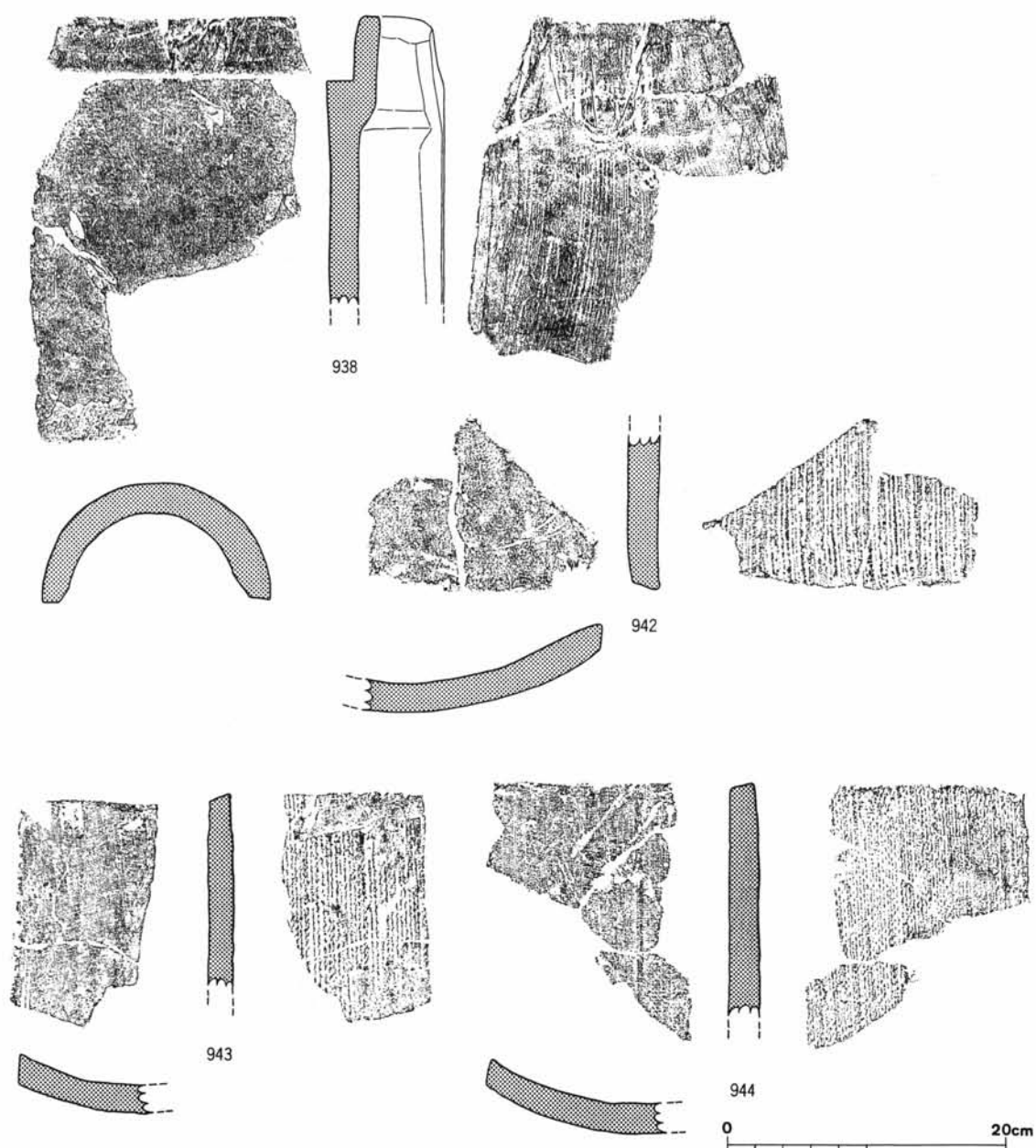


第84図 溝S D247出土遺物実測図(9)



第85図 溝 S D 247出土遺物実測図(10)





第86図 溝S D 247出土遺物実測図(11)

土器碗である。内面のみ黒色処理を施すA類のみが認められる。865は底面に墨書が確認される。

869～871は須恵器鉢である。いずれも大型品であり口縁形態にバリエーションが認められる。872～888は須恵器壺である。小型品のいわゆる瓶子(872～876)、短頸壺(877～880)、長頸壺(882)、広口壺(881・883)、大型品(884～888)の各種が認められる。なかでも887は底部糸切り後輪高台を付し、底面にはヘラ状工具により花卉状の線刻を施している。888は平瓶の可能性が考えられる。889は須恵器高杯である。スカシをもたない低脚に類するものである。

890～894は土師器甕である。890は体部最大径が口径を下回っており甕の可能性はある。いずれも調整はハケが主体であるが、891は体部外面をタタキにより整形する。895～904は須恵器甕である。口縁が直立気味のもの(895・900～903)と短く外反するもの(896～898)、大きく広がるもの(899)がある。900は体部最大系に比して口径が大きい。

第71図には墨書土器を一括して掲載した。905～912・914・916は須恵器、913・915・917・918は土師器である。905は「曹」、907は「メ」状の記号文、906は「井」、908は「矢」をそれぞれ杯外底面に記す。910は蓋天井部外面に「南」を、916は杯外側面に「伊口(部)」、915は土師器杯の外底面に「徳」と思われる墨書を施す。そのほかのものについては、墨書の一部、もしくは解読不能である。

919は風字硯の破片である。

920は鉄製刀子と考えられる。残存長5.2cmを測り両関の形態をとる。

922～923は鞆羽口である。いずれも先端部が被熱により赤変、ガラス質に変化しており使用されたものと判断される。

924は製塩土器である。復原口径9.2cmを測り、内外面にユビオサエの痕跡が残る。

925～927は土馬である。925は頭部削り出された耳をもつ。926は胴から尾にかけての破片。927は尾の破片である。

928～933は土師質の土錘である。流弾型の形態を示し、大・中・小の3者が存在する。

934～944は瓦である。軒平瓦(934)は瓦当面の大部分を失うが、重弧文軒平瓦と判断される。大きく垂下する顎をもち、顎部下端にも沈線を施す。

935～938は丸瓦である。確認できるものは全て玉縁式であり行基式のもの確認できない。玉縁の形状は長さが5cm前後であり、先すばまりの形状を呈する。凸面は縄タタキの後ナデ調整を行い。凹面は布目圧痕を留めたまま未調整である。936は内面に刻印を施す。刻印は「廣椅」と読み、工人の名を記したものと推測される。

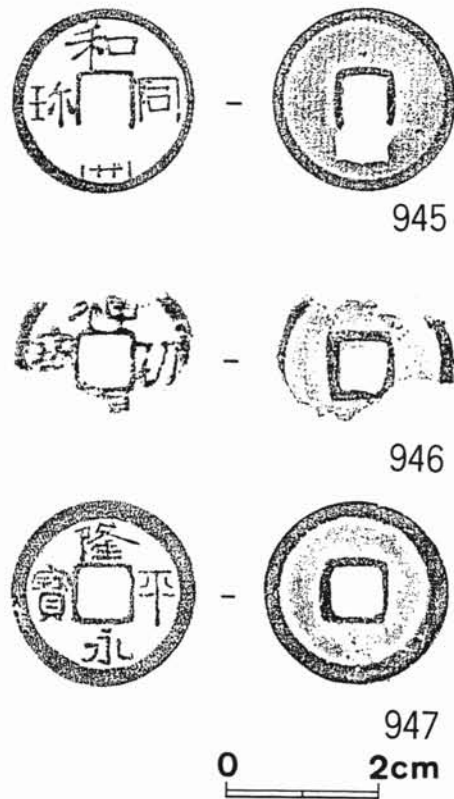
938～944は平瓦である。出土した平瓦には明確な桶巻の痕跡を示すものはなく、すべて一枚作りと考えられる。

945～947は銭貨である。945は和同開珎、946は神功通寶、947は隆平永寶である。ほぼ同一地点から近接して出土していることから祭祀に使用されたものとする。

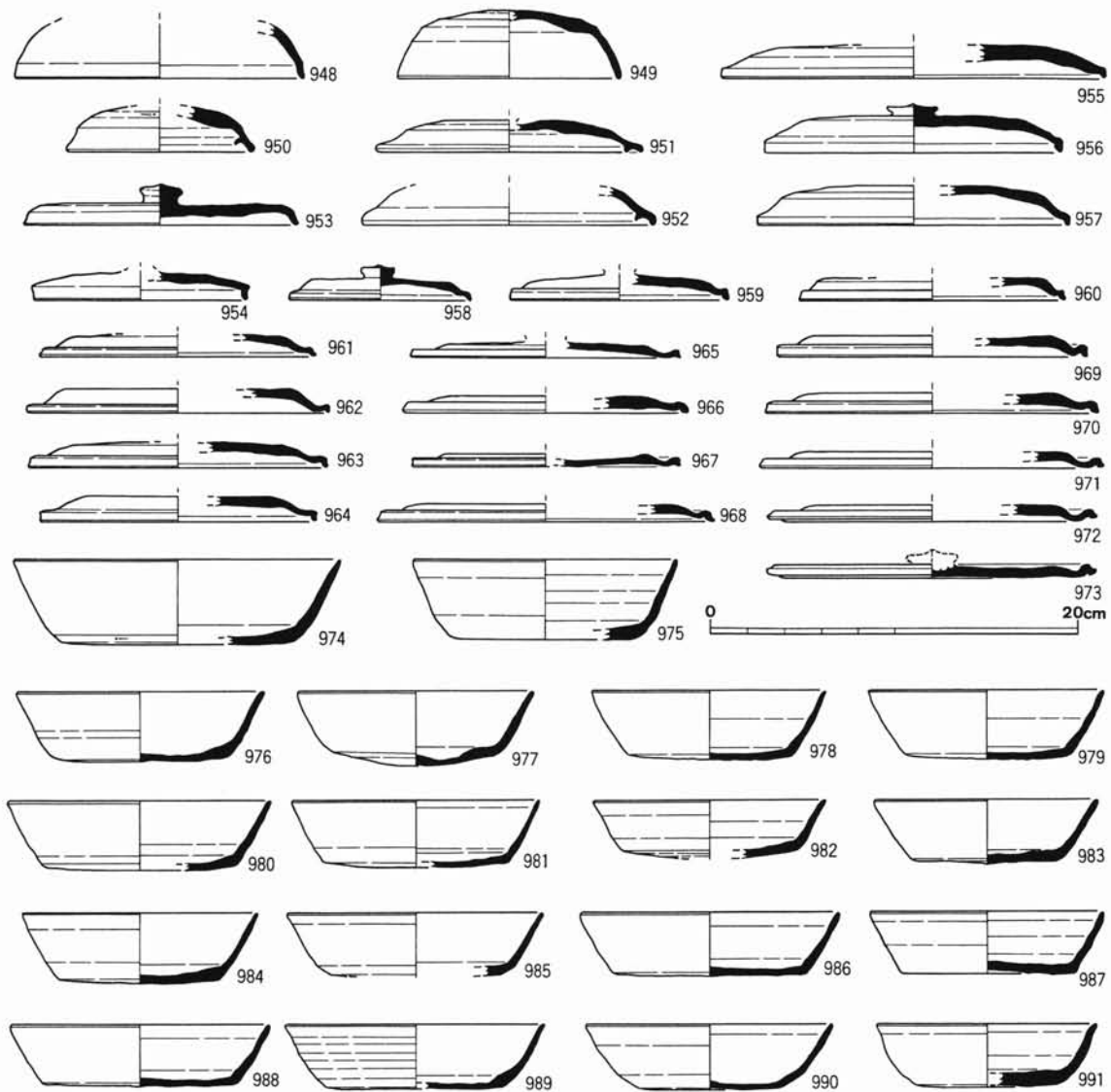
(2)溝S D 205出土遺物(第88～96図上段)

溝S D 205出土遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・無釉陶器・緑釉陶器・製塩土器・ミニチュア土製品・石帯・帯金具・瓦・鞆羽口が認められる。

948～973は須恵器蓋である。古墳時代的な杯蓋が少量認められるが下層の溝S D 354との関係から混入品と判断される。そのほかは溝S D 247同様、3タイプの蓋が存在する。974～1015は須恵器杯である。高台をもたないもの(974～991)と高台をもつもの(992～1015)の両者が存在する。



第87図 溝S D 247出土銭貨拓影



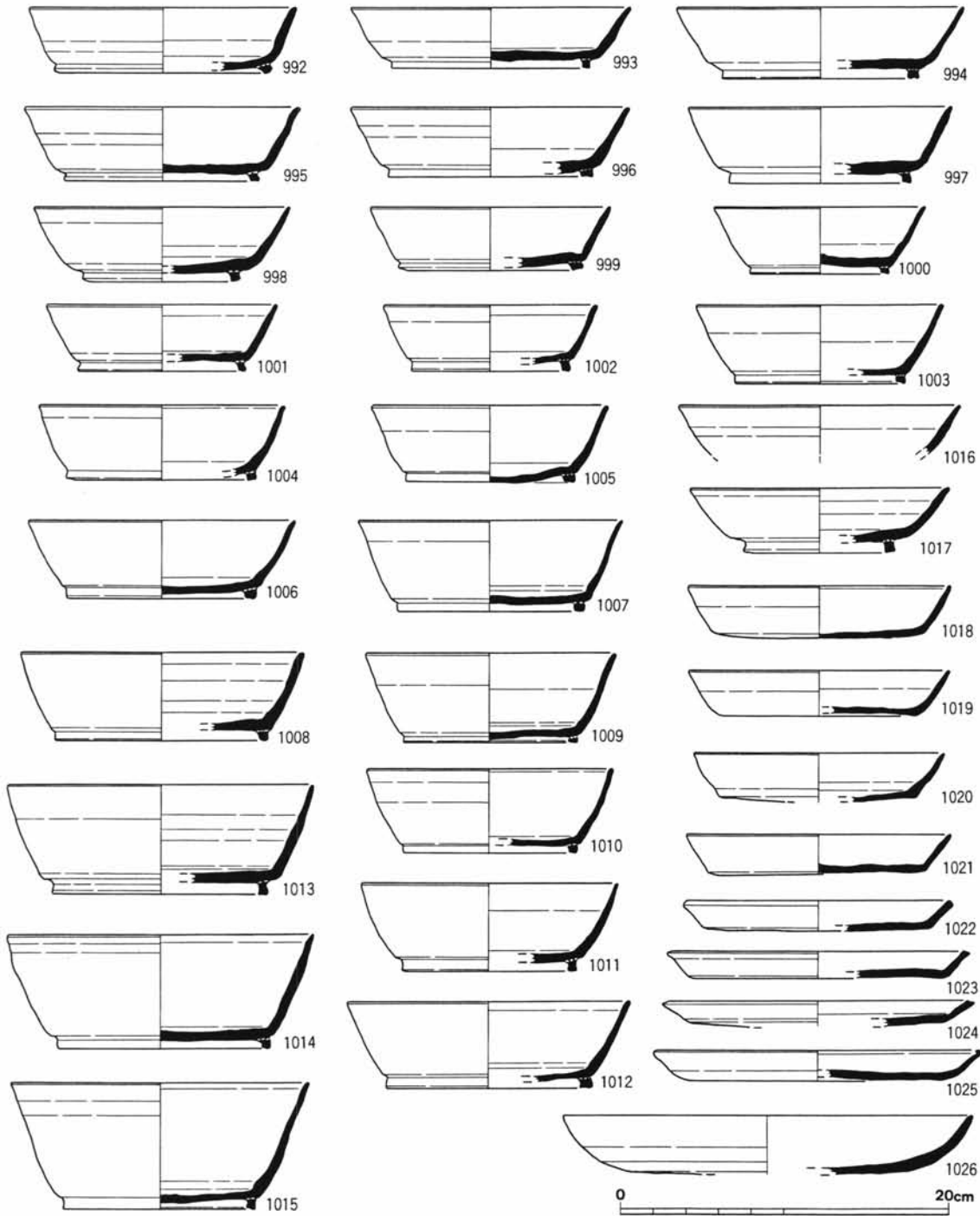
第88図 溝S D205出土遺物実測図(1)

溝S D247にみられた平底碗状の杯は991が形態的に近い個体であるが量的には多くない。1016・1017は碗として分類する。

1018～1026は須恵器皿である。溝S D247と同じく、体部外面が直線的なもの(1022～1025)とやや内湾気味になるもの(1026)が認められるほか、器高がやや高い深手の皿(1018～1021)が存在する。

1027・1028は無釉陶器である。1029・1030は緑釉陶器である。

1031～1041は須恵器壺である。短頸壺(1033)、小型のいわゆる瓶子(1035～1041)、耳付の壺(1031)などがある。1042～1047・1050は須恵器鉢である。口縁形態、法量にバリエーションがあるが、鉄鉢(1042～1044・1041)が多い。こね鉢(1050)は底部外面から多数の昇降を小孔を穿っているが貫通するものは非常に少ない。1048・1049は須恵器甕である。外反する口縁をもつ。1048は、2条の波状文と沈線により加飾する。1051・1052は須恵器平瓶である。大型品(1051)と小型品(1052)がある。1053は須恵器高杯である。脚部に多数の小孔を穿つ。

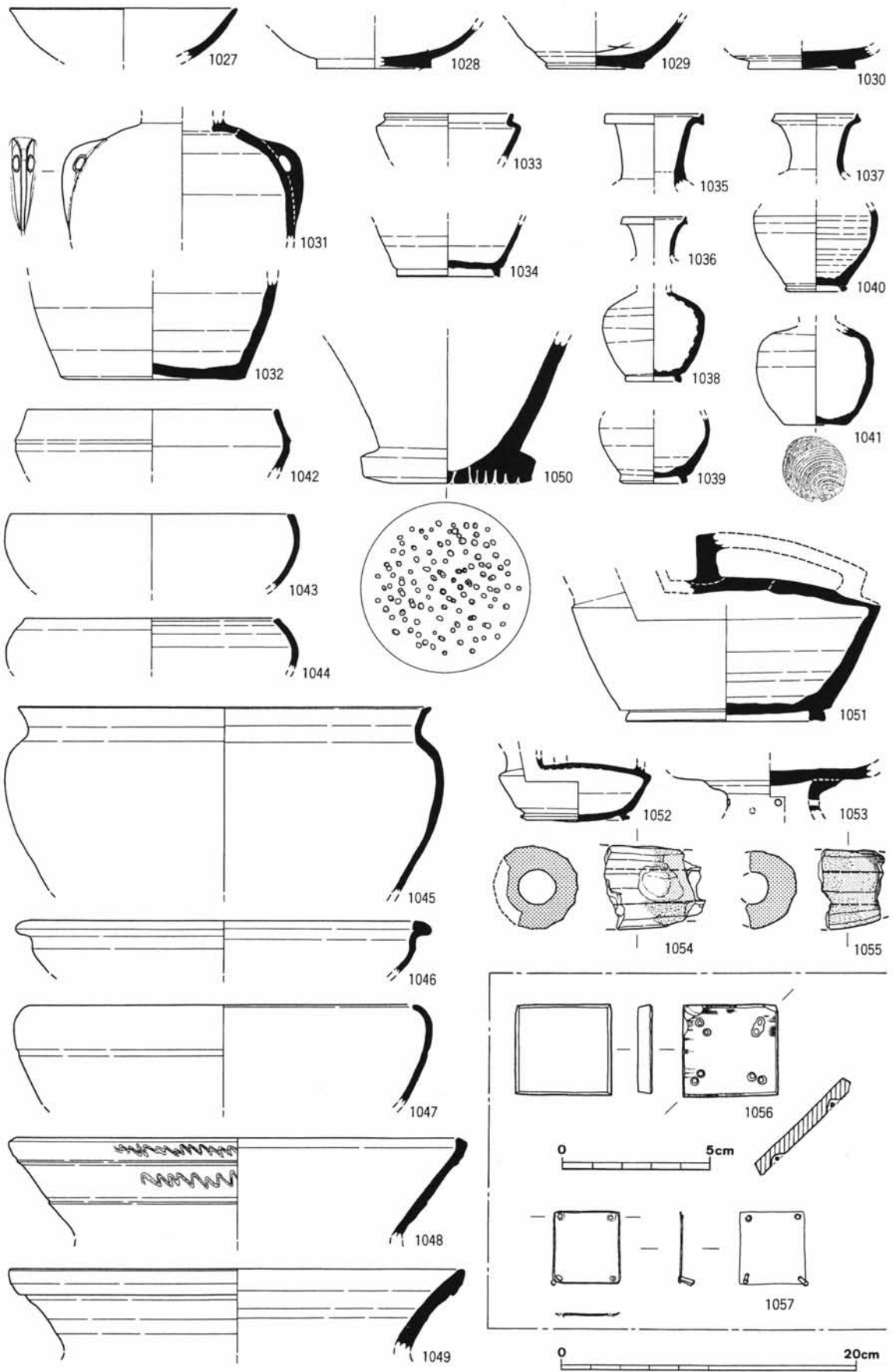


第89図 溝 S D 205出土遺物実測図(2)

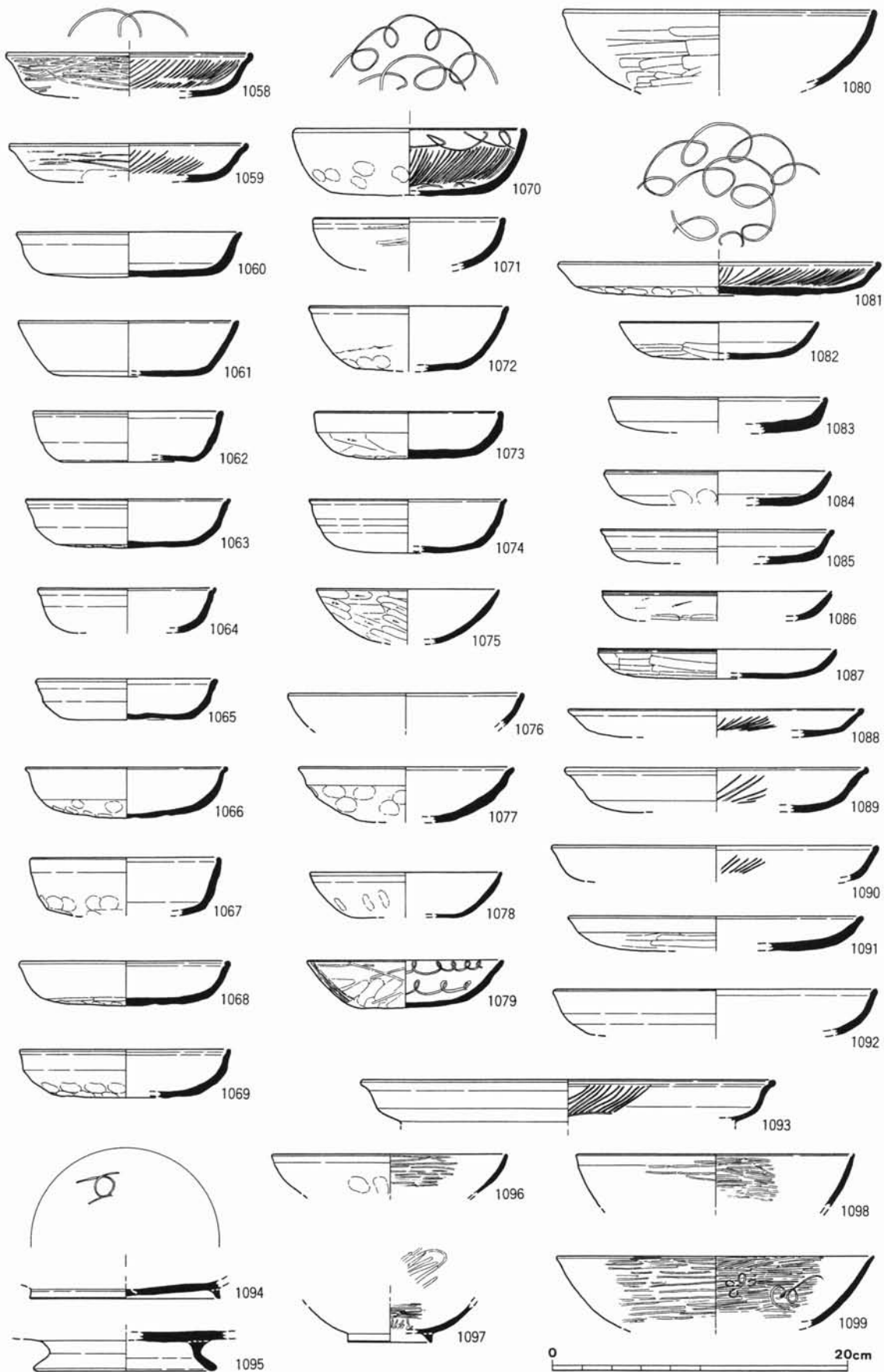
1054・1055は轆羽口である。先端部分が被熱のためガラス質に変質している。

1056は石帯巡方である。一辺3.2cm・厚さ0.55cmを測る。裏面四隅に穿孔を施す。1057は銅製金具である一辺2.2~2.7cmの銅板の四隅を穿孔し、2か所には鋳が遺存している。

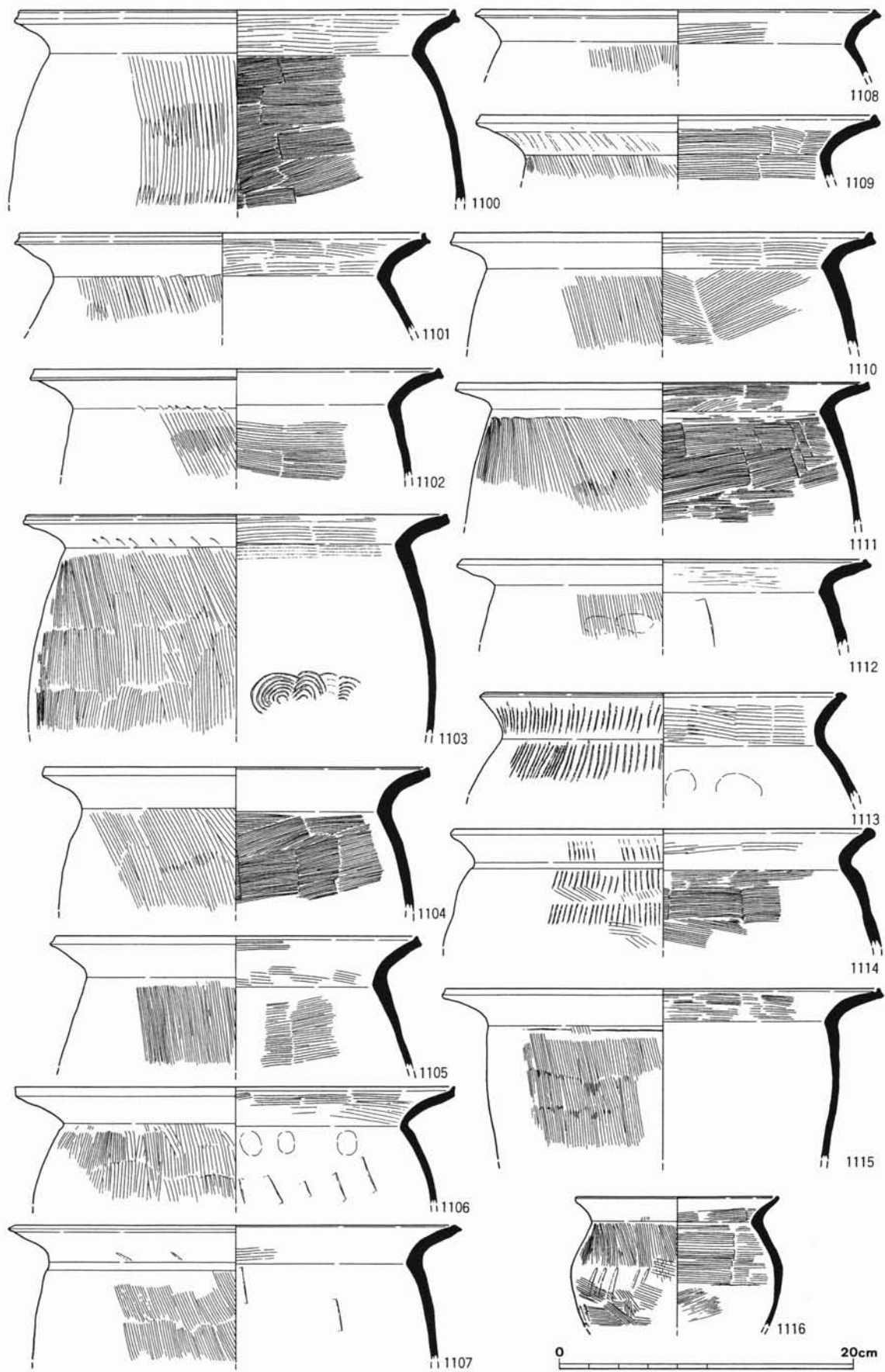
1058~1079は土師器杯である。外面をヘラミガキにより調整し、基本的に暗文を施すもの(1058・1059・1070・1071)、内外面をナデにより調整し、底部付近を指オサエもしくはヘラ削りにより調整する平底のもの(1060~1069・1072~1074)、側面をヘラ削りにより仕上げる椀状のもの(1075)、外側に指オサエの痕跡を顕著に残す椀状のもの(1077~1079)などがある。1080は土



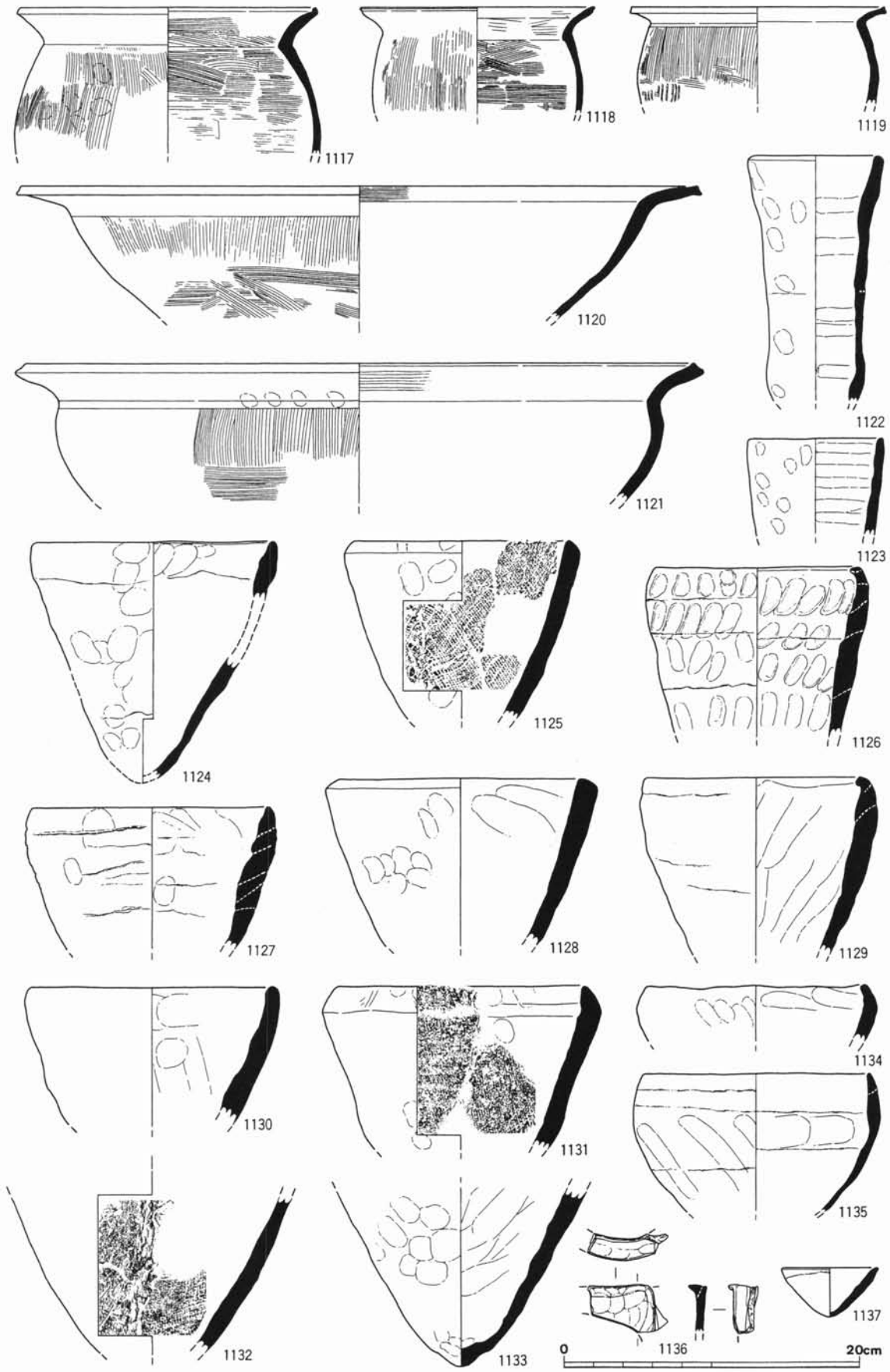
第90図 溝 S D 205出土遺物実測図(3) (1056・1057 : S = 1/2)



第91図 溝 S D 205出土遺物実測図(4)

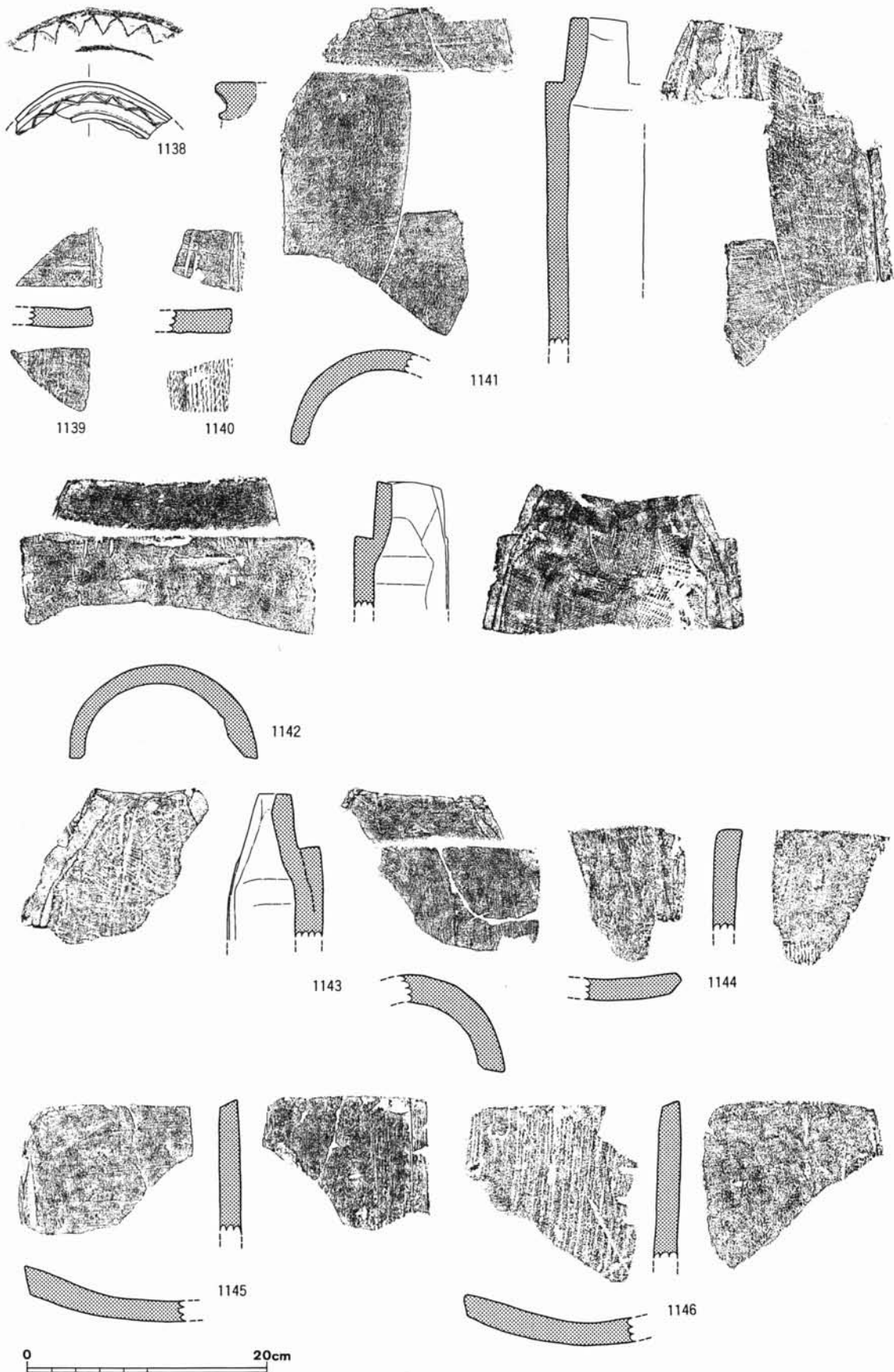


第92図 溝 S D 205出土遺物実測図(5)

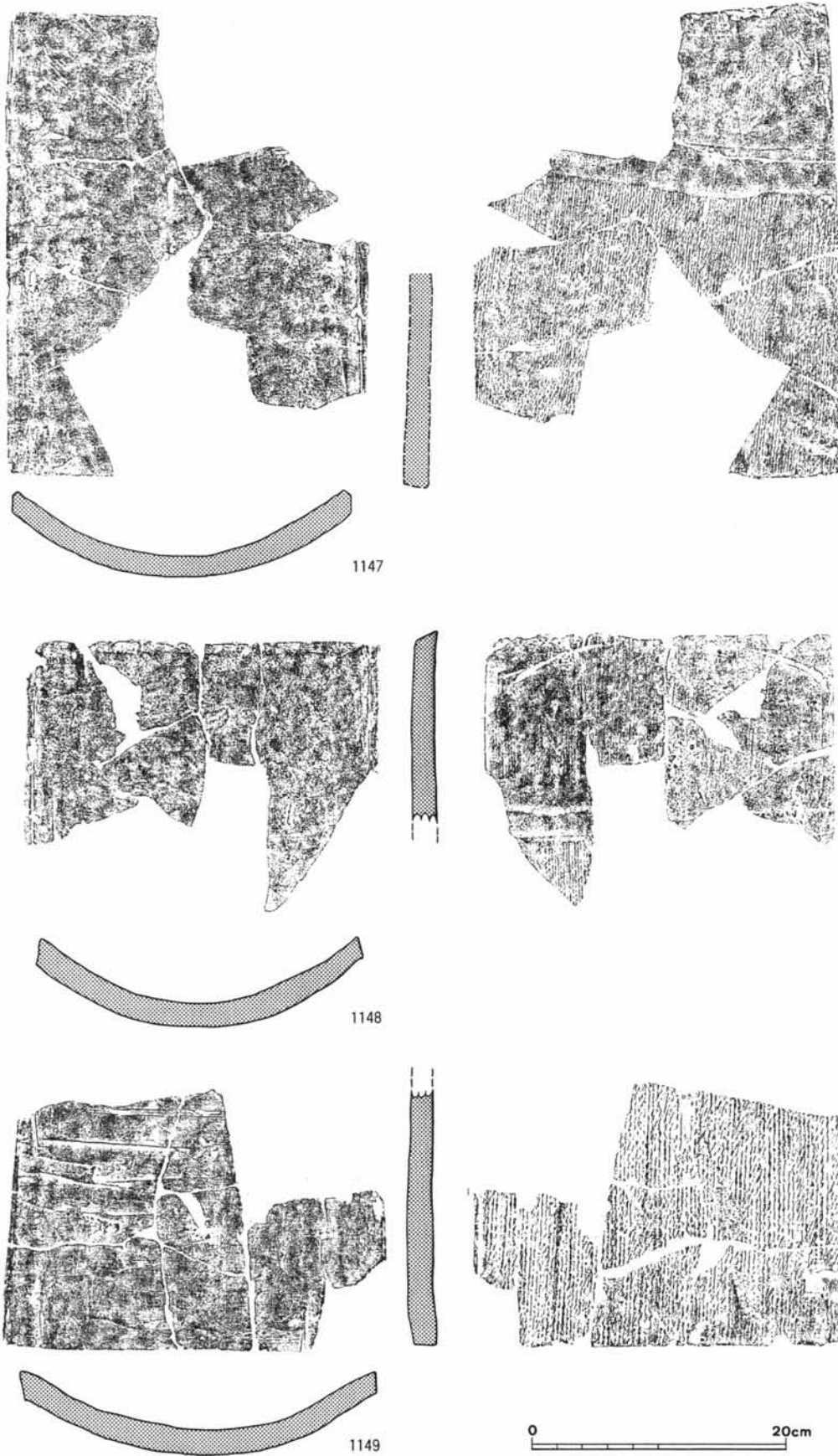


第93図 溝S D205出土遺物実測図(6)

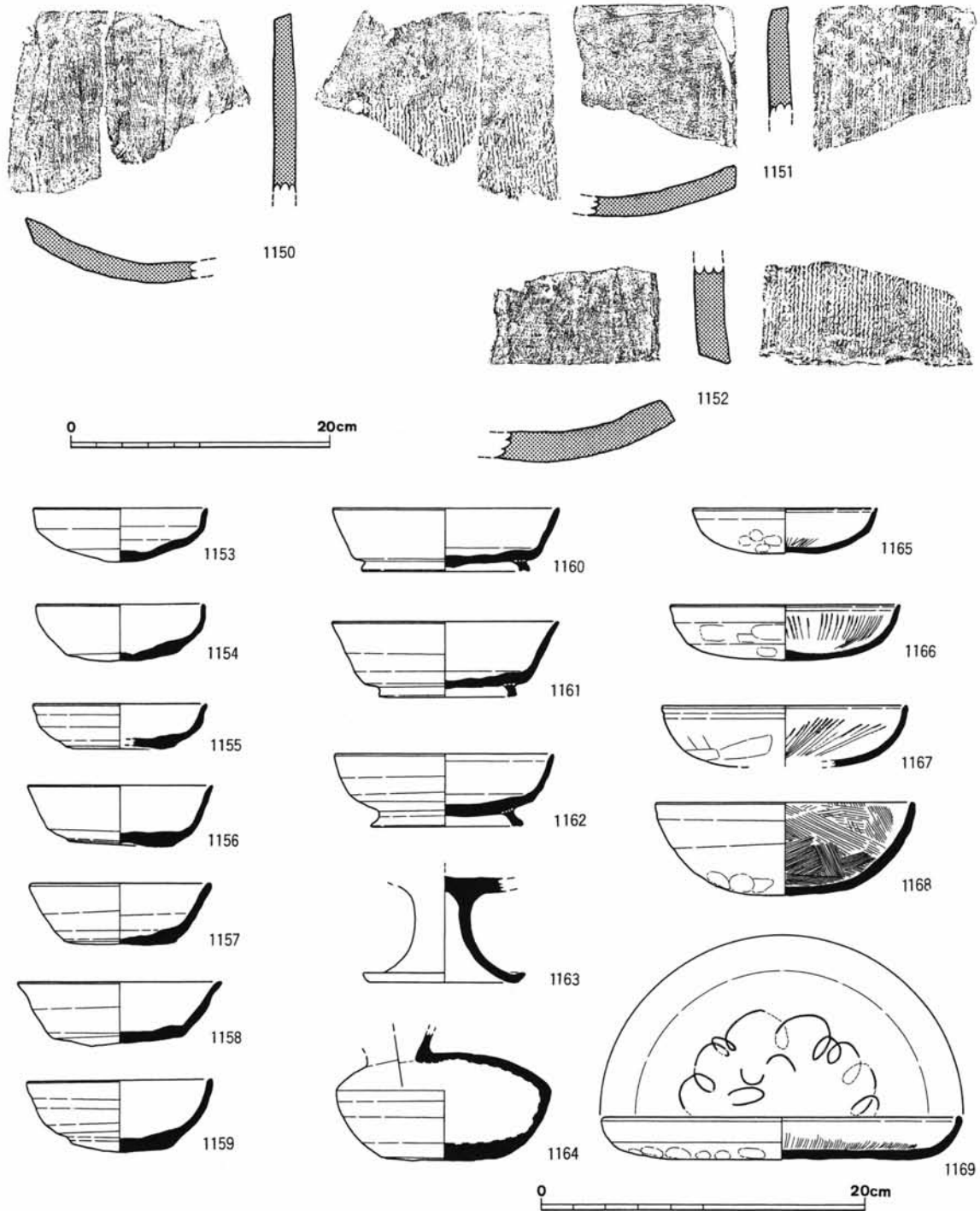




第94図 溝 S D205出土遺物実測図(7)



第95図 溝 S D 205 出土遺物実測図 (8)

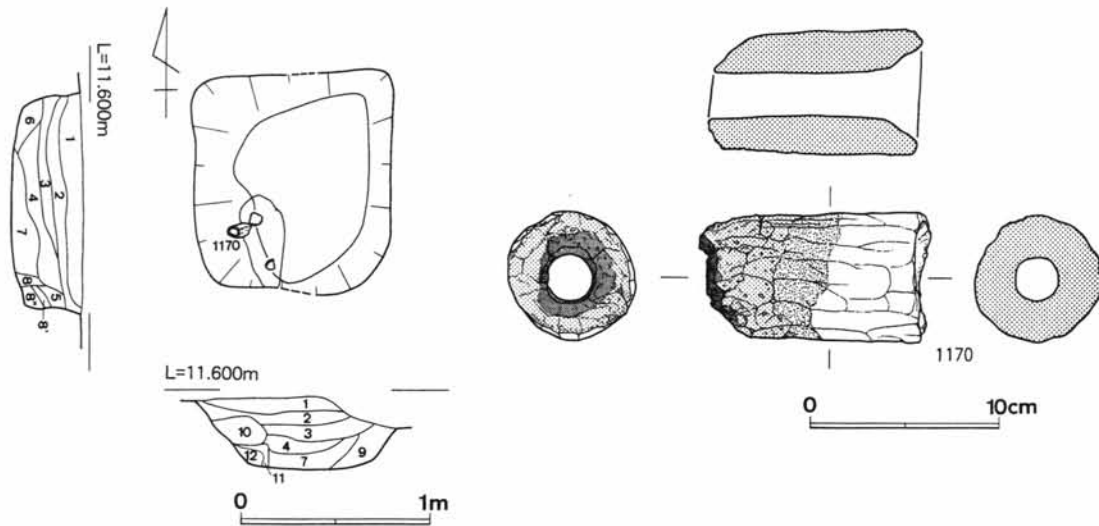


第96図 溝S D205・354出土遺物実測図(9)

師器鉢とした。外面をヘラ削りにより調整する大型品である。

1081~1093は土師器皿である。内面に暗文を施すものが多い。口縁端部は内面に肥厚させるもの、丸く収めるもののほか、外方にのばしてから内湾気味に仕上げるものがある。また、高台をもつもの(1093)も少量ながら確認できる。1094・1095は土師器脚台である。1094は底部内面に暗文を施す。

1096~1099は黒色土器碗である。黒色土器A類(1097~1099)と黒色土器B類(1096)の両者が認められる。



1. 淡黄灰褐色極細砂
2. 暗黄灰褐色極細砂(炭化物をわずかに含む)
3.     〃     (やや粘質あり、2より灰色強、炭化物をわずかに含む)
4. 暗灰褐色極細砂 (3より粘質やや強、炭化物をわずかに含む)
5. 淡黄灰褐色極細砂(やや粘質あり)
6. 暗灰褐色極細砂 (粘質あり)
7.     〃     (6より灰色・粘質強、炭化物をわずかに含む)
8. 淡黄灰褐色極細砂(5より褐色強、やや粘質あり)
- 8'.     〃     (8より粘質弱)
- 8''.     〃     (8より粘質強)
9. 淡黄灰褐色極細砂(灰色強)
10. 暗灰色極細砂
11. 暗黄褐色極細砂(やや粘質あり)
12. 灰褐色極細砂(灰色強、やや粘質あり)

第97図 焼土坑 S X 171 および出土遺物実測図

1100～1119は土師器甕である。基本的に内外面ハケ調整を主体とするが、内面に青海波文の確認できるもの(1103)がある。1120・1121は土師器鍋である。体部外面および口縁部内面をハケ調整により仕上げる大型品である。

1122～1135は製塩土器である。円筒形体部をもつもの(1122・1123)と、砲弾型体部を尖底をもつもの(1124～1135)に大別される。調整は指オサエとナデが主体であるが、内面に布圧痕の観察できるもの(1025・1131・1132)がある

1136はミニチュア土製品の竈、1137はミニチュア土製品の鍋である。

1138～1149は瓦である。1138は軒丸瓦である。外区の鉅齒文のみが遺存する。1139・1140は鬩斗瓦である。焼成後線刻に沿って分割する技法をとるもので2点を確認した。1141～1143は丸瓦である。確認できるものは全て玉縁式であり行基式のもの確認できない。1144～1152は平瓦である。確認できるものは全て一枚作りであり桶巻のものは認められない。凸面狭端側を縄タタキの後、ナデ調整により仕上げるものが存在する。

**溝 S D 345出土遺物(第83図)** 溝 S D 345出土遺物には須恵器・土師器がある。総量的には溝 S D 205に比して少ない。

1153～1162は須恵器杯である。高台のないもの(1153～1159)と高台をもつもの(1160～1162)の両者が存在する。前者には古墳時代の杯蓋を反転した形態のもの含まれる。杯Bはいずれも高台が底部内寄りに付される。1163は須恵器高杯脚部である。中空の脚柱を有し、脚端部は上方に

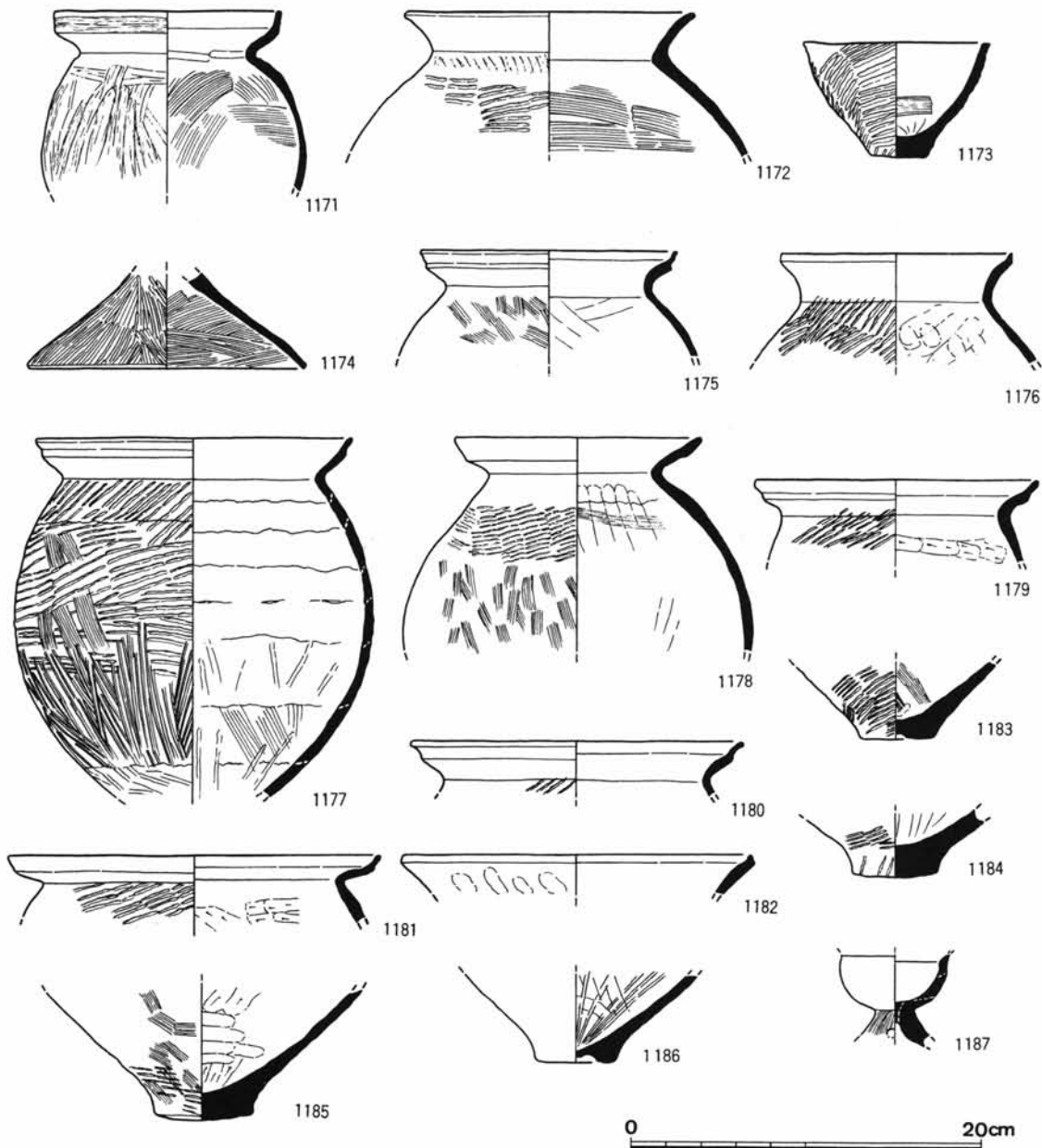
つまみ上げる。スカシは認められない。

1164は須恵器平瓶である。体部最大径13.6cmを測る。把手などの表現はない。

1165～1168は土師器杯である。いずれも内湾気味に立ち上がる体部をもつ。1165～1167には暗文が施される。1169は土師器皿である。口縁端面を内側に肥厚させ、内面には暗文が施される。

焼土坑S X 171出土遺物(第84図) 焼土坑S X 171の出土遺物には鞆羽口がある。完形品であり全長12.4cm、直径6.4cmを測る。炉への装着部は被熱による赤変・ガラス質の付着が認められる。穿孔部は炉への装着部が径2.1cm、鞆の装着部が径4.5cmの漏斗状を呈する。なお、この土坑からは鍛造剥片が出土しており、鉄製品を鍛造する鍛冶炉であると判断された。

(石崎善久)



第98図 竪穴式住居跡S H 340・350出土遺物実測図

竪穴式住居跡 S H340出土遺物(第98図) 1171～1174は、竪穴式住居跡 S H340<sup>(注6)</sup>から出土した。1171は、有段口縁の外面に擬凹線文を施す北陸系甕である。1172は、外面にタタキ、内面にハケを施す弥生系甕である。1174は、椀状の杯部をなす高杯脚部と推定される。時期は、おおよそ佐山Ⅱ-2式に該当する。

竪穴式住居跡 S H350出土遺物(第98図) 1175～1187は、竪穴式住居跡 S H350から出土した一括資料である。出土遺物は弥生系甕を主体とする。弥生系甕には、口縁部に段をなし、端部外面に強いナデを施す甕(1175・1177～1181)と、「く」の字状口縁をもつ甕(1176)がある。1176は、庄内式甕と同様、口縁部の立ち上がり角度が大きく、外反気味に立ち上がる口縁をなす。山城の庄内式甕の祖形を考える上で注目される資料である。1187は、「ハ」の字状の脚部をなす椀状高杯である。口径が小さいことから、庄内式最古相の佐山Ⅱ-1式の所産とみられる。

(高野陽子)

### (3)小結

溝 S D205と溝 S D247は出土遺物の側面では明確な前後関係をもつものとは言い難く、併存していた可能性が高い。これは各溝の機能差によるものと推測しておきたい。

また、焼土坑 S X171の存在や、溝 S D247出土の漆の付着した須恵器杯、溝 S D205・247出土の鉄滓の存在などからこの遺跡では特殊な製品が加工・生産されていたとみられる。瓦や墨書土器の存在から官衙的性格が強いとされてきた内里八丁遺跡の性格を考える上で重要と言える。

(石崎善久)

## 5.まとめ

今回の調査では、内里八丁遺跡の西側部分を、線のではあるが広範囲にわたって調査することができた。また、弥生時代末頃から中世にいたるさまざまな遺構、遺物を検出した。注目すべき遺構、遺物も含まれており、それぞれについて、概観したい。

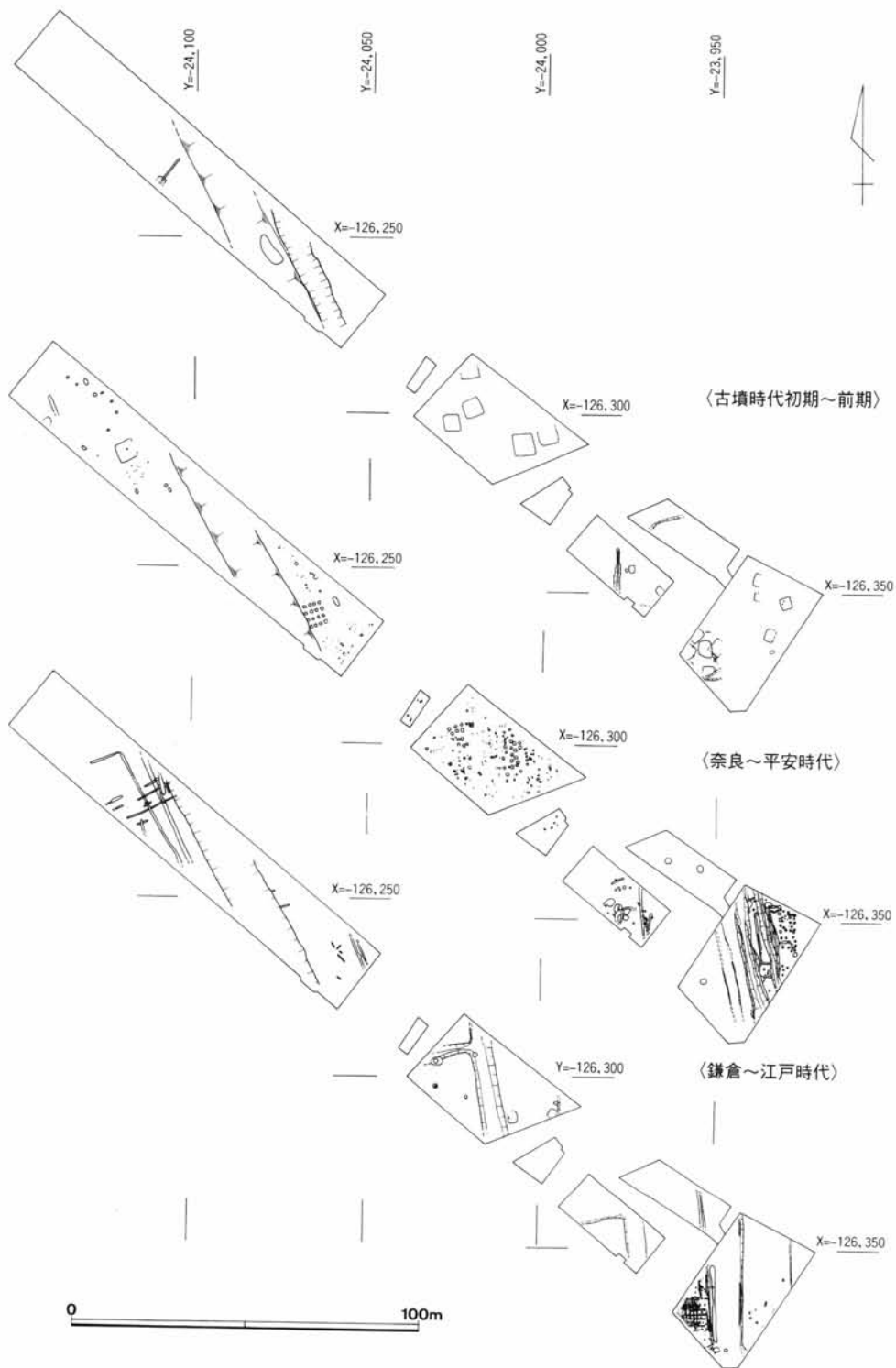
弥生時代末頃から古墳時代前期頃にかけての顕著な遺構の分布は、第1トレンチ東半部の溝 S D150までである。竪穴式住居跡が分布するのも、第2トレンチまでである。今回の調査地付近が、内里八丁遺跡におけるこの時期の遺構分布の西限にあたるものと考えられる。

古代のものとしては、7世紀から9世紀前半頃の遺構を検出している。内里八丁遺跡における過去の調査では、古山陰道が想定されたり、掘立柱建物跡群の検出、瓦や墨書土器の出土など、一般集落とは考えがたい状況が確認されている。今回の調査でも、第1トレンチで、大形の柱穴掘形をもつ掘立柱建物跡 S B60や井籠組の井戸 S E117を検出した。特に、井戸 S E117では、墨書のある井戸枠を検出し、井戸内から銅製黒漆塗鈍尾、墨書土器などが出土した。井戸の構造や出土遺物からみて、一般集落に伴うものとは考えがたいものである。また、第17次調査で、「伊戸(部)」という古代氏族名を墨書した須恵器片が出土しているのが注目される。

第3トレンチの土坑 S K1から、多数の7～8世紀前半頃の土師器、須恵器とともに、中国唐代の絞胎陶枕片が出土した。絞胎陶や唐三彩など、中国唐代に生産された軟質の陶器は、日本で

も各地の遺跡から出土しているが、量的にはかなり少ない。最も多量に出土しているのは、奈良市の史跡大安寺跡であり、量的には群を抜く。唐では明器として生産された軟質の陶器が日本に請来された経緯についてはさまざまな説があるが、日本では珍奇な舶来品として珍重されたものとみられる。器種としては、俑がほとんどなく、椀・壺・陶枕などの器物が多い。

日本において、絞胎陶や唐三彩が出土する遺跡は、古墳、都城跡、寺院跡および宗教関連遺跡、



第99図 内里八丁遺跡遺構変遷図

官衙および官衙関連の集落跡などである。一般的な集落跡などから出土する例は少ない。今回出土した絞胎陶枕片は、古代における内里八丁遺跡の性格を考える上で、興味深い資料と言えよう。また、「奈良園」の候補地が付近に存在することも、かなり示唆的であると言えよう。

なお、この絞胎陶枕片の出土した遺構は、8世紀前半頃のものと考えられる。このことは、絞胎陶枕が製作、請来されてまもなく破損して廃棄されたものともみられ、ひるがえって、唐代軟質陶器の請来時期や契機を考える上でも示唆的な資料と言えよう。

中世の遺構としては、第1トレンチで検出した中世墓とみられるSK10である。中国同安窯系の青磁碗1点をはじめ、瓦器碗4点、土師器皿1点、鉄製短刀1振からなる副葬品の一括資料が目される。内里八丁遺跡内では、類例の少ない中世墓遺構と言える。

第2トレンチでは、12～13世紀頃のものともみられる井戸SE17や井戸SE55を検出している。井戸SE17は島島の造成によって一部を削平された状況を確認しており、井戸SE55は島島間の低地の底部から検出した。このような状況から、この地域独特の景観である島島の形成は13世紀以後と考えられる。島島成立の時期を示す一例と言えよう。

このほか、多数の瓦器碗や土師器皿などが出土した第1トレンチの溝SD1や溝SD4などを検出している。これらの溝は、耕作に伴う溝とは考えがたいものであるが、その性格は不明である。出土した瓦器碗の製作地を詳細に検討すれば、当時の流通を考える資料となろう。

(引原茂治)

注1 ご指導・ご教示いただいた方(敬称略)

川越俊一・小森俊寛・神野恵・高橋克壽・大洞真白・寺井誠・福田敏朗・八十島豊成・山本崇・渡辺理気

注2 調査参加者(敬称略)

木藤洋介・山岡匠平・鷲原裕太郎・村上奈弥・小野彰子・岡野和美・杉江貴宏・柴田文恵・北森さやか・武田雄志・丑山直美・田中希和・木下博文・白山聡・藤原理恵・佐治健一・妹尾沙哉香・庄司愛美・桑田理恵・陸田初代・丸谷はま子・西村香代子・與十田節子・福田玲子・奥平広子・田中美恵子・小西ひとみ・荒尾倫子・合田美佐子・舟木登喜江・川端美恵・藤田久子・内海操・太田信子・小林直・寺尾貴美子・中島恵美子・山中道代・内藤チエ・森川敦子・長尾美恵子・村上優美子・井上聡・清水友佳子・春日満子・兵頭真千

注3 河野一隆「内里八丁遺跡第18次」(『京都府遺跡調査概報』第106冊 (財)京都府埋蔵文化財センター) 2003

注4 高野陽子「土器の編年」(『京都府遺跡調査報告書』第33冊(佐山遺跡) (財)京都府埋蔵文化財センター) 2004

注5 手焙形土器の内部から出土した炭化物については、放射性炭素年代測定を行った。測定は加速器質量分析法(AMS法)により、 $1895 \pm 40$ (yrBP $\pm 1\sigma$ )の年代値を得た。暦年代較正值は、calAD90・calAD100・calAD125、 $1\sigma$ 暦年代範囲はcalAD60-135(86.3%)である。

注6 石尾政信・石崎善久「内里八丁遺跡第16・17次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第103冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002



## 付 載 報 告

# 内里八丁遺跡出土土師器の胎土分析

## 1. 分析方法と結果

試料は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片(プレパラート)を作成した。

(1) 試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドガラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着した。

(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した(表2)。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

## 2. 試料の分類と考察

### (1) 微化石による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、放散虫化石や珪藻化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10～数100 $\mu\text{m}$ (実際観察される珪藻化石は大きいもので150 $\mu\text{m}$ 程度)前後である(植物珪酸体化石が10～50 $\mu\text{m}$ 前後)。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 $\mu\text{m}$ 以下、シルトが約3.9～62.5 $\mu\text{m}$ 、砂が62.5 $\mu\text{m}$ ～2mmである。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は、胎土材料の粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した土師器胎土は、微化石類により、1) 海水成粘土を利用した胎土、2) 淡水成粘土を利用した胎土、3) 水成粘土を利用した胎土、4) 断層ガウジを利用した胎土、などである(表2)。

### 1) 海水成粘土を利用した胎土

これらの胎土中には、放散虫化石や海水種珪藻化石が含まれていた。放散虫化石は、中新統以

降の堆積物中に含まれ、堆積環境としては外洋域で堆積したものと推定される。なお、これらの胎土中には、骨針化石も含まれている。大阪層群における海生層は、山城では、大阪層群Ma3～Ma6相当層(京都市深草付近、京都市西山山麓)、などが知られている。

#### 2) 淡水成粘土を利用した胎土

これらの胎土中には、淡水種珪藻化石などが含まれていた。また、骨針化石を含む胎土もある。なお、(淡水成)とした胎土は、淡水種珪藻化石が少ないことを示す。

#### 3) 水成粘土を利用した胎土

不明種珪藻化石や骨針化石が含まれる。ただし、具体的な堆積環境は特定できない。

#### 4) 断層ガウジを利用した胎土

この胎土は、角閃石類が特徴的に多く、また角閃石類を含む複合鉱物類も特徴的に含まれていた。さらに、これらの鉱物類は、その形状が尖ったものが多く、双晶構造を示す斜長石ではその縞が不連続で破断しているものなど破壊に伴う粒子を含んでいる。これらは、岩石としてはハンレイ岩類であるが、破壊に伴う粒子群が確認されることから、断層ガウジであることが分かる。

#### (2) 砂粒組成による分類

ここで設定した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的な特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行う。起源岩石は、砂岩質や複合石英類(微細)が堆積岩類、斑晶質や完晶質が火山岩類、ガラス質がテフラ(火山噴出物)、複合石英類(大型)や複合鉱物類(含雲母類など)が深成岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、流紋岩質が流紋岩類である。

砂粒組成の分類は、最も多く出現する分類群(第1出現群)と次いで多く出現する分類群(第2出現群)の組合せに従った。その結果、深成岩類を主体として堆積岩類を伴うBc群、堆積岩類を主体として深成岩類を伴うCb群、深成岩類を主体としたB群、流紋岩類を主体として深成岩類を伴うFb群、テフラを主体として深成岩類を伴うGb群、テフラを主体として堆積岩類を伴うGc群、堆積岩類を主体としてテフラを伴うCg群に分類できる(表2)。

#### (3) 胎土材料

胎土材料は、微化石類などの記載により海水成粘土、淡水成粘土、水成粘土、断層ガウジを使用したことが推定された。一方、この胎土中に含まれる砂粒物は、主な起源岩石の組合せにより、大きく7群に分類された。これらのうち(42)の胎土は、テフラ起源のガラスを特徴的に多く含むことから、テフラ層の火山ガラスを混和材として混入した可能性が指摘できる。なお、この火山ガラスは、粘土採取を行った際に同時に採取したことが考えられる。

54の胎土は、粒子の破壊形態および破壊構造により、断層ガウジを用いた胎土であるが、畿内では生駒西麓産土器あるいは河内の胎土として知られている特徴的な土器である。

ここでは、175の胎土のように流紋岩類を含む胎土が見られたが、流紋岩類は大阪府池田市以西において、武庫川や猪名川流域をはじめ六甲山北側において広く分布している。

京都南部から大阪北部あるいは兵庫県南部地域においては、土器の粘土材料として大阪層群の比較的軟質の堆積物や段丘堆積物が利用されたことが予想される。こうした過去の粘土層を利用した場合、混和材としての砂粒も層位的に近い層準の砂層を利用したことが考えられる。こうした場合には、現在の流紋岩分布域に限らず、過去の砂層中においても挟在する可能性が高ことから、砂層の岩石組成を調べておく必要がある。

ここで検討した胎土について、粘土と砂粒の特徴から大まかに4群に分類できる(表2)。

A群は、海水成粘土で砂粒組成B c群を示す3胎土である。なお、A1群は、水成粘土で同様の砂粒組成を示す3胎土である。B群は、淡水成粘土で砂粒組成F b群を示す175の胎土である。C群は、54の断層ガウジを用いた胎土である。D群は、42の淡水成粘土で砂粒組成G b群を示す1胎土である。

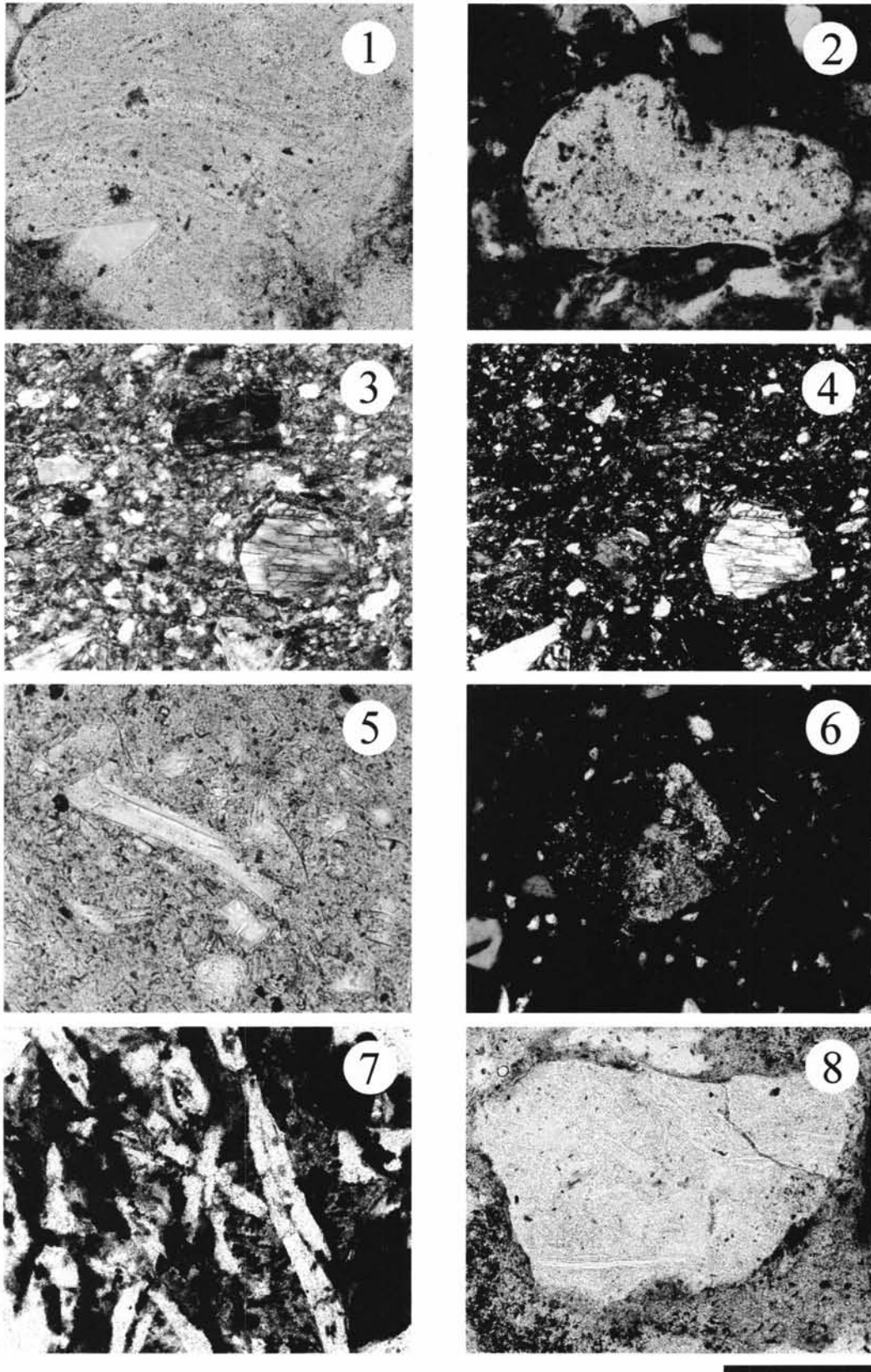
備考 以上の分析は、(株)パレオ・ラボに委託した分析業務成果報告書の内容を抜粋し、掲載したものである。成果報告書は、当調査研究センターで保管している。なお、対比参考資料として、兵庫県太子町教育委員会の協力のもと、山城の庄内式甕と形態的に類似する角島遺跡に播磨産庄内式甕の計測データを併記した。

表1 土器の詳細とその特徴

土器番号	遺構名	器種	色	肉眼観察による特徴観察	
				混入粒子	その他
175	1トレンチ SD33	庄内式甕	浅黄	乳白色粒子目立つ、透明結晶(石英)、金雲母、白色粒子有り	
116	1トレンチ SD150	弥生系甕	にぶい黄褐	大型石英類目立つ	
54		庄内式甕	灰オリーブ	角閃石類多産、透明結晶	
56		庄内式甕	灰白	乳白色・透明粒子目立つ	
42		弥生系甕	灰白	白色結晶、大型石英類(乳白色)、透明石英、黒灰色	
3	1トレンチ SK158	弥生系甕	浅黄	黒灰色粒子目立つ、やや細粒	
1		直口壺	灰白	大型石英類(乳白色)、黒雲母目立つ、透明石英有り	細粒金雲母等多産
8		庄内式甕	にぶい黄橙	大型石英類(乳白・白色)目立つ、透明石英有り	
5		庄内式甕	灰白	大型石英類(乳白色)目立つ、透明石英有り	細粒金雲母目立つ
7		庄内式甕	灰白	大型石英類目立つ	
参考1		—	庄内式甕	灰白	褐色粒子多く、軟質堆積岩目立つ、ガラス質有り
参考2	—	庄内式甕	灰白	褐色粒子非常に多く、軟質堆積岩目立つ、乳白色粒子有り	

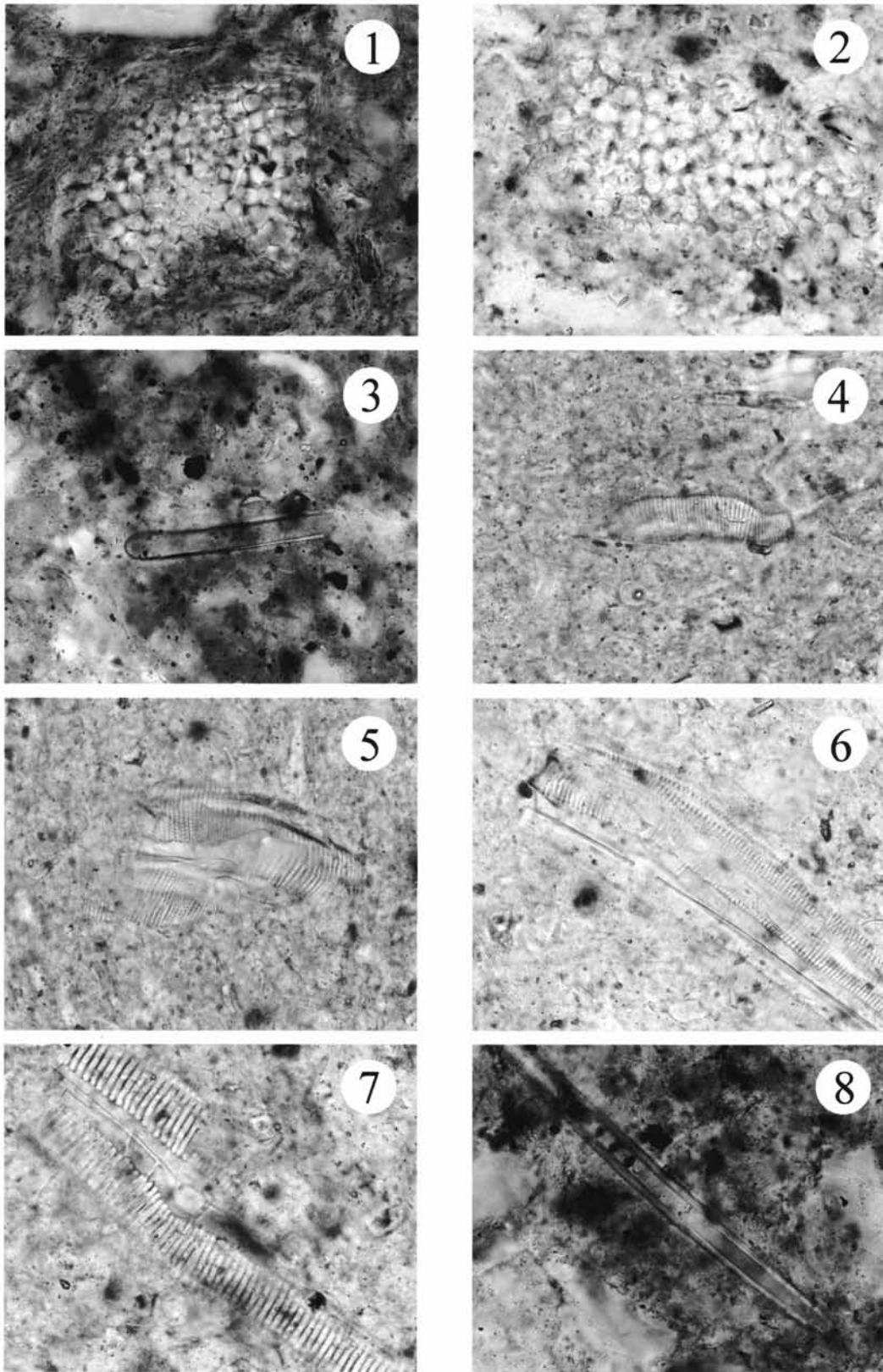
表2 土器胎土の粘土および砂粒の特徴

番号	種類	砂粒の特徴										鉱物の特徴					特徴	分類						
		放散虫化石	海水種珪藻化石	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胞子化石	植物珪酸体化石	分類	堆積岩類	深成岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	片岩類	テフラ			角閃石類	輝石類	ジルコン	ザクロ石類	雲母類	
175	(淡水成)			(+)	+	+		(+)	F b	+	+			++	(+)		+	+	+		+			B
116	(海水成)	(+)	(+)						B c	+	++			(+)			+	+	+		+			A
54	断層ガウジ								B		+++						+++	+			+			C
56	水成								B c	+	++			(+)	(+)	(+)	+	+	++		+			A <sub>1</sub>
42	淡水成			++	+	+	++	+	G b	+	++					+++	+	+						D <sub>1</sub>
3	水成								C g	+++				(+)		+	+	+			+			E
1	水成								B c	+	++					+	+	+	+		+++		砂質胎土	A <sub>1</sub>
8	(海水成)	(+)	(+)						B c	+	++			(+)	(+)		+	+			+			A
5	(海水成)	(+)							B c	+	++			(+)	(+)		+	+			+			A
7	水成								B c	+	++			+				+	+		++			A <sub>1</sub>
参考1	淡水成			++	++	+	+	++	Gc	++	+			+		+++	+							変性火成岩多
参考2	淡水成			++	+++	+	+	++	Cb	++	+			+		++	+							変性火成岩多



図版1 胎土中の粒子顕微鏡写真(スケール; 100 $\mu$ m)

- |                    |                    |                    |
|--------------------|--------------------|--------------------|
| 1. 流紋岩質(175、開放ニコル) | 2. 流紋岩質(175、開放ニコル) | 3. 断層ガウジ(54、開放ニコル) |
| 4. 断層ガウジ(54、直交ニコル) | 5. ガラス質(参考1)       | 6. 流紋岩質(3、直交ニコル)   |
| 7. 変質岩(比較資料)       | 8. 流紋岩質(参考2、開放ニコル) |                    |



図版2 胎土中の粒子顕微鏡写真(スケール; 50 $\mu$ m)

1. 放射虫化石(116)    2. 放射虫化石(8)    3. 珪藻化石*Eunotia biareofera*(42)    4. 珪藻化石  
*Eunotia prerrupta* var. *bidens*(参考1)    5. 珪藻化石*Cymbella aspera*(参考1)    6. 珪藻化石  
*Cymbella aspera*(参考2)    7. 珪藻化石*Pinnularia viridis*(参考2)    8. 骨針化石(56)

### 3. <sup>かたやま</sup>片山遺跡第2・3次発掘調査概要

#### 1. はじめに

片山遺跡の発掘調査は、「相楽都市計画道路3・2・47号駅前東線道路事業」に伴って、平成15・16年度の2か年にわたって実施した。相楽都市計画道路3・2・47号駅前東線は、関西文化学術研究都市木津南地区ほかに所在する住宅地からJR木津駅へのアクセス道路として計画されたものである。発掘調査は、平成15年度は都市基盤整備公団の依頼を、平成16年度は独立行政法人都市再生機構の依頼を受けて実施した。

片山遺跡は、京都府相楽郡木津町大字木津小字池田・片山に所在する。調査地はJR木津駅の東側の扇状地に位置する。調査前はいずれも水田であった。調査は、平成15年度(第2次調査)に、まず試掘調査を行って遺構・遺物が集中する地点を確認し、その後、拡張して本調査を行った。平成16年度(第3次調査)は引き続き本調査が必要と判断された地点についての調査を実施した。調査期間は、平成15年度が平成15年7月22日から平成16年2月24日まで、平成16年度が平成16年7月8日から同年11月29日までである。調査面積は、平成15年度が1,700㎡、平成16年度が1,070㎡で、2か年を合わせて2,770㎡である。

発掘調査は、平成15年度は当調査研究センター調査第2課調査第2係長伊野近富、同調査員筒井崇史が担当し、平成16年度は同じく調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、同調査員筒井が担当した。発掘調査および整理作業には多くの調査補助員・整理員の参加・協力をいただいた。<sup>(注1)</sup>本概要報告は伊野・筒井が執筆した。なお、本概要報告で用いた国土座標系は、過去の調査との関係上、日本測地系(旧座標系)を使用している。

調査期間中は、京都府教育委員会・木津町教育委員会・京都府立山城郷土資料館、木津の緑と文化財を守る会などの関係諸機関からご教示・ご協力をいただいた。

なお、調査に係る経費は、平成15年度は都市基盤整備公団が、平成16年度は独立行政法人都市再生機構が、全額負担した。

#### 2. 位置と環境

##### (1) 地理的環境

片山遺跡の所在する木津町は京都盆地の最南端に位置する。京都盆地は干拓によって消滅した巨椋池を境に北山城地域と南山城地域に区分できる。南山城地域は、木津川とそれに注ぎ込む中小河川の沖積作用によって形成された河谷地形で、南北14km、東西2～3kmの狭長な地形を呈する。木津川は奈良・三重両県に水源を發し、木津町付近までは東から西に流れ、ここでその流れを大きく北に変える。木津町は北を木津川によって画され、東・南・西の三方を丘陵に取り囲ま

れている。南側の丘陵は一般に奈良山丘陵と呼ばれ、京都・奈良両盆地の区切りとなっている。そして、これらの丘陵部から発する小河川の堆積によって、町域中央部の平野部が形成される。また、小河川の一部は天井川化している。

片山遺跡は、この木津町を取り囲む丘陵のうち、東側に位置する丘陵の支尾根の直下に形成された扇状地上に位置する。この扇状地は、今回の発掘調査でその一部を確認した小規模な旧河道によって形成されたと考えられる。片山遺跡周辺は、現在おもに水田地帯となっているが、その地形を見ると、今回新設されることになった道路部分が、扇状地が舌状に最も広範囲に形成された地点であることがわかる(第150図参照)。その範囲は南北約220m、東西約190mを測り、標高は33~42mと、周辺では最も高くなっている。したがって、集落などの遺跡の形成において有利な地形であったことがわかる。こうした地理的な環境によって縄文時代から中・近世に至るまで遺跡が断続的に営まれたと考えられる。

## (2) 歴史的環境

片山遺跡は、本文でも詳述するように、縄文時代から近世に至るまでの遺構・遺物が確認された複合遺跡である。ここでは発掘調査によって明らかになった同時代の遺跡を中心に、片山遺跡周辺の歴史的環境について概観して<sup>(注2)</sup>いく。

縄文時代の遺跡としては、燈籠寺遺跡(4)でまとまった縄文時代後期の土器が出土している。土器はいずれも旧河道からの出土であるが、調査地周辺に縄文時代後期の集落の存在を予想させるに十分な量がある。しかし、木津町域ではこの時期の遺跡は概して少ない。

弥生時代の遺跡としては、前期の赤ヶ平遺跡(7)、中期の燈籠寺遺跡(4)、後期の木津城山遺跡(10)・内田山遺跡(5)・白口遺跡(6)・燈籠寺遺跡などが片山遺跡の東側の丘陵に広がる。片山遺跡でも弥生時代後期末~庄内式期の遺構・遺物が検出されており、片山遺跡周辺では、特に後期を中心に集落が展開していたと考えられる。このほか、木津町西部には、弥生時代中期の遺跡として大島遺跡や扁平鈕式袈裟文銅鐸が出土した相楽山遺跡などがある。

古墳・飛鳥時代の遺跡としては、内田山古墳群(12)・片山古墳群(13)がある。前者はA・Bの2群があり、一辺10~18mの方墳を主体とする。削平が著しいが、多数の埴輪が出土した古墳が多い。古墳時代中期に位置づけられる。後者は横穴式石室を内部主体とする古墳が3基確認されており、飛鳥時代後半に位置づけられる。ただし、片山遺跡周辺では古墳時代から飛鳥時代にかけての集落は未確認である。木津町では、中・小型古墳は比較的多く知られており、木津町南部に所在する瓦谷古墳群(18)や上人ヶ平古墳群(19)、西山塚古墳などがある。また、埴輪生産跡である瓦谷埴輪窯や上人ヶ平埴輪窯、多数の埴輪が出土した弓田遺跡などもある。これらは木津町西部の土師七ツ塚古墳群とともに、古墳時代前期後半から後期初めに営まれたものである。古墳時代後期には、横穴式石室を内部主体とする音乗谷古墳や坊谷古墳が木津町西部に所在する。最も新しい古墳としては、木津町西部の奈良県との境界上に位置するカザハビ(石のカラト)古墳がある。出土した土器から飛鳥時代末ないし奈良時代初めの築造と考えられる。

奈良時代の遺跡は、平城京との関わりで多くの遺跡が分布する。片山遺跡周辺には上津遺跡

(2)・燈籠寺廃寺(3)・釜ヶ谷遺跡(9)などがある。上津遺跡は平城京の外港である泉津に設営された公的な施設と考えられる。燈籠寺廃寺は白鳳寺院と考えられるが、詳細は不明である。また、隣接する旧河道の調査でも奈良時代の遺物が多数出土した。この旧河道の上流にあたる釜ヶ谷遺跡では、墨書人面土器や土馬、斎申などの祭祀遺物が多数出土している。さらに、具体的な遺構は未検出であるが、いわゆる「作り道」(21)や『続日本紀』にみえる「賀世山西道」といった奈良時代の道路の存在が考えられている。なお、片山遺跡は足利健亮氏の復原による恭仁京右京に含まれるが、現在のところ恭仁京の京域の存在を示す遺構は知られていない。

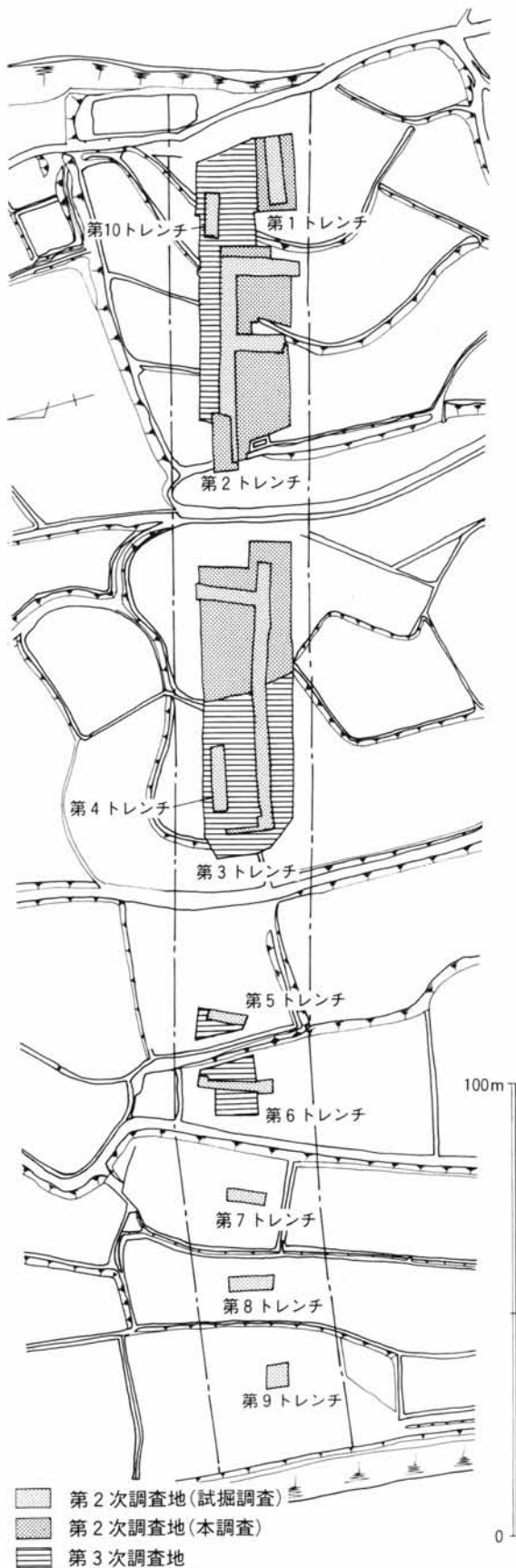
一方、奈良山丘陵には平城宮や興福寺に供給するための瓦を生産していた瓦窯群として、市坂



第100図 片山遺跡周辺主要遺跡分布図(国土地理院1/25,000奈良)

- |           |            |              |                |            |
|-----------|------------|--------------|----------------|------------|
| 1. 片山遺跡   | 2. 上津遺跡    | 3. 燈籠寺廃寺     | 4. 燈籠寺遺跡       | 5. 内田山遺跡   |
| 6. 白口遺跡   | 7. 赤ヶ平遺跡   | 8. 菰池遺跡      | 9. 釜ヶ谷遺跡       | 10. 木津城山遺跡 |
| 11. 木津遺跡  | 12. 内田山古墳群 | 13. 片山古墳群    | 14. 鹿背山瓦窯跡     | 15. 文廻池遺跡  |
| 16. 木津城跡  | 17. 西山遺跡   | 18. 瓦谷遺跡・古墳群 | 19. 上人ヶ平遺跡・古墳群 |            |
| 20. 市坂瓦窯跡 | 21. 作り道跡   |              |                |            |





第101図 トレンチ配置図

瓦窯(20)・梅谷瓦窯・瀬後谷瓦窯・五領池東瓦窯・音如ヶ谷瓦窯などがある。市坂瓦窯に隣接する上人ヶ平遺跡(19)では、瓦生産に伴う工房跡が確認されている。また、木津町西部の大畠遺跡や樋ノ口遺跡では、掘立柱建物跡などが検出されている。特に樋ノ口遺跡では、二彩・三彩陶器や灰釉龍形硯などが出土しており、奈良時代前・中期の離宮跡もしくは寺院跡の可能性が高いと考えられている。

平安時代以降の遺跡はそれほど多くないが、木津城跡(16)・菰池遺跡(8)などがある。木津城跡は、現在も城郭遺構が良好に遺存しており、中世後半の山城と考えられている。菰池遺跡では、近世の南都諸寺院の修復工事などに関連する施設(木屋など)と考えられる建物跡などが検出されている。

### 3. 調査の経過

今回の発掘調査における調査対象面積は約7,000㎡であるが、既往の調査としては、木津町教育委員会による範囲確認調査が実施されているにすぎない(第1次調査<sup>(注4)</sup>)。第1次調査では、調査地全域から弥生時代から近世に至る遺物が出土したが、遺構はごくわずかに検出したにとどまった。このため、遺跡の全容が十分に明らかになっていないとして、調査対象地内の試掘調査を実施して、遺構・遺物の状況を確認の上で、面的な掘削を行った。

試掘調査は、平成15年7月22日から開始した(第2次調査)。過去の記録や第1次調査の成果から、調査対象地の西半部については、遺構の遺存状況が良好とは考えられないため、重点を東半部において試掘トレンチ(第1～10トレンチ)を設定した(第101図)。

試掘調査の結果、第1～4・10トレンチで、

縄文時代から中世にかけての遺構・遺物を多数検出し、本調査を実施した。また、第5・6トレンチでは、遺構・遺物の検出は少なかったものの、安定した地層が見られたため、部分的に拡張して調査を実施した。第7～9トレンチでは、若干の遺物が出土したものの、旧河道と考えられる砂礫層、もしくは湿地帯と考えられる粘土層を確認したのみで、安定した地層は確認できなかった。このため、第6トレンチ以東で本調査を実施することとした。

本調査に伴う重機掘削は平成15年9月29日に開始した。第1・2トレンチでは、仮設の農道や濁水対策用の水路などの余地を残しておかなければならなかったことや、排土を調査地内で処理しなければならなかったことから、平成15・16年度の2か年にわたって調査区の設定を行った。第3トレンチでは、排土の置き場所の関係から、15年度に東半分、16年度に西半分と2回に分けて調査を実施した。平成15年度は調査の進捗状況に合わせて、平成16年1月21日と平成16年2月19日の2回に分けてラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。また、この間の2月13日には関係者説明会を実施、12名の参加があった。2月24日にはすべての作業を終了し、機材を撤収して平成15年度の調査を終えた。

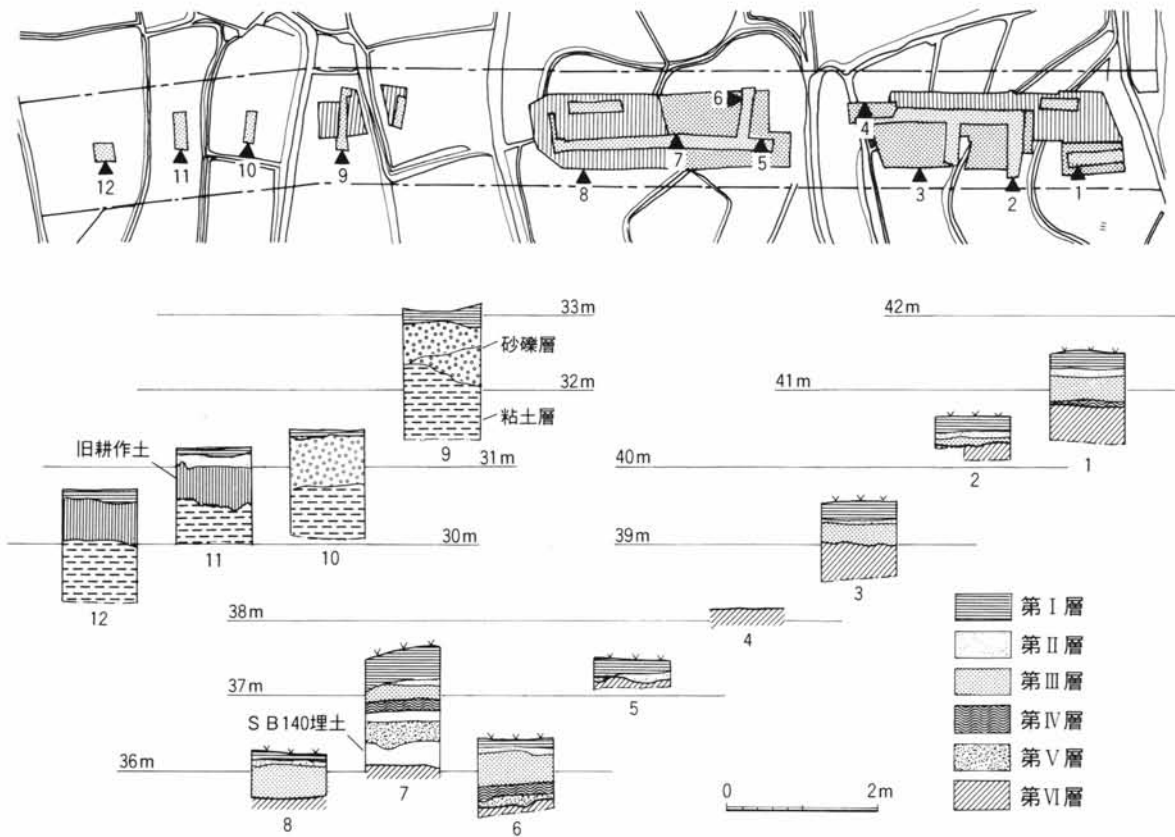
平成16年度の調査(第3次調査)は平成16年7月8日に開始し、昨年度に引き続き、第2・3トレンチの調査を実施した。また、平成16年11月5日には第5・6トレンチの拡張を行った。調査がおおむね終了した平成16年11月26日はラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。また、翌11月27日には現地説明会を実施し、100名の参加があった。11月29日にはすべての作業を終了し、機材を撤収して2か年にわたる調査を終えた。

#### 4. 調査の概要

##### (1) 基本層序

調査地の基本層序を第102図に示した。基本的な層序は、調査地の東側と西側では大きく異なる。第1～4トレンチにあたる東側の基本的な層序は、第Ⅰ層；黒灰色ないし暗青灰色粘質土、第Ⅱ層；明橙黄色ないし明橙褐色砂質土、第Ⅲ層；灰色ないし茶褐色砂質土、第Ⅳ層；橙黄色ないし橙褐色粘質土、第Ⅴ層；暗茶褐色ないし茶褐色粘質土、第Ⅵ層；橙褐色ないし黄橙色粘質土である。第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は床土と考えられる。第Ⅲ層は一部では分層することが可能で(ⅢA～ⅢC層)、奈良時代の遺物も多数含まれるが、中世の遺物を主体とする遺物包含層である。第Ⅲ層を除去した第Ⅳ層上面もしくは第Ⅵ層上面で中世の耕作溝を多数検出している。以下、これを上層遺構面と呼ぶ。第Ⅳ層は中世段階の整地土と考えられる。第Ⅴ層も分層することが可能で(VA・VB層)、VA層は瓦器碗を含む。VB層は弥生時代や奈良時代の遺物が出土した。第Ⅵ層は地山である。第Ⅳ層あるいは第Ⅴ層を除去した第Ⅵ層上面で遺構を検出した。以下、これを下層遺構面と呼ぶ。

これらのトレンチでは、水田ごとに、第Ⅲ層が東側では薄く、西側では厚く堆積していた。つまり、東側では第Ⅲ層が薄く、直ちに第Ⅵ層(地山)となっているが、西側では第Ⅲ層が比較的厚く堆積し、部分的に第Ⅳ・Ⅴ層がみられた。また、第Ⅲ層の各層で多数の耕作溝が検出された。



第102図 調査地土層柱状図

これらのことから、第Ⅲ層の形成に伴って、土地の水平化、すなわち耕作地化が進行したと考えられる。したがって、本来の地形は一定の傾斜を有していたと考えられる。

第5～9トレンチでは、耕作土を除去すると、砂礫層または粘土層が厚く堆積していることを確認した。第5～7トレンチでは上層に砂層や砂礫層が堆積し、下層は粘土層やシルト層が砂層を挟みながら堆積していた。なお、第5・6トレンチの北半部ではやや安定した茶黄色ないし茶橙色粘質土層があり、この上面から若干の遺物が出土したことから、遺構面の存在が予想された。第8・9トレンチでは、粘土層やシルト層が堆積していた。こうしたことから、片山遺跡の東側に位置する丘陵から流れ出た小規模な旧河道が、第6・7トレンチ付近に到達していたと考えられる。なお、第1～4トレンチでは旧河道が存在した痕跡はみられないことから、この付近では調査地の南側を大きく迂回していたと考えられる。

## (2) 調査の方法

調査は、現在の耕作土(第Ⅰ層)・床土(第Ⅱ層)を重機で除去し、中世の遺物包含層(第Ⅲ層)を人力で除去した。その後、遺構面(第Ⅳ層ないし第Ⅵ層上面)の精査を行い、遺構の検出に努めた。また、下層の遺物包含層(第Ⅴ層)が存在した場合には同様の作業を繰り返した。なお、調査に当たって、調査対象地全体を覆う地区割りを設定した。地区割りは、日本測地系にもとづく、 $X = -140,480$ 、 $Y = -15,400$ を原点とし、10mごとの方眼に割り付けた。その表示方法は、 $X = -140,480$ を1とし、以下、南に向かって、10mごとに2、3、4・・・とし、 $Y = -15,400$ をAとし、以下、西に向かってB、C、D・・・とし、10m四方の地区の東北角の位置にあたる両者の

交点を地区名称とした。

検出した遺構は、その位置を平板で記録しながら、掘削を行った。検出した遺構には原則として通し番号をつけ、遺構の性格を示す略号をつけた。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更しないようにした。使用した略号は、竪穴式住居跡；S B、溝；S D、土坑；S K、井戸；S E、不明遺構・その他；S Xである。なお、本概要報告に掲載した遺構番号は調査時のものである。ただし、調査時に番号のなかった遺構については、本概要報告作成時に新たに付与した。遺構の掘削を終えると、必要に応じて1/10または1/20の平面図、断面図の作成と写真撮影を行った。また、遺構面全体の調査を終えると、トレンチあるいは地点ごとに全景写真を撮影した。また、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。なお、2か年にわたる調査の結果、出土した遺物の総量は、整理箱にして50箱である。

### (3)各トレンチの調査概要

#### ①第1トレンチ(第103図)

調査地の最も東端に、長さ15m、幅3mの調査区を設定し、遺構が確認されたことから拡張した。基本層序は第I～IV層・第VI層で、第V層は確認することができなかった。遺構は、第III層を除去して検出した上層遺構面(第103図左)とこれを除去して検出した下層遺構面(第103図右)の2遺構面を確認した。上層遺構面では多数の耕作溝を検出した。耕作溝の主軸はおおむね北に対して35～45°東に振る。下層遺構面では縄文時代の土坑S K02、奈良時代の土坑ないし自然地形の落ち込み3か所(S K01・77、S X131)、時期不明の溝S D90などを検出した。調査は平成15年度に完了し、平成16年度は排土置き場として利用した。

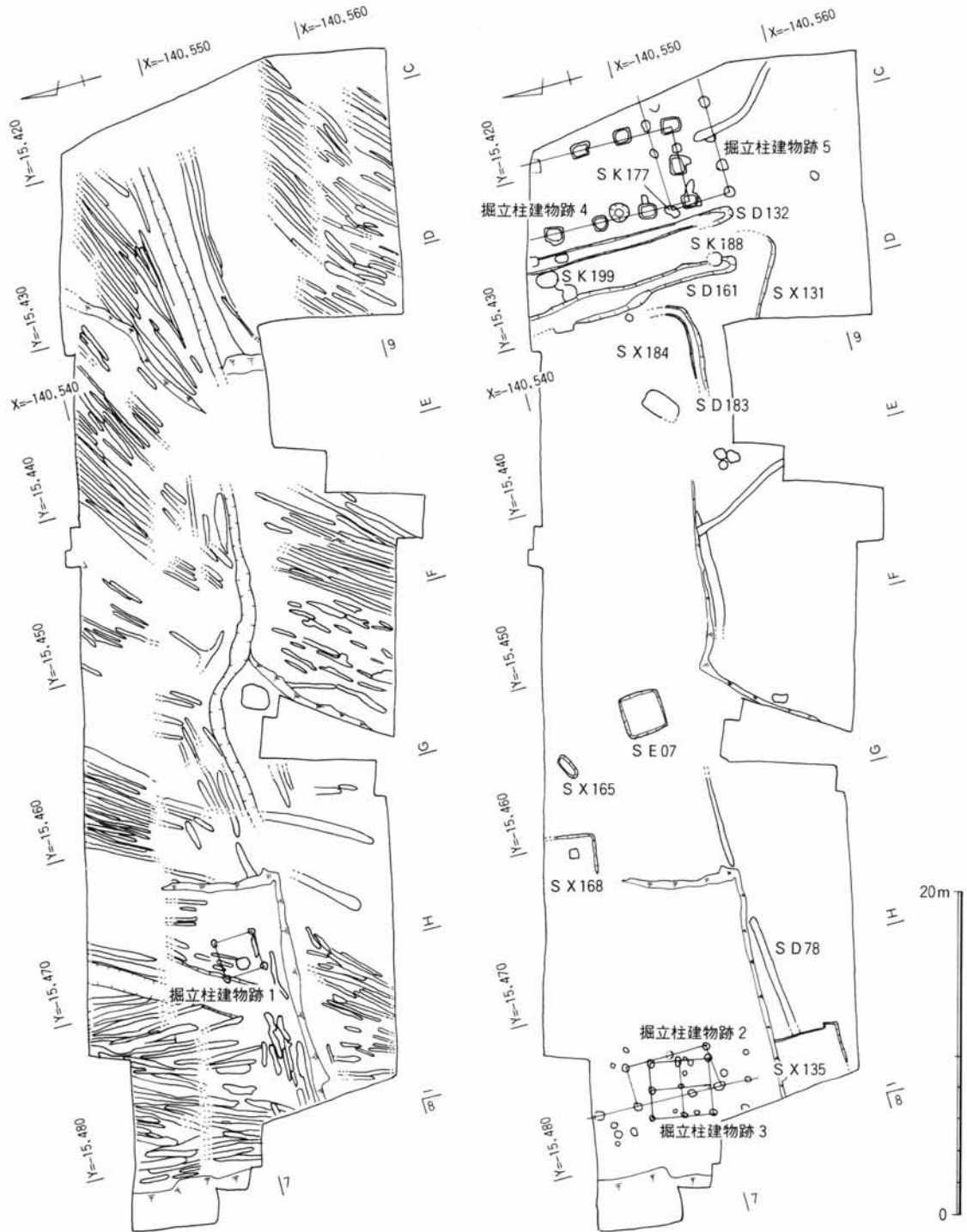
#### ②第2・10トレンチ(第103図)

第2トレンチは第1トレンチの西側に、総延長60m、幅3mの「F」字形の調査区を設定した。また、第10トレンチは第1トレンチの北側、第2トレンチの東側に、長さ10m、幅3mの調査区を設定した。両トレンチとも遺構が検出されたことから拡張した。平成16年度は、平成15年度の調査成果を受けて、第1トレンチと第2トレンチの北側、第10トレンチの周辺を拡張し、この部分も第2トレンチとして扱った。基本層序は第I～IV層・第VI層で、第V層は調査区の西端のみで確認した。遺構は第III層を除去して検出した上層遺構面(第103図左)と、これを除去して検出した下層遺構面(第103図右)の2遺構面を確認した。上層遺構面では多数の耕作溝を検出した。耕作溝の主軸はおおむね北に対して10～35°東に振る。下層遺構面では、弥生時代と推定される土坑1基(S K191)、古墳時代の土壙墓S X165、奈良時代の掘立柱建物跡4棟(建物跡2～5)、溝3条(S D132・157、S D161・187、S D78)、井戸1基(S E07)、焼土坑3基(S K177・188・199)、中世の不明遺構1か所(S X135)、時期不明の建物跡1棟(建物跡1)、不明遺構1か所(S X168)などを検出した。

#### ③第3・4トレンチ(第104図)

第2トレンチの西側に設定した。第2トレンチとの間には農業用基幹水路と現用農道があるため、約17m分について調査を実施することができなかった。調査区として、第3トレンチは総延

長70m、幅3m、第4トレンチは長さ15m、幅3mを設定し、どちらも遺構が検出されたことから拡張した。第4トレンチは第3トレンチに含めることとし、平成15年度に東半部を対象として、また、平成16年度に西半部を対象として実施した。基本層序は第Ⅰ～Ⅳ層・第Ⅵ層で、第Ⅴ層は、平成15年度調査区の北側と西側の一部で確認したにとどまる。遺構は第Ⅲ層を除去して検出した上層遺構面(第104図左)と、これを除去または第Ⅴ層を除去して検出した下層遺構面(第104図右)の2遺構面を確認した。上層遺構面では多数の耕作溝を検出した。耕作溝の主軸はおおむね北に



第103図 第1・2・10トレンチ検出遺構配置図

対して40°東に振る。下層遺構面では、弥生時代の竪穴式住居跡3基(S B140・S B142・S B230)、溝2条(S D59・143)、奈良時代の土坑(S K227)、自然流路1条(S D73)、溝1条(S D70)などを検出した。

④第5トレンチ

第5トレンチは、第3・4トレンチの西側約40mに設定した。第3トレンチとの比高差は約3mを測る。調査区は長さ8m、幅3mの長方形を呈する。現地表下10~15cmで安定した茶褐色粘



第104図 第3・4トレンチ検出遺構配置図

質土を検出した。試掘では顕著な遺構・遺物はみられなかったが、ほぼ同様の層位を呈する第6トレンチでは遺物が出土したことから、平成16年度に拡張して調査を実施した。

⑤第6トレンチ

第5トレンチの西側約13mに設定した。調査区は長さ15m、幅3mの長方形を呈し、部分的に拡張した。第5トレンチと同様に安定した淡茶褐色粘質土を確認し、遺存状態の良い瓦器碗1点(272)が出土したことから、平成16年度に拡張して調査を実施した。しかし、第5トレンチとともに、顕著な遺構は確認できなかった。また、遺物の出土もごくわずかであった。なお、第6トレンチの南側では旧河道と思われる砂礫層を確認した。

⑥第7トレンチ

第6トレンチの西側約22mに設定した。第6トレンチとは、比高差は約2mを測る。調査区は長さ8m、幅3mの長方形を呈する。層序は上層に砂礫層、下層に粘土層が堆積する。堆積状況から旧河道にあたと考えられる。遺物はごくわずかであるが出土した。

⑦第8トレンチ

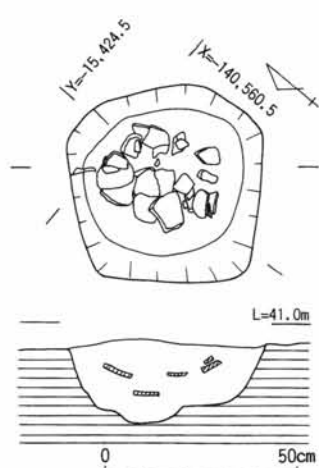
第7トレンチの西側約13mに設定した。調査区は長さ10m、幅3mの長方形を呈する。層序は現耕作土・床土の下に過去の耕作土と思われる堆積層があり、その下層にはシルト層ないし粘土層となっている。堆積状況から湿地状の地形を呈していたと考えられる。遺物はごくわずかであるが出土しており、軒丸瓦の瓦当部の小破片(501)などがある。

⑧第9トレンチ

第8トレンチの西側約15mに設定した。調査区は5m四方の矩形を呈する。基本層序は第8トレンチとほぼ同じである。堆積状況から、第8トレンチと同様、湿地状の地形を呈していたと考えられる。遺物は下層から中世の土器片などがわずかに出土した。

5. 検出遺構

以下、各トレンチで検出した遺構を時代順に報告する。なお、ここで報告する遺構は、原則として、下層遺構面検出の遺構である。



第105図 土坑S K 02実測図

(1)縄文時代の遺構

明らかに縄文時代の遺構といえるのは第1トレンチで検出した土坑S K 02のみである。

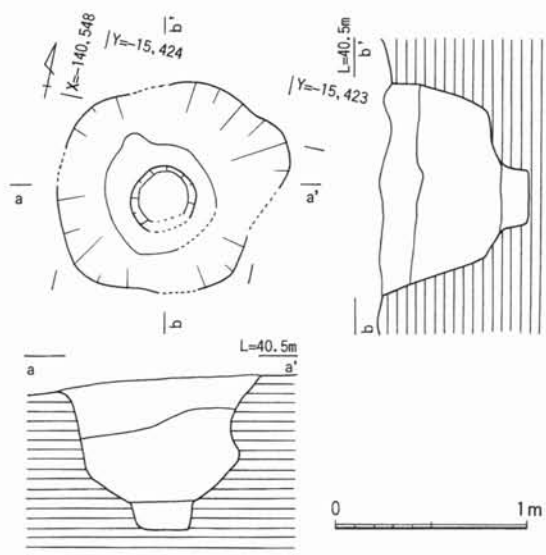
土坑S K 02(第105図) 第1トレンチ中央付近、C 9区で検出した。やや不整形な円形を呈し、直径50cm前後、深さ20cmを測る。土坑内からは縄文土器深鉢1点(1~8)がつぶれた状態で出土しており、土坑内に埋納されていたと考えられる。出土土器から縄文時代後期と考えられる。

(2)弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、土坑1基・竪穴式住居跡3基・溝2条を検出

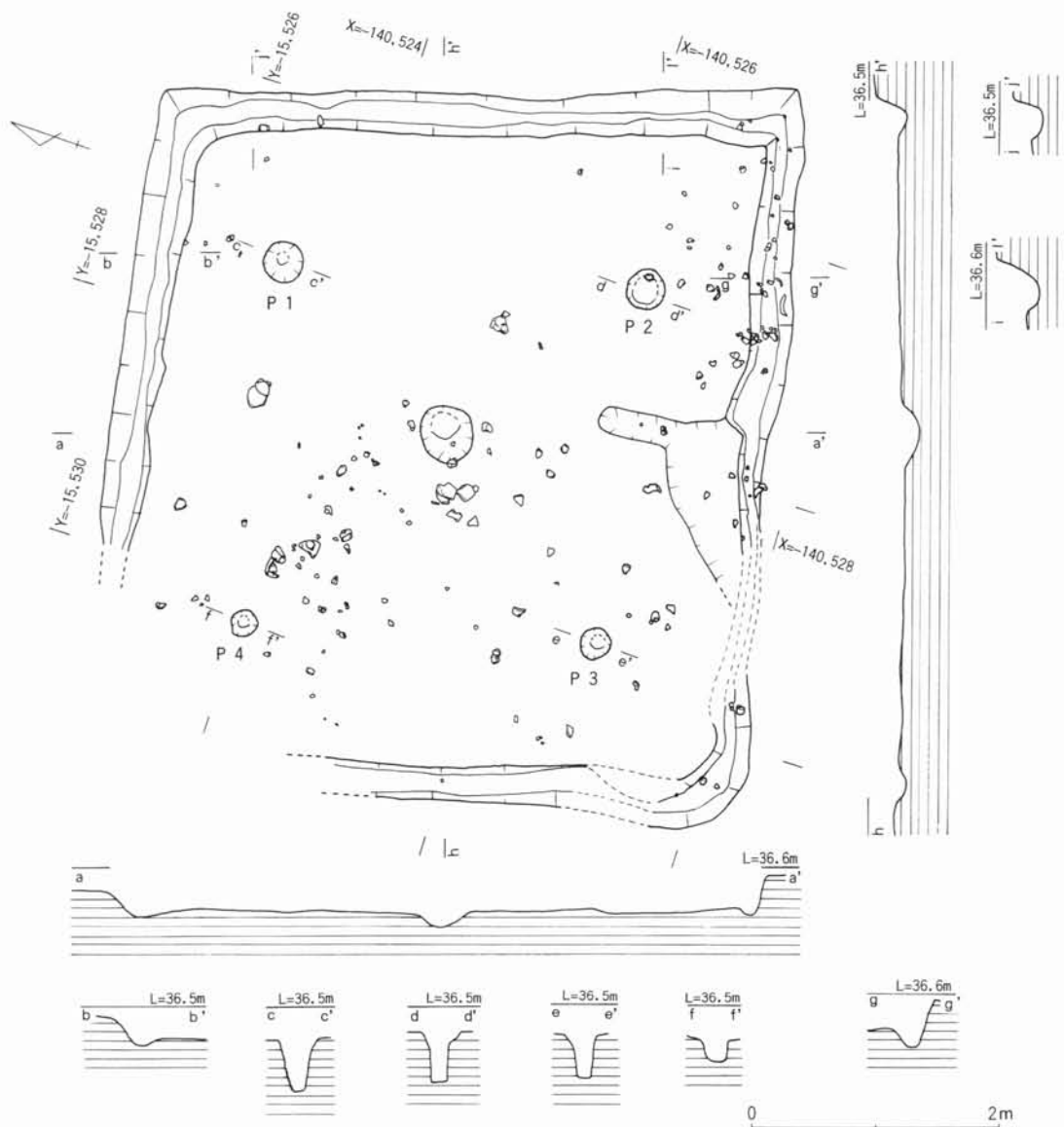
した。土坑は弥生時代中期の可能性があるが、他の遺構はいずれも弥生時代後期末ないし庄内式期と考えられる。

**土坑 S K 191 (第106図)** 第2トレンチ東端、C7区で検出した。平面形はやや不整形な円形を呈し、直径1.1~1.2m、深さ0.8mを測る。土坑底には直径30cm、深さ14cmの柱穴状の掘り込みがある。縄文時代の落とし穴の可能性もあるが、土坑内から出土した遺物は弥生時代の土器片(弥生時代中期か)と考えられる。なお、出土遺物は細片のため図示することができなかった。



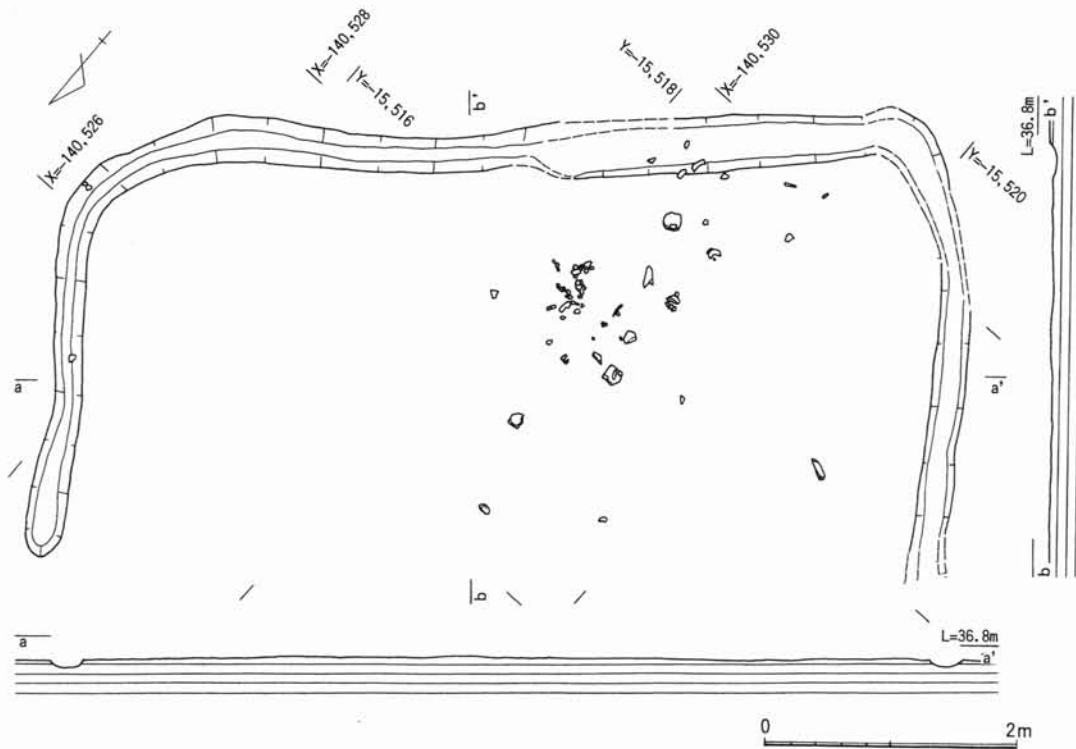
第106図 土坑 S K 191 実測図

**竪穴式住居跡 S B 140 (第107図)** 第3トレン

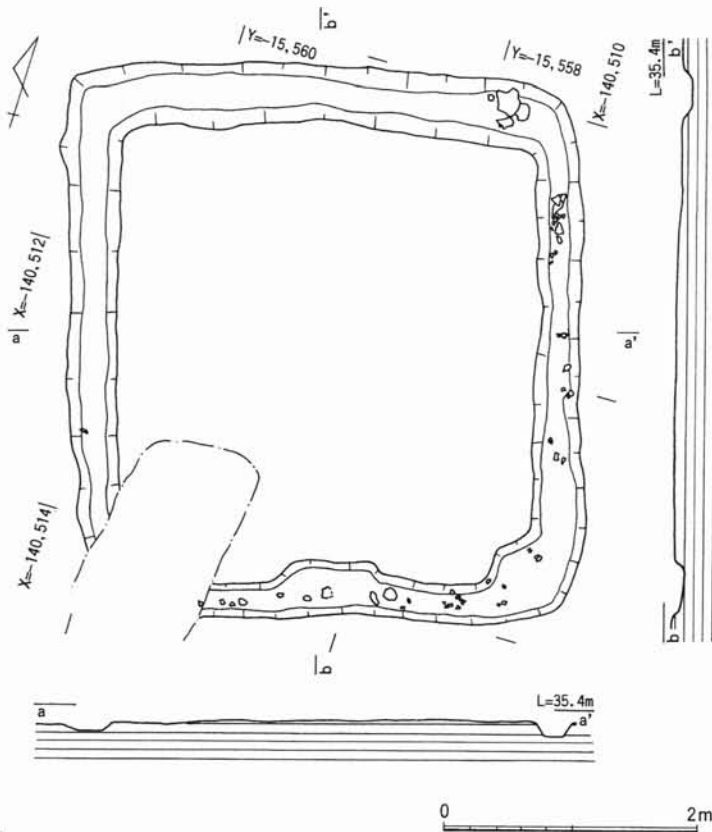


第107図 竪穴式住居跡 S B 140 実測図





第108図 竪穴式住居跡 S B 142実測図



第109図 竪穴式住居跡 S B 230実測図

チ中央付近、M5・N5区で検出した。平面形はややいびつな方形を呈し、平行四辺形に近い。一辺5.2~6.0mを測る。東側の遺存状況が良好で、深さ25cmを測る。西側に向かって削平が著しく、北西隅は遺存しない。周壁溝は全周し、深さ6~15cmを測る。住居跡の中央には炉跡があり、炭が堆積し、部分的に赤色に変色していた。炉跡はほぼ円形を呈し、直径45cm、深さ13cmを測る。主柱穴は4本確認した。P1~3は深さ40cm前後を測るが、P4は25cmしかない。遺物は、埋土ならびに床面上から比較的多数の弥生土器(9~31)が出土した。いずれも弥生時代後期末ないし庄内式の土器である。

竪穴式住居跡 S B 142(第108図)

第3トレンチ東半部、L5・M5区で検出した。ただし、検出できたのは周壁溝と考えられる溝が1条だけである。溝は、総検出長13m、幅25~40cm、深さ5cm前後を測り、「コ」字形にめぐらる。長辺の長さが6.8mを測ることから住居跡の周壁溝ではなく、住居の外周をめぐらる排水溝の可能性も考えられる。主柱穴・炉跡は確認できなかった。遺物は床面直上および掘削中にまとまって弥生土器(32~37)が出土した。いずれも弥生時代後期末ないし庄内式の土器である。

**竪穴式住居跡S B 230(第109図)** 第3トレンチ西端、P4区で検出した。平面形は方形を呈するが、周壁は完全に削平されており、周壁溝のみを検出した。住居跡の直上は第Ⅲ・Ⅳ層にあたり、須恵器や瓦器などが出土している。長辺4.3m、短辺4.0mを測り、周

壁溝は幅30~45cm、深さ10cm前後を測る。主柱穴・炉跡は、竪穴式住居跡S B 142と同様、確認できなかった。遺物は、周壁溝の東辺と南辺を中心に弥生土器(38~42)が出土したが、遺存状態は良好ではなく、図示できるものは少なかった。いずれも弥生時代後期の土器である。

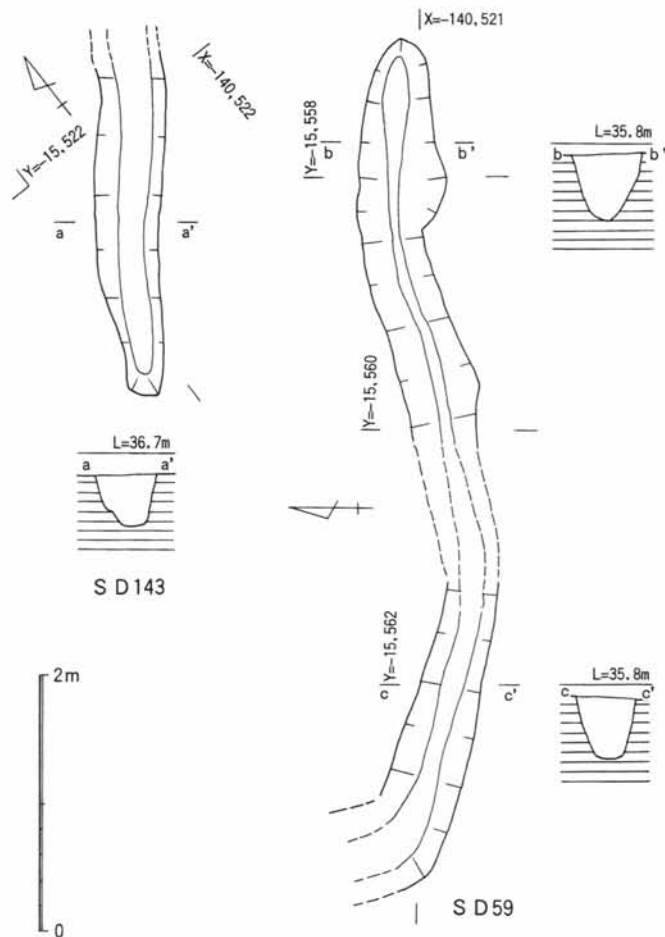
**溝S D 143(第110図左)** 第3トレンチ中央部やや北寄り、M5区で検出した。検出長2.7m、幅0.5m、深さ40cm前後を測る。幅に対して深く掘られた溝で、断面形は逆台形状を呈する。北側は後世の削平のため不明であるが、南端は急に途切れている。弥生土器の破片(43・44)が出土しており、弥生時代後期のものである。

**溝S D 59(第110図右)** 第3トレンチ西端部、P5・Q5区で検出した。検出長6.6m、幅0.5m、深さ40~50cmを測る。溝S D 143と同様、幅に対して深く掘られた溝で、断面形は緩い「V」字状を呈する。西側は後世の削平のため不明であるが、東端は急に途切れている。弥生土器の破片(45・46)が出土しており、弥生時代後期のものである。S D 59とS D 143は集落内の排水溝だった可能性がある。

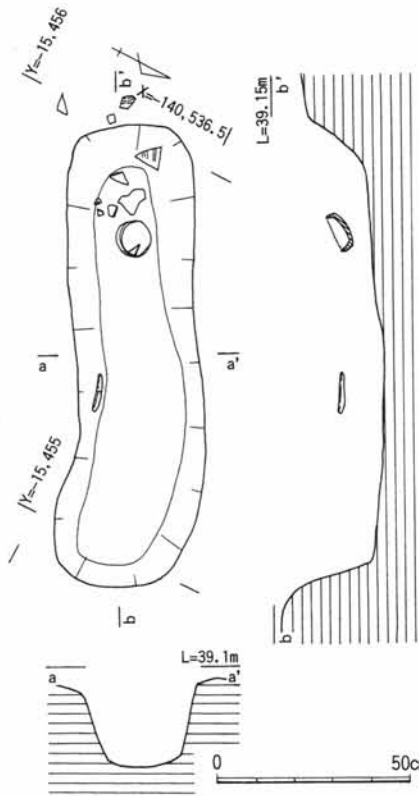
### (3)古墳時代の遺構

明らかな古墳時代の遺構としては、第2トレンチで検出した土壙墓S X 165がある。

**土壙墓S X 165(第111図)** 第2トレンチ中央部北辺寄り、F6区で検出した。平面形は隅丸長



第110図 溝S D 59・143実測図



第111図 土墳墓 S X 165実測図

方形を呈し、全長1.2m、幅0.35m、深さ25cmを測る。断面形は不明瞭な「U」字形を呈する。埋土は暗茶褐色土である。遺物は、土壌内から完形品の須恵器蓋1点(73)と、刀子(563)が出土したほか、検出面で須恵器壺(74)の破片が出土した。出土した須恵器蓋から古墳時代後期前半と考えられる。

#### (4)奈良時代の遺構

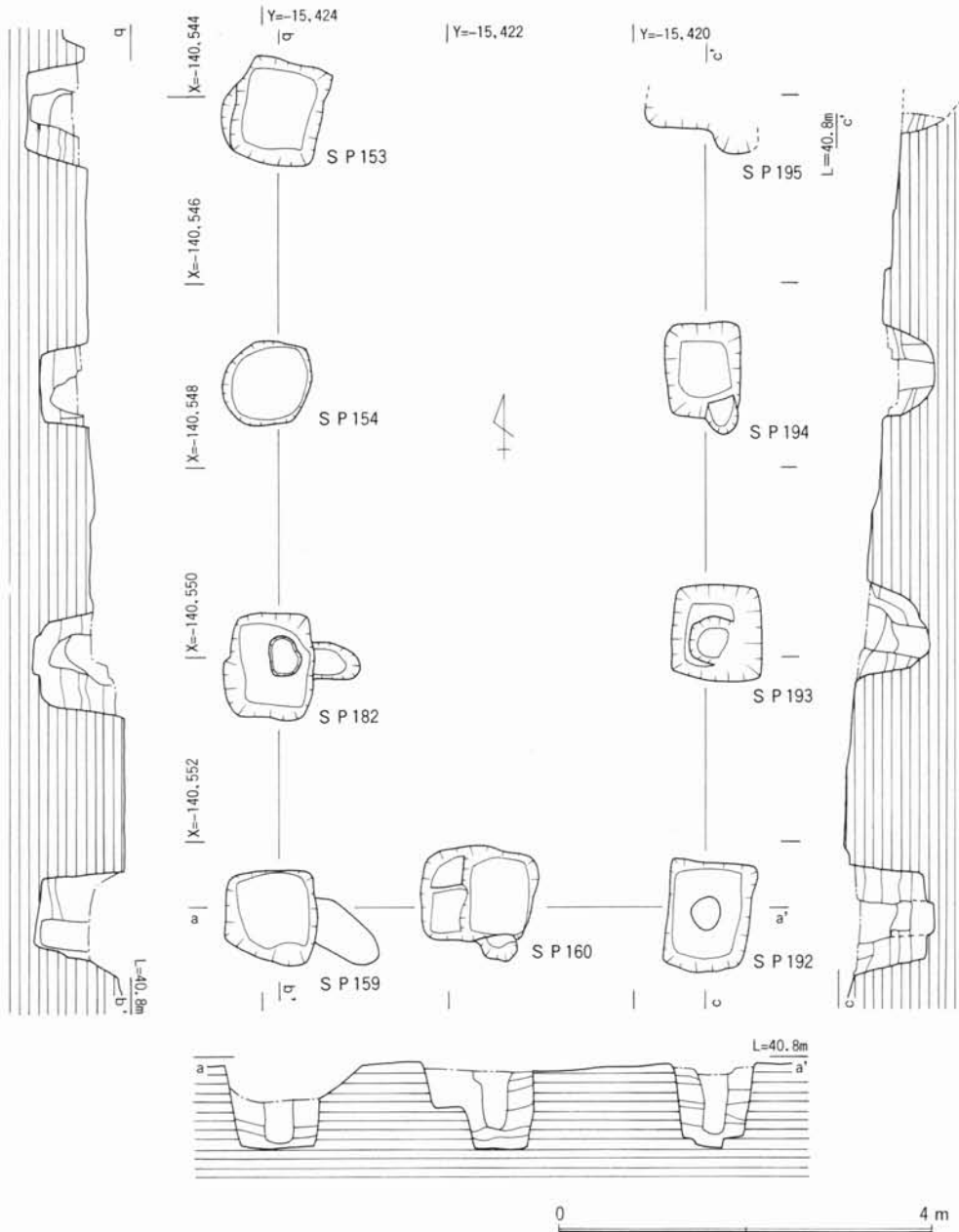
奈良時代の遺構としては、掘立柱建物跡4棟、井戸1基、溝4条、土坑4基、流路1条などを検出した。

**掘立柱建物跡4**(第112図) 第2トレンチ東北端、B7・B8・C7・C8区で検出した。一棟の建物と考えられる9つの柱穴を検出し、桁行4間以上(9.2m以上)、梁間2間(4.8m)に復原できる。北側は妻柱がみられないことから調査区外にのびると考えられる。建物の主軸は、南北方向である。柱穴は一辺が0.8mないし1.2mを測るややいびつな方形もしくは長方形の掘形に、直径30~40cmの柱痕を確認した。また、柱穴の深さは0.5~0.9mを測る。柱間寸法は、

梁間は8尺等間、桁行きはややばらつきがみられ、9ないし10尺を測る。柱穴S P 154・193を除いて、柱を抜き取った痕を確認した。柱穴からは須恵器や土師器のほか、瓦片(87~91・491・492・504)なども出土したが、量的には多くない。柱穴S P 153の柱痕内から出土した須恵器鉢と溝S D 132の整地土上面から出土した破片(91)が接合した。柱穴S P 182の掘形埋土から出土した土師器高杯とS D 132の埋土(黒褐色粘質土)から出土した破片(89)が接合した。柱穴S P 194では、抜き取り穴から1/3程度欠損する平瓦(504)が出土した。

**掘立柱建物跡5**(第113図) 第2トレンチ東端、B8・C8区で検出した。当初、掘立柱建物跡4の南限を画する柱列と理解していたが、北側にほぼ対応する柱穴を確認したことなどから、掘立柱建物跡4に重複する建物跡と判断した。一棟の建物と考えられる8個の柱穴を検出した。西側桁行きの柱穴1基については検出できなかった。桁行3間以上(5.6m以上)、梁間2間(3.8m)に復原できる。また、東側は妻柱がみられないことから、さらに東にのびると考えられる。建物の主軸は、北に対して1°西に振る。柱穴は直径または一辺が0.5m前後の、いびつな円形ないし方形を呈する。深さにばらつきがみられ、20~50cmを測る。柱穴の並びはやや不揃い、柱間寸法も6尺ないし7尺と不揃いである。遺物は柱穴S P 256から土師器壺B(141)が出土したのみである。遺構の重複関係から、掘立柱建物跡5が掘立柱建物跡4に先行して建てられたと考えられる。

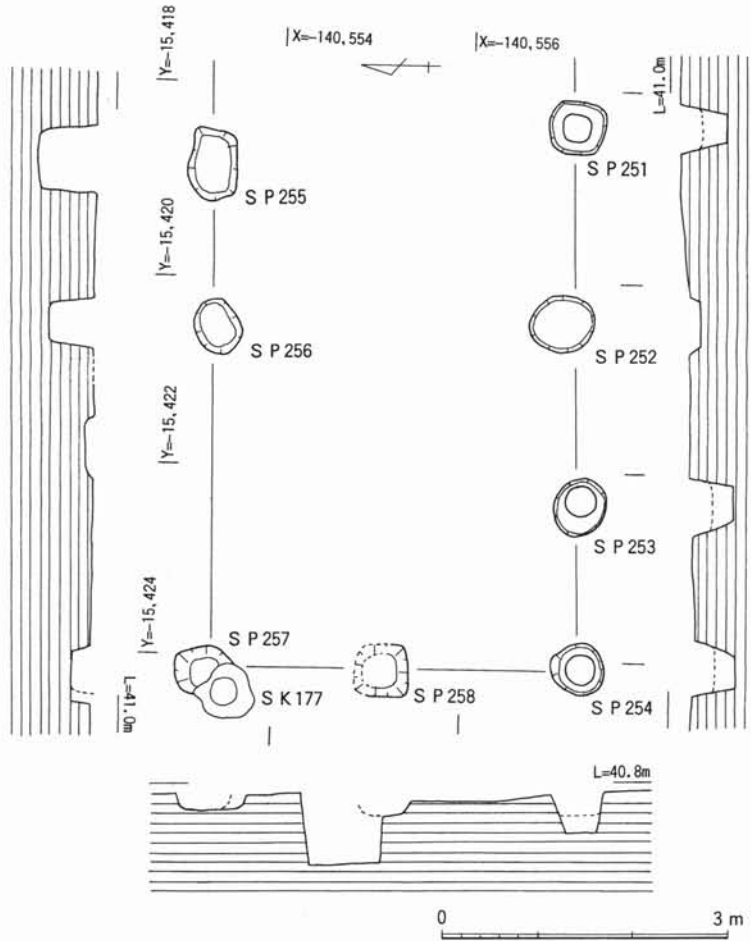
**溝S D 132・157**(第114図) 同一地点で確認された溝で、第2トレンチ東半部、C7・C8区で検出した。なお、溝S D 132は平成15年度の調査で、第10トレンチの東端でその西肩3m分を



第112図 掘立柱建物跡4実測図

検出していたが、その方位がほぼ南北方向であること、奈良時代の遺物が出土したことなどから、平成16年度にその周辺の調査が必要と判断された経過がある。S D132は、検出長12.8m、幅0.8m、深さ40cmを測り、第2トレンチと第1トレンチの境界付近でなくなっている。溝の主軸は、北に対して1°西に振る。非常に直線的な溝で、かつ深く掘られている。溝の断面形は逆台形状を呈するが、南端付近では緩い「U」字状を呈する。溝底は、南から北に向かって傾斜している。S D132からは土器片や瓦片(92~97・473~480)が出土した。

溝S D132の土層を観察すると、下層は黒褐色粘質土で、溝の堆積と考えられるが、上層は黄褐色粘質土で、整地土と考えられる。同様の土層は、溝S D161のほか、井戸S E07でも確認できる。溝S D132の整地土の上層に、ほぼ同一地点で溝S D157が新たに掘削されている。S D157は、検出長3.5m、幅1.5m、深さ10~15cmを測る。溝の主軸は、北に対して1°西に振る。溝



第113図 掘立柱建物跡5実測図

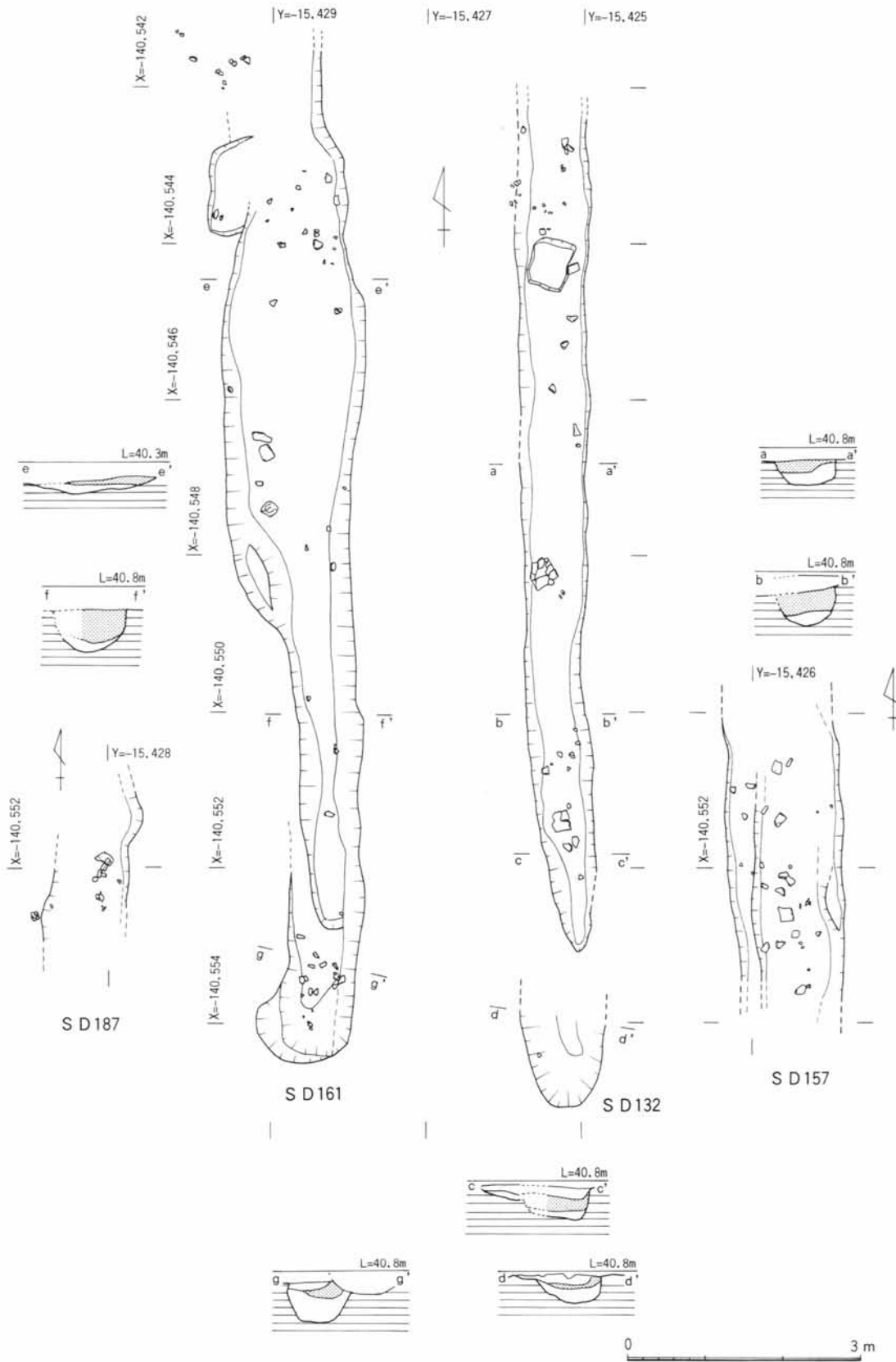
の北延長部は後世の田畑の造成に伴い、すでに削平されていた。S D 157からは土器片や瓦片(115~119・481~484)などが出土した。S D 157は、幅が広く深さも浅いことから、近接する掘立柱建物跡4の雨落ち溝の可能性もあるが、上述の出土土器の接合関係から、掘立柱建物跡4とS D 132が同時に存在したと考えられる。ただ、溝S D 132は掘立柱建物跡4に先行して設けられていた可能性もある。

溝S D 161(第114図) 溝S D 132の西側2mの位置でほぼ並行して検出した溝である。検出長13.0m、幅0.8~1.8m、深さ20~50cmを測る。溝の主

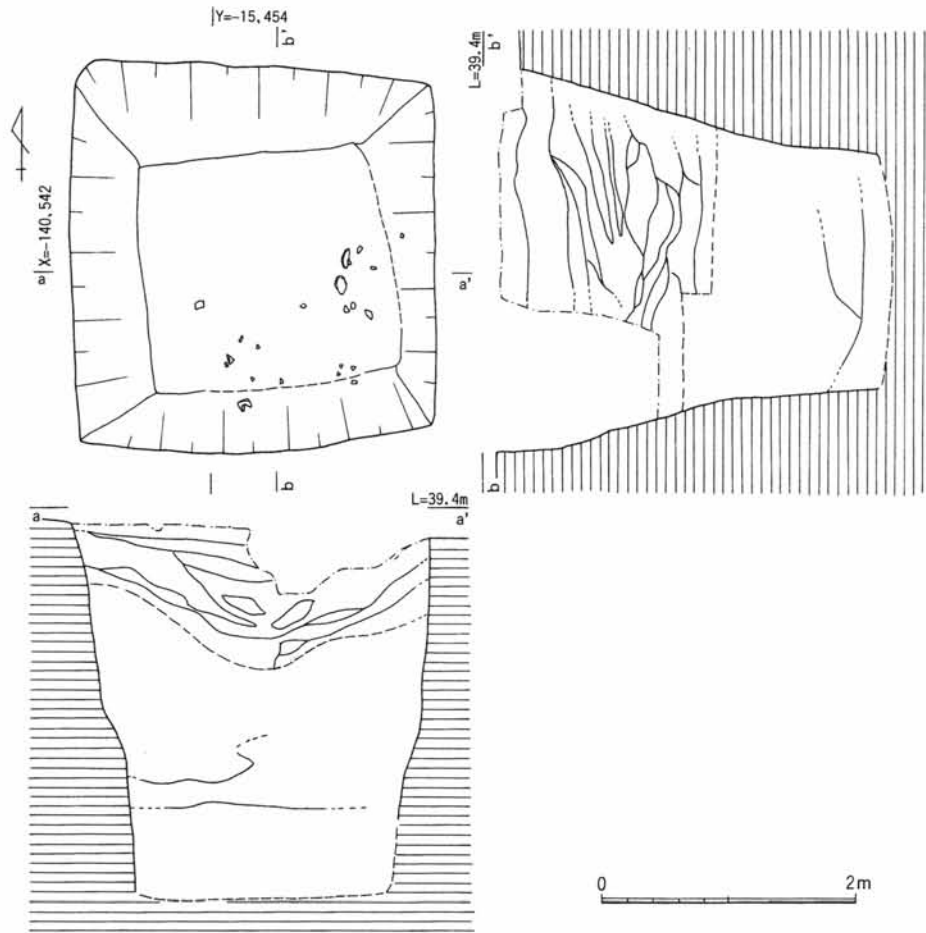
軸は、北に対して2°西に振る。溝S D 161は、南側でS D 132と同様に、直線的、かつ深く掘られている状況を確認したが、北側では幅が広がっている。この点は、溝の作り替えなどの可能性もあるが、新旧関係は確認できなかった。溝S D 157からは、土器片や瓦片(98~110・485~490)などが出土した。なお、S D 132とS D 161は構造が類似し、かつ並行することから、同時に存在していたと考えられ、両者の間に築地塀などの区画施設が設けられていた可能性もある。

溝S D 187(第114図) 溝S D 161と重複して検出されたが、掘形は他の溝に比べると不明瞭であることから土坑の可能性もある。検出長1.5m、幅1.0m、深さ20cmを測る。溝S D 187からは土器片(120~123)が出土した。

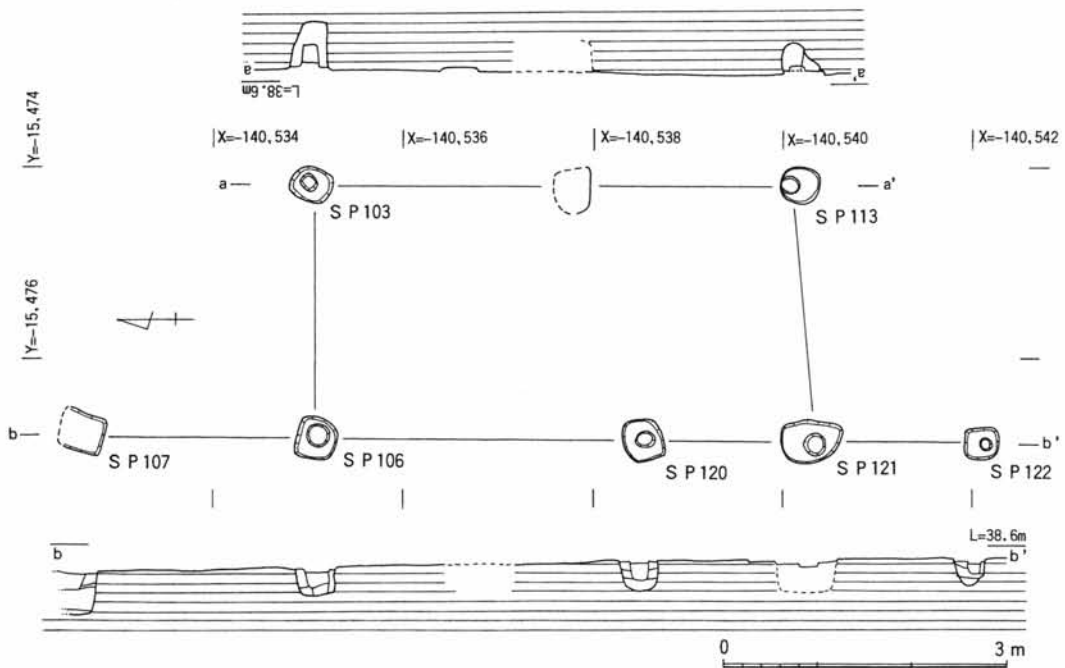
井戸S E 07(第115図) 第2トレンチ中央部、F 7区で検出した。一辺3.0mを測るほぼ方形の掘形をもち、各辺がほぼ正確に東西南北を指向する。また、検出面からの深さは3.0mを測る。井戸S E 07の周辺では、奈良時代の遺構は検出されていないが、これは田畑の造成などに伴って周辺が大きく削平されたため、深さのある井戸だけが遺存したものと考えられる。井戸の埋土は、下層が黒灰色ないし青灰色のシルトまたは粘土層、上層が黒灰色シルトがブロック状に混じる淡黄褐色粘質土である。上層は厚さが1.5mに達し、土層の変化が少ないことから短期間に埋められたと考えられる。この埋土は溝S D 132や溝S D 161の整地土に類似している。したがって、井戸は意図的に埋められたと考えられる。また、井戸を底まで掘削したところ、井戸は湧水層まで



第114図 溝S D 132・161・157・187実測図



第115図 井戸 S E07実測図



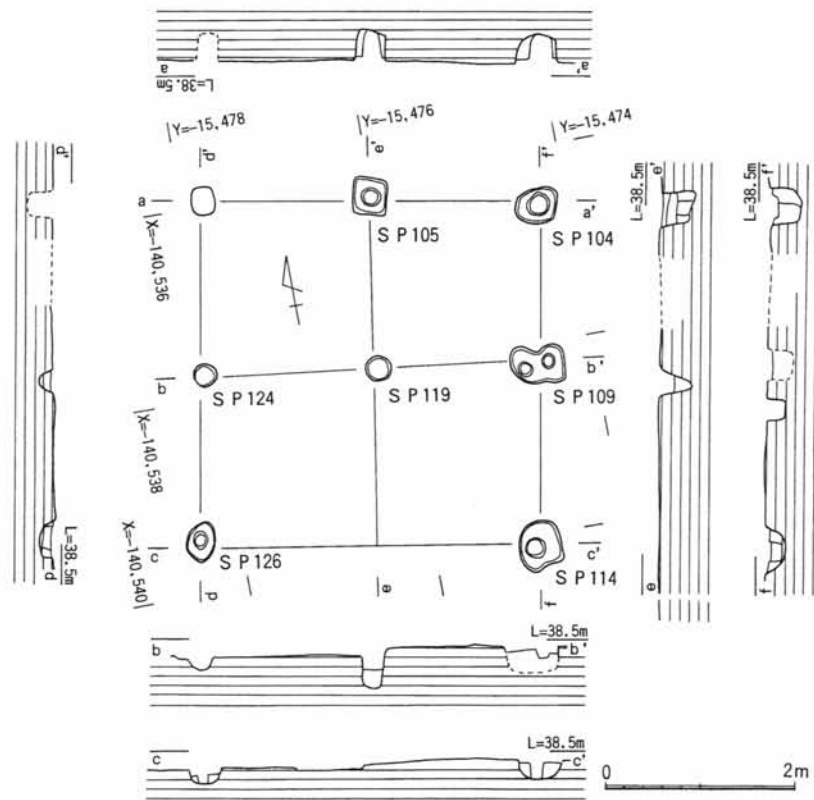
第116図 掘立柱建物跡 2 実測図

達していないことがわかった。このことから、井戸としては実際に機能していなかったと考えられる。井戸の最上層から土器片(111~114)がごくわずかに出土した。

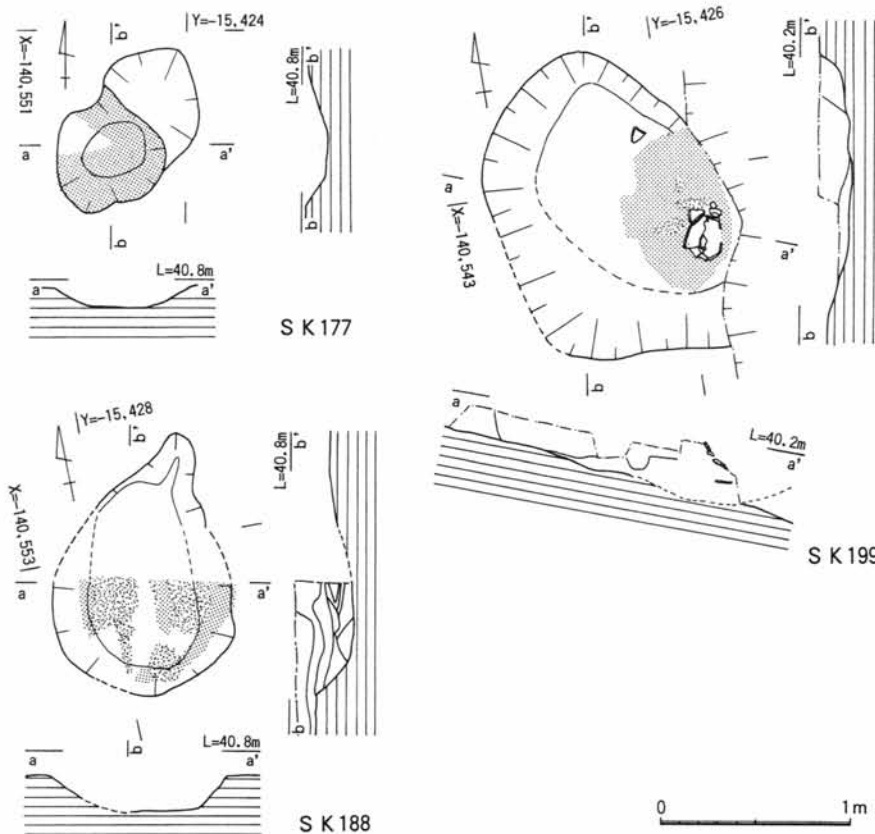
掘立柱建物跡2(第116図) 第2トレンチ西端、H6区で検出した。南北2間(5.1m)、東西1間(2.65m)以上の建物跡と考えられるが、西側の柱穴S P 106・121とほぼ主軸や柱筋をそろえて柱穴S P 107・120・122があり、柵状をなしていることから、門跡とそれ

に取り付く柵状の施設の可能性も考えられる。建物跡の主軸は、北に対して1°東に振る。S P 106・121からは土器片(146)が出土した。

掘立柱建物跡3(第117図) 第2トレンチ西端、H6区で検出した。2間四方の総柱の建物跡と考えられるが、南辺中央の柱は未確認である。南北3.6m、東西3.5mを測る。建物の主軸は、北

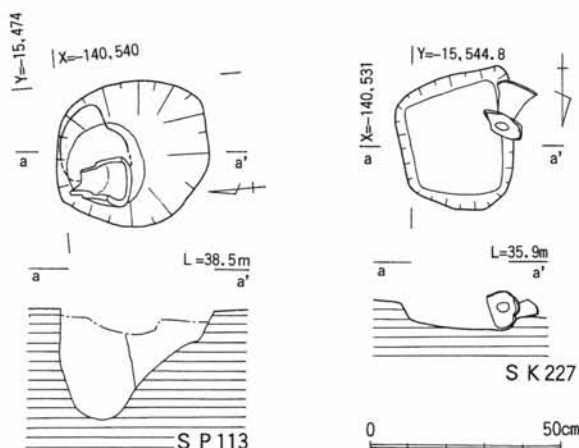


第117図 掘立柱建物跡3実測図



第118図 焼土坑S K 177・188・199実測図





第119図 柱穴SP113・土坑SK227実測図

第119図 柱穴SP113・土坑SK227実測図  
 第3トレンチ東半部、C8区で検出した。長軸長1.4m、短軸長1.0、深さ20cmを測る不整形な土坑である。土坑底の一部が赤く変色し、炭が堆積している。出土遺物としては須恵器片(128)がある。

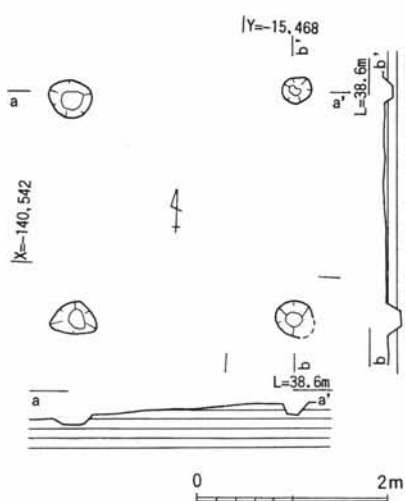
**焼土坑SK177**(第118図左上) 第3トレンチ東半部、C8区で検出した。直径50cm前後、深さ15cmを測る不整形な円形を呈する小規模な焼土坑である。掘立柱建物跡5の柱穴SP257と重複し、焼土坑SK177の方が新しい。土坑底の一部が赤く変色する。遺物は出土していない。

**焼土坑SK188**(第118図左下) 第3トレンチ東半部、C8区で検出した。長軸長1.6m、短軸長1.0m、深さ20cmを測る楕円形を呈する。溝SD132と重複し、焼土坑SK188の方が新しい。土師器甕1点(129)がほぼ完形で出土した。

**溝SD183・不明遺構SX184** 2トレンチ東半部、D7・D8区で検出した。溝SD183は、溝SD161の西側約1.5mのところ検出した検出長6.5m、幅0.5～0.8m、深さ10cm前後を測る浅い溝で、不明遺構SX184は、SD183によって区画された広場状の平坦面である。SD183は「L」字状に屈曲し、その主軸はおおむね正方位を指向するが、掘立柱建物跡4・5や溝SD132・161などとの関係は不明である。遺物はSX184から出土した須恵器片(142)がある。

**土坑SK01・77** 第1トレンチ、C8・C9区で検出した。深さが2～5cmと浅い落ち込み状の遺構である。自然地形の可能性もあるが、埋土から奈良時代の遺物(130～135)が出土した。

**落ち込み状遺構SX131** 第1トレンチから第2トレンチにかけてのC8・D8区で検出した。浅い落ち込み状の遺構であるが、第1トレンチから第2トレンチに向かって緩く傾斜して、遺物



第120図 掘立柱建物跡1実測図

包含層の可能性もある。埋土からは土器片・瓦片(136～139・467)などが出土した。

**落ち込み状遺構SX185** 第2トレンチ東端、B8・C8区で検出した。掘立柱建物跡4の柱穴SP192と重複していた。SP192は落ち込み状遺構SX185の埋土を除去して検出した。SX185は長さ2.7m、幅2.1mの範囲に広がり、深さは最大で15cmである。遺物としては須恵器片(143・144)などがある。

**流路SD73** 第3トレンチ西半部、P4・P5区で検出した。調査区を南東から北西に向かって横断しており、検出長22mを測る。幅5.5～7.8m、深さ1.8mの流路が複数切

り合っている(流路S D73A~C)。出土遺物は少ないが、弥生時代から奈良時代までのもの(51・68・153~165・496~498)がある。弥生・古墳時代のもは混入と考えられ、おもに奈良時代に利用されたと考えられる。なお、流路S D73Aでは、幅0.75~1.3m、深さ0.7~0.9mの断面台形状を呈している状況が確認できた。形状から人為的な掘削に伴う可能性がある。最終的には奈良時代以降、中世まで埋没したと考えられる。

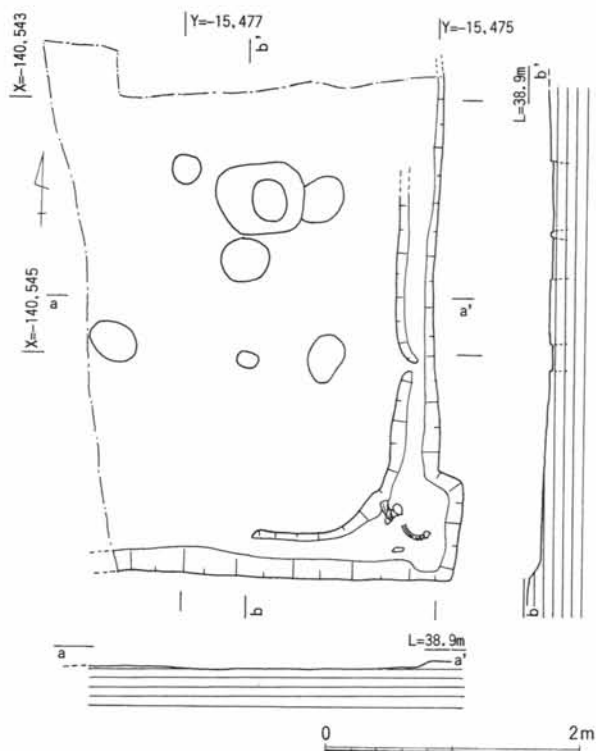
**溝S D70 第3トレンチ西半部、O4・O5区で検出した。**流路S D73の東側にほぼ接し、一部重複して検出した。検出長10m、幅0.6~1.3m、深さ10~30cmを測る。検出状況としては蛇行しており、流路S D73に伴う自然作用による溝の可能性ある。出土遺物としては土器・瓦片(162~165・498)などがある。

**土坑S K227(第119図) 第3トレンチ中央付近、O4区で検出した。**平面形は隅丸方形を呈し、長辺0.35m、短辺0.3m、深さ10cmを測る。土坑からは、長頸壺の口頸部(151)が出土した。

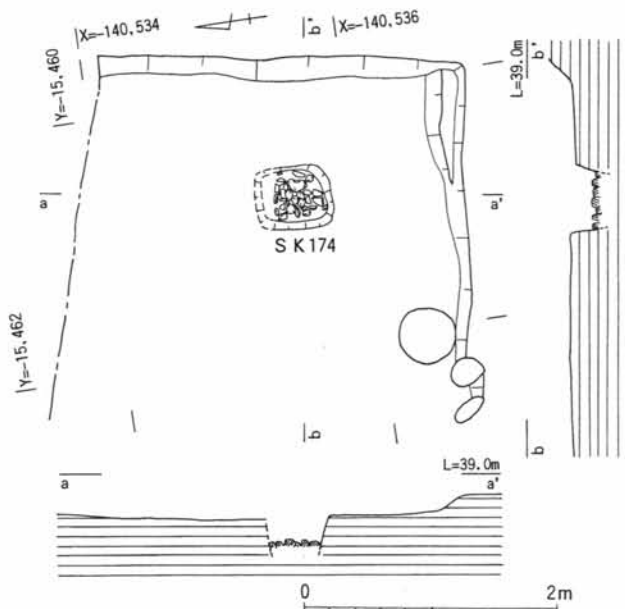
(5)中世・時期不明の遺構

**掘立柱建物跡1(第120図) 第2トレンチ西半部、H6区で検出した。**1間(南北2.4m、東西2.3m)四方と考えられる建物跡である。建物の主軸は、北に対して2°西に振る。埋土は灰色粗砂ないし砂礫で、柱痕は確認できなかった。遺物は奈良時代の須恵器片が出土したが、埋土の状況から中世以降のものだと判断した。

**不明遺構S X135(第121図) 第2トレンチ南西隅、H7区で検出した。**掘形はほぼ正方位を指向するが、西端は調査区外にのび、北端は大きく削平されている。南北4.0m以上、東西2.7m以上、深さ10cmを測る。掘形に沿って浅い溝が断続的にめぐる。また、遺構内には土坑などの痕跡



第121図 不明遺構S X135実測図



第122図 不明遺構S X168・土坑S K174実測図

を確認したが、詳細は不明である。遺物は南東隅で、土師器羽釜(377)などが出土した。

不明遺構 S X 168・土坑174(第122図) 第2トレンチ西半部北辺、G 6区で検出した。S X 168は、検出当初、竪穴式住居跡と考えたが、掘削の結果、周壁溝や柱穴が検出されなかったことから、遺構の性格については不明とせざるを得なくなった。南北2.9m以上、東西2.9m、深さ20cmを測る。遺構の中央には一辺50cmほどの土坑 S K 174があり、その内部に拳大の礫が充填されていた。どちらからも遺物は出土しなかった。

## 6. 出土遺物

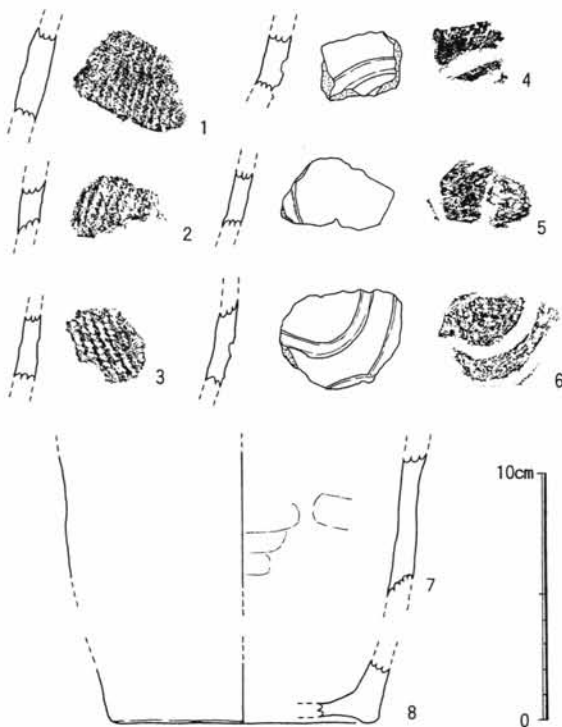
### (1) 土器

今回の調査では縄文時代から近世に至るまでの土器が出土した。ただし、遺構の削平が著しく、遺構よりも遺物包含層出土のものが多い。なお、出土土器の胎土・色調・焼成は特に記すべき場合に限って記述する。

#### 1) 縄文土器(第123図)

1～8は、いずれも土坑 S K 02から出土した。同一個体と思われるが、磨滅が著しく接合復原できない。器種は深鉢と思われる。1～3は外面に縄文、内面にナデを施す。4～6は外面に幅0.5cm前後の沈線を施した破片である。7・8は接合しないが、底部とそれに続く体部下半の破片である。基本的に内外面ともナデ調整である。胎土は1～2mm程度の砂粒を比較的多く含む。焼成は良好である。色調は茶褐色ないし黄灰色を呈する。4～6の破片から、いわゆる磨り消し縄文をもつ土器で、縄文時代後期中津式から福田 K 2 式のものと考えられる。

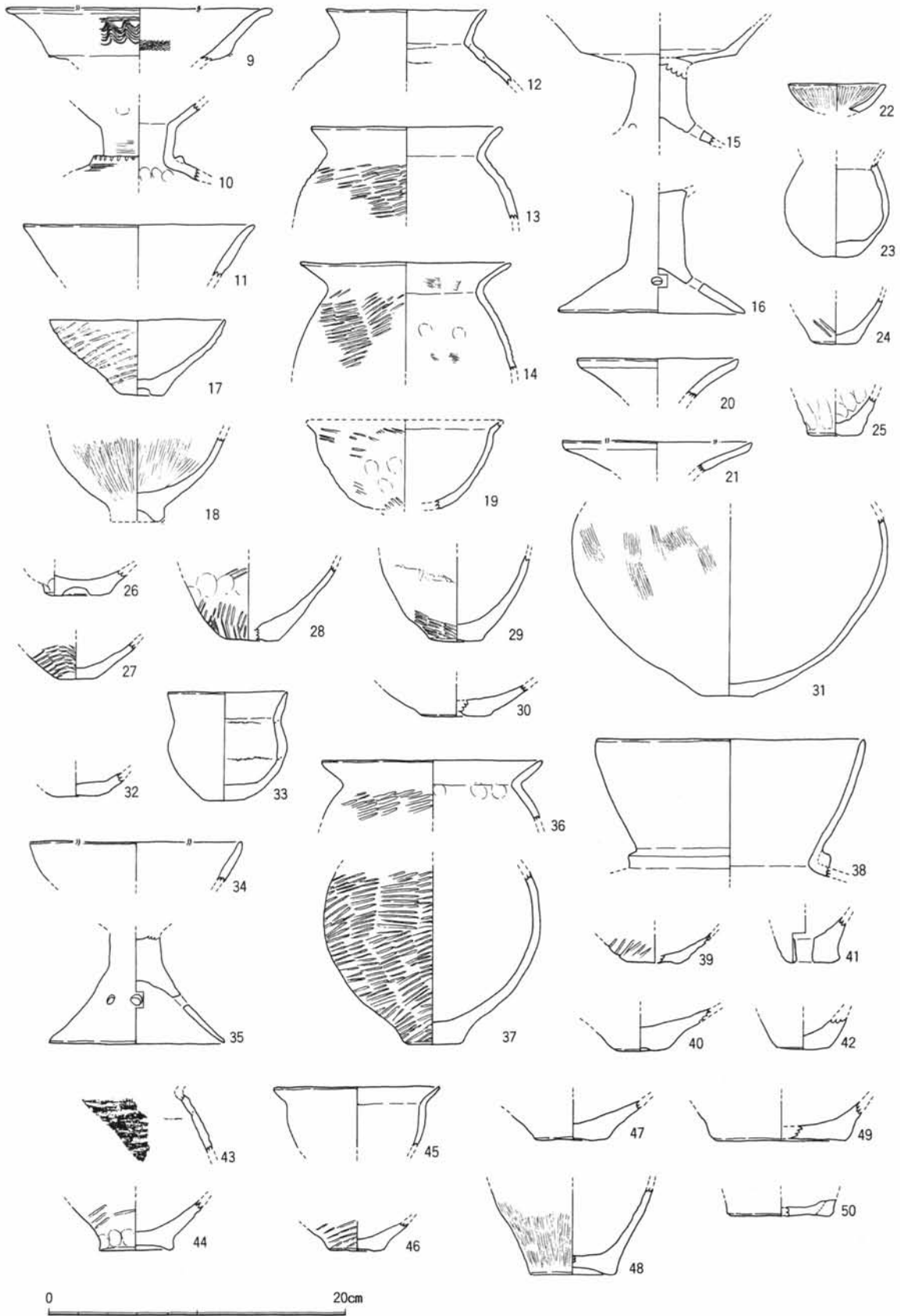
#### 2) 弥生土器(第124・125図)



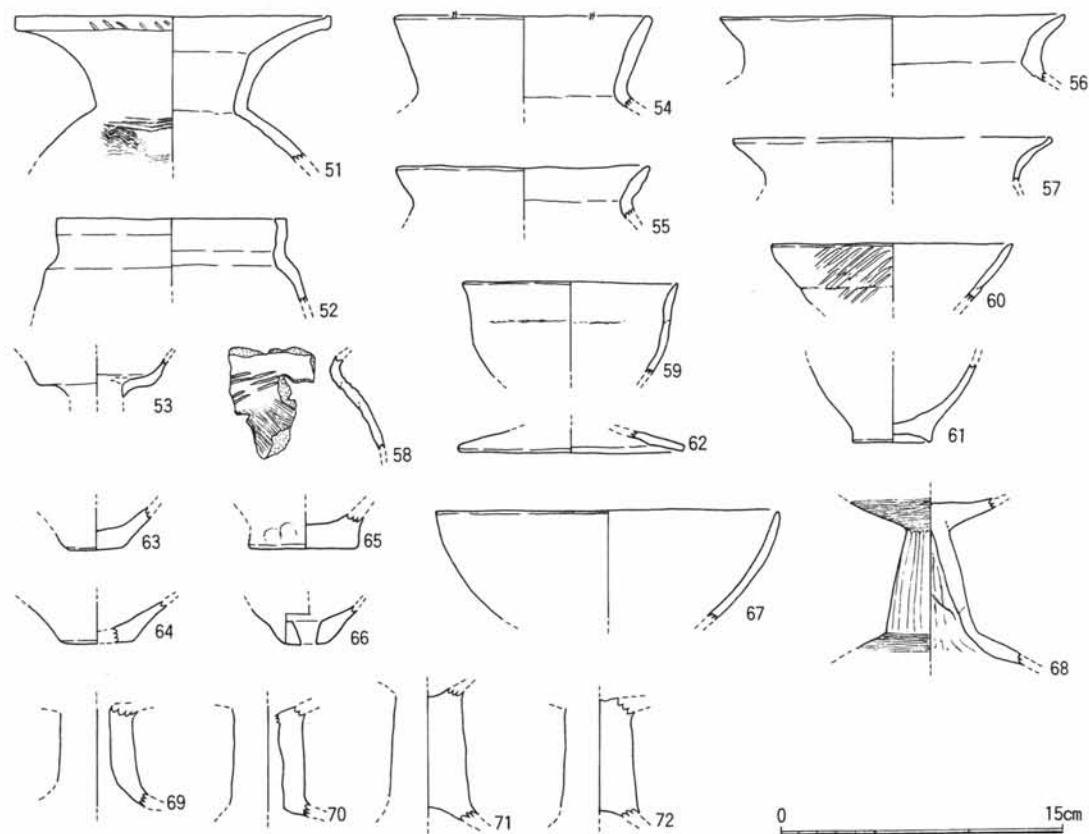
第123図 出土遺物実測図(1) 縄文土器

各遺構のほか、遺物包含層から少量ながら出土した。

9～31は、竪穴式住居跡 S B 140から出土した。9・10は同一個体の可能性が高く、加飾壺と考えられる。肩部以下を欠損する。口縁部内外面に波状文を施し、直立気味の頸部をもつ。頸部から肩部にかけての屈曲部に上端に刻みを施した突帯を貼り付ける。肩部に櫛描文がみられる。胎土は砂粒を少し含み、色調は橙褐色を呈する。11は高杯もしくは壺の口縁部と思われる。12～14は口縁部が「く」字状に外反する甕である。12は内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。13・14は口縁部にヨコナデ調整、体部外面にタタキ調整、体部内面にナデ調整を施す。13は口径12.6cm、



第124図 出土遺物実測図(2) 弥生土器



第125図 出土遺物実測図(3) 弥生土器・古式土師器

14は口径14.2cmを測る。胎土は砂粒を少し含む。15は口縁端部と脚端部を欠損する高杯で、杯部と脚部は直接接合しない。内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。脚部は柱状部が中実で、脚端部に向かって「ハ」字状に開くようである。円形の透かし穴が3個確認できる。胎土は2～4mm程度の砂粒を多く含む。色調は2次焼成に由来するかもしれないが、淡赤褐色を呈する。16は高杯脚部で、実測部分は完存する。中実の脚柱部に、脚端部に向かって「ハ」字状に開く。透かし穴は4個確認できる。底径12.4cm、残存高8.4cmを測る。胎土は2～3mmの砂粒を多く含む。17は完形の鉢である。内外面とも磨滅が著しいが、外面にはタタキ調整痕が遺存する。口径11.8cm、器高5.0cmを測る。胎土は2～3mmの砂粒を多く含む。焼成はやや軟質である。色調は外面が淡黄灰色、内面が淡橙褐色を呈する。なお、16・17は試掘調査で出土したものである(図版第73-(3))。18も鉢と考えられるが、口縁部は遺存しない。外面にミガキ調整が施される。19は口縁端部と底部が遺存しないため、形状に不明確な点があるが、外面にタタキ調整を施した鉢と考えられる。20・21は器台の口縁部と思われる。22は内外面ともにミガキ調整を施した小型の杯状を呈する破片である。口径6.2cm、残存高1.9cmを測る。胎土は砂粒を含まない良好なものである。色調は淡橙褐色を呈する。23は後述する33のような短い口縁部を有する小型壺と考えられる。24～31は底部である。24・25は23のような小型壺の底部と考えられる。27～29は外面にタタキ調整を施す底部である。28は底部内面中央付近が大きくくぼむため、有孔鉢の底部になる可能性がある。30・31は壺の底部である。31は壺の体部下半から底部にかけての破片である。底径3.5cm、残存高12.0cmを測る。

32～37は、竪穴式住居跡S B142から出土した。32は33と同様な小型壺の底部と考えられる。33は小型の壺である。小さな平底に口径とほぼ同じ体部最大径を有する。口径8.1cm、器高7.3cmを測る。胎土は砂粒を含む。34は甕の口縁部の破片である。35は高杯脚部で、透かし穴は5個確認できる。底径11.8cm、残存高7.6cmを測る。胎土は砂粒を含む。36・37は体部外面にタタキ調整を施した甕である。36は口径14.8cmを測る。胎土は砂粒を含む。37は底径4.0cm、残存高11.6cmを測る。胎土は2～5mmの砂粒や小礫を含む。36と37は同一個体の可能性もある。

38～42は、竪穴式住居跡S B230から出土した。38は内湾気味に立ち上がる口縁部と頸部の屈曲部に断面方形の突帯を有する。内外面とも磨滅が著しく調整は不明である。口径18.0cm、残存高9.2cmを測る。胎土は1～5mmの砂粒を含み、焼成もやや甘い。色調は淡黄灰色を呈する。39は外面にタタキ調整を施し、甕または鉢の底部と考えられる。40は壺、41は有孔鉢、42は33のような小型壺の底部と考えられる。

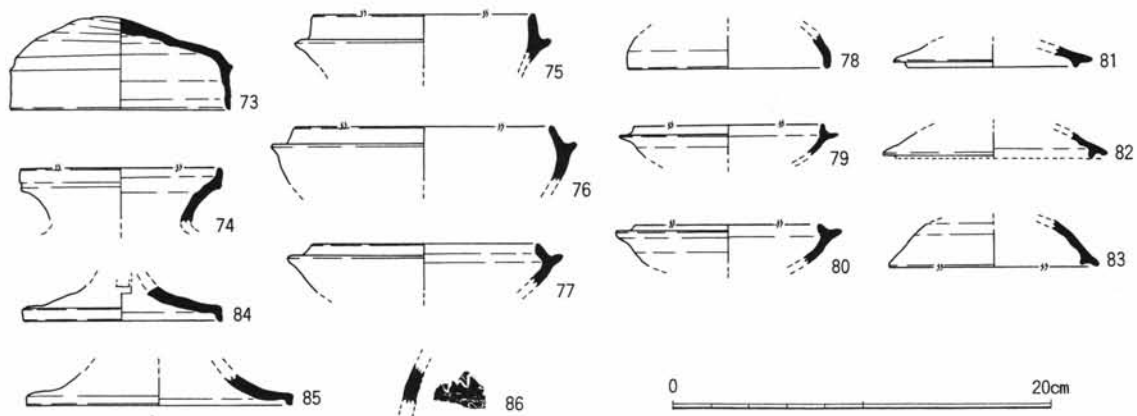
43・44は、溝S D143から出土した弥生土器である。どちらも外面にタタキ調整を施した甕の破片である。44は底径5.0cmを測る底部で、底面はユビオサエヤナデ調整のため若干くぼむ。45・46は溝S D59から出土した弥生土器である。45は小型の鉢と考えられる。46は甕または鉢の底部で、外面にタタキ調整を施す。

47～72は、遺物包含層から出土した弥生土器ないし布留式土器である。47～50は弥生時代中期の壺・甕の底部と考えられる。48は底径5.9cm、残存高5.9cmを測る。外面にハケ調整、内面にナデ調整を施す。50は底部外面に葉脈状の圧痕がみられる。51は口縁部が大きく開く広口壺である。口縁端部外面に列点文を、肩部外面に直線文・波状文を施す。直接接合しない複数の破片を図上復原したものである。復原口径16.6cm、推定残存高7.7cmを測る。胎土は1～2mmの砂粒を含む。色調は外面が灰褐色、内面が黒褐色を呈する。内面は黒斑かもしれない。52は口縁部がほぼ直立する壺と考えられる。53は下端部に剥離痕がみられ、小型の二重口縁壺と考えられる。54は直口壺の破片と考えられる。55～58は甕である。57は口縁端部がつまみ上げ気味となっており、いわゆる庄内甕の特色がみられる。ただし、胎土は生駒西麓のものではない。口径16.8cmを測る。59～61・67は鉢である。59は頸部があまり屈曲しない。60は口径11.4cm、残存高5.9cmを測り、外面にタタキ調整を施す。体部中位に接合痕がみられる。61は44に類似した特色をもつ底部である。67は口径18.0cm、残存高5.8cmを測る大型の鉢である。63～65は甕の底部と考えられる。66は有孔鉢の底部である。68は布留式の高杯と考えられる。杯部は部分的にしか残存しないが、外面に細かなミガキ調整を施す。脚柱部はやや幅広の縦方向のミガキ調整を施す。残存高8.8cmを測る。胎土は細かな砂粒を含む。色調は淡橙褐色を呈する。69～72は高杯の脚柱部である。69・70は中空、71・72は中実である。

### 3) 古墳・飛鳥時代の土器(第126図)

73・74を除き、いずれも遺物包含層からの出土である。

73・74は、土壙墓S X165から出土した。73は完形の須恵器蓋である。焼け歪みによって天井部がいびつな形状になっている。口径11.6cm、器高4.9cmを測る。天井部の大半に回転ヘラケズ



第126図 出土遺物実測図(4) 古墳・飛鳥時代；須恵器

り調整を施す。口縁端部は丸くおさめる。胎土は砂粒を含む。形態や法量から田辺編年MT15型式に位置づけられる。74は須恵器壺の口縁部と思われる。口縁部は受け口状を呈する。75～77・79・80は須恵器杯で、田辺編年TK10～TK217型式に位置づけられる。78は須恵器蓋と考えられるが、小破片である。81～83は内面にかえりをもつ須恵器蓋である。飛鳥編年I～II期に位置づけられる。<sup>(注5)</sup>84・85は須恵器高杯脚端部の破片である。84は方形の透かし孔が確認できる。どちらも端部を下方へ屈曲させる。86は須恵器甕などの口頸部外面に波状文を施した破片である。

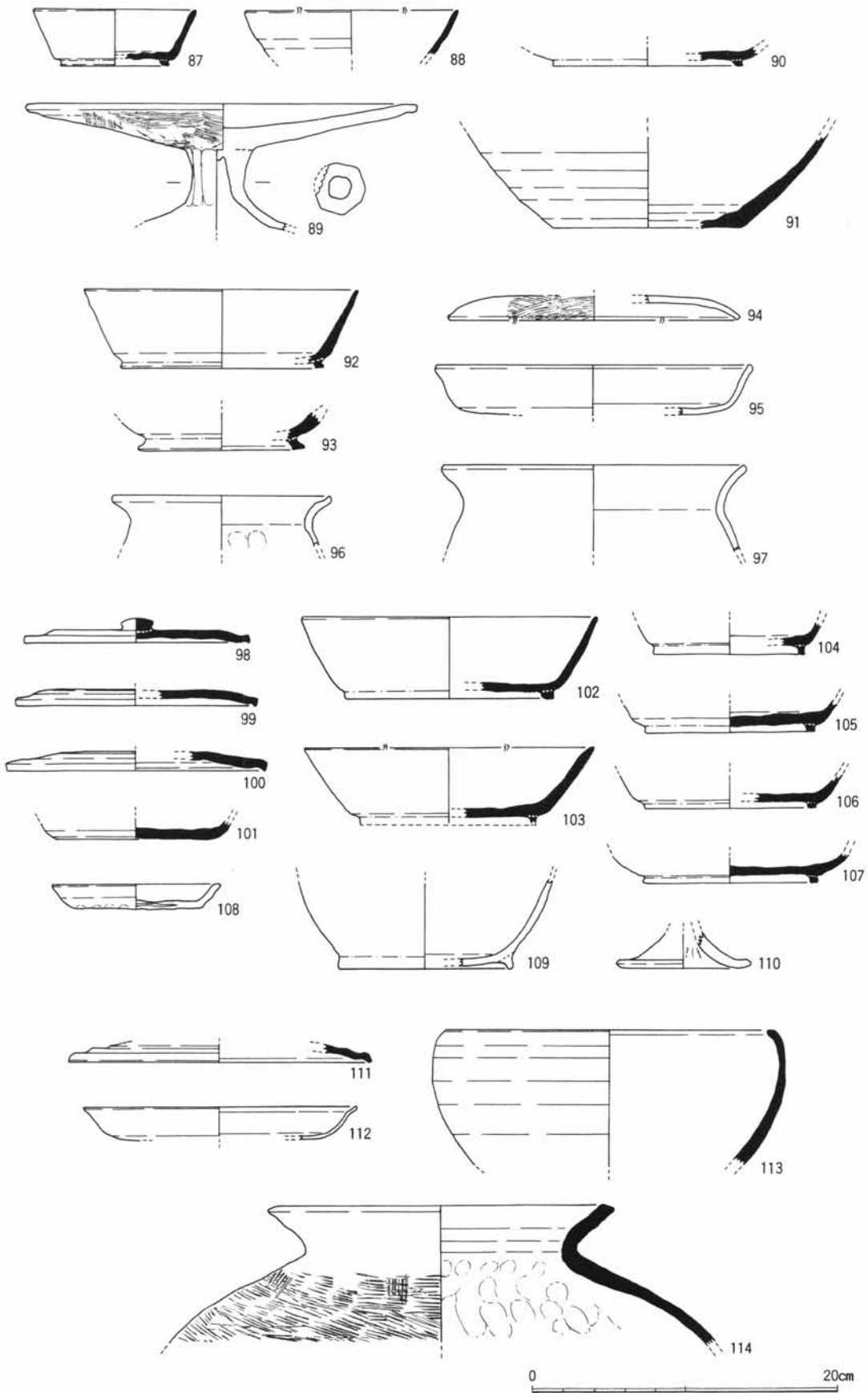
#### 4) 奈良時代の土器(第127～133図)

遺構から多数の土器が出土したほか、中世の遺物包含層である第Ⅲ層からも多数が出土した。奈良時代の土器の分類や編年的位置づけについては奈良文化財研究所の分類・編年に準拠する。<sup>(注7)</sup>

87～91は、掘立柱建物跡4の柱穴から出土した。87は柱穴SP182検出時にその上面で出土した須恵器杯Bである。口径10.6cm、器高4.7cmを測る。88もSP182から出土した須恵器杯である。89は土師器高杯Aで、溝SD132埋土出土の破片と接合した。杯部は外面にミガキ調整を施すが、内面は磨滅のため不明である。暗文の有無も確認できない。脚柱部は面取りをする。脚端部は欠損する。口径25.8cm、残存高8.1cmを測る。胎土は細かな砂粒をわずかに含む。焼成は良好である。色調は橙褐色を呈する。90は柱穴SP160から出土した須恵器杯Bの底部である。91は柱穴SP153柱痕から出土した須恵器甕Cの底部と思われ、溝SD132整地土上面出土の破片と接合した。胎土は細かな砂粒を含む。焼成が甘く、灰白色を呈する。

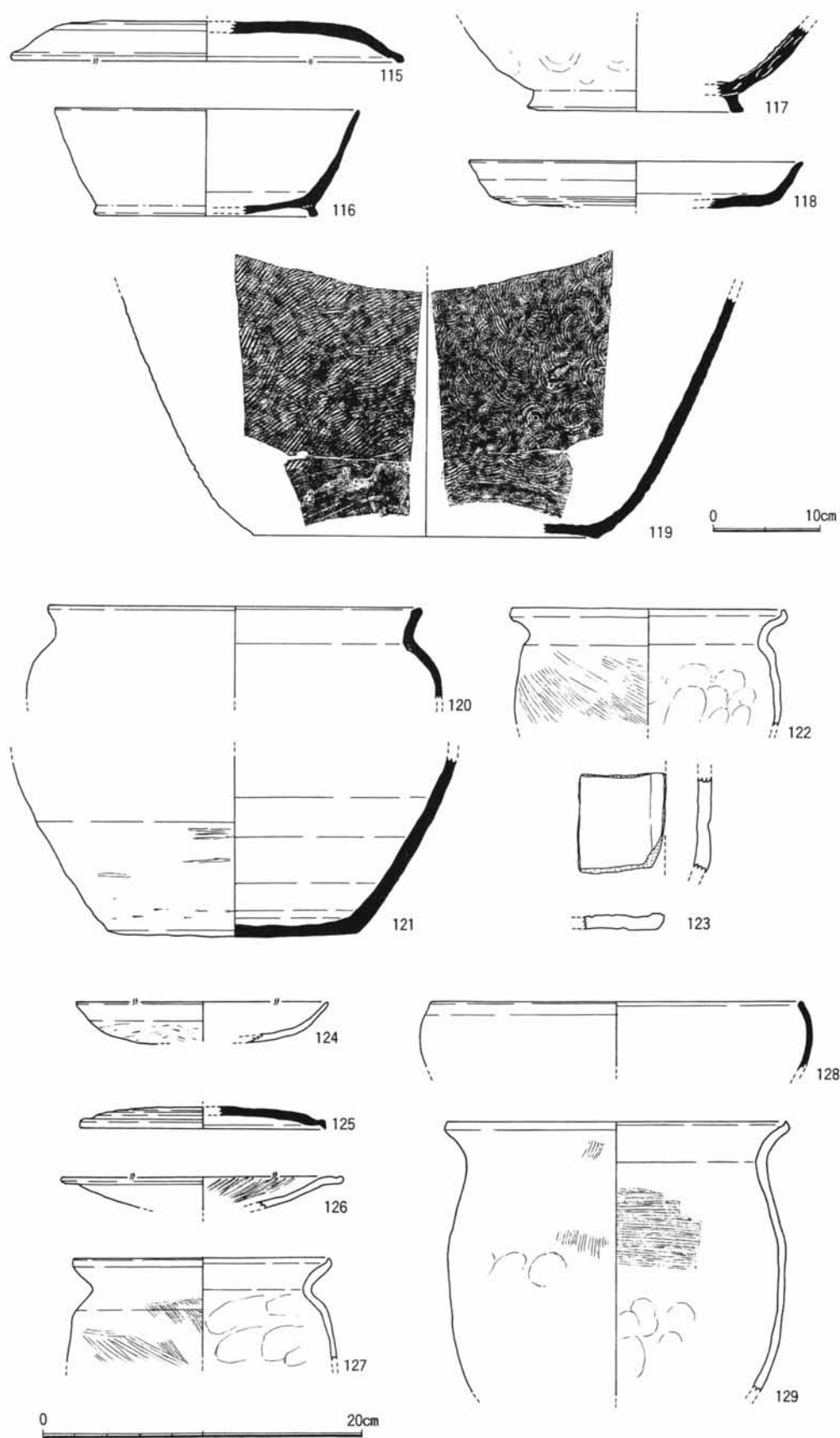
92～97は、溝SD132から出土した。92は須恵器杯Bである。口径18.0cm、器高5.2cmを測る。93は高台がやや厚いので長頸壺などの底部と考えられる。94は土師器蓋の破片である。外面にミガキ調整を施す。95は土師器杯Aである。内外面とも磨滅のため調整は不明である。口径20.8cm、器高3.3cmを測る。胎土は密で、色調は橙褐色を呈する。96・97は土師器甕である。96は口縁端部をわずかにつまみ上げる。97は磨滅のため調整は不明である。

98～110は、溝SD161から出土した。98～100は須恵器蓋である。いずれも口縁端部が屈曲するA形態を呈するが、屈曲の度合いはそれほど大きくない。98は口径14.9cm、器高1.6cmを測る。101は須恵器杯Aの底部である。102～107は須恵器杯Bである。102は口径19.1cm、器高5.3cmを測る。108は土師器杯で、器表面の剥離が著しい。109は土師器壺または鉢の底部と考えられる。



第127図 出土遺物実測図(5) 奈良時代；須恵器・土師器





第128図 出土遺物実測図(6) 奈良時代；須恵器・土師器(119のみ S=1/6)

110は高杯脚部と考えられる。

111～114は、井戸SE07から出土した。111は須恵器蓋の破片である。112は土師器杯Aである。内外面とも磨滅のため調整は不明である。口径17.9cm・器高2.2cmを測る。胎土は砂粒を含むが、密である。113は底部を欠損するが、尖底状を呈する、いわゆる鉄鉢形の須恵器鉢Aと考えられる。114は須恵器甕Bと考えられる。口縁部を回転ナデ調整、体部外面にタタキ調整、体部内面にナデ調整を施す。

115～119は、溝SD157から出土した。115は須恵器蓋である。復原口径は24.6cmを測り、皿Bの蓋であろう。116は須恵器杯Bである。高台が立ち上がり付近に貼り付けられる。また、杯体部・口縁部がほぼ直線的にのびる。口径19.0cm、器高6.5cmを測る。117は須恵器壺または鉢の底部である。内面に白色の粉末状の物質が付着するが、詳細は不明である。118は須恵器皿Aである。口径21.0cm、器高2.8cmを測る。119は平底を呈する須恵器甕Cの底部と考えられる。大型品で、底径32.7cm、残存高22.8cmを測る。

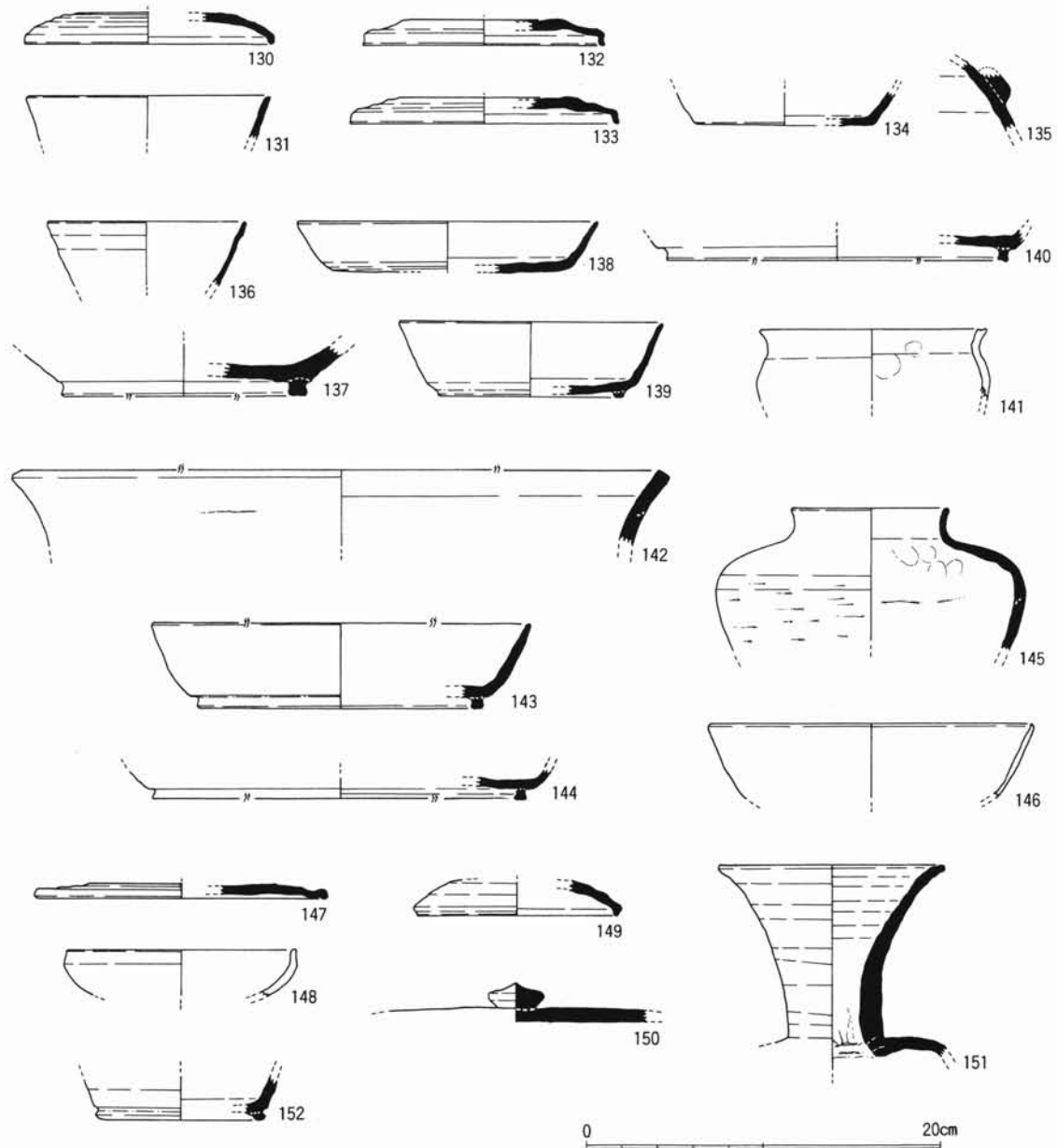
120～123は、溝SD187から出土した。120は須恵器甕Bまたは壺Aの口縁部と考えられる。頸部内面に接合痕が認められる。121は119と同様に須恵器甕Cの底部と考えられる。119に比べると一回り以上小さく、底径16.0cm、残存高11.3cmを測る。122は口縁端部をつまみ上げる土師器甕Aである。口縁部にヨコナデ調整、体部外面にハケ調整、体部内面にナデ調整、ユビオサエ調整を施す。口径17.2cm、残存高7.2cmを測る。胎土は細かな砂粒を含み、色調は橙褐色を呈する。123は器種不明の土師器である。

124は、溝SD157、SD132とほぼ同一地点に設定した断ち割りから出土した。土師器碗Dと考えられ、底部外面にケズリ調整を施す。125～127は溝SD187、SD161とほぼ同一地点に設定した断ち割りから出土した。125は須恵器蓋である。126は土師器高杯Aである。杯部に放射状の暗文を施す。口径17.4cm、残存高1.9cmを測る。胎土は砂粒を少し含み、色調は橙褐色を呈する。127は土師器甕Aである。122とほぼ同法量で、同様の調整手法が施される。出土地点も近接しており、同一個体の可能性もあるが接合しない。外面にすすが付着する。

128は、焼土坑SK188から出土した。113のような鉄鉢形の須恵器鉢Aの口縁部と考えられる。129は焼土坑SK199から出土した土師器甕Aである。磨滅が著しいが、体部内外面にハケ調整、口縁部にヨコナデ調整を施す。胎土は砂粒を含んでやや粗い。色調は淡橙褐色を呈する。

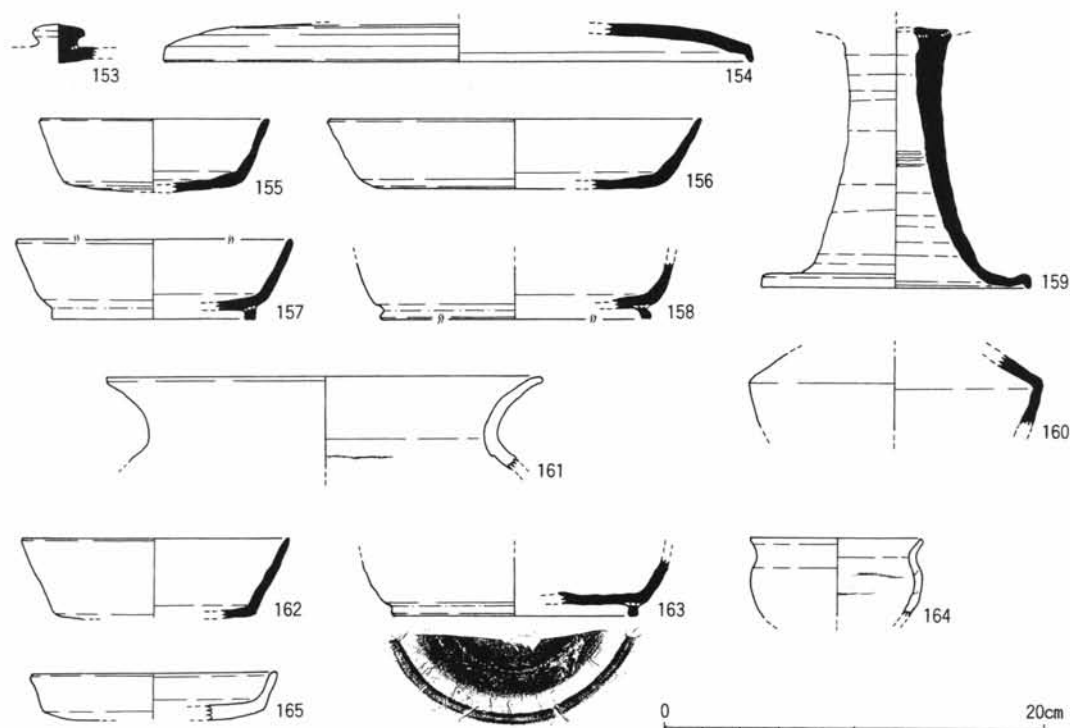
130・131は、土坑SK01から出土した。130は口縁部形態がB形態の須恵器蓋、131は須恵器杯である。132～135は土坑SK77から出土した。132・133は須恵器蓋の破片である。134は須恵器杯Aの小破片である。135は須恵器壺の肩部の小破片である。136～139は落ち込み状遺構SX131から出土した。136は須恵器杯である。137は須恵器壺または鉢の底部である。138は須恵器皿Aである。口径16.9cm、器高2.8cmを測る。139は須恵器杯Bである。口径14.8cm、器高4.2cmを測る。140は須恵器皿Bの底部である。

141は、掘立柱建物跡5の柱穴SP256から出土した土師器壺Bである。口径12.8cm、残存高4.1cmを測る。胎土は細かな砂粒をわずかに含む。色調は外面が茶褐色、内面が淡橙褐色を呈す



第129図 出土遺物実測図(7) 奈良時代；須恵器・土師器

る。142は不明遺構 S X 184から出土した須恵器甕である。復原口径36.2cmを測る。143・144は落ち込み状遺構 S X 185から出土した。143は須恵器杯で、復原口径21.4cm、器高4.8cmを測る。144は須恵器皿Bと考えられる。145は掘立柱建物跡3の柱穴 S P 105から出土した須恵器壺Aである。体部外面にケズリ調整と思われる砂粒の動きがある。口径8.6cm、残存高8.0cmを測る。146は掘立柱建物跡2の柱穴 S P 121から出土した土師器杯Aである。内外面とも磨滅が著しく調整は不明である。147・148は溝 S D 78から出土した。147は須恵器蓋、148は土師器碗Cである。149は土坑 S K 62から出土した須恵器蓋である。器高が高めであるが、焼け歪みのためと思われる。150は柱穴 S P 46から出土した須恵器蓋である。151は土坑 S K 227から出土した須恵器壺Lの口縁部である。口径12.7cm、残存高10.9cmを測る。焼け歪みが認められる。152は柱穴 S P 43から出土した須恵器杯Bの底部である。

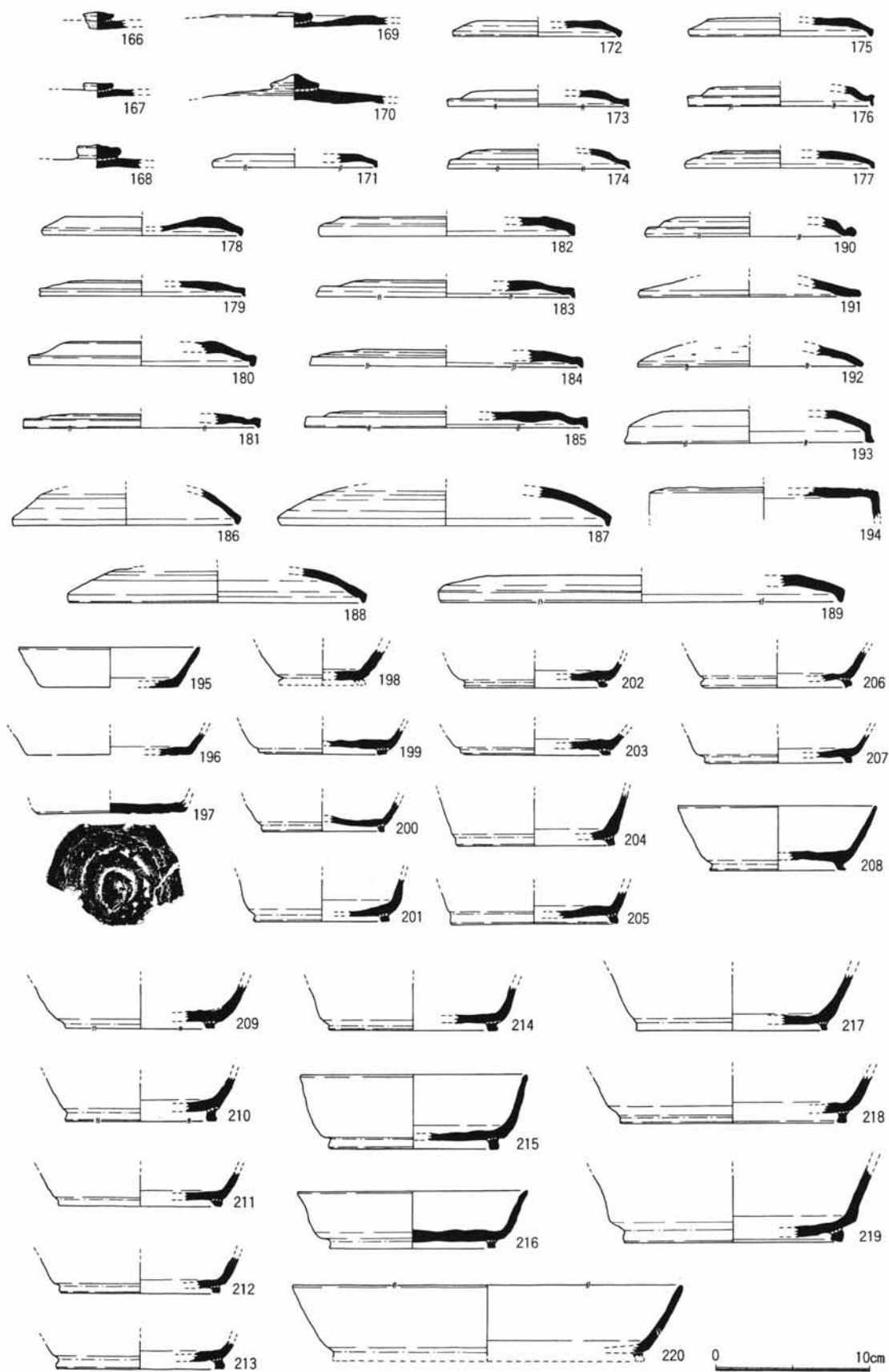


第130図 出土遺物実測図(8) 奈良時代；須恵器・土師器

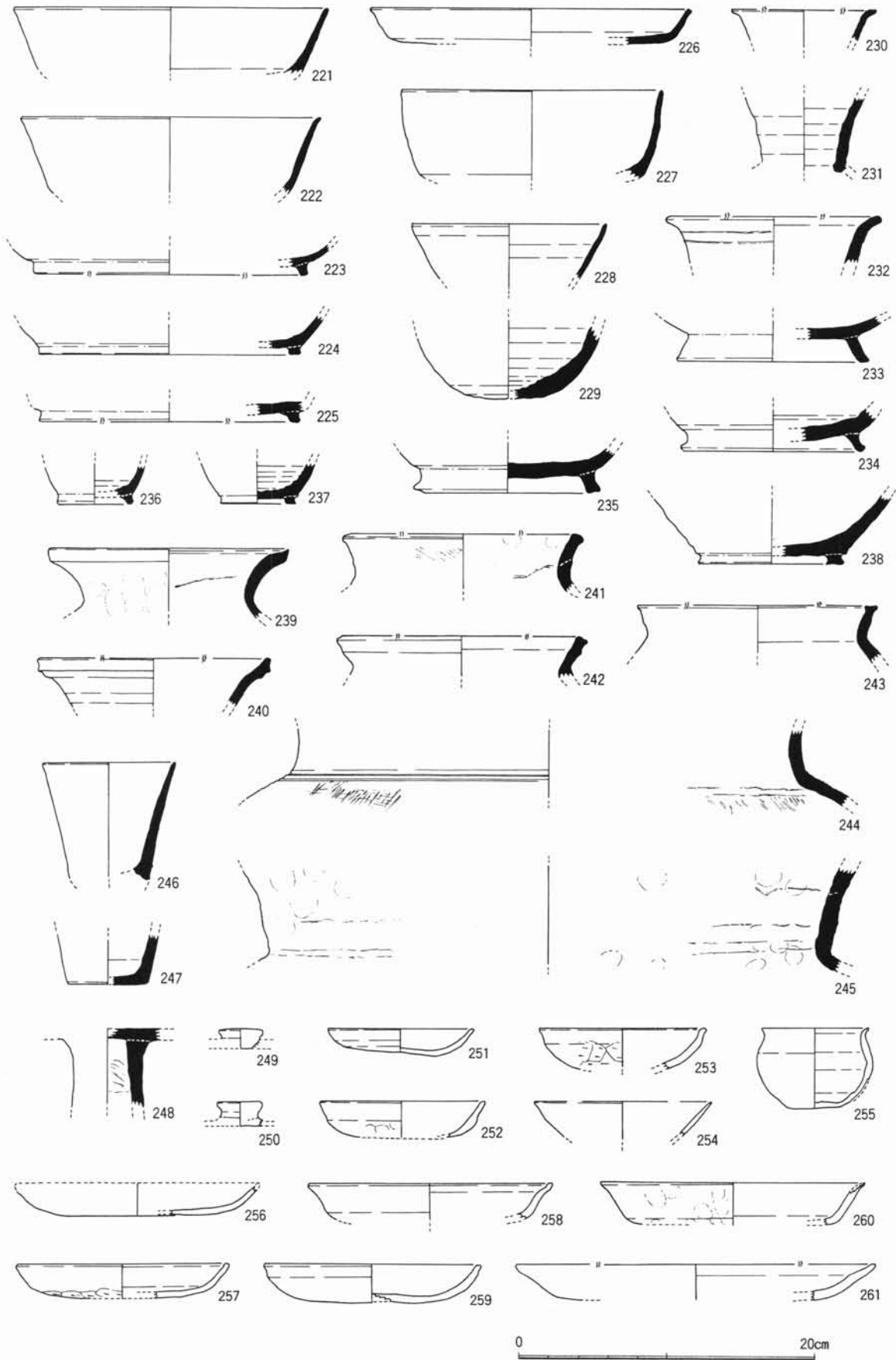
153～161は、流路S D73から出土した。153は須恵器蓋のつまみである。154は須恵器蓋である。口径31.2cm、残存高2.0cmを測る。155は須恵器杯Aである。口径12.0cm、残存高3.8cmを測る。156は須恵器皿Aである。口径19.6cm、器高3.7cmを測る。157は須恵器杯Bである。口径14.5cm、器高4.1cmを測る。158は須恵器Bの底部である。159は須恵器高杯脚部である。脚端部と脚柱部の破片は直接接合しないため、図上復原である。内外面とも回転ナデ調整の痕跡が明瞭にみられる。脚端部は強く屈曲する。底径14.1cm、推定残存高13.5cmを測る。160は須恵器長頸壺などの肩部の破片である。161は土師器甕Aである。口径23.0cmを測る。

162～165は、溝S D70から出土した。162は須恵器杯Aである。口径14.0cm、残存高4.1cmを測る。163は須恵器杯Bの底部である。底部外面に爪状圧痕がみられる。164は土師器皿Cである。口径12.9cm、残存高2.5cmを測る。胎土は細かな砂粒をごく少量含む。色調は外面が淡橙褐色、内面が淡灰黄色を呈する。165は土師器壺Bである。口径9.0cm、残存高4.0cmを測る。胎土は細かな砂粒をごく少量含む。色調は外面が橙褐色、内面が淡黄灰色を呈する。

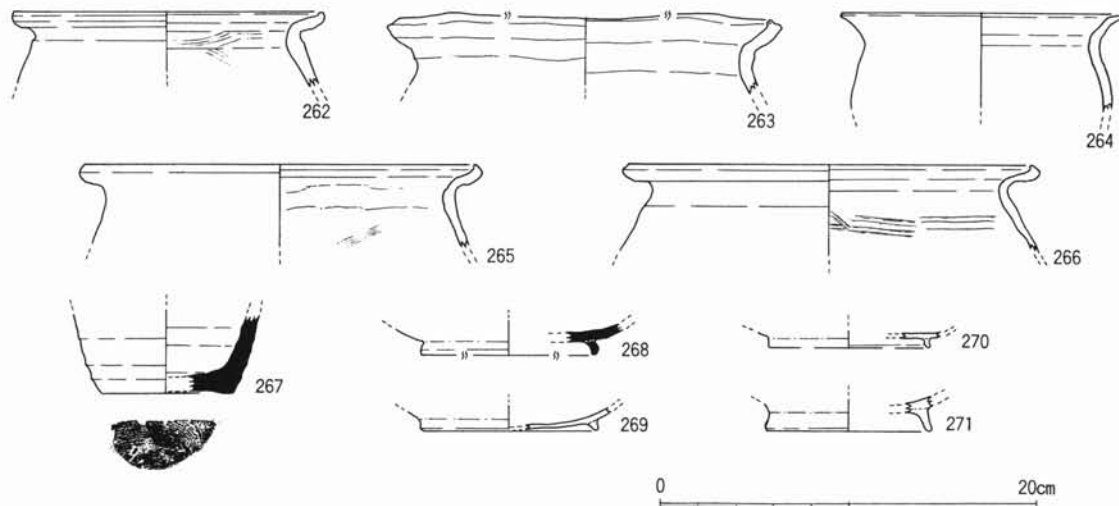
166～271は、遺物包含層から出土した。166～193は須恵器蓋である。166～168はつまみである。169・170は口縁端部を欠損する。171～189はつまみを欠損する口縁部の破片である。口縁端部の形状は、笠形の天井部から口縁端部がそのまま屈曲するB形態と、口縁端部でいったん屈曲した後、再び下方へ屈曲するA形態がともにみられる。190～192はこれらに当てはまらない須恵器蓋である。191・192は口縁端部が屈曲せず、天井部からそのまま口縁端部に至る。193は笠形の天井部に強く屈曲する口縁部をもつ須恵器蓋である。口縁端面に面を有する。194は須恵器壺Aの蓋であるが、口縁端部とつまみを欠損する。195～197は須恵器杯Aである。197は杯A底部で、外面に回転ヘラ切り痕が残る。198～219は須恵器杯Bである。197はやや小型で、高台も欠損す



第131図 出土遺物実測図(9) 奈良時代；須恵器



第132図 出土遺物実測図(10) 奈良時代；須恵器・土師器



第133図 出土遺物実測図(11) 奈良・平安時代；土師器・須恵器・黒色土器ほか

ることから杯Bではない可能性もある。高台は断面方形のものや、内面に強いナデ調整のみられるもの、外方へ踏ん張るもの、内湾気味ものなどの形態が認められる。しかし、古相の特徴である高台が高く、強く踏ん張るものは認められない。208は口径13.2cm、器高4.1cm、底径9.0cm、215は口径14.8cm、器高4.8cm、底径11.2cm、216は口径15.2cm、器高3.9cm、底径11.0cmを測る。219は底部から口縁部への立ち上がりに明瞭な屈曲がみられる。底径14.3cm、残存高5.2cmを測る。220は高台端部と底部を欠損するが、須恵器皿Bと考えられる。221・222は底部を欠損するが、大型の須恵器杯Bと考えられる。221は口径21.4cm、222は口径20.5cmを測る。223～225は大型の須恵器杯Bまたは須恵器皿Bの底部である。226は須恵器皿Aである。口径21.9cm、残存高2.4cmを測る。227は須恵器杯Eまたは椀Cである。口径17.8cm、残存高6.0cmを測る。228も須恵器椀と思われる。229は須恵器壺の底部と考えられ、丸底を呈する。230～232は須恵器長頸壺の口頸部である。231には淡緑色を呈する自然釉が付着する。233～235は須恵器壺の底部である。236・237は小型の須恵器壺の底部と考えられる。238は須恵器鉢の底部と考えられる。239・240は須恵器壺の口縁部と思われる。241～243は須恵器甕または壺の口縁部である。244・245は甕の頸部である。頸部径が34.8～38.0cmに達する大型品である。246・247は須恵器鉢Eである。246は口径9.0cm、残存高7.9cmを測る。248は高杯の杯部と脚部の接合部の破片である。

249・250は土師器の蓋のつまみである。251は土師器皿Cである。後述する256・259とともに、V層上面で1個体ずつ、ほぼ完形に近い状態で出土した。口径9.8cm、器高1.9cmを測る。252・253は土師器椀Cである。253は底部外面にケズリ調整を施す。254は土師器杯であろうか。255は土師器壺Bである。口径7.2cm、器高5.5cmを測る。256・259は土師器皿Aである。磨滅のため調整は不明であるが、259は口径14.8cm、器高2.8cmを測る。257・258・260は土師器杯Aである。257は底部外面にケズリ調整を施す。口径14.4cm、器高2.5cmを測る。260は口縁端部内面を欠損するが、外面にユビオサエ痕がみられる。261は、皿状を呈する大型の破片であるが、奈良時代のものかどうか不明である。262～266は土師器の甕である。

267～271は、平安時代に属する土器である。267は底部に糸切り痕を有する須恵器壺の底部で

ある。268は灰釉陶器と思われる椀の底部である。内面に灰釉がわずかにみられる。高台の断面形は三日月状を呈する。底径9.2cm、残存高1.6cmを測る。269は土師器椀の底部と思われる。270・271は黒色土器椀の底部と思われる。270は薄手のつくりで、内面にのみ黒色処理を施す。底径8.5cm、残存高0.9cmを測る。271は270と異なり、厚手でしっかりした高めの高台を有する。内外面とも黒色処理を施す。

#### 5) 中世の土器(第134～136図)

中世の土器の大部分は遺物包含層からの出土で、遺構に伴うものはごくわずかである。

272～318は瓦器椀である。272は当遺跡出土の瓦器椀としては唯一全体の形状の復原が可能である。第6トレンチの遺物包含層から出土した。内面と外面上半には緻密なミガキ調整を施す。外面下半にはユビオサエ痕が残る。口縁端部に沈線を1条施す。見込みに同心円状の暗文を施す。口径15.0cm、器高5.3cm、底径4.4cmを測る。胎土は精良である。273～290は、おおむね272と同型同大と考えられるが、磨滅のため内外面ともミガキ調整のはっきりしないものが多い。いずれも口縁端部に沈線を1条施す。291・292は小型化した瓦器椀の口縁部の破片と考えられる。口縁端部の沈線はみられない。292は口径8.4cm、残存高2.4cmを測る。293～318は瓦器椀の底部である。高台の断面形は、293～305が方形に近く、306～318は三角形に近い。316・317は矮小化した高台が貼り付けられているにすぎない。これらは良好な資料が少ないが、おおむね12世紀から14世紀にかけてのものと考えられる。

319～329は瓦器皿である。いずれもほぼ同じ形態で、やや丸味のある底部と強く外反する口縁部からなる。調整もほぼ同じで、底部外面にユビオサエ、口縁部にヨコナデ調整を施し、底部内面には暗文が施される。全体に磨滅気味の個体が多く、暗文についてわかる資料は少ない。319は口径8.7cm、器高1.3cmを測る。321は口径11.0cm、残存高1.7cmを測る。324は口径9.9cm、器高1.5cmを測る。327は口径8.4cm、残存高1.8cmを測る。

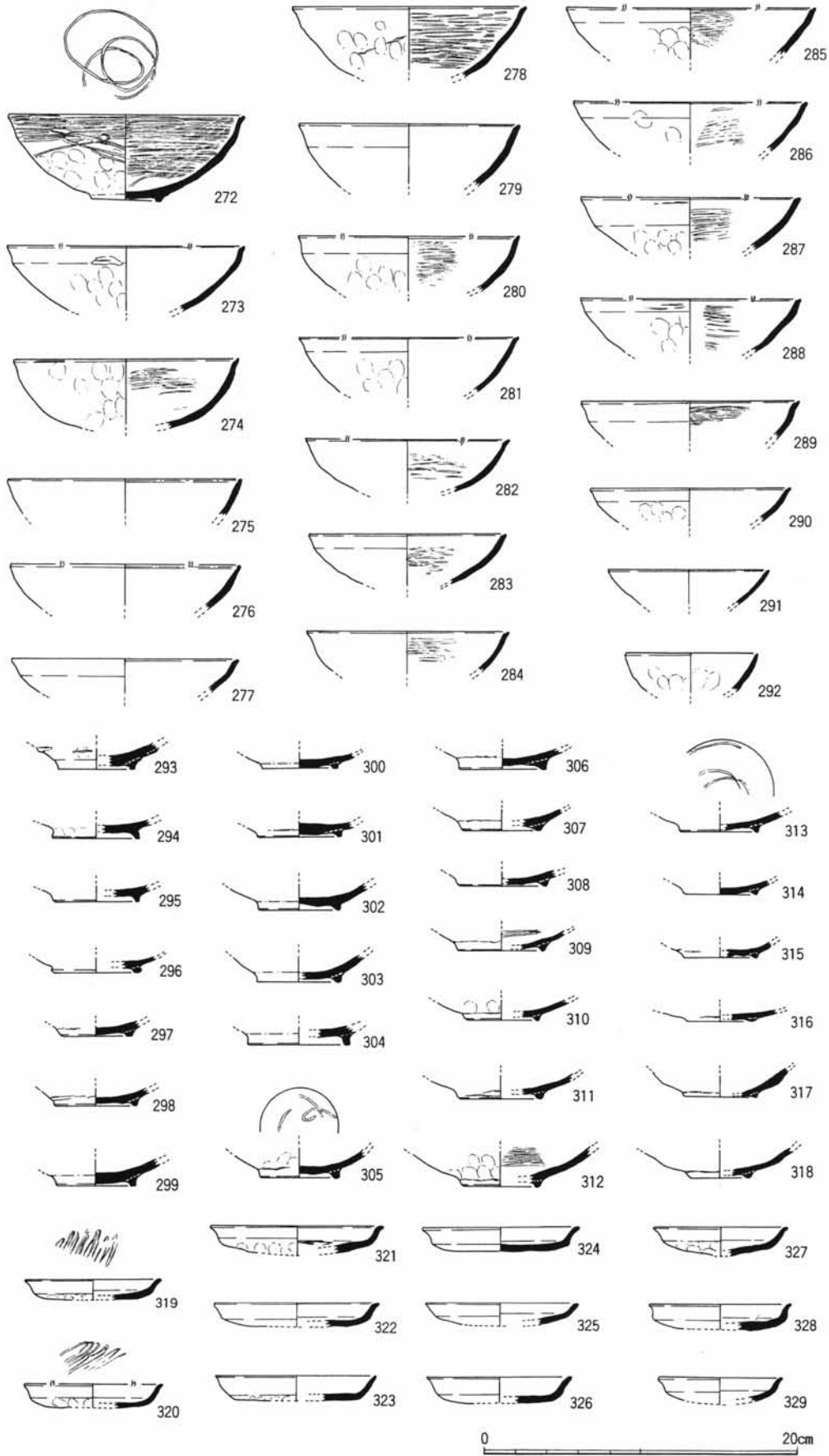
330～344は土師器皿である。基本的な調整は、底部外面にユビオサエ、底部内面にナデ調整、口縁部内外面にヨコナデ調整を施す。333は底部が上げ底状を呈する。341・342は口縁部外面に二段のヨコナデ調整を施す。342は口径13.4cm、残存高2.3cmを測る。345は器種不明の土師器である。何らかのミニチュアの土器と考えられる。346は土師器台付皿の脚台である。

347～358は須恵器鉢であるが、全体の形状を確認できる資料はない。いずれも片口の鉢であると思われるが、片口が確認できるのは351・352のみである。347～349は口縁端面が体部に対して直角な面をもつもので、348は口縁端部が若干下方に拡張されている。350・352・353は口縁端部が上下両方向に拡張されている。351・354～356は口縁端部を上方に拡張している。357・358は底部で、358には高台が貼り付けられている。これらは、いずれもいわゆる東播系須恵器と呼ばれるもので、12世紀から14世紀にかけてのものと考えられる。<sup>(注8)</sup>

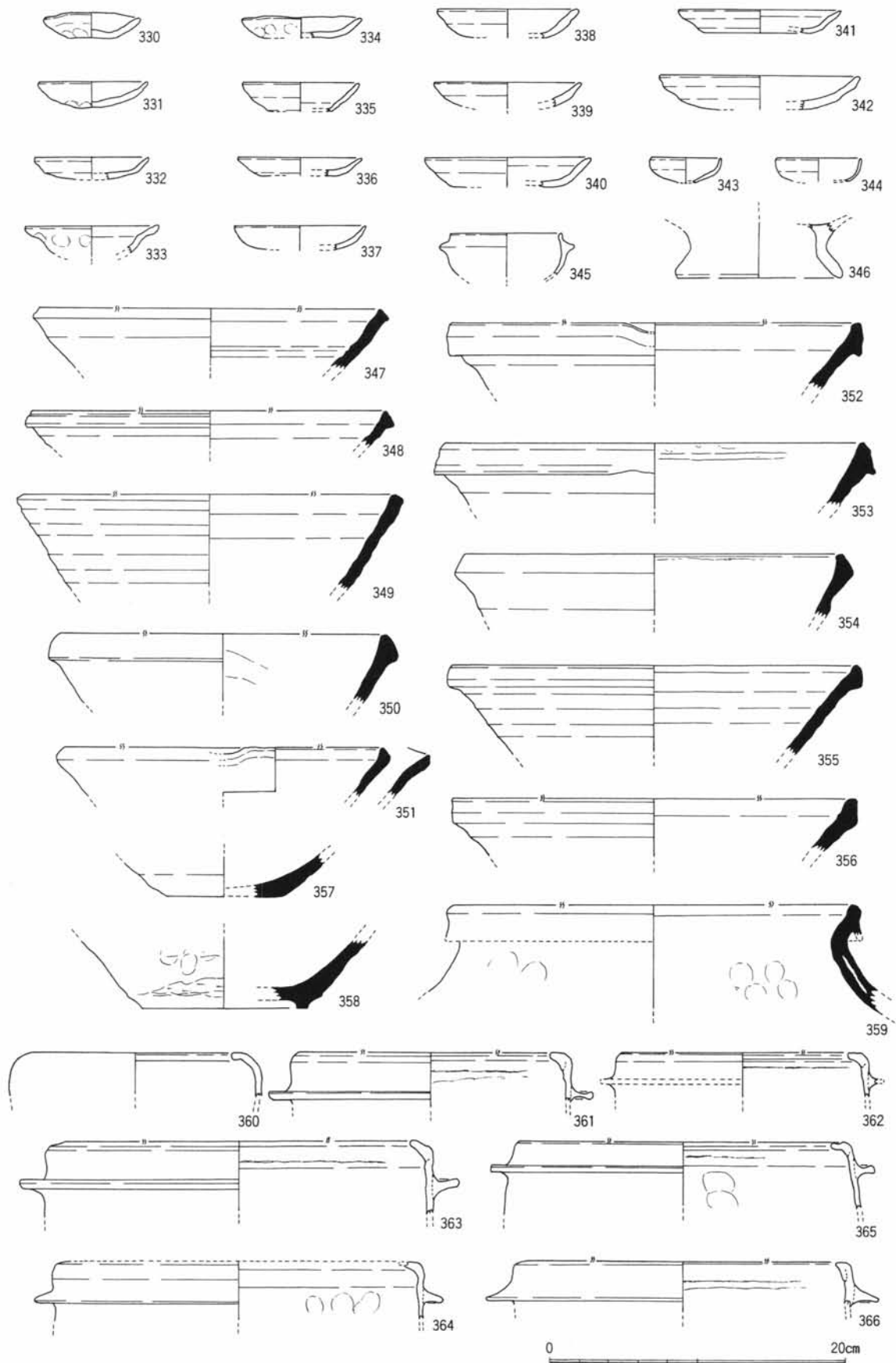
359は常滑の甕と思われるが、小破片のため実測図は推定の域をでない。

360～377は土師器の羽釜である。360～365は口縁部を内方に屈曲させもので、菅原正明氏分類の大和H<sub>2</sub>ないしH<sub>3</sub>型にあたる。<sup>(注9)</sup>366は口縁端部を内方に折り曲げて肥厚させるものである。

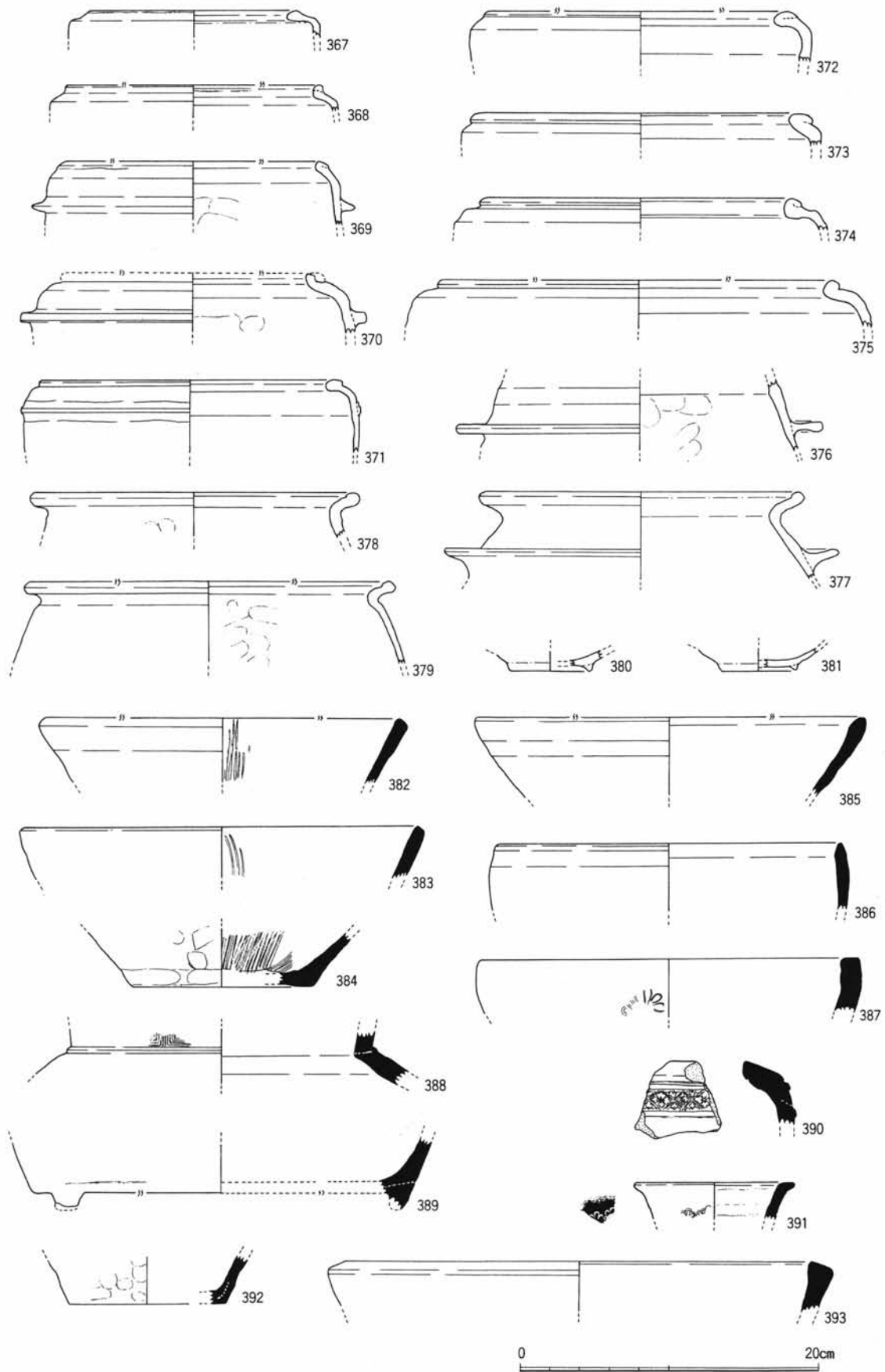




第134図 出土遺物実測図(12) 中世；瓦器



第135図 出土遺物実測図(13) 中世；須恵器・土師器



第136図 出土遺物実測図(14) 中世；土師器・瓦質土器

368～375は口縁端部を外方へ折り曲げて肥厚させるもので、菅原氏分類の大和H<sub>1</sub>型にあたる。376は口縁部を欠損するが、377と同形態の羽釜と考えられる。377は不明遺構S X 135から出土したもので、中世段階の遺物としては唯一遺構に伴うものである。口径21.2cm、残存高5.8cm、鏝最大径26.6cmを測る。菅原氏分類に大和B<sub>1</sub>型にあたる。これらは菅原氏の年代観によると、おおむね11世紀から16世紀にかけてのものと考えられる。

378・379は土師器甕である。どちらも口縁端部内面を丸く肥厚させる。379は口径24.4cm、残存高5.4cmを測る。380・381は土師器碗の底部と考えられる。瓦器碗と同じ形態を呈するが、最終段階に還元焰焼成しないため土師質のままである。

382～393は瓦質土器である。382～384は内面に摺り目がみられる。385～387・392・393は鉢であろう。388・390は風炉であろうか。389は火鉢などの底部であろう。

(筒井崇史)

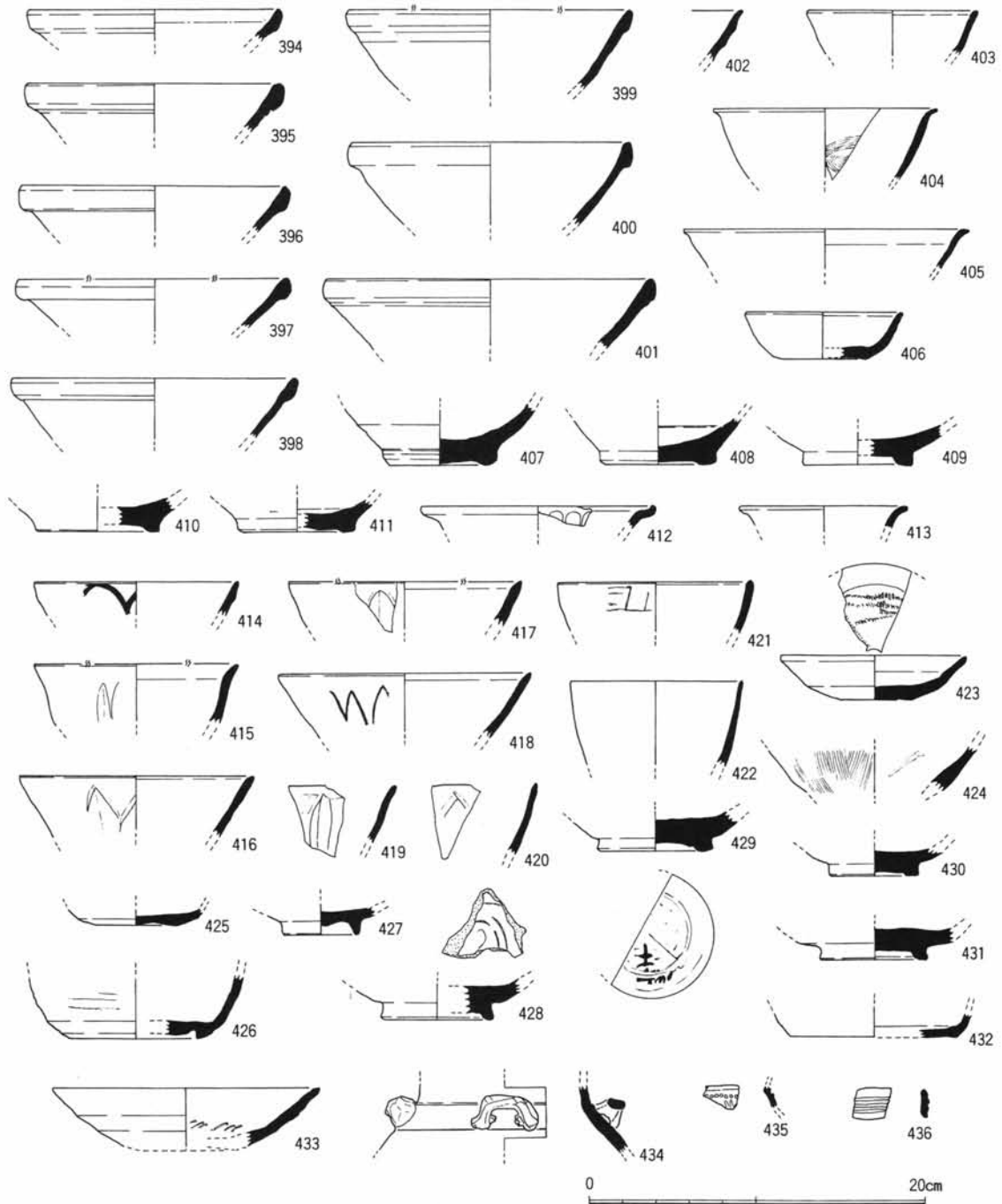
#### 5) 中世陶磁器(第137・138図)

今回の調査で出土した中近世の陶磁器の点数は多く、特に、中国製の白磁・青磁が多い。これらはいずれも遺物包含層からの出土であり、遺構に伴うものはなかった。

394～411は白磁である。碗には、玉縁状口縁で、底部は内周をやや削った高台のⅣ類(394～401・407・408・410・411)と、やや外反する口縁部で、底部を深く削り高い高台とするⅤ類(402～405、409)の2種がある。Ⅳ類は内外面ともほぼ施釉されているが、外底部のみ露胎である。上半部には分厚く釉がかかっているところがある。釉色は黄白色や灰白色である。口径は14.8cm～19.4cmで、完形品はなく、器高は不明である。404は内面に流水文様を櫛描きで施す。皿(406)は内外面とも施釉しているものの、口縁端部のみ掻き取っており、露胎である。外底面は糸切りである。釉色は灰白色である。これらは、12～13世紀に属する。

412～428は青磁である。杯(412・413)は内外面とも施釉しており、内面には凹凸のレリーフが施されている。碗には龍泉窯系鎬蓮弁文のものがある(414～420)。これは、内外面とも施釉したもので、釉色は緑色あるいは緑灰色である。鎬蓮弁文様はヘラによる造形がされている。ほとんどは、蓮弁の中心は肉厚であるが、418のみ平滑である。龍泉窯系雷文帯碗(421)は内外面とも施釉したもので、釉色は緑灰色である。口縁部外面にヘラ描きによる雷文を帯状に施している。龍泉窯系深碗(422)は、無文様のものである。内外面とも施釉している。同安窯系碗(424)は、外面に櫛描き文を施すものである。釉色は緑灰色である。碗(429)は生産地不明のものである。430・431は底部が分厚い龍泉窯系碗である。皿(425)は平高台のものである。この部分は露胎であるが、それ以外は施釉されている。碗(427)は削り出し高台のものである。碗(426)は碁笥底のものである。釉色から龍泉窯系と考えられる。428は龍泉窯系碗である。内面見込みにヘラ描き文様を施す。これらは、13～14世紀に属するが、426は14～15世紀と考えられる。

432・435・436は青白磁である。432は杯、435は合子の身である。外面は施釉されており、内面は露胎である。口縁部直下に円形浮文を施す。436は壺の把手もしくは耳である。外面に横方向の筋がある。これらは、12～13世紀に属する。



第137図 出土遺物実測図(15) 中世；陶磁器

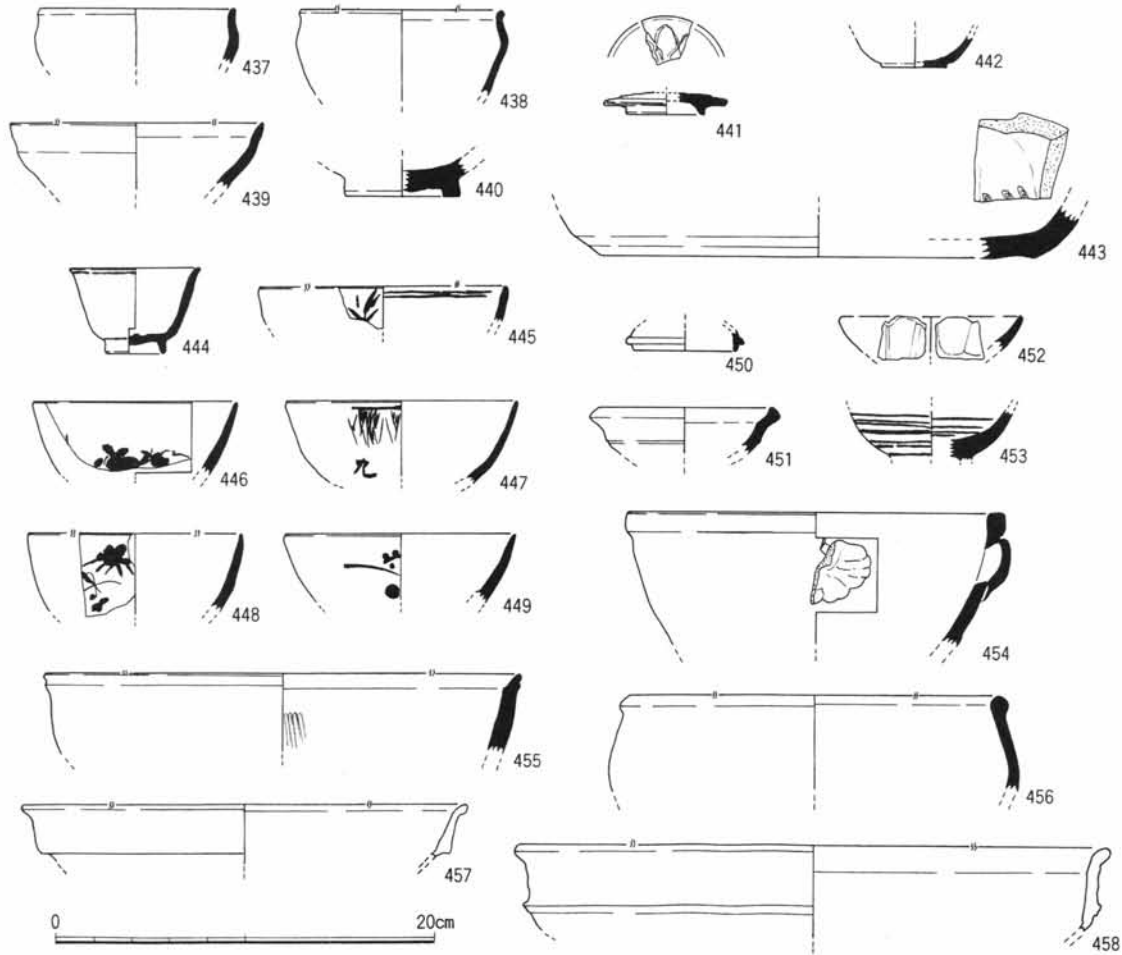
434は褐釉の壺である。外面に褐色の釉を施したものである。12～13世紀に属する。

433・441～443・450～459は古瀬戸である。灰釉のものには鉢(443)や杯(442)、皿(433・451・452)、蓋(441・450)がある。なお、433は卸し皿である。441は外面に蓮弁を刻印したのち施釉している。

6) 近世の土器(第138図)

鉄釉は天目茶碗(437～440)である。これらは、16～17世紀に属する。

444～449は染付である。近世の伊万里である。唐津(453・454)は近世のもので、碗と鉢である。信楽(455)は16世紀のもので、内面に櫛目を施す。陶器(456)は産地不明の近世の鉢である。土師



第138図 出土遺物実測図(16) 近世；陶磁器ほか

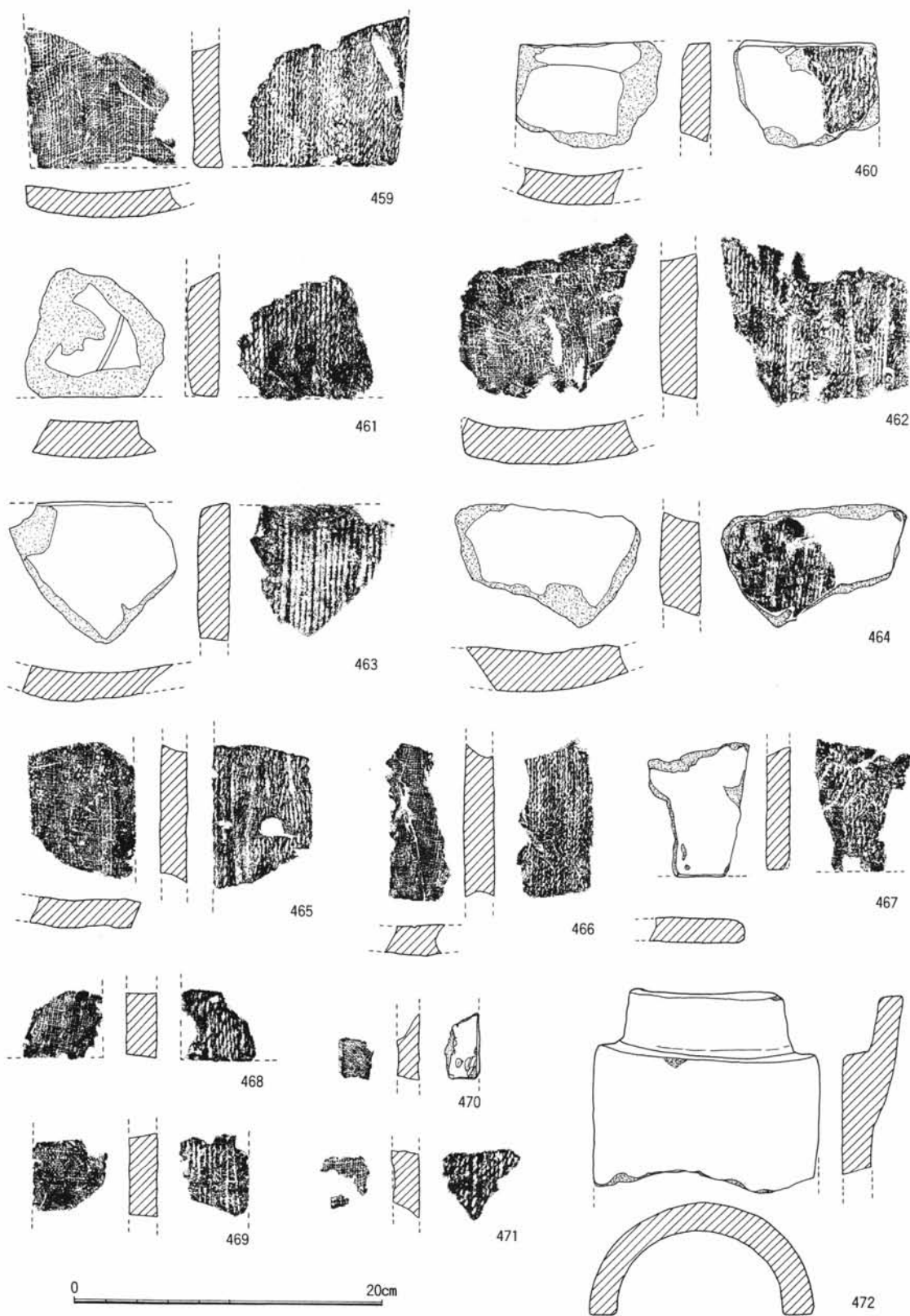
器(457・458)はいずれも鍋である。いわゆる、焙烙鍋で、生産地は奈良もしくは、木津の鹿背山焼きである。

(伊野近富)

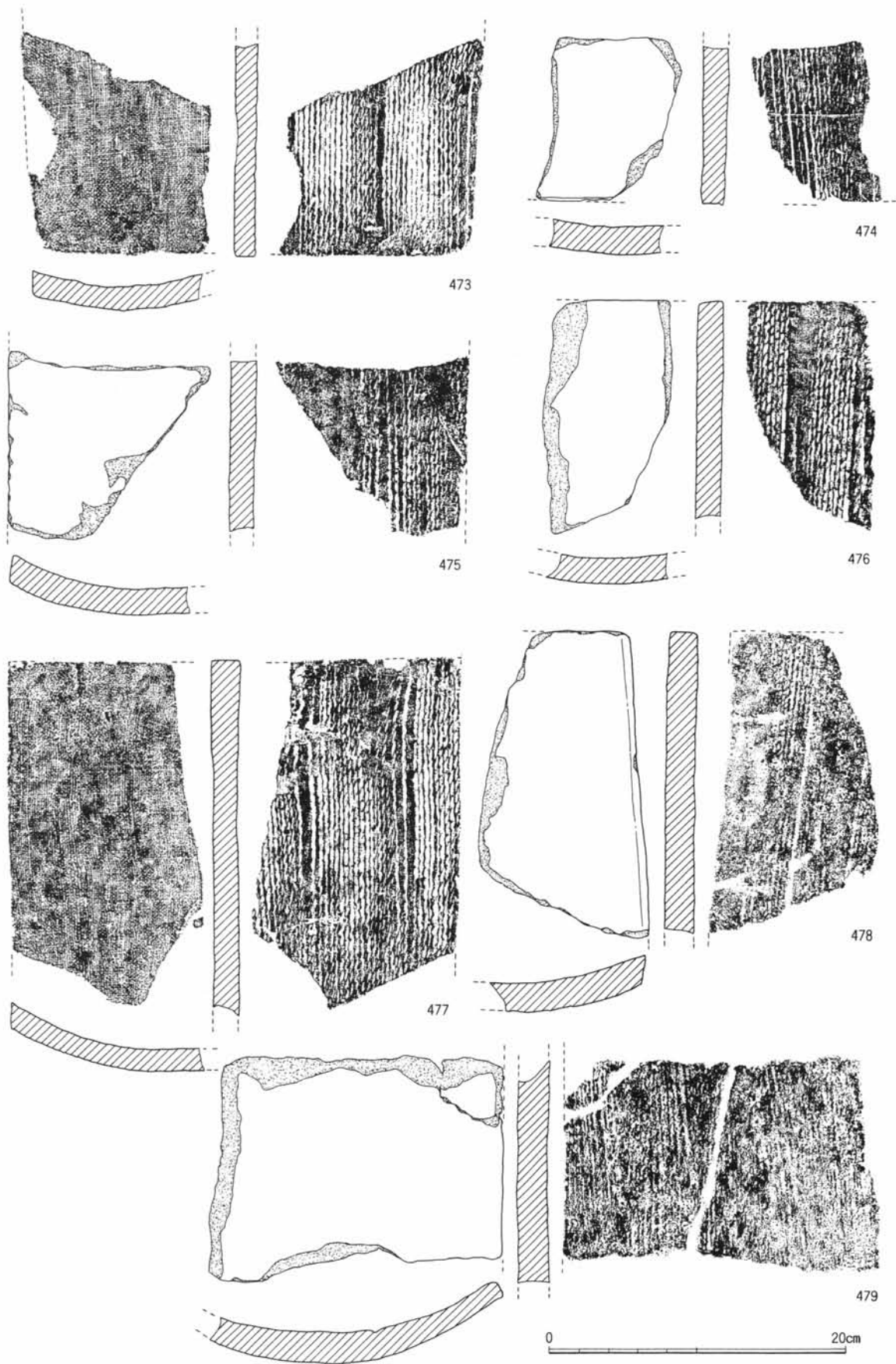
## (2) 瓦類

今回の調査で出土した瓦は遺物包含層を中心に、遺構からも少量ながら出土した。出土した瓦には中世以降のものもみられるが、本概要報告に掲載したものは(502)を除き、いずれも奈良時代の瓦と考えられる。これらの大多数は平瓦であり、その胎土や焼成から大きく2つの群に分けられる。1群は砂粒を含むが、焼成が比較的堅緻なものである。2群は1群よりも砂粒が多いうえ、小礫も混じり、焼成も甘く、磨滅の著しいものである。一方、丸瓦は型式の知り得たもの(500)も含めて、砂粒をほとんど含まないが焼成の甘いものが多い。

459～472・501・502は、第2次調査で出土した。459～471はいずれも平瓦で、凸面に縄叩目、凹面に布目圧痕がみられる。1群に属するのは459・465・466である。2群に属するのは460～464・467である。472は、掘立柱建物跡2の柱穴S P 113出土の丸瓦である。磨滅のため調整は不明で、軒丸瓦であったかどうか不明である。残存長は12.9cmを測る。501は、第8トレンチで出土した軒丸瓦の瓦当部の小破片である。502は、2トレンチで出土した軒平瓦の瓦当部で、中世

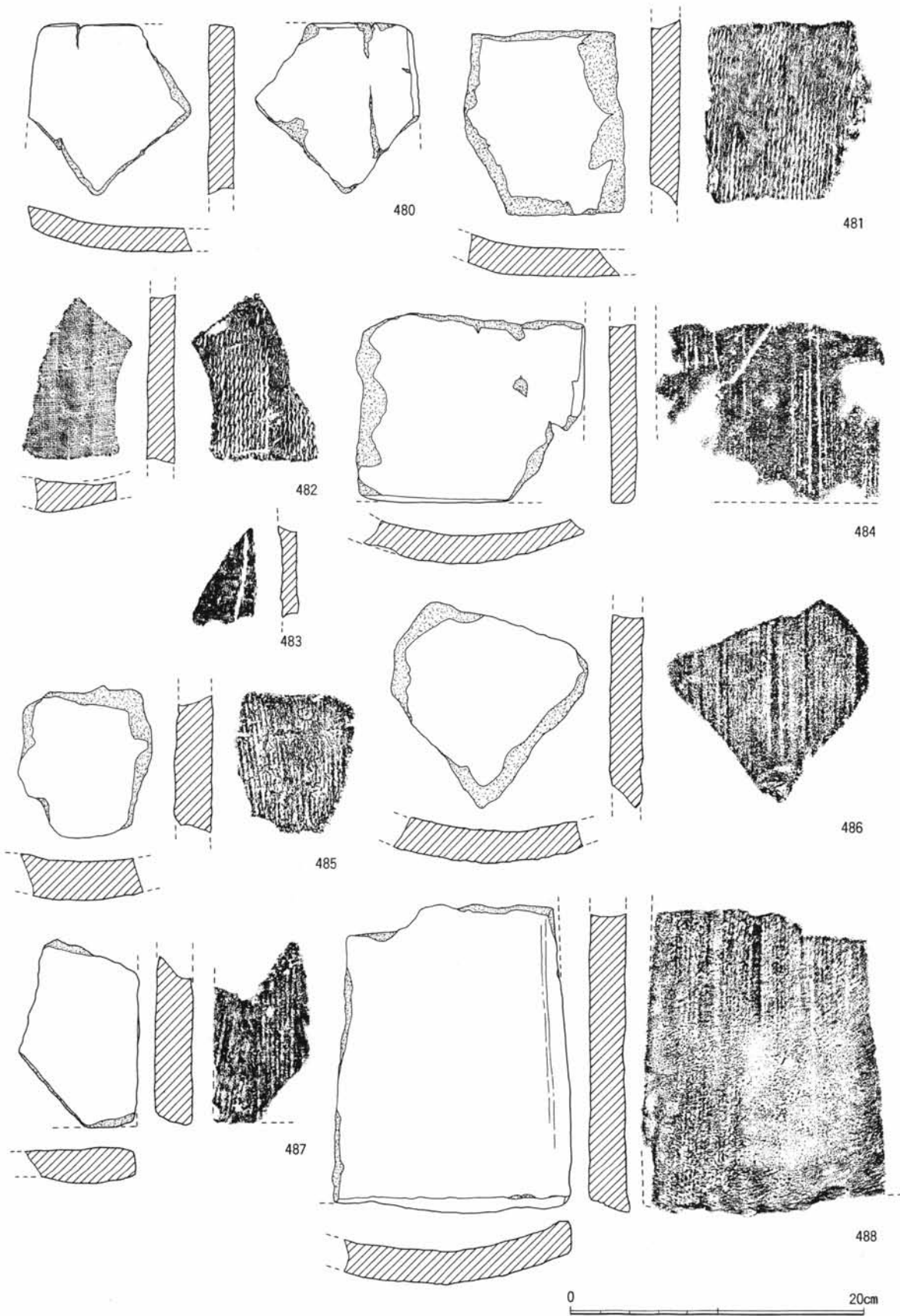


第139図 出土遺物実測図(17) 瓦

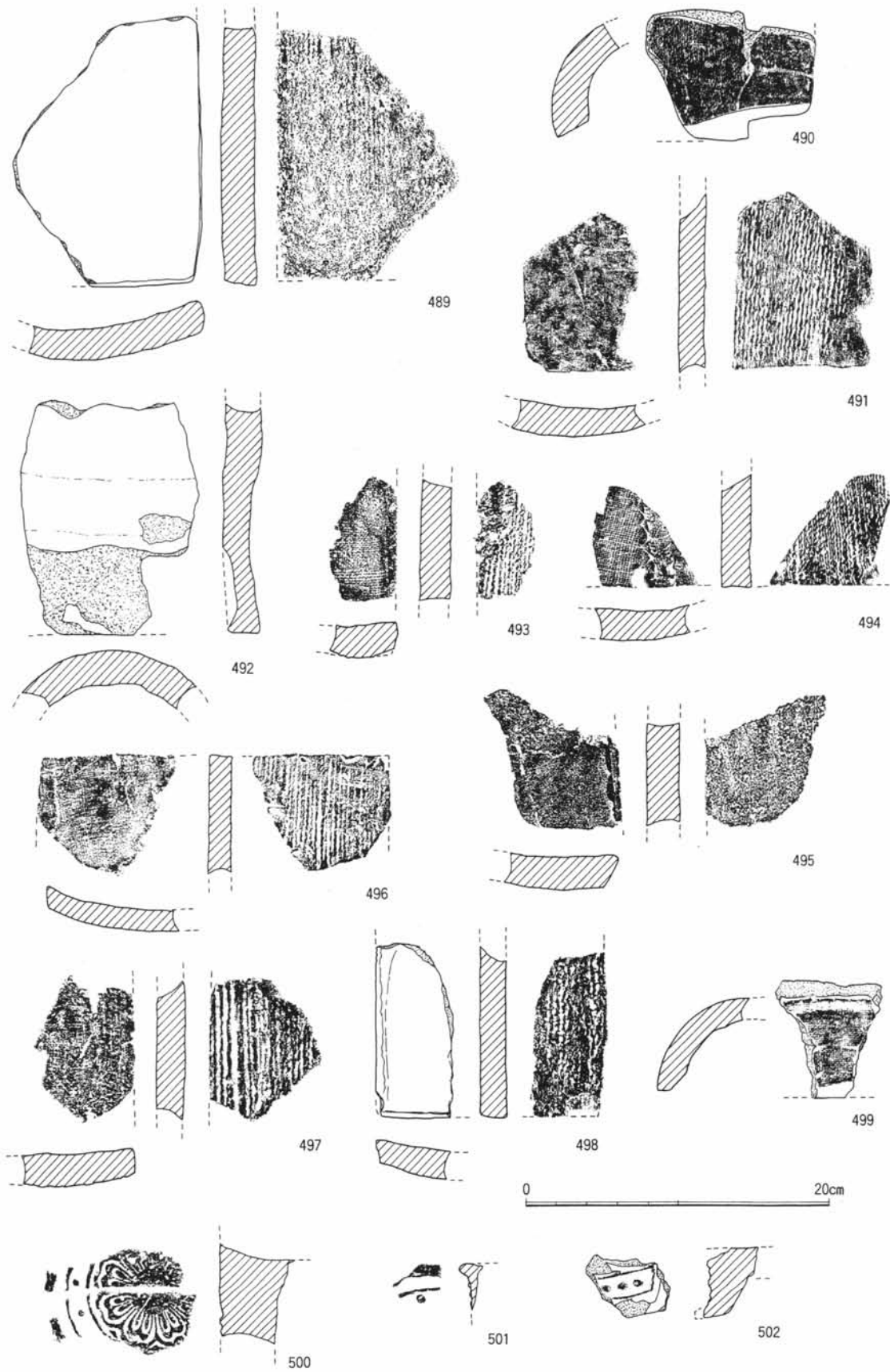


第140図 出土遺物実測図(18) 瓦

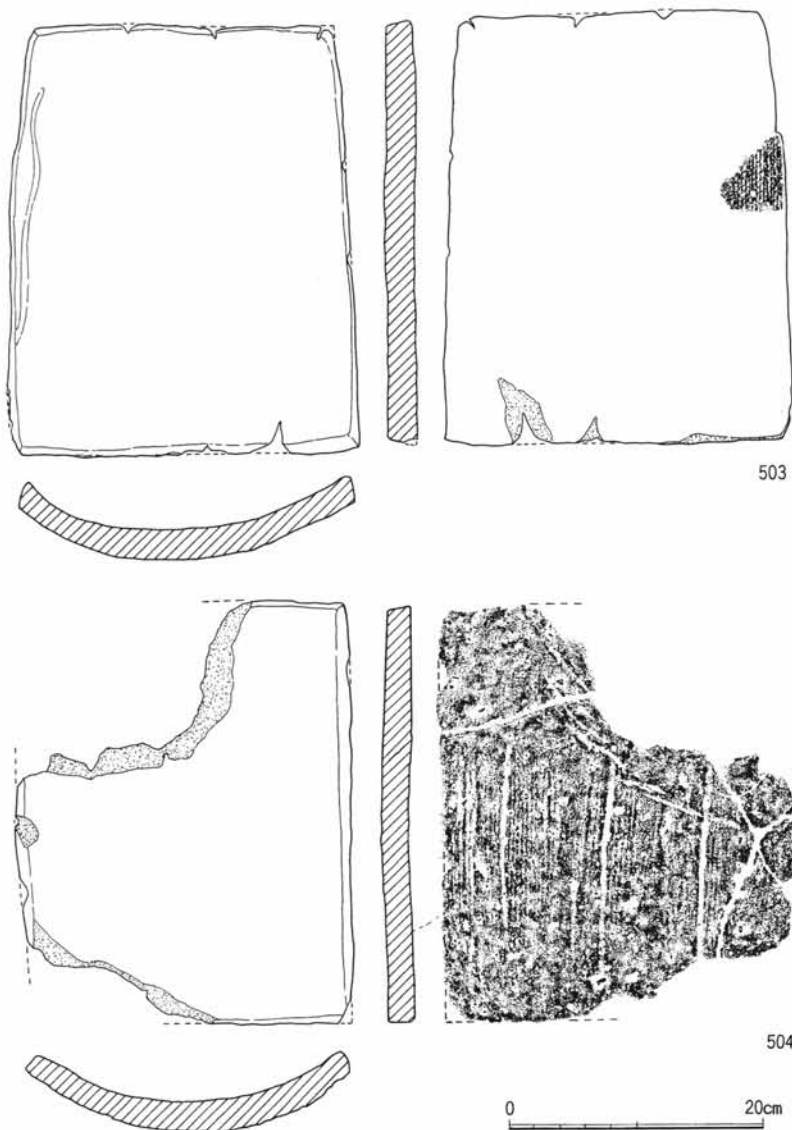




第141図 出土遺物実測図(19) 瓦



第142図 出土遺物実測図(20) 瓦



第143図 出土遺物実測図(21) 瓦

のものである。

473～500・503・504は、第3次調査で出土した。

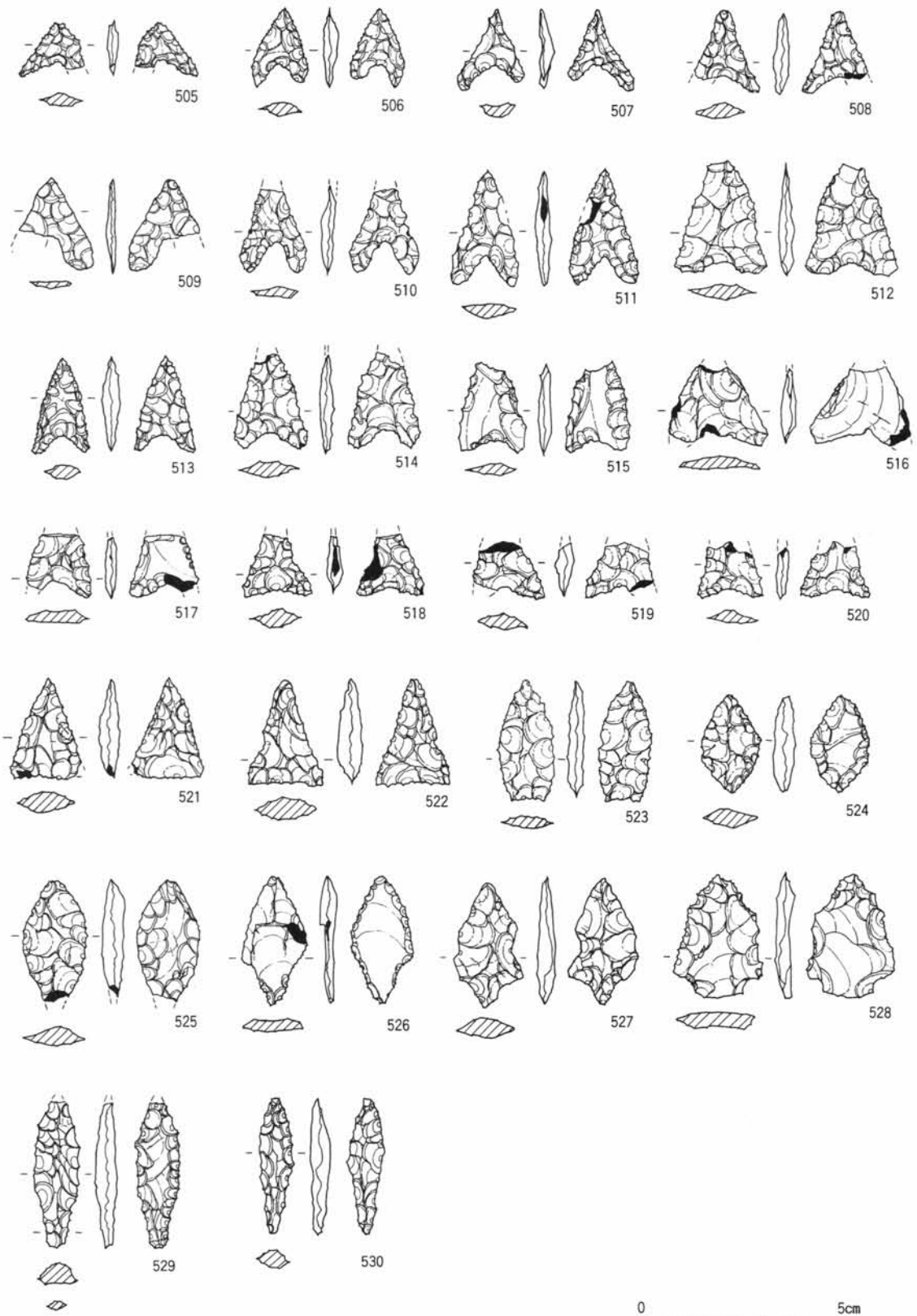
473～480・503は、溝S D132から出土した平瓦である。いずれも凸面に縄叩目、凹面に布目圧痕がみられる。473は残存長15.3cm、残存幅13.5cmを測る。477は残存長23.6cm、残存幅13.4cmを測る。479は残存長15.2cm、残存幅20.0cmを測る。503は、ほぼ完形の状態で投棄されていた平瓦である。全長35.1cm、幅27.6cmを測る。内外面とも剝離・磨滅が著しく、調整痕はほとんど残っていない。1群に属するのは473・474・477である。2群に属するのは475・476・478～480・503である。

481～484は、溝S D157

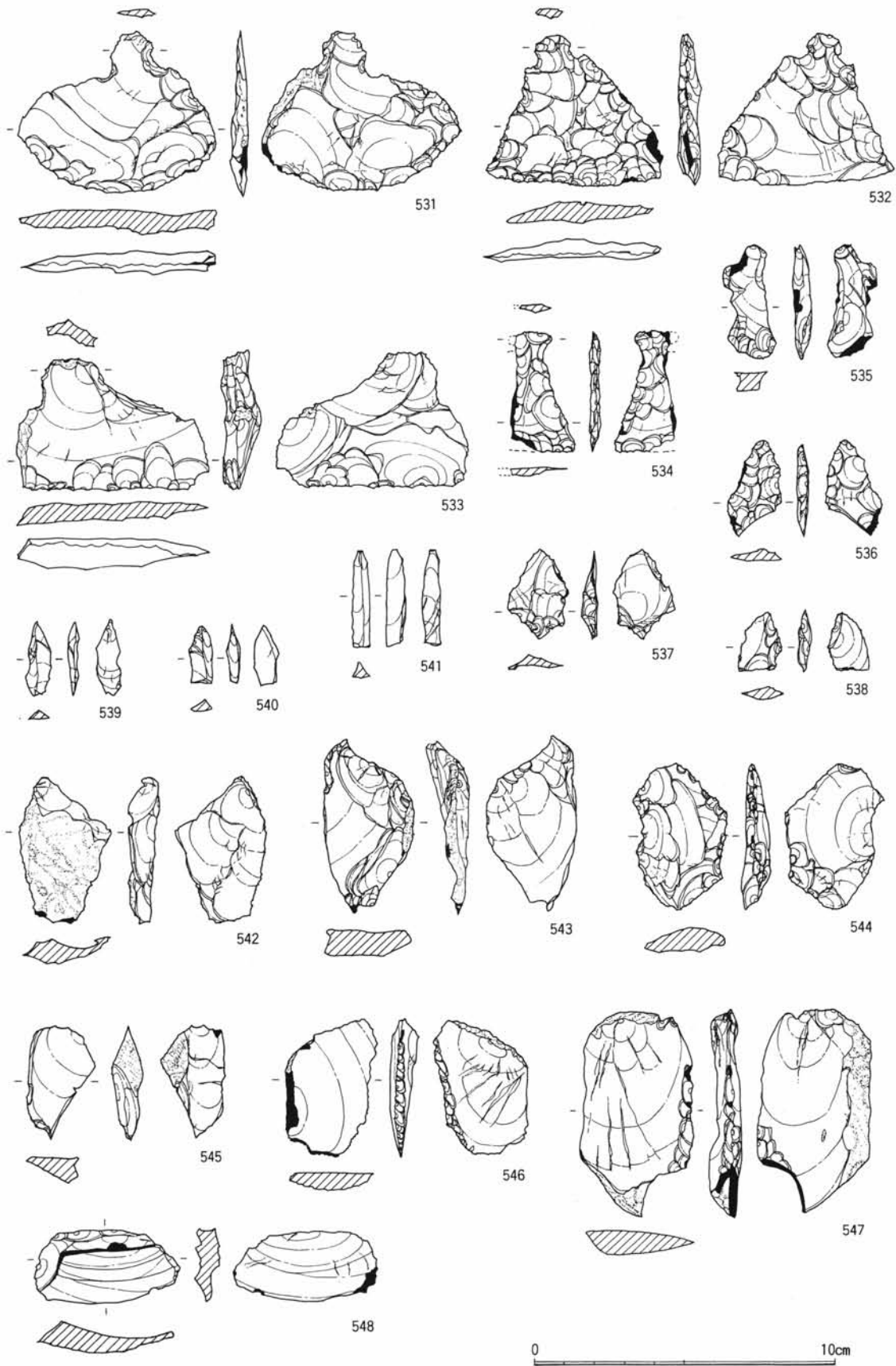
から出土した瓦である。いずれも平瓦で、凸面に縄叩目、凹面に布目圧痕がみられる。いずれも2群に属する。

485～490は、溝S D161から出土した瓦である。485～489は平瓦で、磨滅しているものも多いが、凸面に縄叩目、凹面に布目圧痕がみられる。488は残存長19.1cm、残存幅15.9cmを測る。489は残存長17.6cm、残存幅12.5cmを測る。いずれも2群に属する。490は丸瓦で、内面に布目圧痕がある。残存長10.3cmを測る。

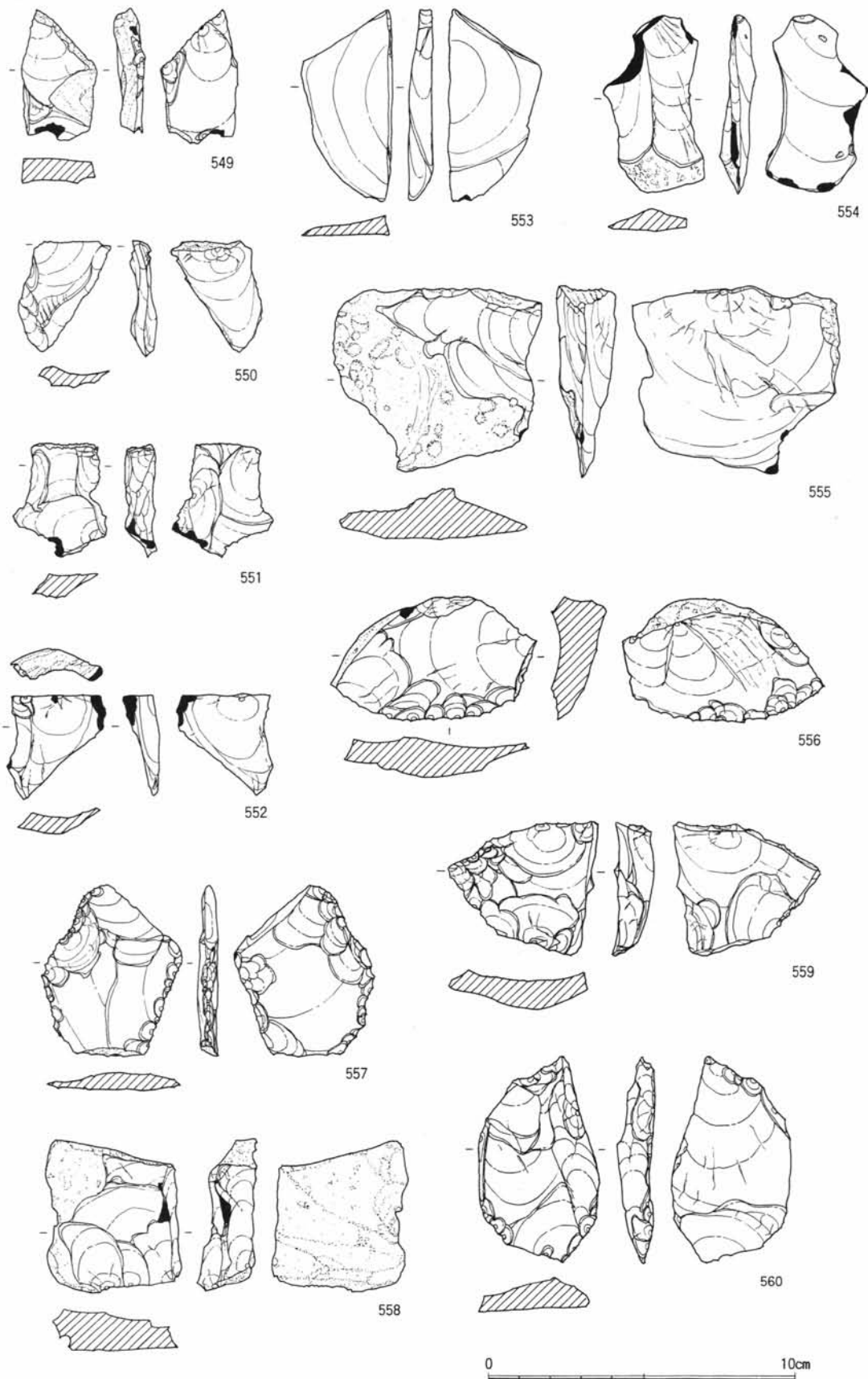
491は、掘立柱建物跡4の柱穴S P193から出土した平瓦である。492は、掘立柱建物跡4の柱穴S P153から出土した丸瓦である。504は、掘立柱建物跡4の柱穴S P194の抜き取り穴から出土した。欠損部があるが、503とほぼ同型同大のものと考えられる。凸面の約1/3は縄叩目がみられず、ナデ消されたと考えられる。胎土は2群である。496・497は、流路S D73から出土した平瓦である。498は、溝S D70から出土した平瓦である。493～495は、遺物包含層から出土した平瓦、499は同じく丸瓦である。



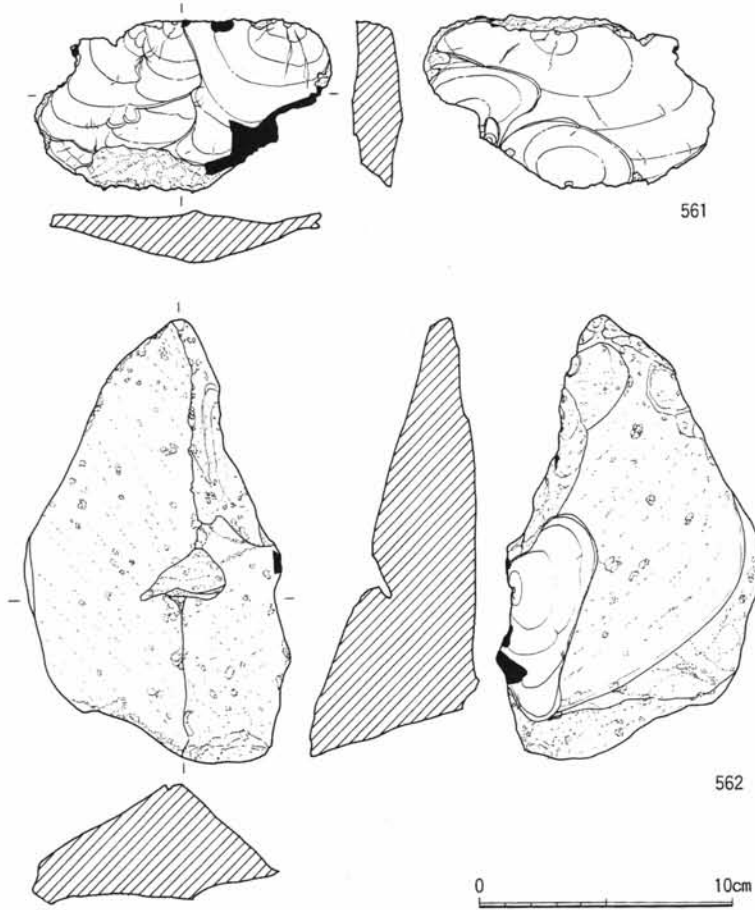
第144図 出土遺物実測図(22) 石器



第145図 出土遺物実測図(23) 石器



第146図 出土遺物実測図(24) 石器



第147図 出土遺物実測図(25) 石器

500は、溝S D187付近の遺物包含層から出土した軒丸瓦の瓦当部である。欠損、磨滅が著しいが、今回の調査において唯一型式を知ることができた。中房は磨滅により不明であるが、弁は複弁蓮華文で、外区に珠文を配する。瓦当部の断面形が突出するような形状とはならず、全体に平坦である。以上のような特徴から、平城宮式の6291B型式と<sup>(注10)</sup>考えられる。残存高6.3cm、残存幅12.5cmを測る。胎土は砂粒をあまり含まないが、焼成は甘い。色調は淡橙褐色を呈する。6291B型式は奈良市薬師寺をはじめ、京都府城陽市平川廃寺・同久世廃寺などで出土例

があるが、平城宮内において出土していない。500は平城宮瓦編年の第Ⅲ期後半(749～757年)に位置づけられる。

さて、片山遺跡における奈良時代の瓦の出土状況をみると、まず軒瓦の少なさがある。また、丸瓦も決して多くない。これに対して圧倒的に多いのが平瓦である。当遺跡で確認された遺構はいずれも掘立柱建物跡であり、瓦を多用するような建物の存在は確認していない。したがって、軒瓦や丸瓦の少なさを考えると、平瓦を鬘斗瓦として、建物の一部に瓦を利用していた可能性がもっとも高いと考えられる。

### (3) 石器

今回の調査では、遺構に伴うものはなかったものの、遺物包含層から大量の石器・剥片が出土した。ただ、今回の報告では、出土資料の提示にとどめ、今後の調査・研究に期待したい。なお、これらの石材はいずれもサヌカイトと考えられる。

505～530は石鏃である。505～520は縄文時代、521～530は弥生時代のものと考えられる。531～534は石匙である。534は1/2程度欠損する。535～561は剥片である。自然面を一部に残すものがある。562は原石と考えられ、一部に新しい剥離痕がみられた。

ところで、片山遺跡周辺における石器資料は、赤ヶ平遺跡で弥生時代前期の土坑から石器製作に伴う剥片類が大量に出土した例を除けば、<sup>(注11)</sup>あまり量的に知られていなかった。しかし、今回の

調査では、遺物包含層中から大量に出土した。今回、出土した石器の多くは縄文時代のものと考えられ、これらは片山遺跡や燈籠寺遺跡で出土している縄文土器の時期、すなわち縄文時代後期に属する可能性が高いと考えられる。

(4) そのほかの遺物

今回の調査では、土器・瓦・石器以外にも多数の遺物が出土した。以下では、代表的な遺物について述べる。また、今回図示することはできなかったが、フイゴの先端なども出土した。

**鉄器** 563は、土墳墓S X165から出土した刀子である。全長4.9cm、幅1.1cm、厚さ0.3~0.4cmを測る。

**埴輪** 564は、第2トレンチ東端の遺物包含層から出土した家形埴輪の破片である。床周りの破片と考えられる。残存高8.6cmを測る。胎土は1mm前後の砂粒を多く含むが、焼成は良好である。色調は淡橙褐色を呈する。片山遺跡の東側の丘陵上に位置する内田山B1号墳に樹立されていたものが転落したのと考えられる。

**不明製品** 565は、遺物包含層から出土した土製の円盤である。直径3.0cm、厚さ1.0cmを測り、中央に直径0.2~0.3cmの穿孔がある。詳細は不明であるが、紡錘車の可能性がある。

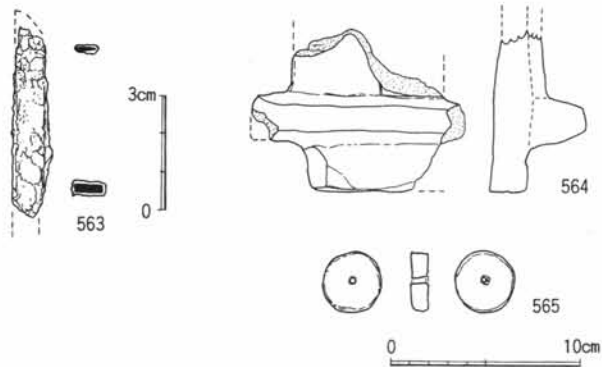
**銭貨** 566・567は、遺物包含層から出土したもので、どちらも北宋銭である。566は「元豊通寶」(1078年初鑄)で、直径2.4cmを測る。567は1字欠損するが「紹聖元寶」(1094年初鑄)と考えられ、直径2.45cmを測る。

7. まとめ

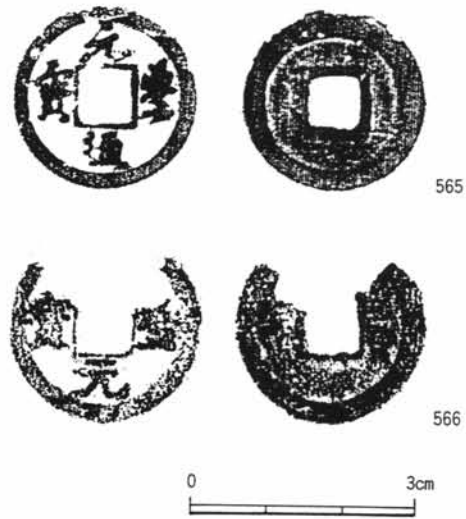
2か年にわたる調査では、縄文時代から近世に至る遺構・遺物を多数検出した。片山遺跡の本格的な調査としてははじめてのもので、大きな成果を得ることができた。また、周辺でも多くの調査が行われており、今回の調査成果はこれらと切り離して論じることはできない。以下、周辺遺跡の動向と絡めながら時代ごとに調査成果のまとめを行いたい。

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構としては土坑1基を検出したにとどまる。この土坑から縄文時代後期の土器(深鉢1点)が出土したほか、遺物包含層から多量の石器・剥片が出土した。また、片山遺跡の北東約750mのところでは旧河道から縄文時代後期の土器が多数出土した燈籠寺遺跡<sup>(注12)</sup>がある。した



第148図 出土遺物実測図(26)  
鉄器・埴輪・不明土製品



第149図 出土銭貨拓影



がって、片山遺跡の所在する木津町東部の丘陵周辺において、縄文時代後期を中心とする遺跡の形成が行われたと考えられる。

## (2) 弥生時代

弥生時代後期末の竪穴式住居跡を3基検出し、さらに関連する遺構や遺物が出土した。片山遺跡周辺には、前期の土坑を検出した赤ヶ平遺跡<sup>(注13)</sup>や中期の方形周溝墓などを検出した燈籠寺遺跡<sup>(注14)</sup>があり、さらに後期の集落遺跡として木津城山遺跡<sup>(注15)</sup>や燈籠寺遺跡<sup>(注16)</sup>、内田山遺跡<sup>(注17)</sup>などがある。今回検出した遺構群は、出土した土器から、これらに後続するものである。

片山遺跡を含む木津町とその周辺地域における弥生時代後期の遺跡の調査は、近年、大きな成果をあげているので、それらについて簡単にまとめておきたい。なお、後期弥生土器の編年観は木津城山遺跡の報告書に掲載したものにもとづく<sup>(注18)</sup>。

まず、内田山遺跡土器溜まりS X 113出土資料は一部第2段階を含むものの、主体は第3段階と考えられる。片山遺跡の竪穴式住居跡S B 140・142出土資料は第6段階と考えられる。精華町椋ノ木遺跡の大溝S D 1001・1002出土資料第4段階から第5段階にかけてと考えられる<sup>(注19)</sup>。山城町上狛西遺跡でも良好な資料が出土しており、おおむね第4段階と考えられる。このように木津町・山城町・精華町の相楽郡西部地域の弥生時代後期の土器資料は非常に充実してきた。

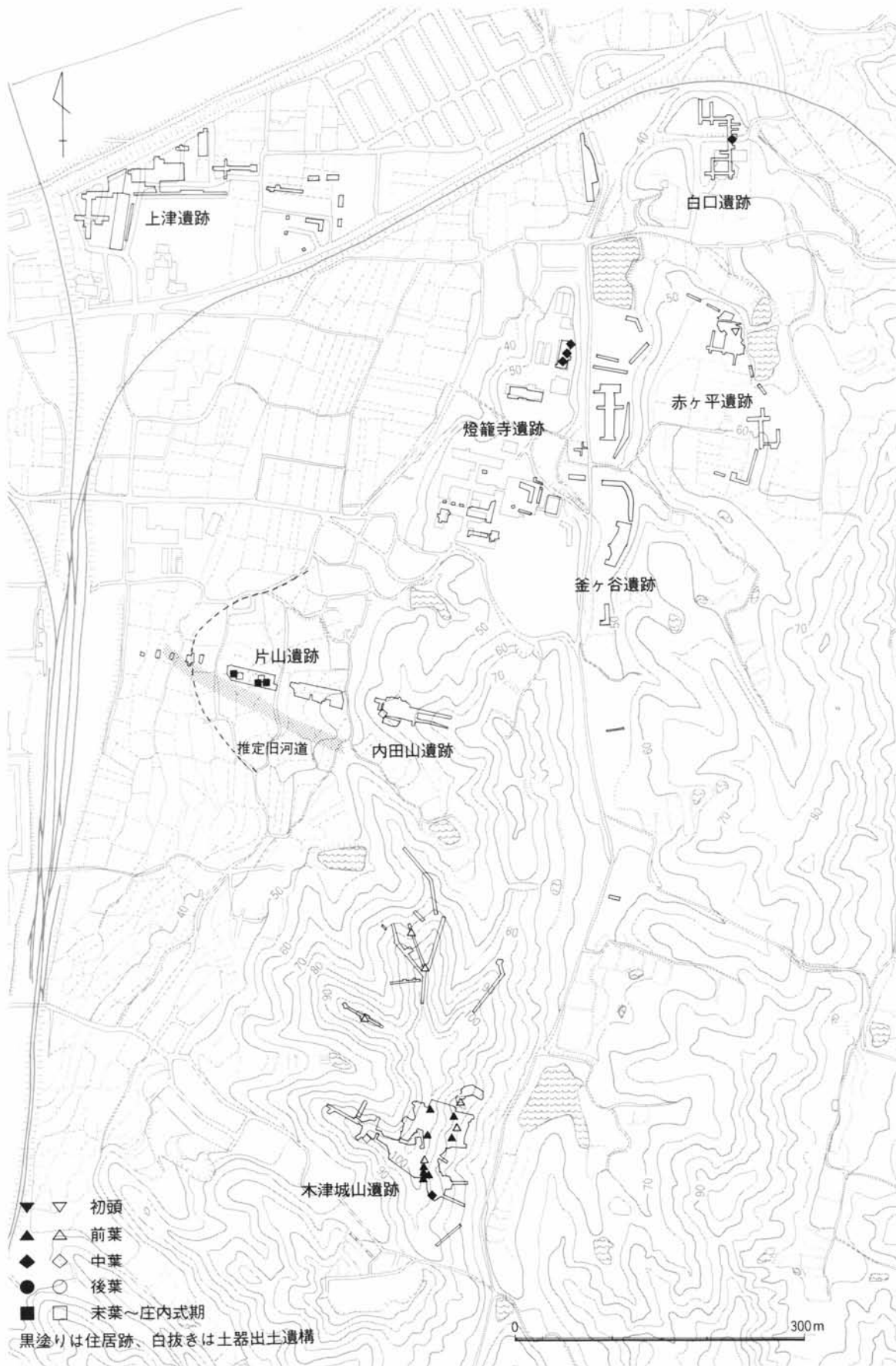
以上の土器群の位置づけがに問題がないとすれば、片山遺跡周辺では第5段階の良好な資料はみられないものの、第2段階の木津城山遺跡から第3段階の内田山遺跡、第4段階の燈籠寺遺跡を経て第6段階の片山遺跡へと、高地性集落である木津城山遺跡から平地の集落である片山遺跡へ、時期を追うごとに丘陵上から平地へと集落の中心地を移動させていくようすが見て取れる。これは、八幡市や久御山町において、弥生時代後期中葉後半(第4段階)以降になると、平地に大規模な集落(内里八丁遺跡や佐山遺跡など)が成立することと関連した現象と考えられる。

## (3) 古墳～飛鳥時代

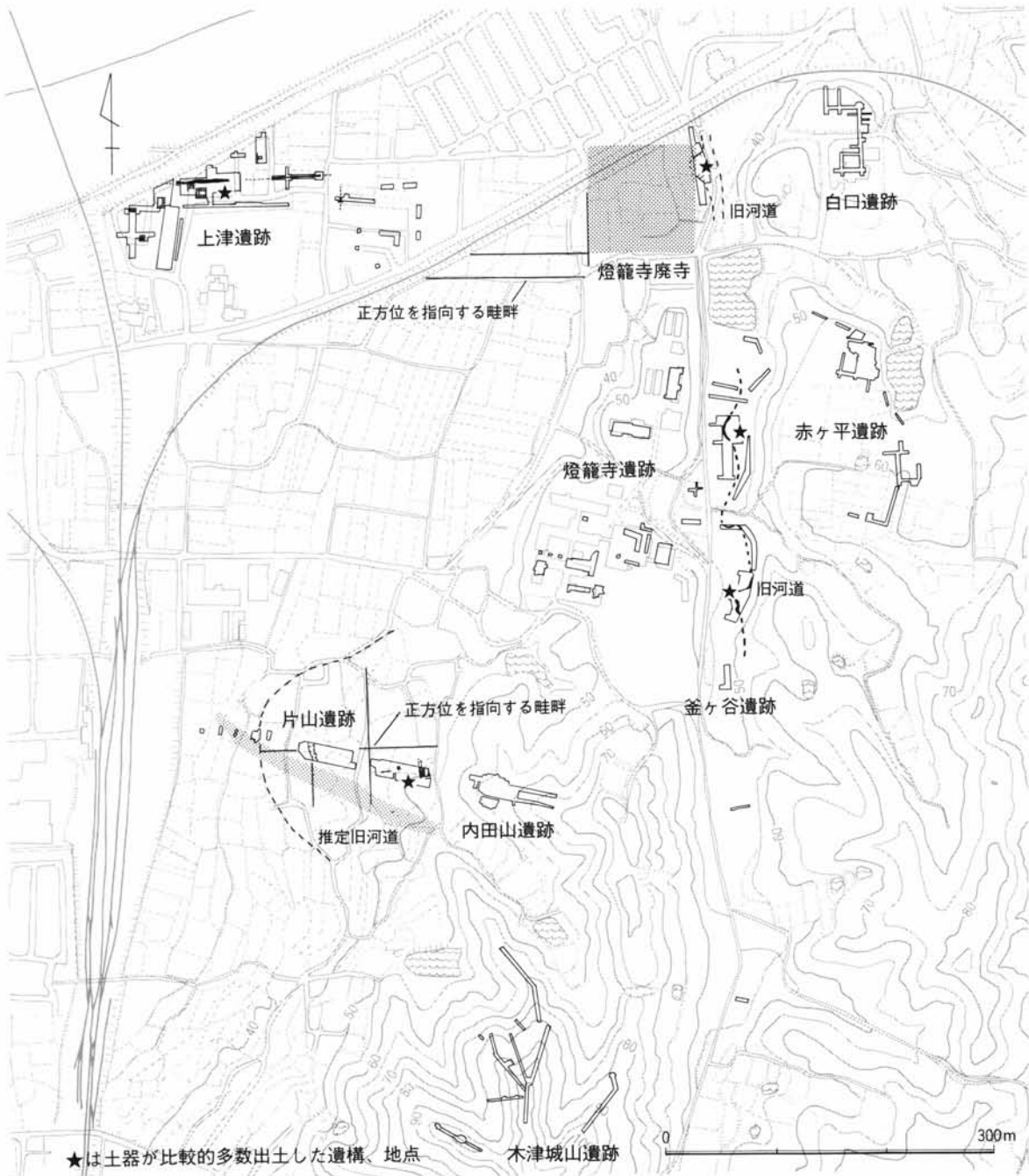
古墳～飛鳥時代の遺構としては、土壙墓1基を検出したにとどまる。ところで、東側の丘陵上には、古墳時代中期の内田山古墳群<sup>(注20)</sup>と、飛鳥時代の片山古墳群<sup>(注21)</sup>が所在する。しかし、今回の調査では、若干の遺構・遺物の出土は確認できたものの、両時期の集落の存在をうかがわせるような遺構・遺物は確認できなかった。木津町域を見渡してもこの時期の集落遺跡は決して多くない。特に古墳時代中期には多数の古墳が造られるにもかかわらず、集落遺跡の数が少ない点は、今後の調査・研究にあたって注意していかなければいけない。

## (4) 奈良～平安時代

奈良時代の遺構としては、掘立柱建物跡・井戸・溝・土坑・流路など、多数の遺構を検出することができた。これらの遺構の性格については、文字資料がないのため具体的には不明である。しかし、遺構の規模や正方位を指向する点、さらに平城宮式の軒丸瓦(500)の出土、調査地の北西約600mに平城京の外港である泉津関連の施設と考えられる上津遺跡<sup>(注22)</sup>があることなどから、官衙や駅家など、公的な機関の施設である可能性が高い。あるいは精華町畑の前遺跡<sup>(注23)</sup>の建物跡の柱穴規模と類似することから貴族の邸宅あるいは別荘などの可能性も考えられる。しかし、建物の



第150図 片山遺跡周辺弥生時代後期遺構分布図



第151図 片山遺跡周辺奈良時代遺構分布図

構造や瓦の出土量などから、瓦葺きの建物とは考えられず、寺院跡の可能性はほとんどない。また、流路S D73では人為的な掘削と思われる痕跡も確認している。流路S D73は、地形的には自然流路の存在するような地点ではないことから、調査地の南方に存在すると考えられる旧河道から水を引くために掘削された人工的な水路であった可能性もある。なお、第1・3トレンチでも遺物包含層から奈良時代の遺物が多数出土しており、さらに広い範囲にわたって、これらの遺構群が広がっていたと考えられる。

次に、これらの成立および廃絶年代についてであるが、遺構の検出状況から、大きく2時期の存在が確認できる。まず、溝S D132・161、井戸S E07が黄褐色粘質土によって埋め立てられて

いることから、これらの遺構が第1段階と考えられる。そして、この整地土の上層に位置する溝SD157・187などが第2段階にあたる。検出している建物跡のうち、建物跡4は第1段階に位置づけられる可能性が高く、建物跡5はこれに先行すると考えられる。なお、建物跡4は、その規模などから、今回検出した遺構群の中心的施設と考えられる。一方、建物跡2・3はいずれの段階のものか不明である。ただし、建物跡3は主軸が正方位から大きくずれることから、より後出する可能性もある。これらの遺構からは、少なからずの土器が出土しているが、時期を明確にできるものは少ない。おそらく平城宮土器ⅢからⅤにかけてものと考えられる。このことは唯一型式の判明した6291B型式の年代観からも裏付けられる。すなわち、唯一型式の判明した軒丸瓦6291B型式は、平城宮瓦編年によると、Ⅲ期後半、暦年代で749～757年(天平勝宝年間)に位置づけられている。500が今回検出された建物跡4・5に利用されていたかどうかは明らかでないが、当遺跡におけるこれらの遺構群の年代を考える上で参考になる。

以上のことから、片山遺跡における奈良時代の遺構群の形成期(第1段階)は、奈良時代中頃と考えられる。恭仁宮の成立・存続時期に近い可能性があるものの、本遺跡形成の契機が恭仁宮の造営とかかわるかどうかは明らかでない。ただ、6291B型式の軒丸瓦の存在から、天平勝宝年間(749～757年)には当該期の遺構群が成立していた可能性は高い。その後、一旦整地をされて新たな建物の造営が行われた(第2段階)。奈良時代後半と考えられる。中心的な施設である建物跡4は、第1段階から第2段階にかけて存在したと考えられる。建物跡4の廃絶時期は明らかでないが、建築部材を再利用するために抜き取っている点を踏まえ、出土土器の様相や当時の社会情勢から、長岡京遷都を一つの契機、廃絶の理由と考えることも可能である。このことは平安時代前期に位置づけられる遺物がほとんど出土しないことから確認できる。

#### (5) 中世以降

中世段階では、顕著な遺構は検出されなかったが、中国製陶磁器や多数の食器(瓦器碗・土師器皿など)、煮炊具(土釜・土鍋など)が遺物包含層から出土したことから、有力豪族の居宅や寺院などが存在した可能性が考えられる。この遺物包含層は、本来存在した中世段階の遺構を削平して形成されたと考えられる。このことは今日みるような水田や畑地などの耕地化が遅くとも近世段階には達成されていたことを示している。

(筒井崇史)

注1 平成15・16年度における調査参加者は以下の通りである。

井上聡・大野壽子・大谷博則・岡野奈知子・荻野富紗子・奥出裕也・春日満子・小澤政貴・滝下勝久・田中陽子・土屋菜摘子・長尾美恵子・中津梓・永野宏樹・野上由香・藤野好博・松浦弘太郎・丸谷はま子・八木哲・山田三喜子・鷺田紀子

注2 個々の文献については省略するが、木津町教育委員会ならびに当調査研究センターが木津町において実施した発掘調査に伴う各調査報告書、および『木津町史』本文編、『同』資料編Ⅰを参照した。

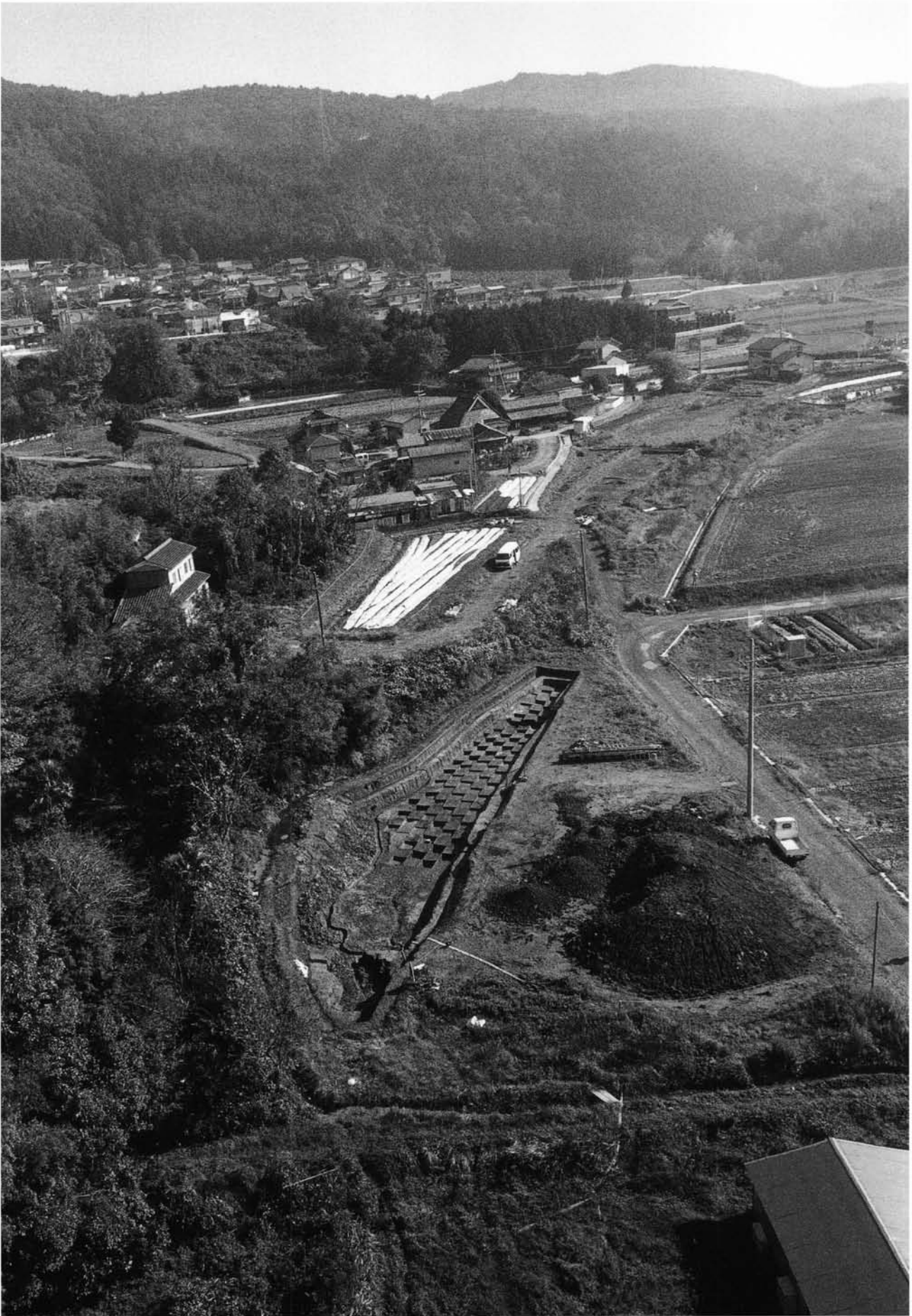
注3 足利健亮「恭仁京プランの復原」(『日本古代地理研究』大明堂) 1985

注4 松本秀人『片山遺跡』(『木津町埋蔵文化財発掘調査報告書』第7集 木津町教育委員会) 1989

- 注5 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』（平安学園考古学クラブ）1966
- 注6 奈良国立文化財研究所編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』（『奈良国立文化財研究所学報』第31冊）1978  
同『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ』（『奈良国立文化財研究所学報』第55冊）1955
- 注7 奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』Ⅶ（『奈良国立文化財研究所学報』第26冊）1976  
同『平城宮発掘調査報告』Ⅺ（『奈良国立文化財研究所学報』第40冊）1981
- 注8 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」（『文化財論叢』奈良国立文化財研究所）1983
- 注9 森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開」（『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館）1986
- 注10 「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」（『平城宮発掘調査報告』Ⅻ（『奈良国立文化財研究所学報』第50冊）奈良国立文化財研究所）1991  
なお、出土軒瓦については、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の林正憲・中川あや氏からご教授を得た。
- 注11 筒井崇史・山内基樹ほか「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成13年度発掘調査概報」（『京都府遺跡調査概報』第105冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2002
- 注12 伊賀高弘「燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第64冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1995
- 注13 注11文献に同じ
- 注14 黒坪一樹「燈籠寺遺跡第4次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第43冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1991
- 注15 筒井崇史ほか「木津城山遺跡」（『京都府遺跡調査報告書』第32冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2003
- 注16 石井清司ほか「燈籠寺遺跡第6次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第53冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1993
- 注17 筒井崇史「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成14年度発掘調査概報」（『京都府遺跡調査概報』第110冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2004
- 注18 注15文献74～75項
- 注19 森島康雄・石崎善久「棕ノ木遺跡第6次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第110冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2004
- 注20 大槻真純「内田山古墳発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第4冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1982、松井忠春ほか「燈籠寺遺跡第2次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第16冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1985、伊賀高弘「燈籠寺遺跡第7次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第57冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1994、戸原和人・筒井崇史「木津地区所在遺跡平成11年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第95冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2000
- 注21 注15文献に同じ
- 注22 平良泰久・奥村清一郎ほか「上津遺跡第2次発掘調査概報」（『木津町埋蔵文化財発掘調査報告書』第3集 木津町教育委員会）1980
- 注23 川西宏幸ほか編『京都府(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書』（精華町教育委員会・（財）古代学協会）1987

図

版



案察使遺跡調査トレンチ全景(西から)

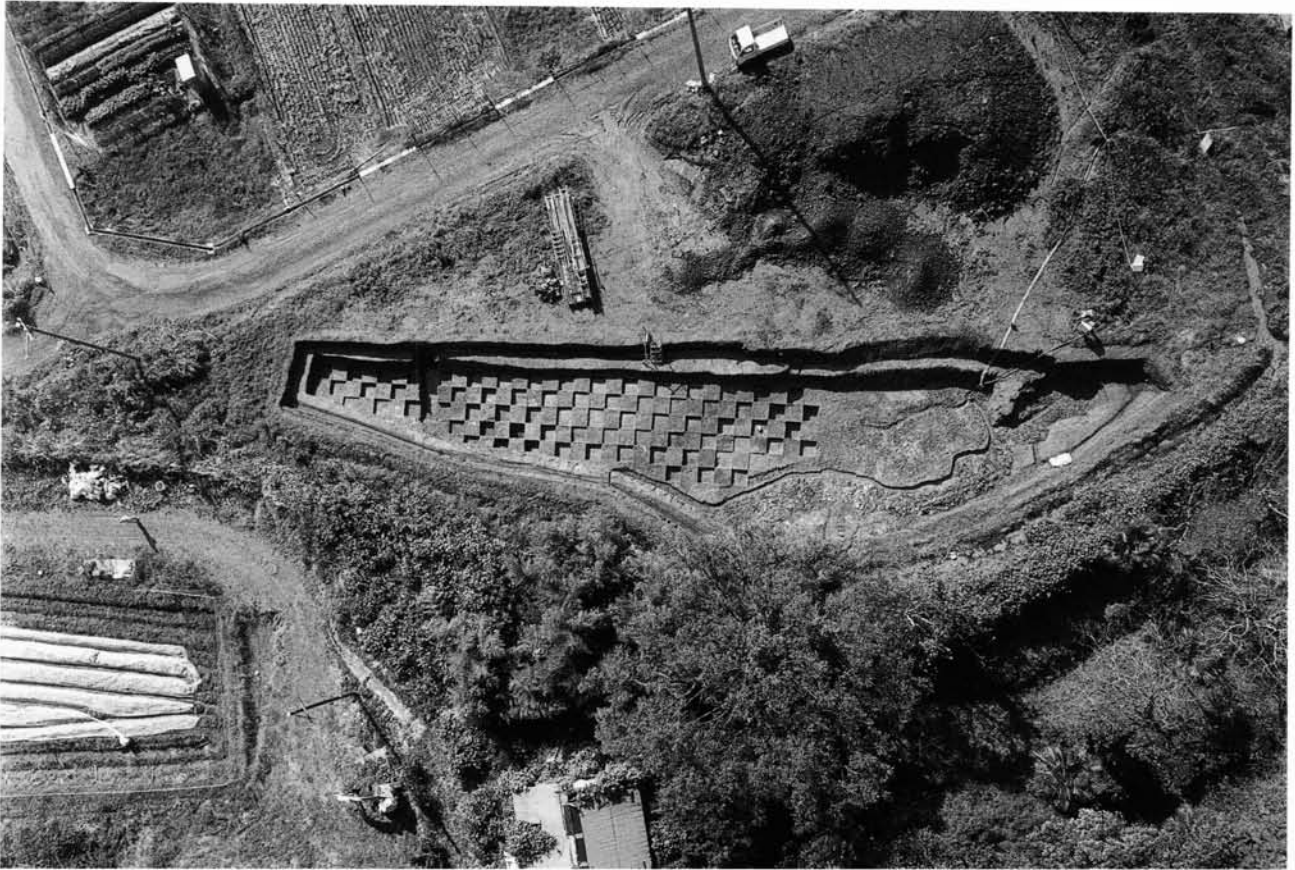


(1)第1 トレンチ全景(東から)



(2)第2 トレンチ全景(南から)





(1)第3トレンチ全景(上が南)



(2)試掘第2トレンチ(西から)



(1)試掘第 3 トレンチ(東から)



(2)試掘第 4 トレンチ(東から)



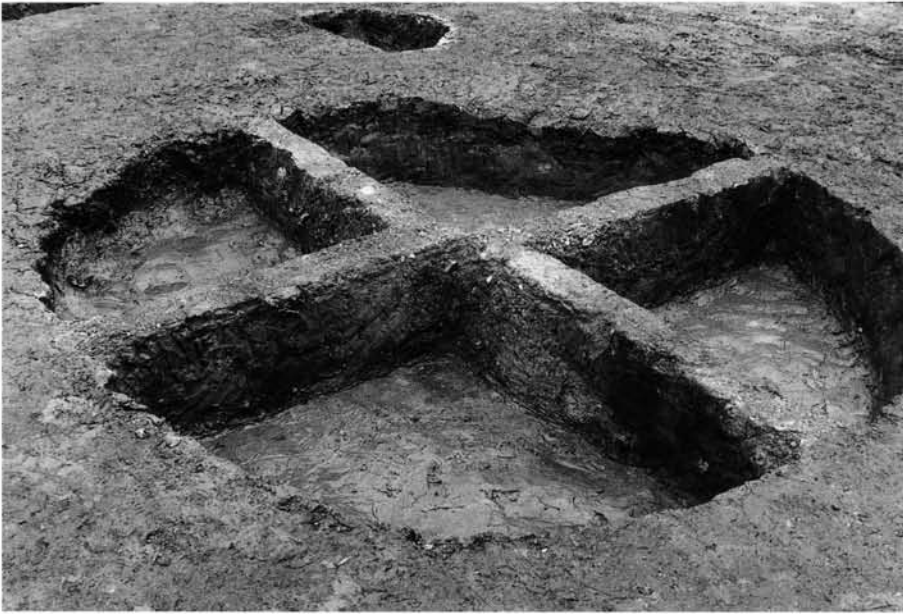
(1)第1トレンチ北部遺構(南から)



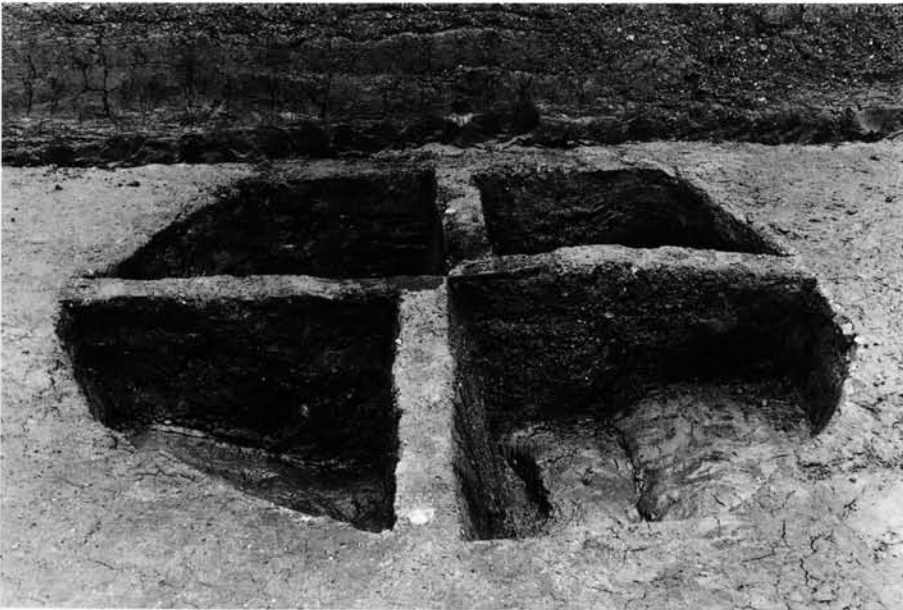
(2)第1トレンチ南部遺構(北から)



(3)第1トレンチ土坑S K01  
遺物出土状況(東から)



(1)第1 トレンチ S K02(東から)



(2)第1 トレンチ S K04(東から)



(3)第1 トレンチ S K09  
遺物出土状況(南から)



(1)第2トレンチ(西から)



(2)第2トレンチ(東から)



(1)第2トレンチ南部落ち込み  
(西から)



(2)第2トレンチ土坑SK17  
遺物出土状況(北から)



(3)第2トレンチ土坑SK17  
遺物出土状況(北から)



(1)第2 トレンチ溝 S D 13(北から)



(2)第2 トレンチ溝 S D 13断面  
(北から)



(3)第2 トレンチ土坑 S K 16  
(北から)



(1)第2トレンチ土坑S K15・16  
(南から)



(2)第2トレンチ土坑S K15  
(南から)



(3)第3トレンチ東部(西から)





(1)第3トレンチ深堀区南壁(北から)



(2)第3トレンチ木質出土状況(上が北)



(3)第3トレンチ深堀区(西から)



(1)第3トレンチF26グリッド  
遺物出土状況(北から)



(2)第3トレンチF24グリッド  
遺物出土状況(東から)



(3)第3トレンチトレンチ中央部  
(南から)



18



26



11



16



3



9



6



38



(1) 縄文時代押型文土器(表)



(2) 縄文時代押型文土器(裏)



(1)第1トレンチ調査前全景(南から)



(2)第1トレンチ溝S D 150(南東から)



(1)第1 トレンチ溝 S D 150遺物出土状況(北から)



(2)第1 トレンチ溝 S D 150手焙形土器出土状況(北から)



(1)第1トレンチ土坑S K158(南西から)



(2)第1トレンチ土坑S K158遺物出土状況(南東から)



(1)第1トレンチ西半部上層遺構(北西から)



(2)第1トレンチ溝S D155(北から)

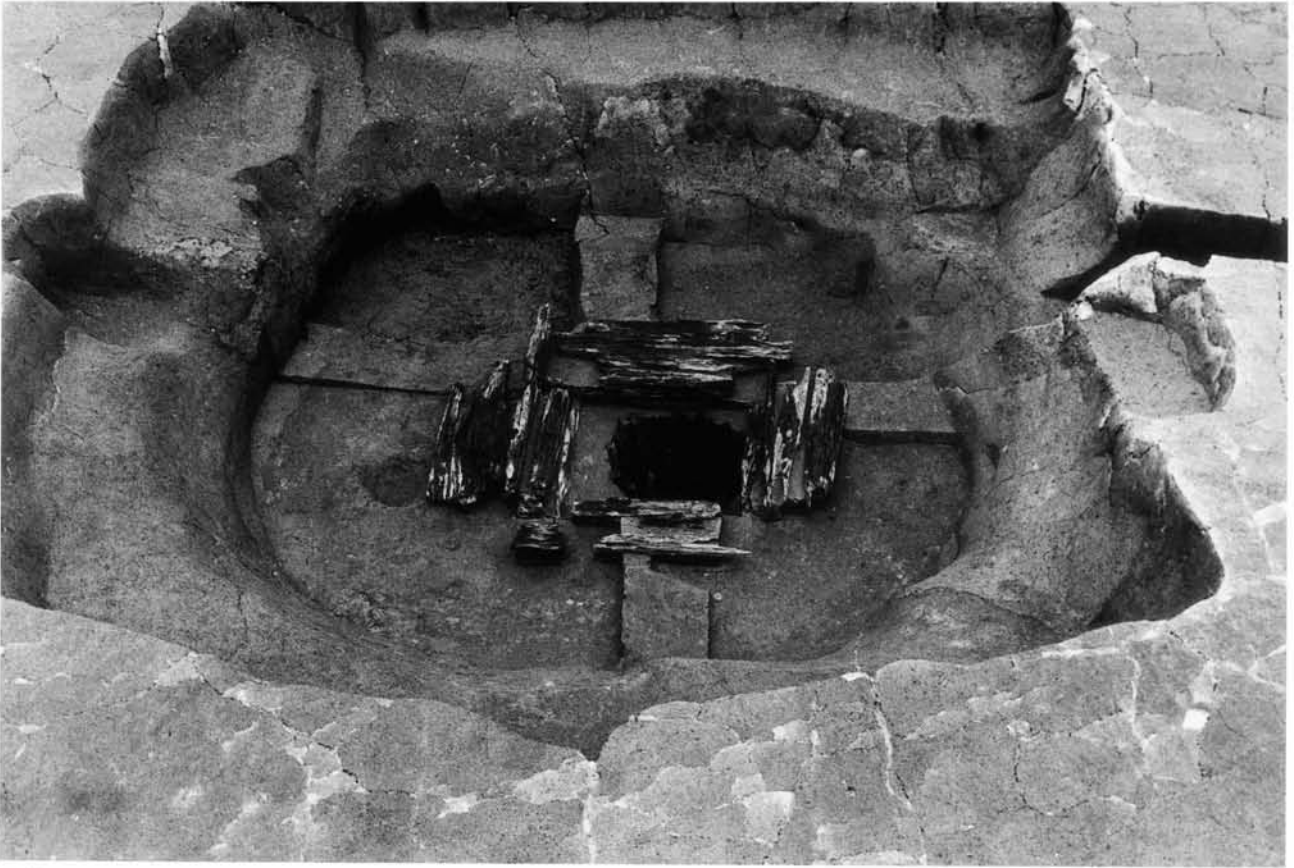




(1)第1トレンチ掘立柱建物跡S B60(南から)



(2)第1トレンチ掘立柱建物跡S B60柱穴(東から)



(1)第1トレンチ井戸SE117(南から)



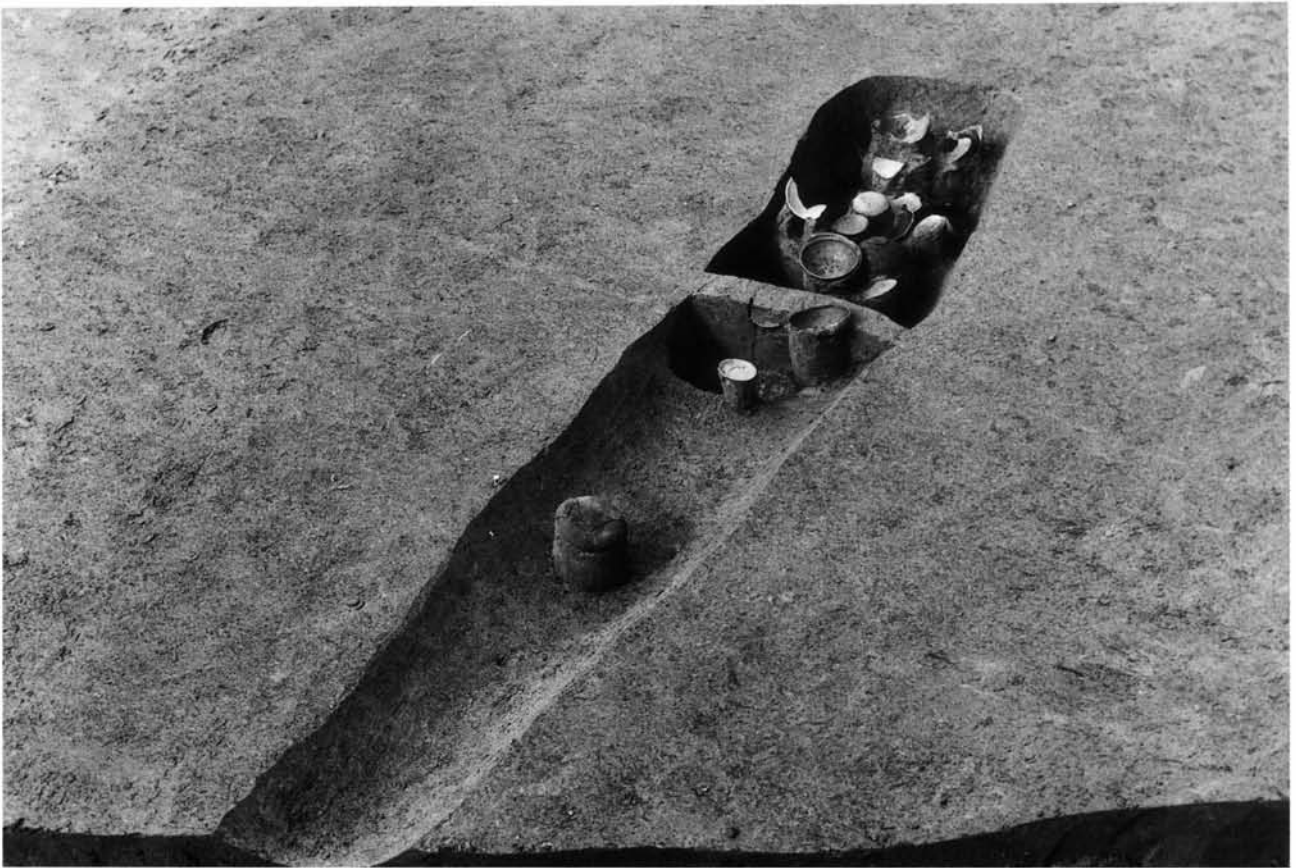
(2)第1トレンチ井戸SE117井戸枠(西から)



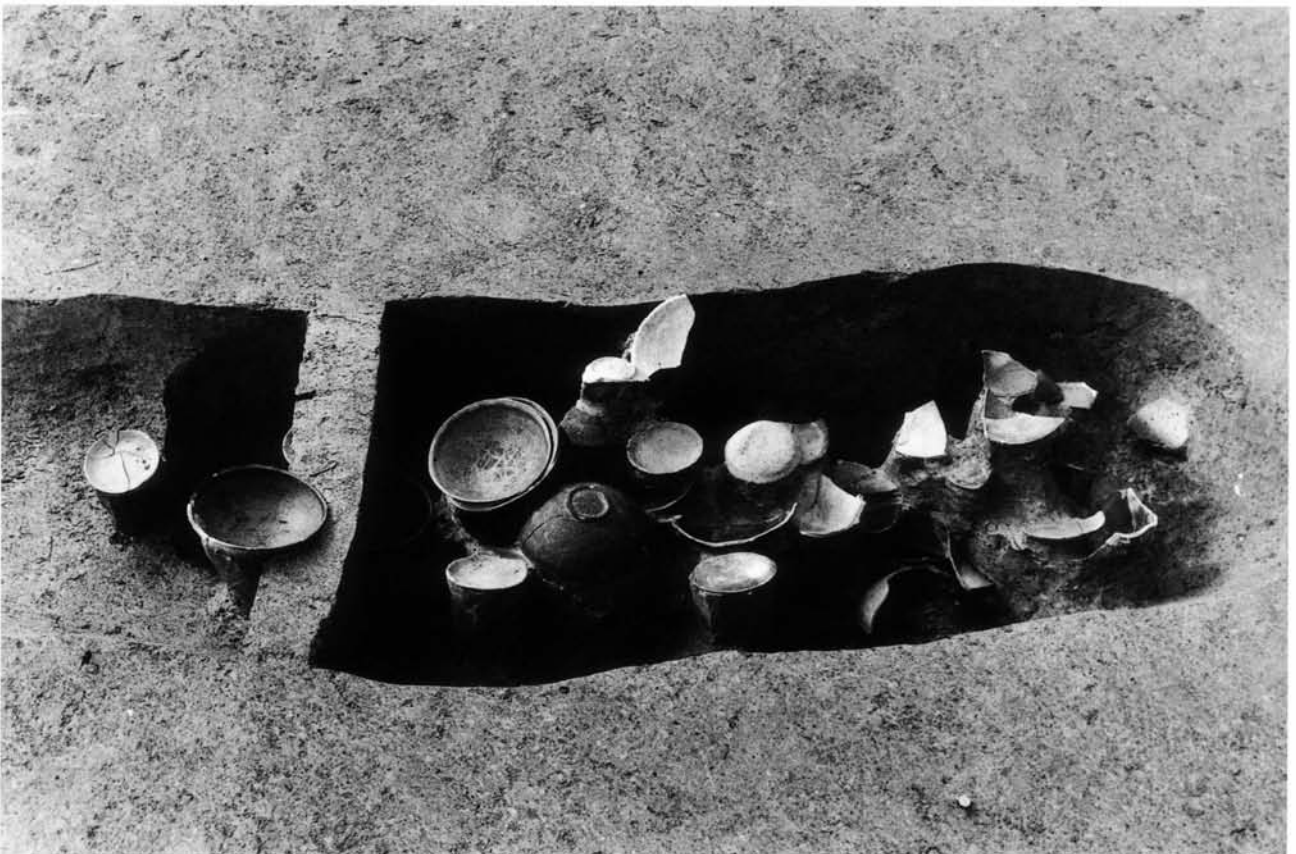
(1)第1トレンチ井戸S E117底部(北から)



(2)第1トレンチ井戸S E117井戸枠墨書



(1)第1 トレンチ溝SD1 (西から)



(2)第1 トレンチ溝SD1 遺物出土状況(南から)



(1)第1トレンチ中世墓SX10遺物出土状況(西から)



(2)第1トレンチ中世墓SX10墓壙(北から)



(1)第2トレンチ調査前全景(北西から)



(2)第2・3トレンチ全景(空撮、左上が北)



(1)第2 トレンチ下層遺構全景(空撮、左上が北)



(2)第2 トレンチ上層遺構全景(空撮、左上が北)



(1)第2 トレンチ 竪穴式住居跡 S H12(南から)



(2)第2 トレンチ 竪穴式住居跡 S H182(南から)





(1)第2トレンチ井戸S E17遺物出土状況(北東から)



(2)第2トレンチ井戸S E17断面(西から)



(1)第3トレンチ調査前全景(北西から)



(2)第3トレンチ全景(空撮、右下が北)



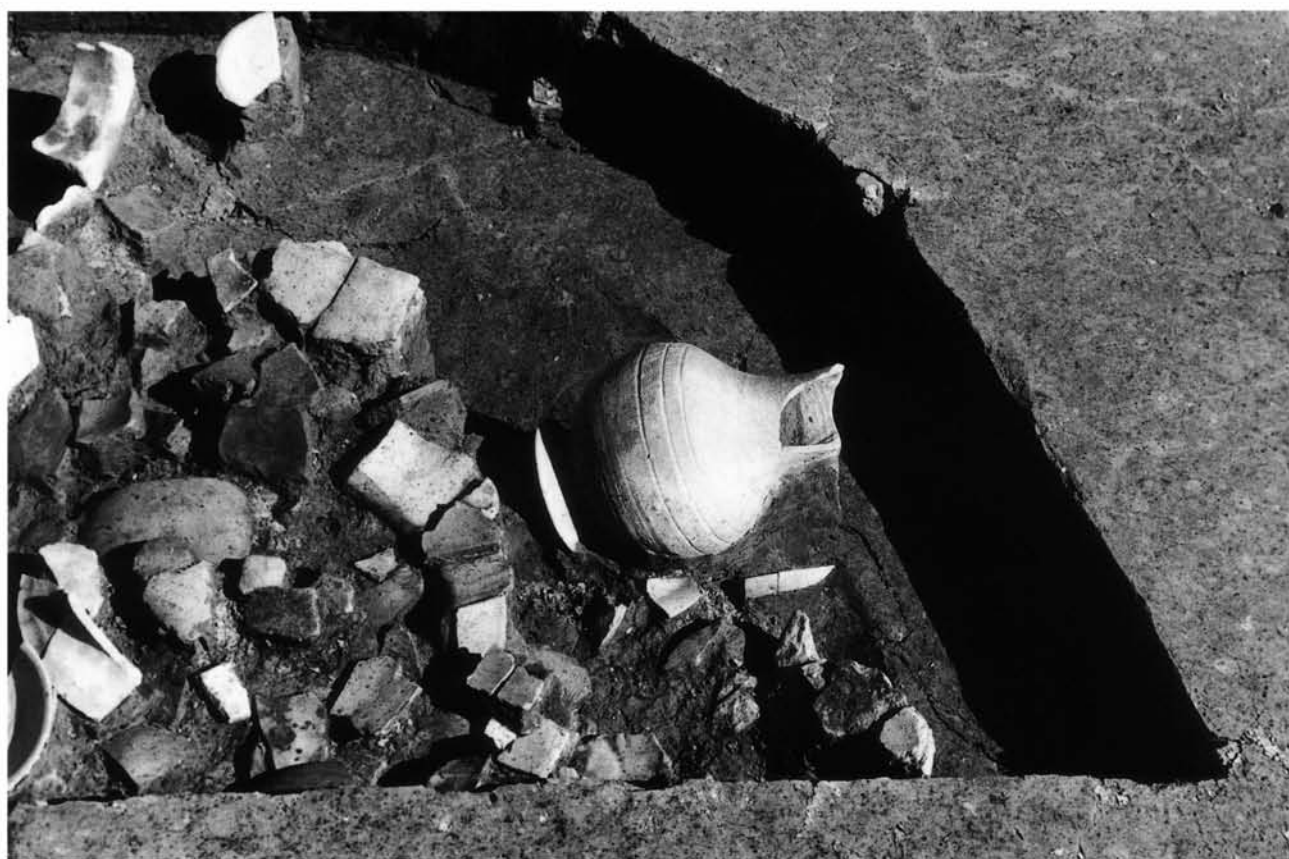
(1)第3トレンチ土坑SK9(南東から)



(2)第3トレンチ焼土層SX10(北西から)



(1)第3トレンチ土坑SK1(南西から)



(2)第3トレンチ土坑SK1遺物出土状況(南西から)



1



6



2



8



5



7



17



32



34



35



33



36



37



41



39



42



40



47



48



56



54



68



55



69





70



73



74



92



96



75



97



102



103



105



106



107



116



147



117





120



171



145



173



169



177



174



179



204



217



221



222



146



223



241



225



249



236



252



256



259



261



283



276



285



331



335



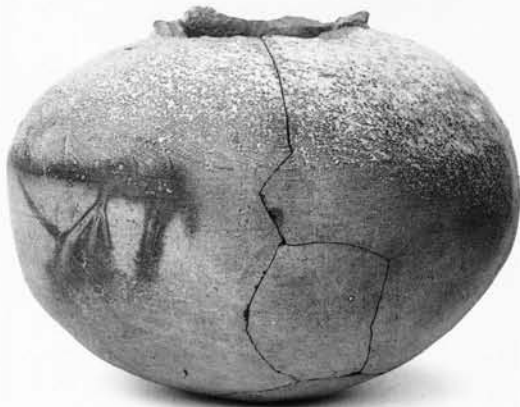
343



336



344



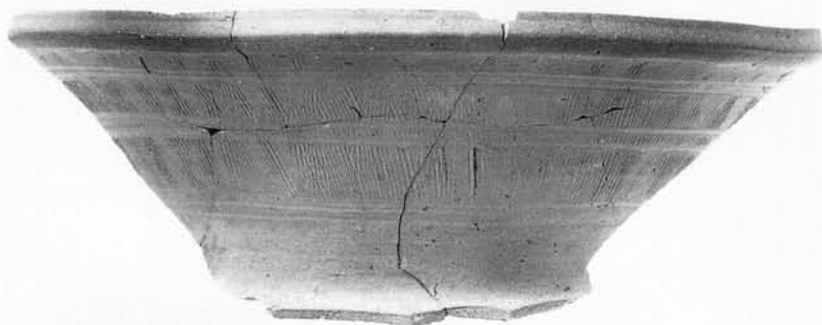
338



355



334



339





292



296



302



298



303



311



316



305



318



328



396



398



311



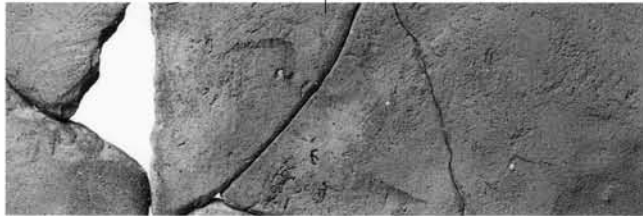
352



362



361



360



386



365



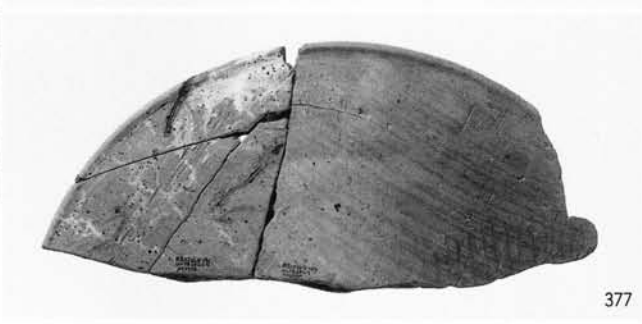
373



376



369



377



366



387



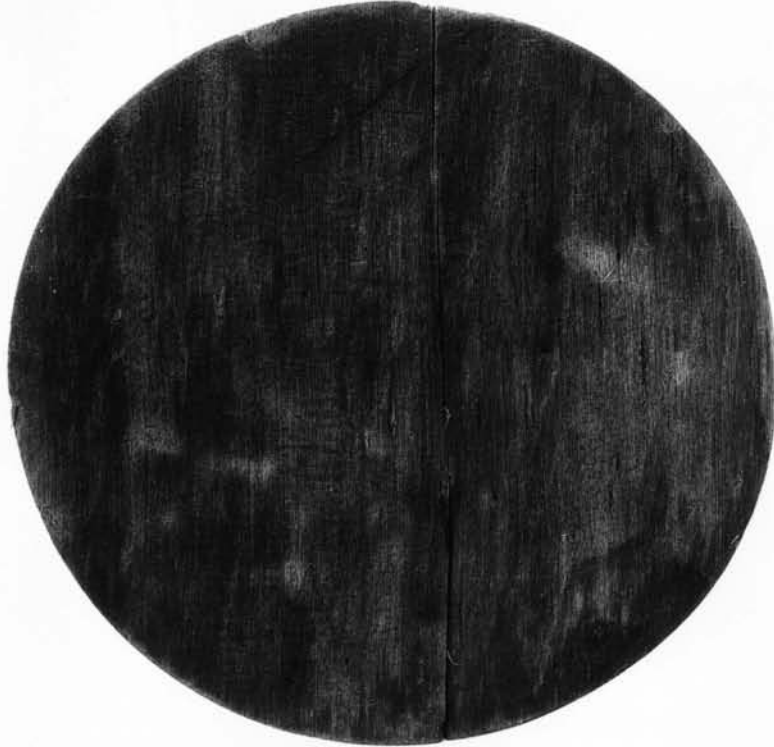
388



389



390



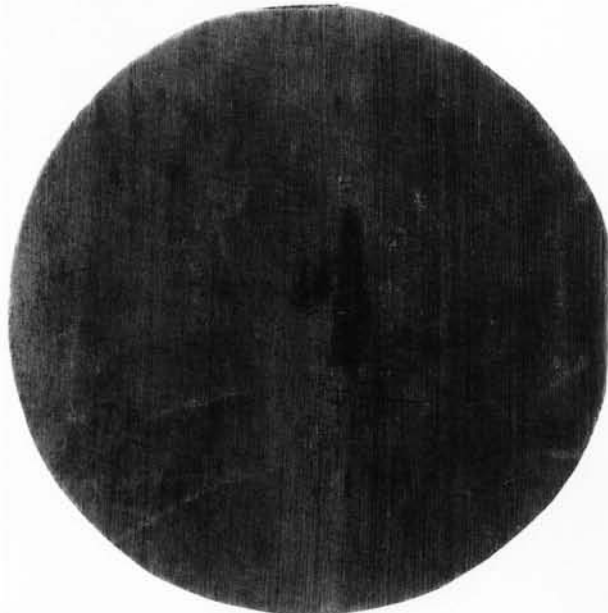
391



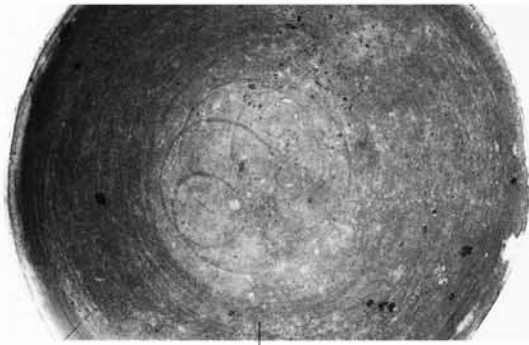
392



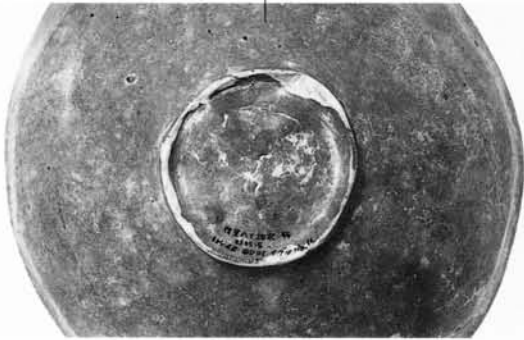
393



394



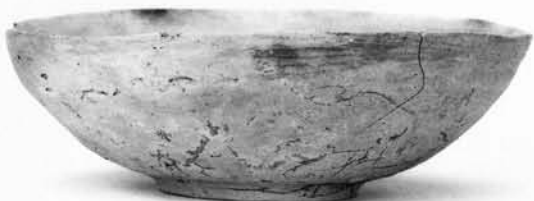
417



402



408



418



424



435



428



432



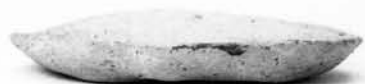
425



430



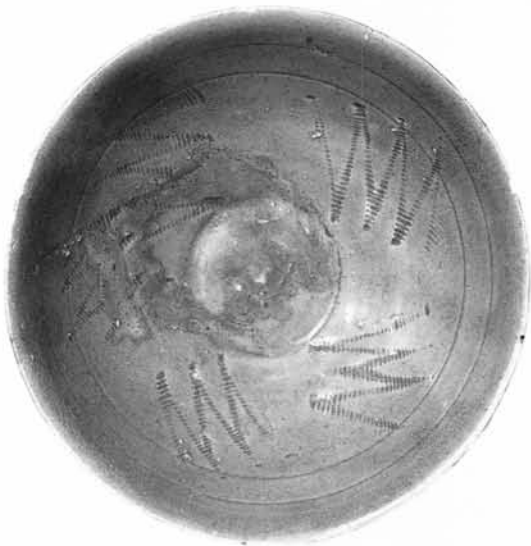
449



454



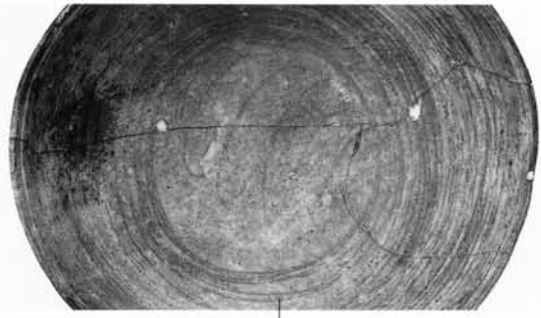
453



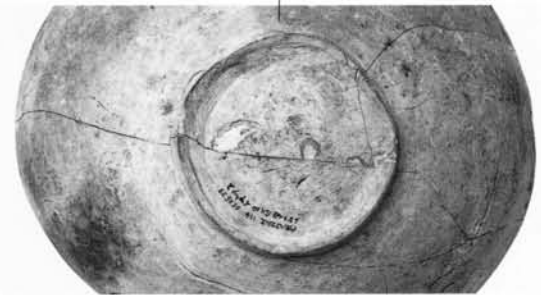
439



444



443



441



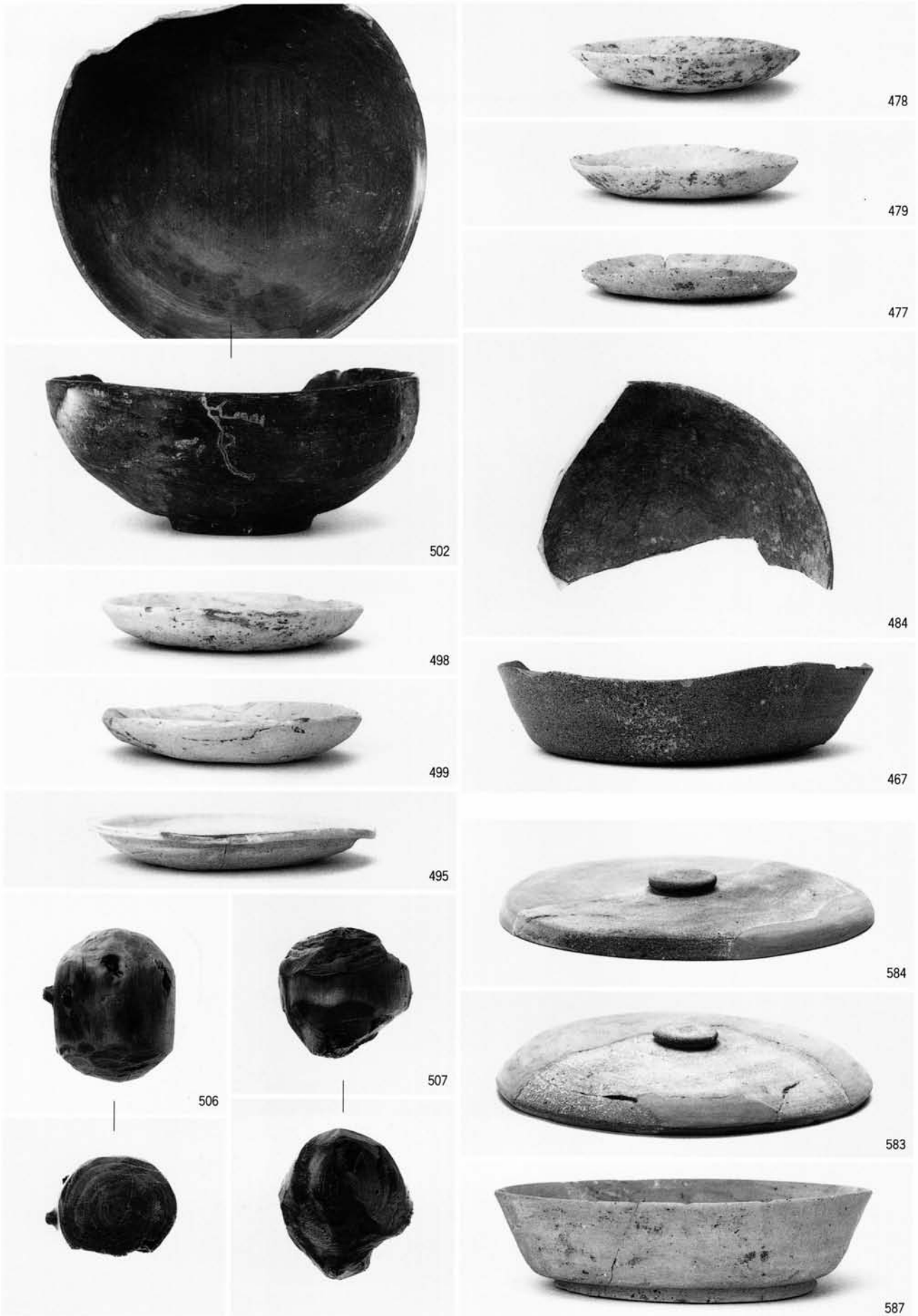
442

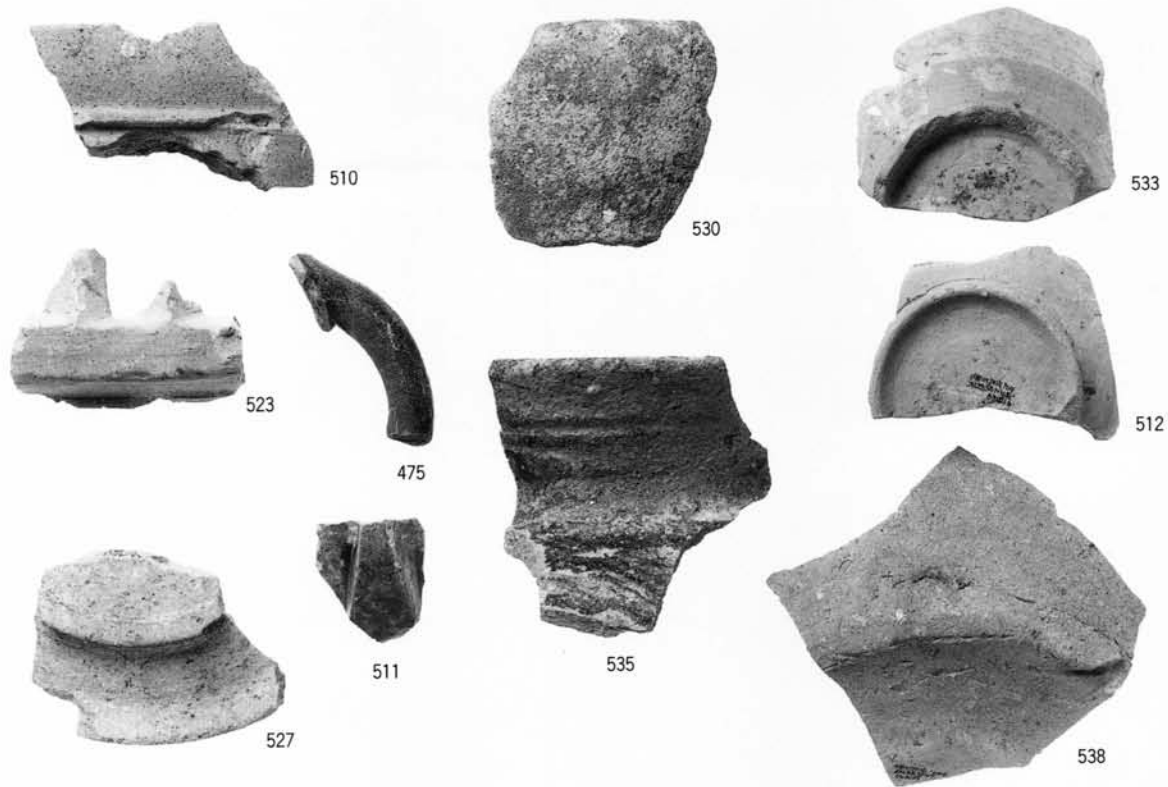


440

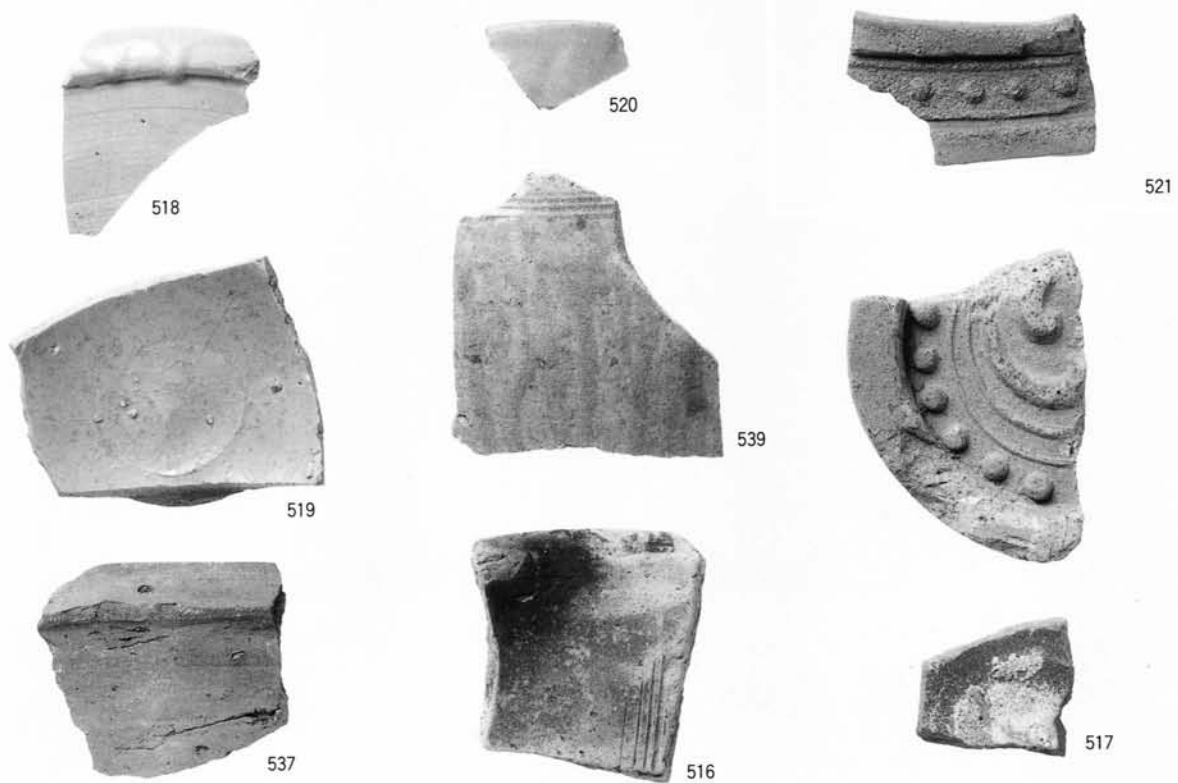


445





(1)出土遺物(19)



(2)出土遺物(20)



582



545



543



547



544



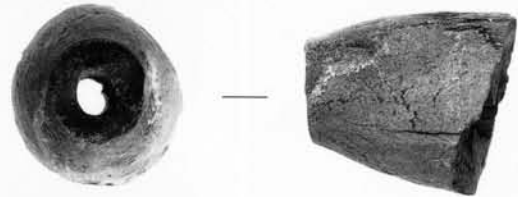
552



566



557



574



575



562





910

906



1126



1128



935

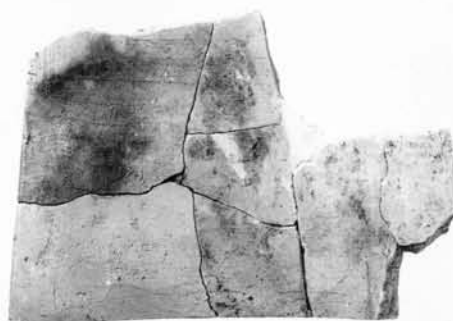
出土遺物(23)(第16・17次調査)



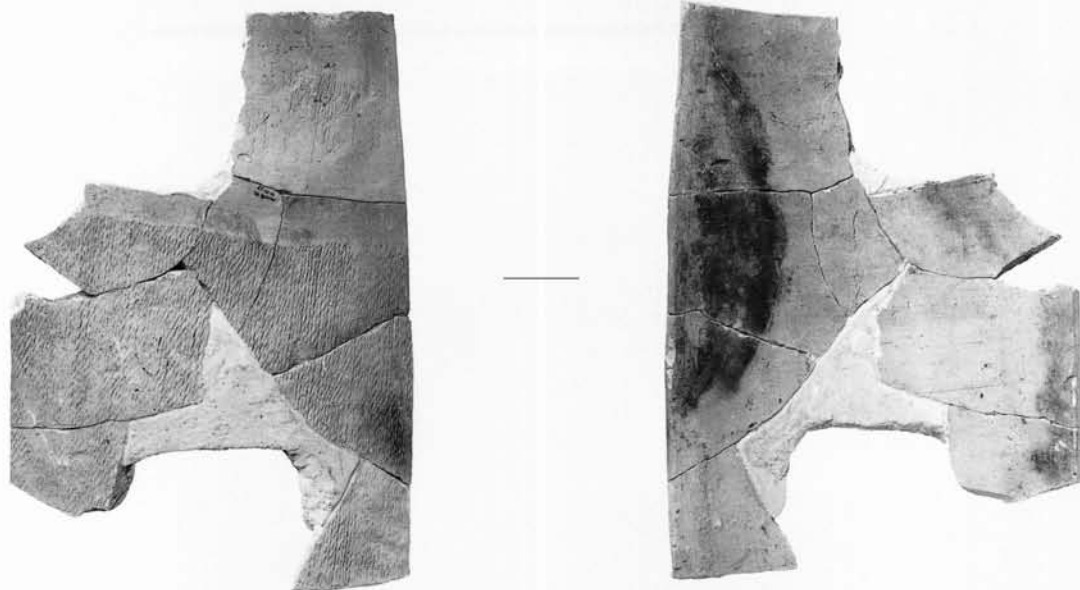
935



S D 205

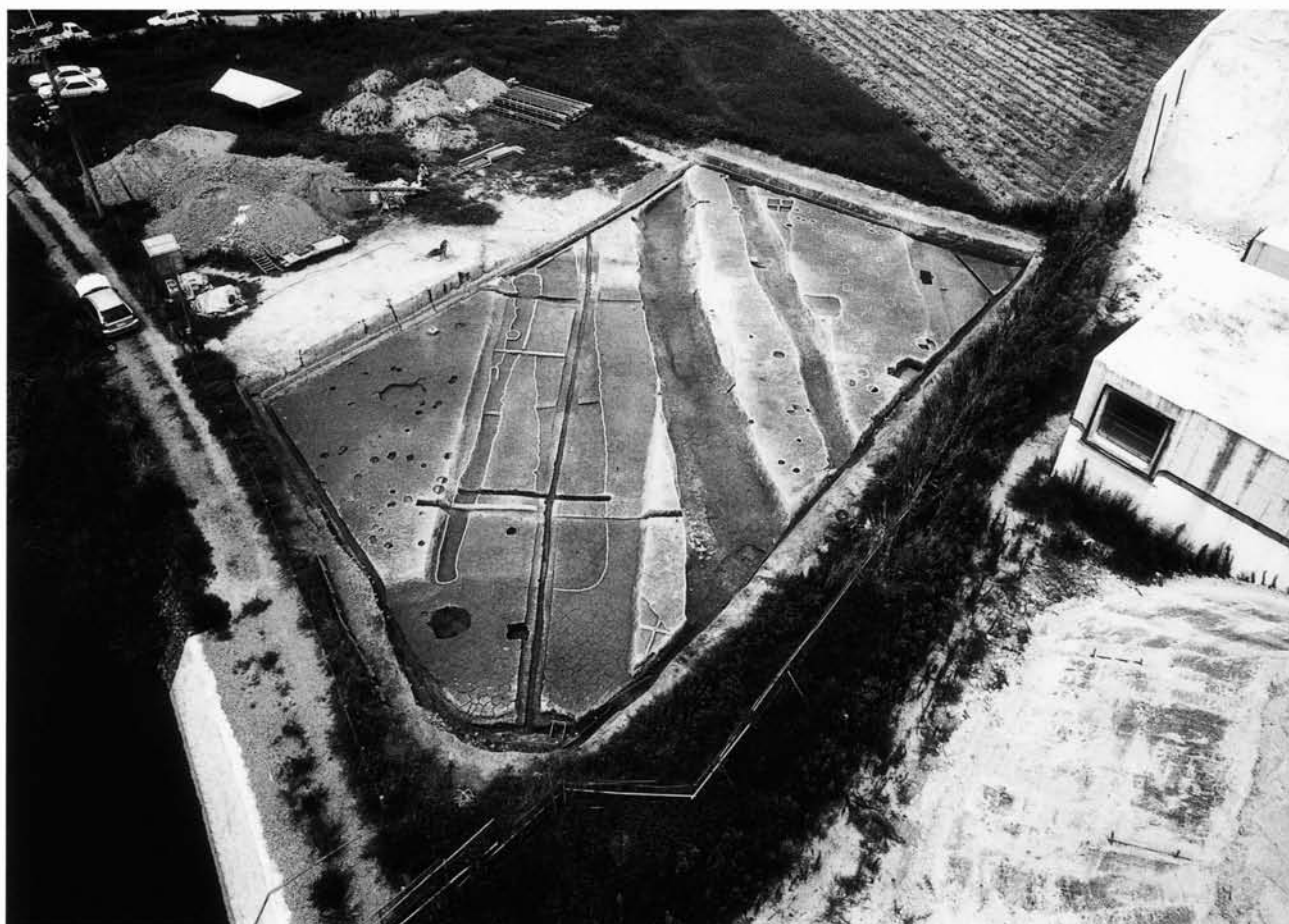


1149



1147

(1)出土遺物(25)(第16・17次調査)



(2)第16・17次調査地全景(南から)



(1)調査前全景(東から)



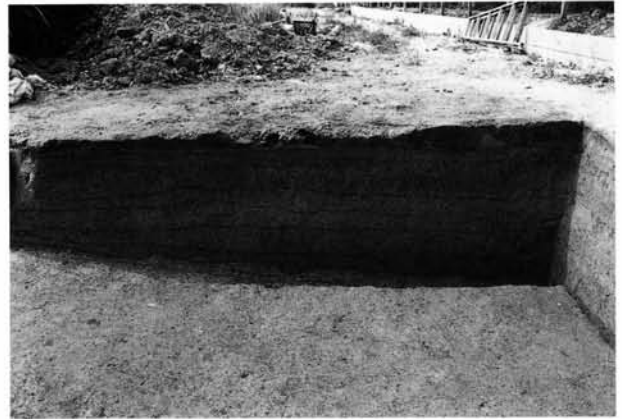
(2)第2次調査試掘トレンチ  
重機掘削中



(3)第2次調査試掘トレンチ  
作業風景



(1)第1 トレンチ南壁土層断面(1地点)



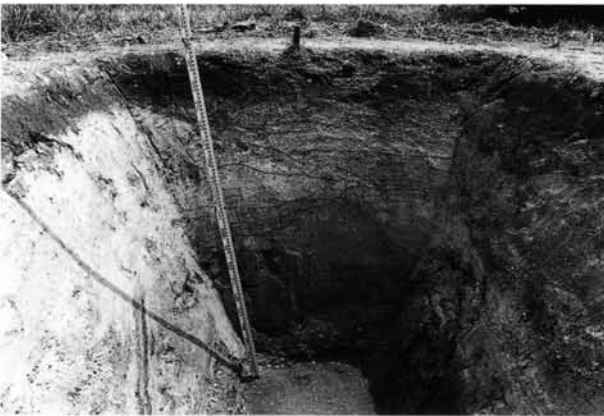
(2)第3 トレンチ(試掘)土層断面(6地点)



(3)第3 トレンチ(試掘)土層断面



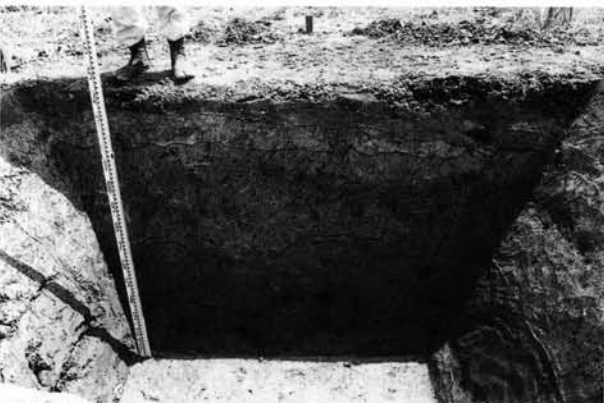
(4)第3 トレンチ南壁土層断面(8地点)



(5)第6 トレンチ南壁土層断面(9地点)



(6)第7 トレンチ南壁土層断面(10地点)



(7)第8 トレンチ南壁土層断面(11地点)



(8)第9 トレンチ南壁土層断面(12地点)



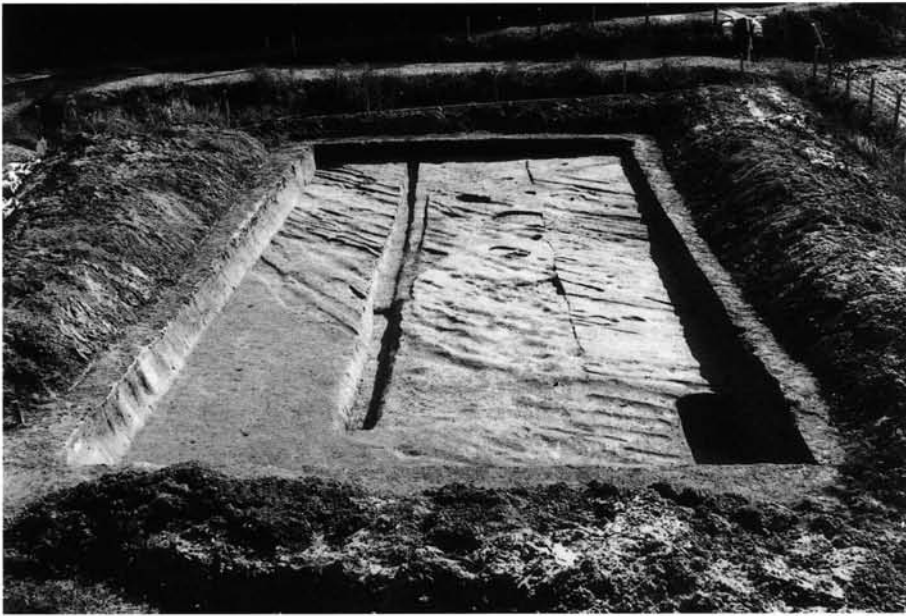
(1)第2次調査調査地全景(東から)



(2)第2次調査第2トレンチ全景  
(西から)



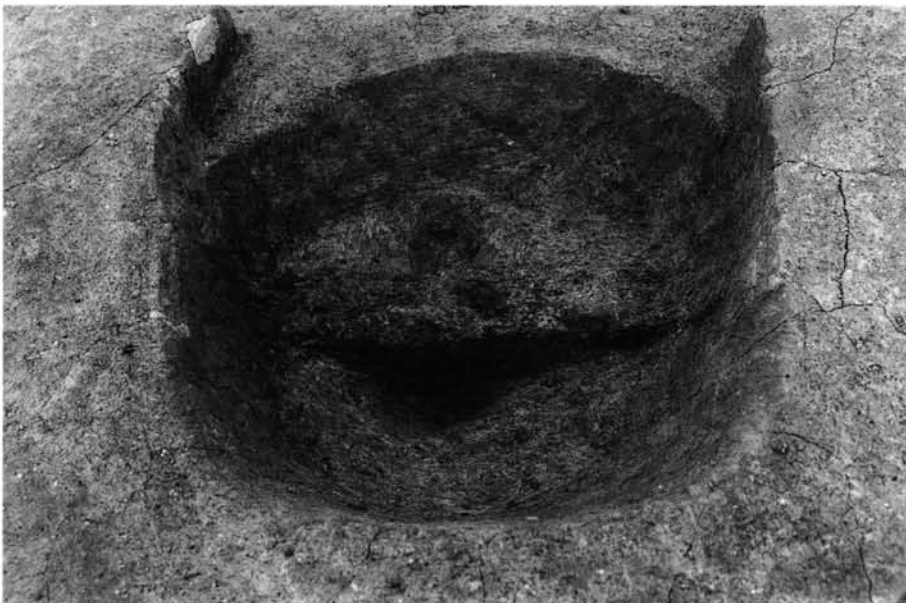
(3)第2次調査第1・2トレンチ  
全景(北から)



(1)第2次調査第1トレンチ  
上層遺構全景(西から)



(2)第2次調査第1トレンチ  
下層遺構全景(東から)



(3)第2次調査第1トレンチ  
土坑 S K02完掘状況(北西から)





(1)第2次調査第2トレンチ西半  
上層遺構全景(東から)



(2)第2次調査第2トレンチ南東部  
上層遺構全景(西から)



(3)第2次調査第2トレンチ東半  
上層遺構全景(東から)



(1)第3次調査第2トレンチ  
下層遺構全景(北東から)



(2)第3次調査第2トレンチ  
下層遺構全景(上が北)



(3)第3次調査第2トレンチ  
掘立柱建物跡4・5、溝SD  
132・161全景(上が北)



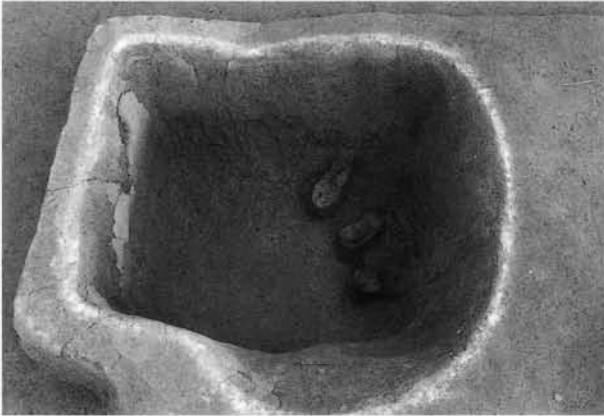
(1)第3次調査第2トレンチ  
掘立柱建物跡4、溝SD132・  
161全景(西から)



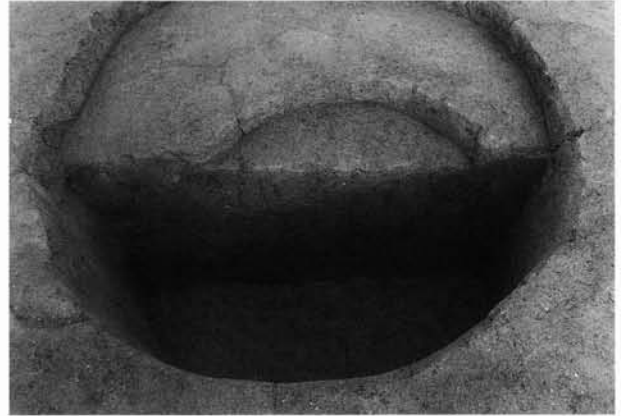
(2)第3次調査第2トレンチ  
掘立柱建物跡4全景(南から)



(3)第3次調査第2トレンチ  
掘立柱建物跡4完掘後全景  
(南から)



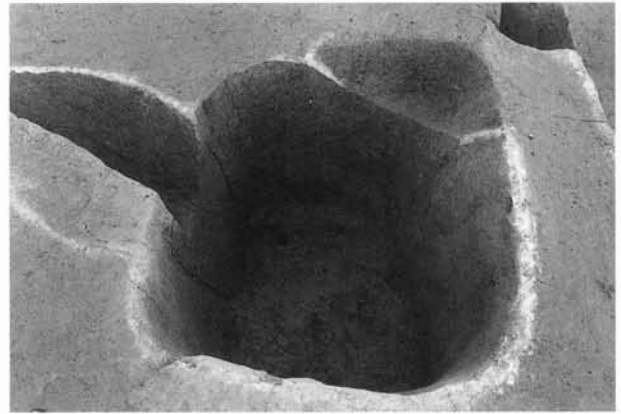
(1)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4  
柱穴S P 153完掘状況(西から)



(2)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4  
柱穴S P 154土層断面(西から)



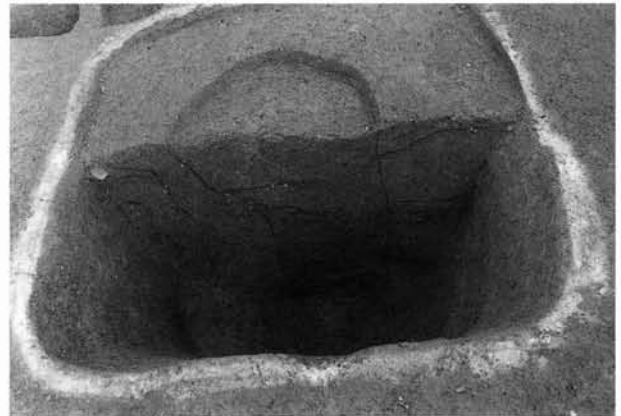
(3)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4  
柱穴S P 182土層断面(西から)



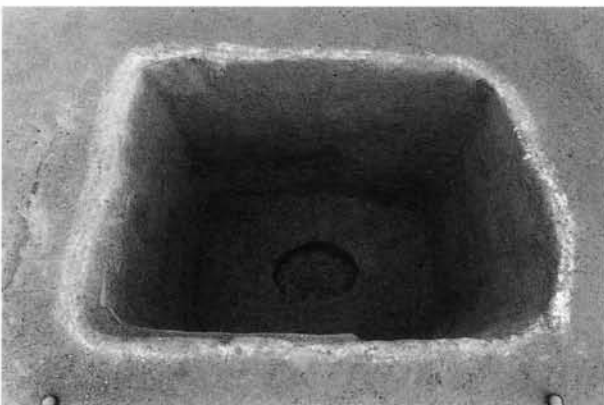
(4)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4  
柱穴S P 159完掘状況(西から)



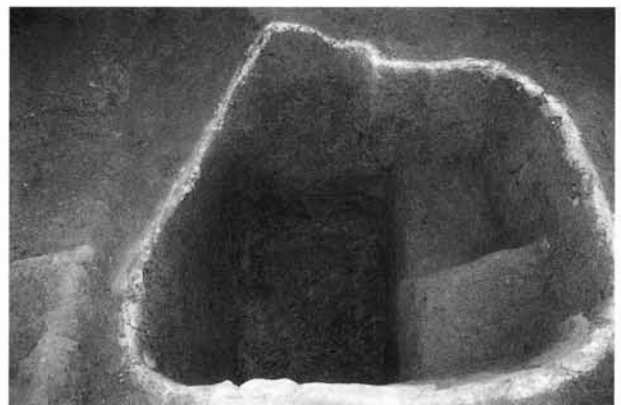
(5)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4  
柱穴S P 194遺物出土状況(北から)



(6)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4  
柱穴S P 193土層断面(西から)



(7)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4  
柱穴S P 192完掘状況(西から)



(8)第3次調査第2トレンチ掘立柱建物跡4  
柱穴S P 160完掘状況(西から)



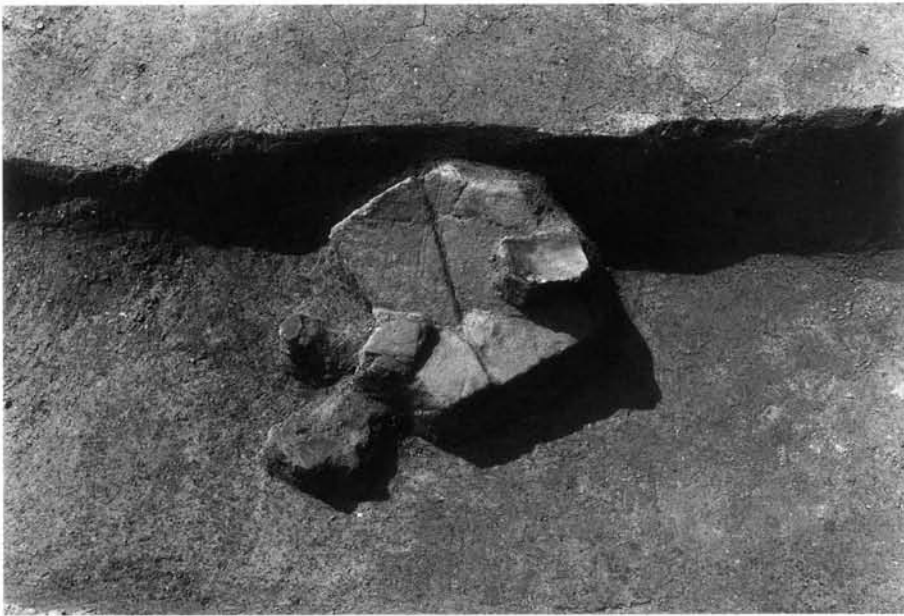
(1)第2次調査第10トレンチ  
溝S D131ほか検出状況  
(西から)



(2)第3次調査第2トレンチ  
溝S D132・161全景(南から)



(3)第3次調査第2トレンチ  
溝S D132遺物出土状況  
(南から)



(1)第3次調査第2トレンチ  
溝S D132遺物出土状況  
(西から)



(2)第3次調査第2トレンチ  
溝S D161遺物出土状況  
(東から)



(3)第3次調査第2トレンチ  
溝S D161遺物出土状況  
(北から)



(1)第3次調査第2トレンチ  
溝SD157遺物出土状況  
(西から)



(2)第3次調査第2トレンチ  
溝SD157遺物出土状況  
(南から)



(3)第3次調査第2トレンチ  
溝SD187遺物出土状況  
(北西から)



(1)第3次調査第2トレンチ  
軒丸瓦(6291B型式)出土状況  
(北から)



(2)第3次調査第2トレンチ  
焼土坑S K 188全景(東から)



(3)第3次調査第2トレンチ  
焼土坑S K 199遺物出土状況  
(東から)





(1)第2次調査第2トレンチ  
井戸S E07検出状況(西から)



(2)第2次調査第2トレンチ  
井戸S E07掘削状況(南から)



(3)第3次調査第2トレンチ  
井戸S E07完掘状況(東から)



(1)第2次調査第2トレンチ  
掘立柱建物跡2・3検出状況  
(東から)



(2)第2次調査第2トレンチ  
掘立柱建物跡2・3検出状況  
(南から)



(3)第2次調査第2トレンチ  
掘立柱建物跡2(柱穴S P 113)  
遺物出土状況(西から)



(1)第3次調査第2トレンチ  
不明遺構 S X 167全景(西から)



(2)第2次調査第2トレンチ  
不明遺構 S X 135全景(東から)



(3)第3次調査第2トレンチ  
土壇墓 S X 165全景(西から)



(1)第2次調査第3トレンチ  
上層遺構全景(西から)



(2)第2次調査第3トレンチ  
上層遺構全景(南東から)



(3)第3次調査第3トレンチ  
下層遺構全景(北から)



(1)第3次調査第3トレンチ  
流路S D73全景(西から)



(2)第3次調査第3トレンチ  
流路S D73全景(南から)



(3)第3次調査第3トレンチ  
流路S D73土層断面(北東から)



(1)第3次調査第3トレンチ  
土坑S K 227遺物出土状況  
(南から)



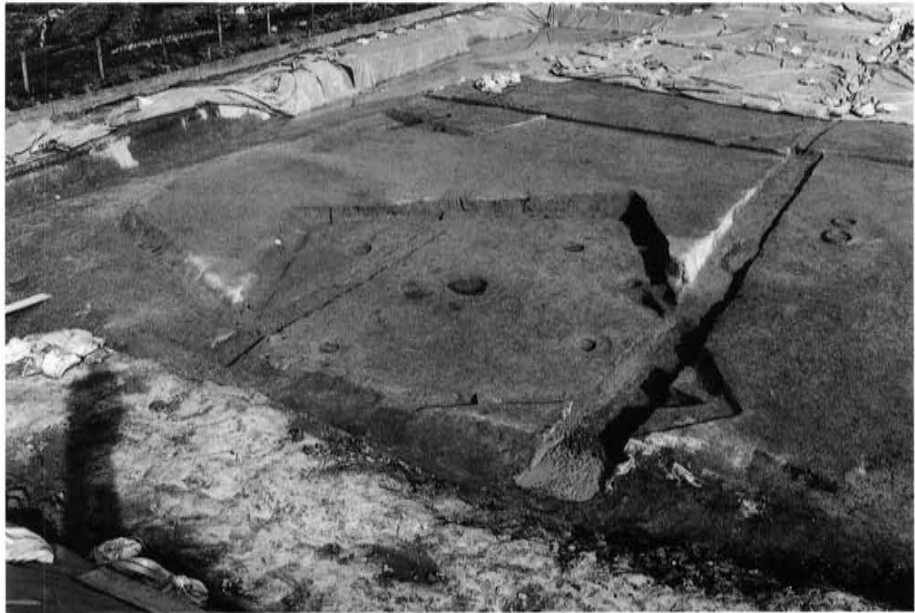
(2)第3次調査第3トレンチ  
竪穴式住居跡S B 230全景  
(南から)



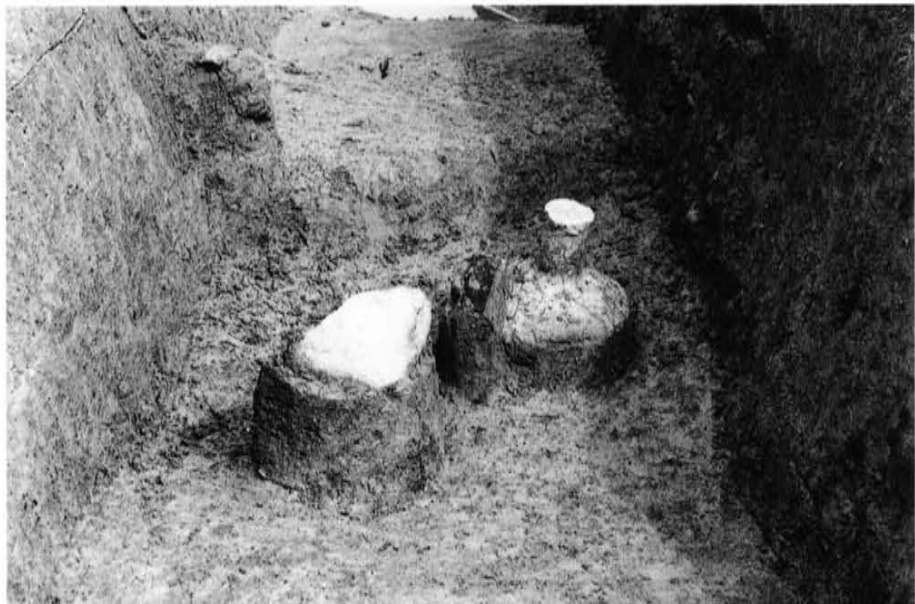
(3)第3次調査第3トレンチ  
作業風景(西から)



(1)第2次調査第3トレンチ  
下層遺構全景(南西から)



(2)第2次調査第3トレンチ  
竪穴式住居跡S B 140全景  
(南西から)



(3)第2次調査第3トレンチ  
(試掘)竪穴式住居跡S B 140  
遺物出土状況(西から)



16



17



33



37



35



48

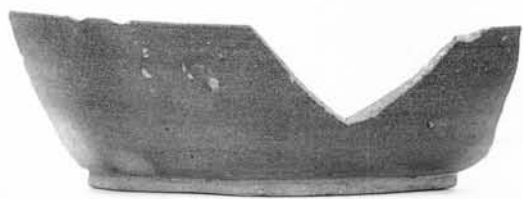


73



68





102



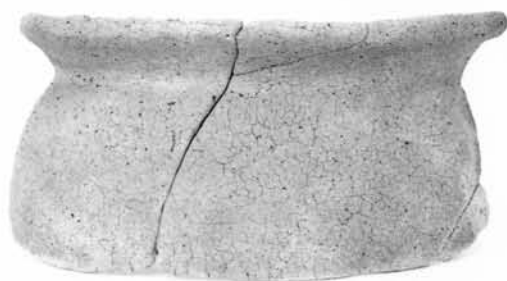
87



89



116



122



155



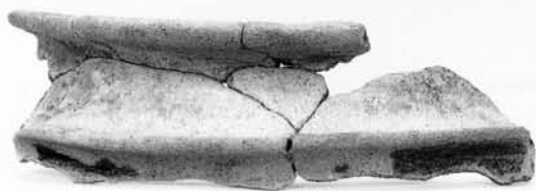
159



151



272



377



503



500



504



562



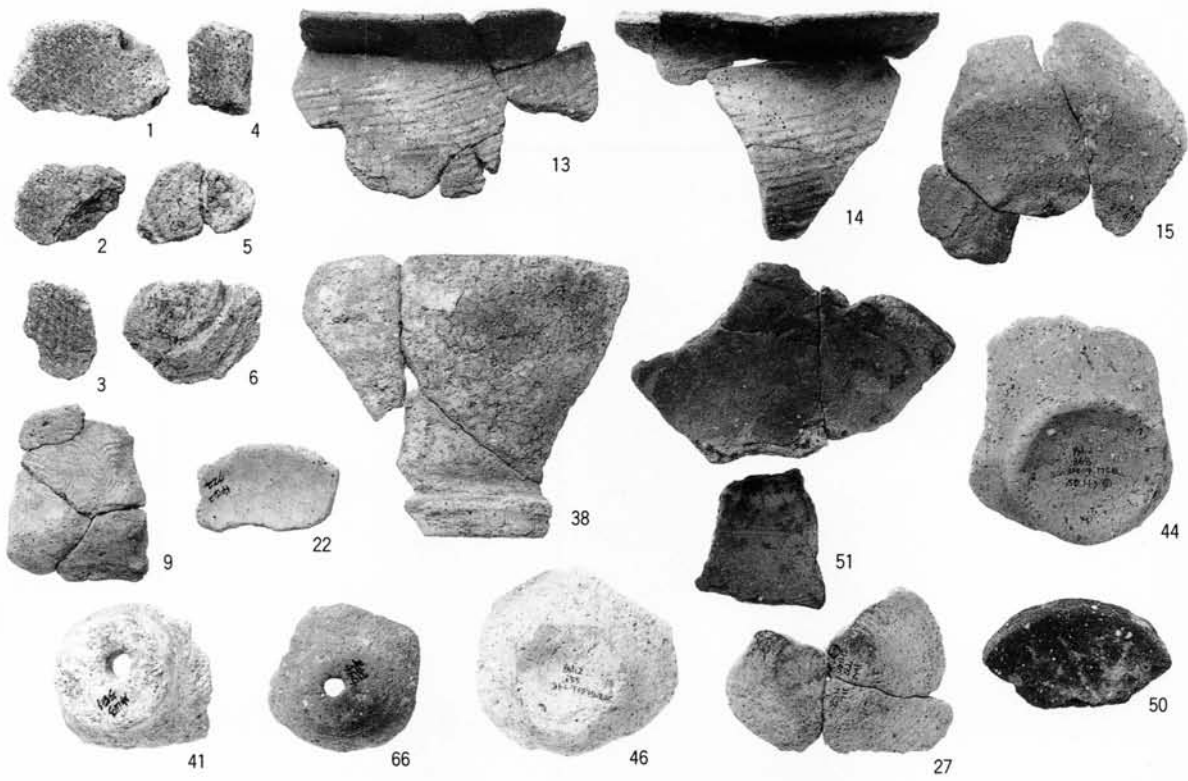
566



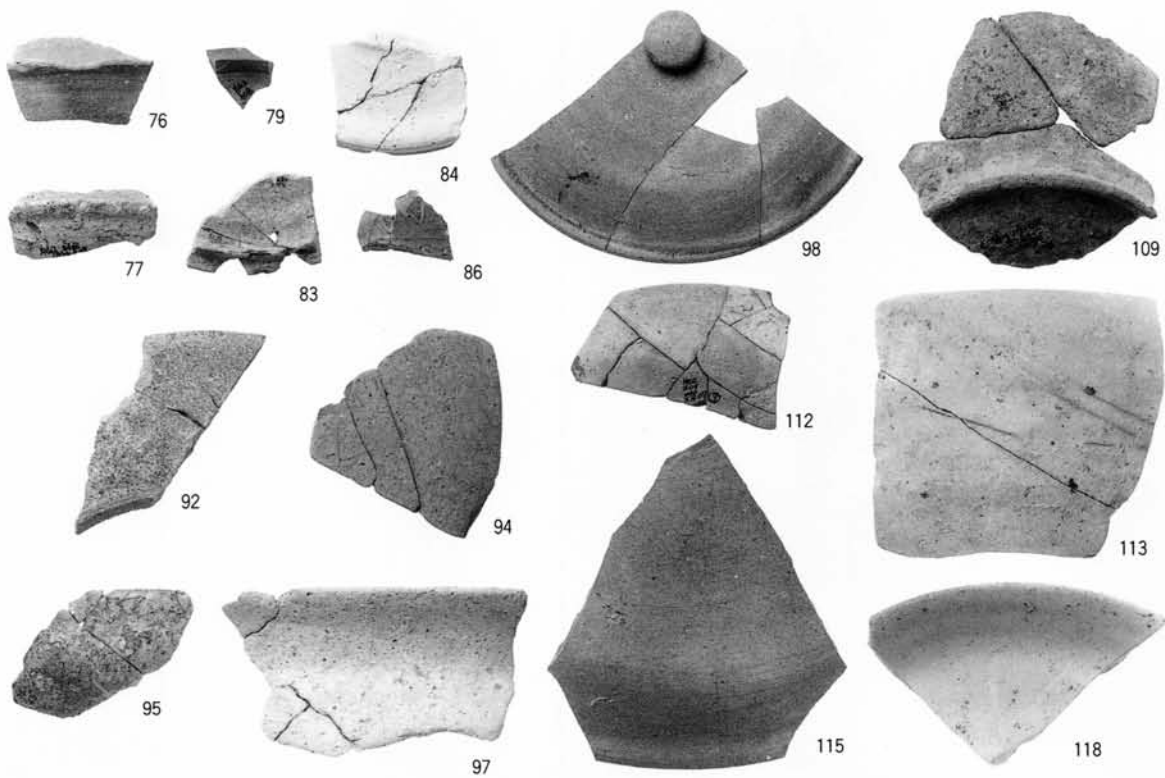
567



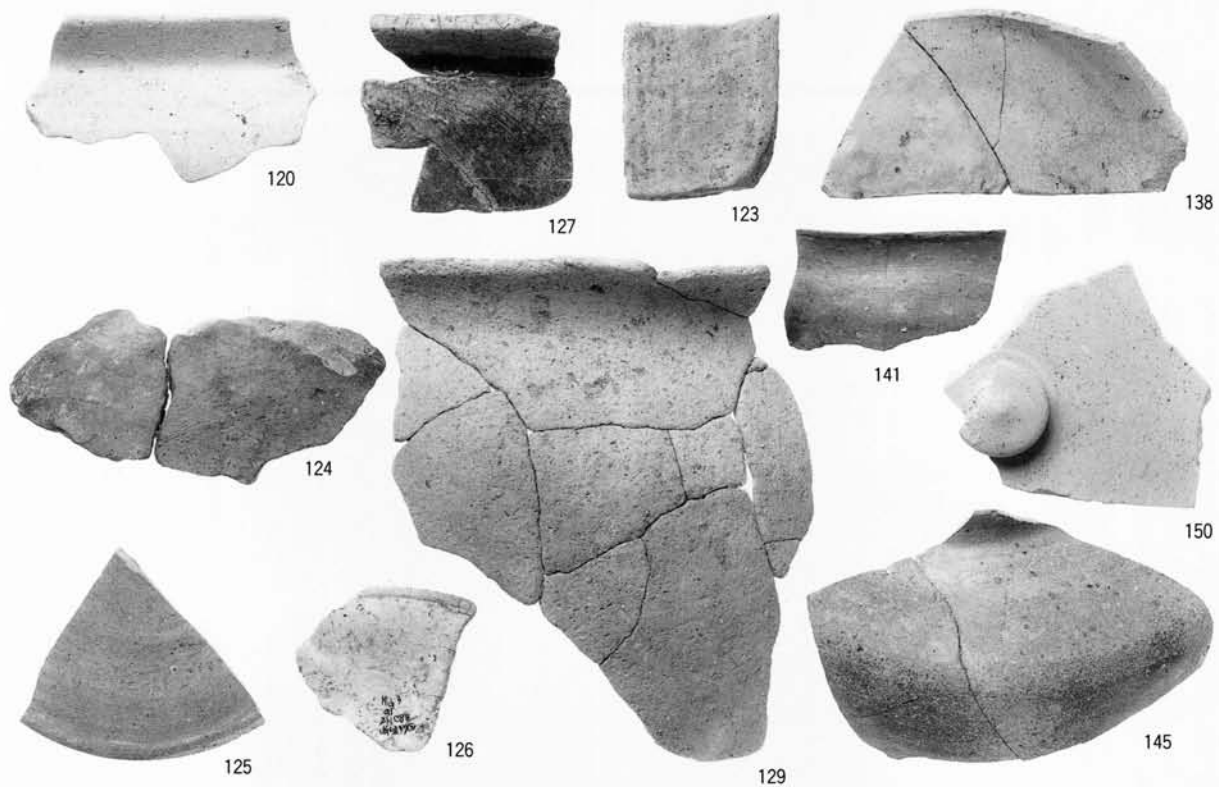
564



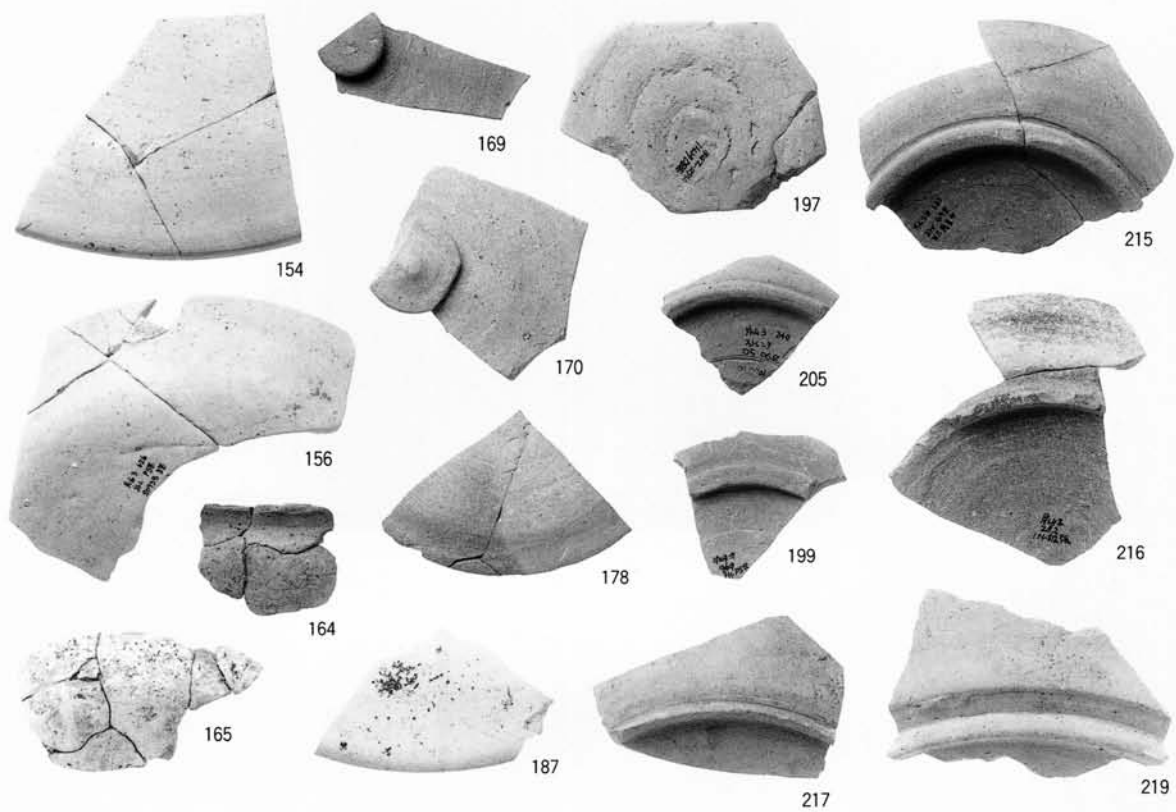
(1)出土遺物(4) 縄文土器・弥生土器



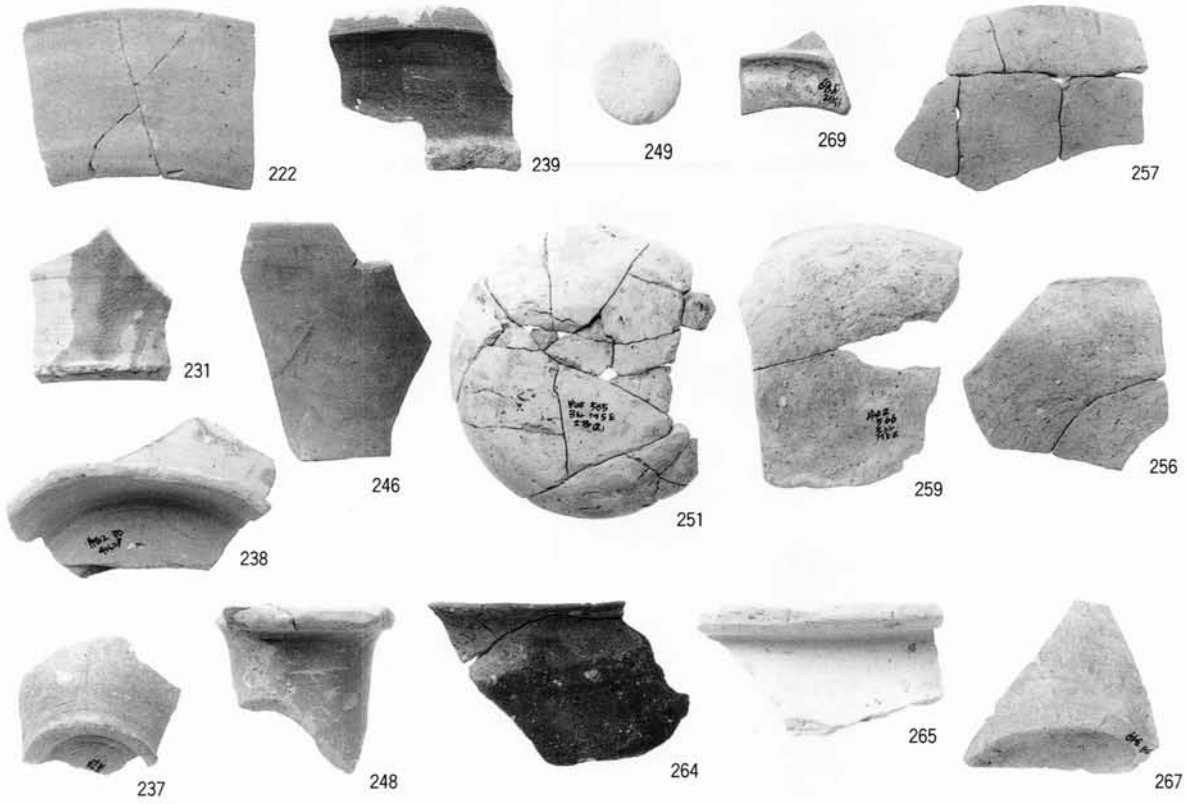
(2)出土遺物(5) 須恵器・土師器



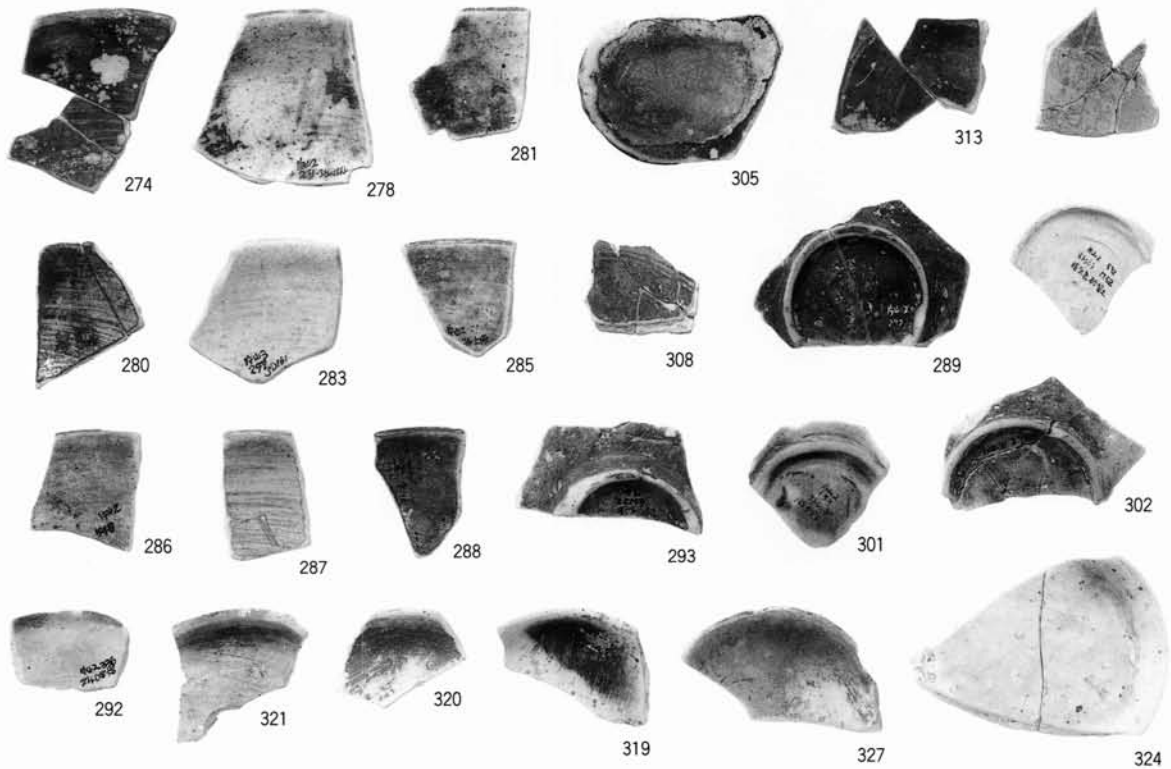
(1)出土遺物(6) 須恵器・土師器



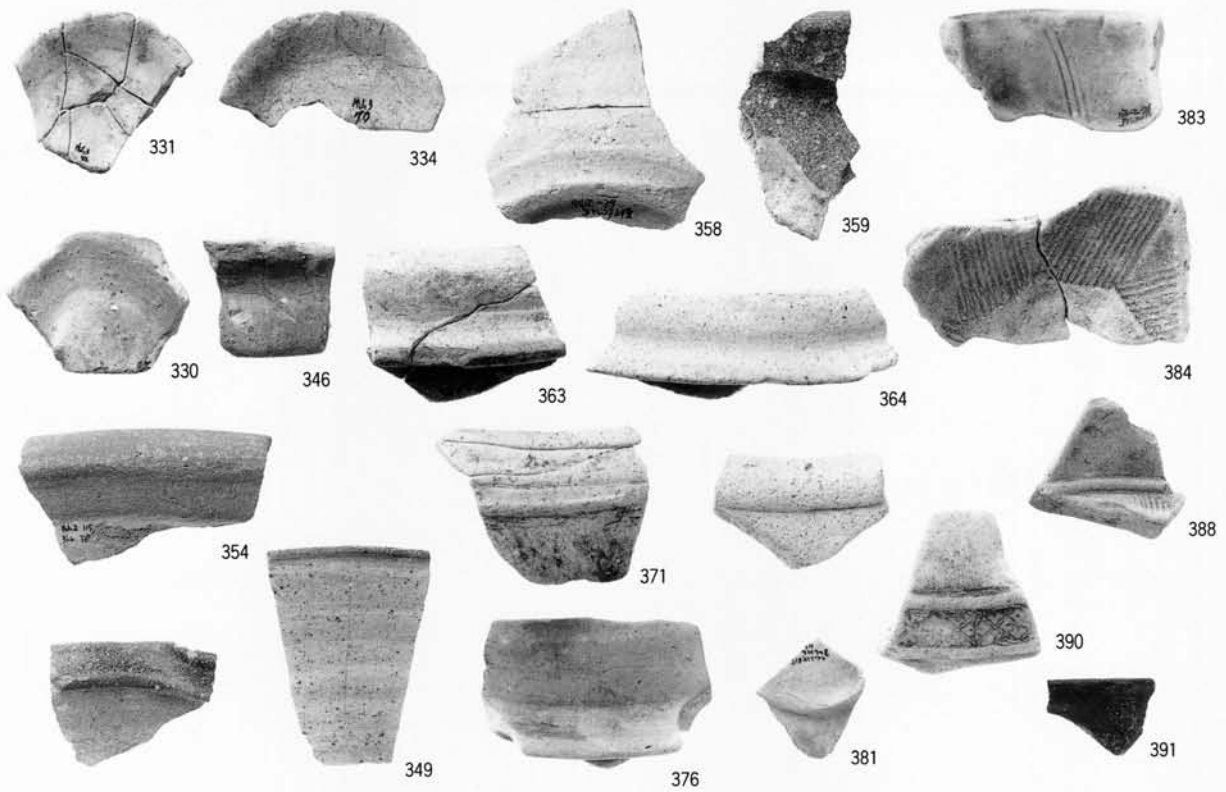
(2)出土遺物(7) 須恵器・土師器



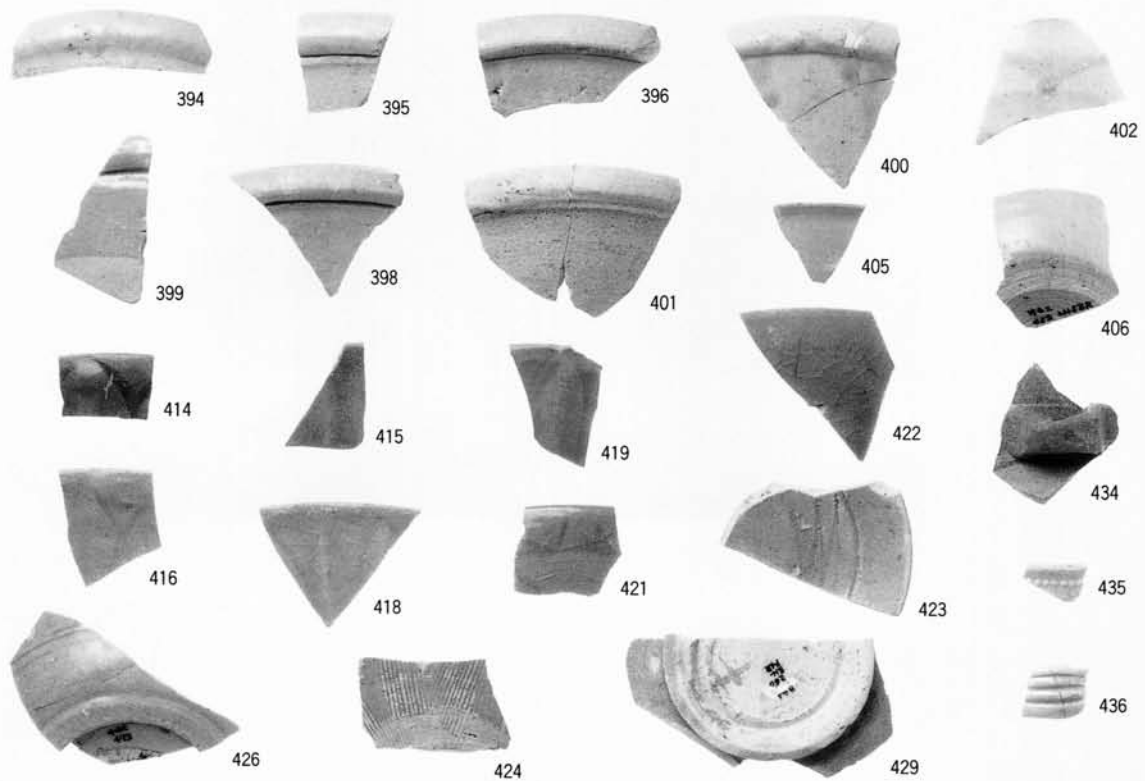
(1)出土遺物(8) 須恵器・土師器



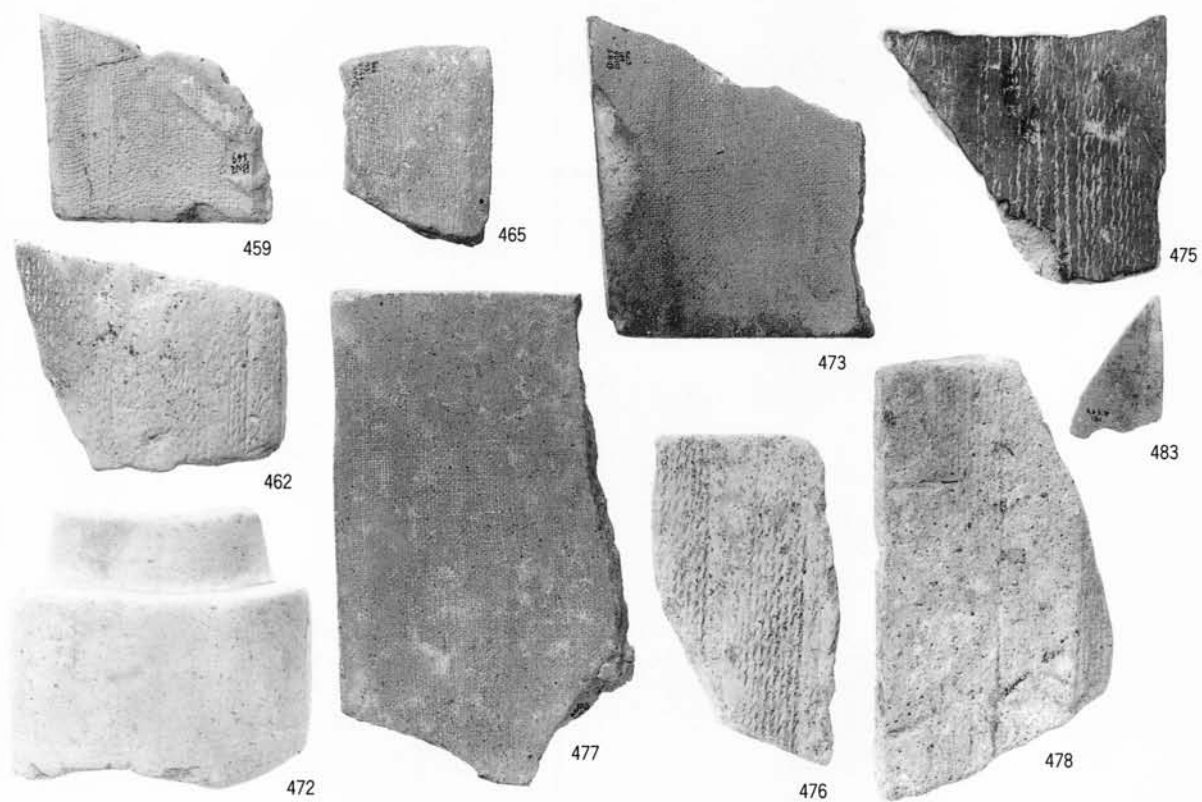
(2)出土遺物(9) 瓦器



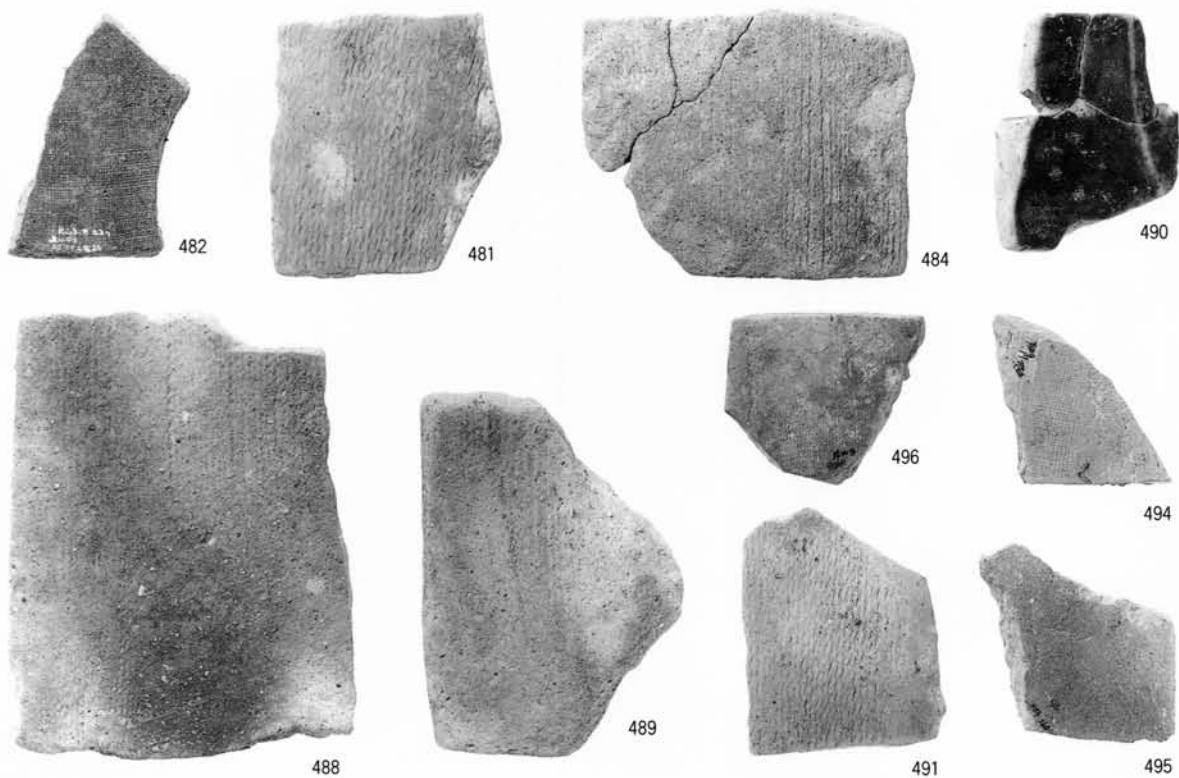
(1)出土遺物(10) 土師器・須恵器・瓦質土器



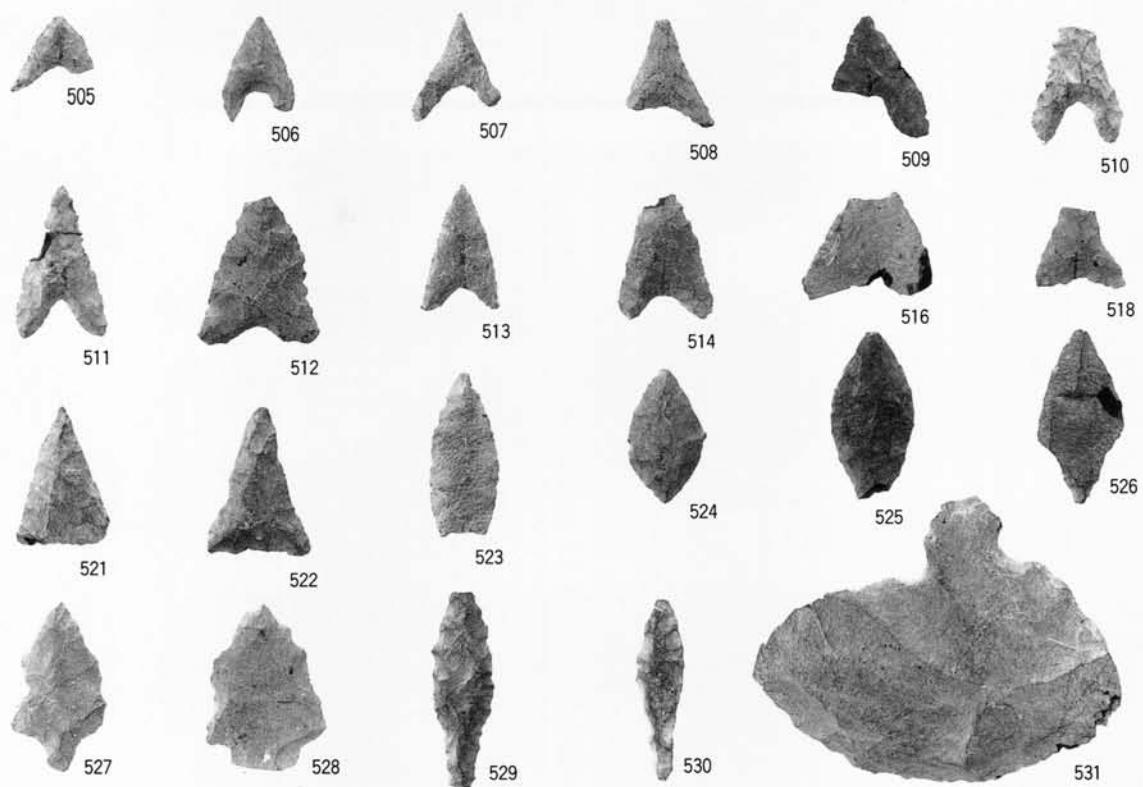
(2)出土遺物(11) 白磁・青磁ほか



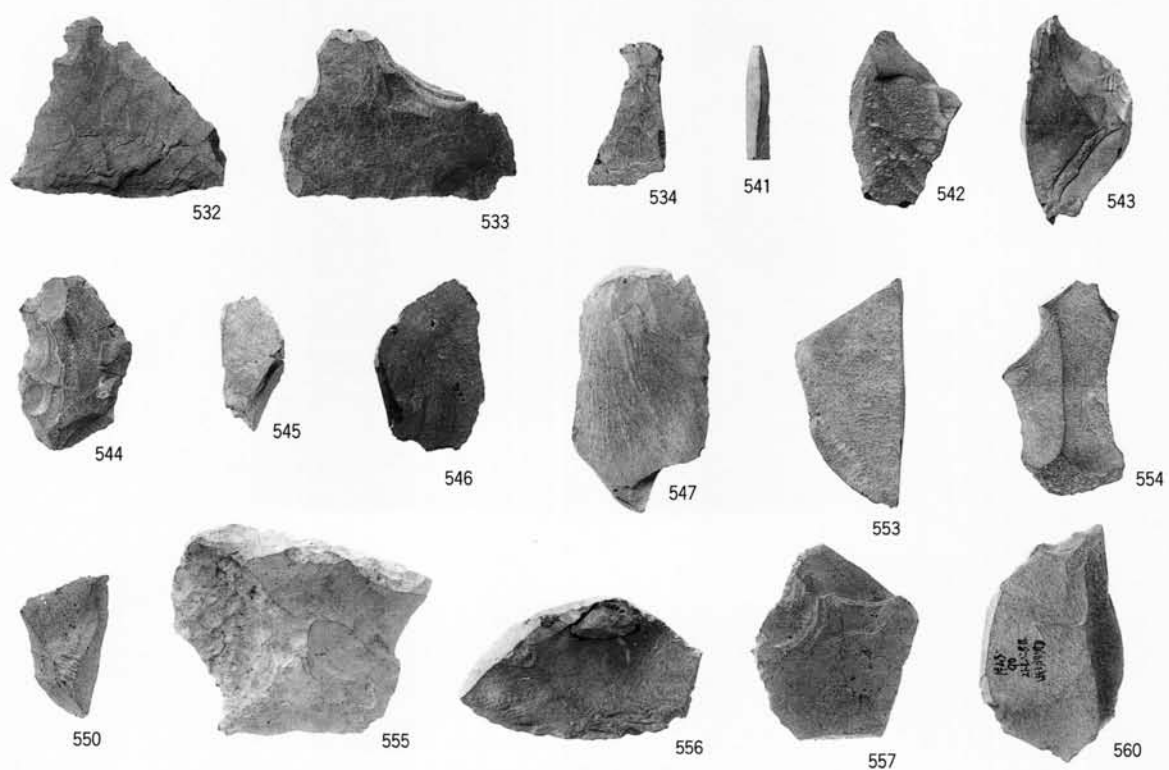
(1)出土遺物(12) 瓦



(2)出土遺物(13) 瓦



(1)出土遺物(14) 石器



(2)出土遺物(15) 石器



報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第116冊							
編著者名								
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Tel		075(933)3877		
発行年月日	西暦 2005 年 3 月 28 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
あぜちいせ きだいご・ ろくじ	きょうとふかめお かしほづちょうで いほか					20040116 ～ 20040224 20040720 ～ 20041203	1,350	道路建設
案察使遺跡 第5・6次	京都府亀岡市保津 町出井ほか	26206	41	35° 01' 47"	135° 35' 08"			
うちさと はっちょう いせきだ いにじゅうじ	きょうとふやわた しうちさと					20030424 ～ 20040226	3,640	道路建設
内里八丁遺跡 第20次	京都府八幡市内里	26210	37	34° 51' 50"	135° 44' 07"			
かたやまい せきだ いに・さんじ	きょうとふそうら くぐんきづちょう おおあざきづこあ ざいけだ・かたや ま					20030722 ～ 20040224 20040708 ～ 20041129	1,700	
片山遺跡第 2・3次	相楽郡木津町大字 木津小字池田・片 山	26362	29	34° 44' 11"	135° 49' 40"		1,070	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
案察使遺跡 第5・6次	集落	縄文早期 弥生 奈良～平安	土坑	押型文土器 弥生土器/石器 須恵器	縄文時代早期の押型文土器(大川式新段階)の出土。
内里八丁遺跡 第20次	集落	弥生  古墳 飛鳥 奈良～平安前期	竪穴式住居跡/土坑/溝  溝/土坑 溝/土坑 掘立柱建物跡/柵列/溝/土坑/ 井戸	弥生土器/庄内式土器 土師器/須恵器 土師器/須恵器 土師器/須恵器/絞胎 陶枕片/墨書土器/銅 製黒漆塗蛇尾/銭貨 瓦器/土師器/同安窯 系青磁椀/短刀	弥生時代末の土器の良好な一括資料。 奈良～平安時代の遺構群は、特殊な出土遺物からみて官衙的要素が強い。
	集落/墓	中世	溝/土坑/井戸/墓		
片山遺跡第 2・3次	集落	縄文 弥生	土坑 竪穴式住居跡/土坑/溝	縄文土器/石器 弥生土器/石器	弥生時代後期の集落跡。  奈良時代の建物群は官衙的性格をもつ。
	墓 集落/官衙	古墳～飛鳥 奈良～平安	土壙墓 掘立柱建物跡/井戸/溝/土坑/ 落ち込み状遺構	須恵器/鉄器(刀子) 須恵器/土師器/灰釉 陶器/黒色土器/瓦 須恵器/土師器/瓦器 /瓦質土器/陶器/中 国製陶磁器(白磁/青 磁)/銭貨	
	集落	中世	掘立柱建物跡		

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

## 京都府遺跡調査概報 第116冊

平成17年3月28日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141